THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

第三十一年第十三號　第三百三十八號

大正五年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

再版

萬有の神秘

神秘、神秘、これ單に人間好奇心の一要求としてのみ看做さるべきものではない。物質萬能、人力萬能は古き十九世紀の夢想と化して、幾倍か合理的なる非物質主義、心靈主義（オイケン然り、ベルグソン然り）は今や全歐の思想界、文藝界を風靡して居る。而してイブセン逝きトルストイ既に世を去れる今日、世界の最大文豪として何人も異論なきマーテルリンクこそ、實に其の神然主義、心靈萬能主義に於て歐洲新人の代表者とさへ云はれて居る。本書は其の神秘主義を尤も明快に、尤も徹底的に論述せる著者の社會觀、人生觀、運命觀で、毎頁殆んど無限の興味と教訓とに充てるベリット・テンプル（埋宮）の全譯である。

四六版總クロース 全一冊
正價 壹圓貳拾錢
郵税 十錢

參版

英國 デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

▼朝れば夕あり、生あれば死あり。死後を窮むるは即ち斯の生を知る所以也。

四六判總クロース 全一冊
定價金八十五錢
郵税八錢

東京本郷西片町 玄黃社 電話下谷一三一九番 振替東京七九九五番

近代文藝に心ある人の一度は必ず讀むべき名著

新たに至廉なる縮刷版として公にせり

ダンヌンツィオ著　生田長江氏譯

縮刷　死の勝利

新刊

總洋布上製　紙數五百廿頁　定價九拾五錢　郵送料八錢

華麗なる文章を以て熱烈なる戀愛を描ける世界屈指の傑作。深刻なる近代人の苦悶を背景として性慾の衝動と兩性の間に横はる人間の暗黑面とは正視するに堪へざるの露骨と鋭敏とを以て描かれたり。

「死の勝利」の若き主人公は、熱情的な、肉感的な、常識を缺いた自己中心の人物で所謂近代人の各方面を遺憾なく具へてゐる。熱情的ではあるが、一方には寧ろ殘酷なほど冷靜な所がある。肉感的な一方には、非常に宗教的な、靈的な所がある。かうして矛盾した心持で女を愛してゐる。愛してゐるのだか、敵として鬪つてゐるのだか、分らぬやうな戀だ。其性の爭鬪が極めて深刻に描かれてゐる。而して男が遂に負けて了ひさうになるので、女を全然自分の有とするには殺して了ふより外無いと考へて遂に高い崖から突き下す……夫迄の徑路が、讀者を戰慄させるやうに書いてある。「死の勝利」は、實に近代人の戀愛のいかなるものかを示して、即ち戀愛の一面から、近代的精神を解剖したるものである。作者ダンヌンツィオは南歐の華やかな日光の下に生れて、紅の花の香、綠濃い草木の匂ひの蒸されるやうな暖國の空氣に育まれた人で、熱烈奔放な感情と、豐艶富麗の技巧とを有してゐる現在文豪中の第一人である。

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

トルストイ叢書 續々刊行

此の眞面目なる叢書の出版は、果して讀書界の異常なる歡迎を受け、第一編第二編共に發行後一週日ならずして賣切れ再版發賣するに至れり。第四編以下に、相馬御風中村吉藏諸家苦心の譯書を公にすべし。

- 總洋布最上製美本
- 紙數約三百二十頁
- 定價一冊金七十錢
- 送料一冊八錢

第參編

幼年・少年

江馬修氏譯

——紙數三百二十頁——

新刊出來

「幼年 少年」はトルストイが初期の作にしてその生ひ立ちの記也。翁が藝術家としての手腕と地位とを始めて歐羅巴の文壇に確保したるは實に此の作なりとす。而も藝術家としてよりも、人として更に偉大なるトルストイの「人」を覗ふ可き其の自傳の第一章也。偉大なる靈魂の芽生と成長とは、其の嚴密靈活なる自己解剖の筆によりて遺憾なく描き盡くさる。眞に是れ萬人必ず讀む可きの書。何ぞ必ずしも文藝の士にのみ薦む可きものならんや。譯は江馬氏が今春來の苦心に成り、玆に漸く公にするに至れり。

第一編

我が宗教

生田長江譯

東京朝日新聞曰く、——本書の内容は直ちにトルストイの全生活の内容にして、翁の全力を集注せし結晶とも見る可し。翁の眞面目を知らんとする者は必ず此の書を一讀せざる可からず。

（再版）

第二編

イワン・イリイッチの死

（附篇）主人と下男 高架索の捕虜

福士幸次郎譯

（再版）

東京市牛込區矢來町中の丸

新潮社

電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

今日の幸福は？

腦病神經衰弱

田中博士の新治療法

（即ち此全文を見逃さずにソシテはがき一枚發し醫學博士の藥と著書とを無代で貰ふが最大幸福也）

夜眠らんとするも安眠が中々能きず、惡夢に襲はれたり、誇大妄想を浮べる。記憶力が惡くなり、根氣仕事や讀書等は長く出來ず。些細な事が氣に掛り、從つて喜怒哀樂の情甚たしく。生殖機能の障害、即ち陰萎となり早漏となり不感症となる。陽氣の加減で、馬鹿に頭重く感じ、頭痛を覺え、時に眩暈や耳鳴がする。便秘勝ちで、食慾は不進とは云ふものゝ氣の向いた時などは人の驚く程大食する。

右の如な容體があつたら如何程不愉快であり如何程不都合であらう。是れ一口に神經衰弱と云つて人間の成功を妨げ、人間の快樂を奪ふ所の實に恐るべき病である。所が此の病氣の初めは、總て其の容體が甚だしく苦痛で無い爲め、恐るべき病に罹つて居ることを自覺しない人がある。中には右の樣な容體が現はれて、不愉快を感じ不都合を感じて居ながら、年齡の故であらうとか、早くから腦力を使ひ早くから不品行をしたからだらうとか、自分で其の原因を極めて居て敢て病であることを思はない人もある。又中には本病の恐るべきを自覺しイヤ自覺どころでなく本病の爲めに大に惱まされ、既にあれよこれよと種々治療するも、全快の目的を達し得ざるに、あゝ最早世間にある種々の藥劑などにては到底全治の見込なしと失望落膽し居る人もあらう。病氣と云ふことを氣付かない人は、まこと知らぬ間が佛であるけれども必ず早晩悲慘の病苦に泣かねばならぬから一刻も早く自己の病を知つて治療せねばなりませぬ。又既に病苦を憂ひ散々治療するも其効なきに失望して居らるゝ人はまこと氣の毒の至り大に同情に堪へぬ。然し諸子よ、最早落膽し給ふな諸子の前途に一大光明が輝いたのである。其は何かと云ふと、前帝國大學教授醫界の權威たる田中醫學博士が世間薄幸なる本病患者の爲め、其の深き學殖と幾多經驗に基き今回本病最新治療藥として、効驗確實著大の藥物を方劑せられ、又其の新智識を傾注されて何人にも了解し容易なる本症治療書を發表せられた一大福音である。不肖ながら余之れが一般賣藥の任に當つたので、敢然此處に一般同病者に對し博士の著書と試驗用藥劑を廣く無代價にて進呈することゝしたれば、前記の如き容體が少しでもある人は速かにハガキにて申込まれよ。既にあれこれと賣藥などして効なきに、之れも矢張り世間ありふれの無効藥と同一ならんかなど、疑念を起して申込を躊躇する人ありとすれば、まことに其人は不幸である。僅か只一トノハガキにて博士の治療書と優良なる藥劑が得られるのであるから何卒猶豫せず申込むべし、あゝ今日の幸福の最大なるものである。玉と石とを見違へて後悔し給ふな。機會を捉へざる者より逸すの金言ある事を思ひ給へ●申込所東京芝區田村町九十七、愛宕山下電停際（電話芝一六一四番）山本德次郎宛の事。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●中島英之助著

町の兄弟

（新刊發賣）

四六判總布裝美本
ポイント三百頁
定價金九拾錢
送料金八錢

新作小說

著者年少二十歳。處女作として「町の兄弟」を公にす。

長篇一卷、寂しき驛路町の屋敷に生ひたちし兄弟を描く。主人公芳之助の生活を中心として、都の春、郷土の風色、更に新に眼醒めたる若き人の如何に悶へ如何に苦みしか、その眼に如何なる人生の走馬燈をうつしたるか。

僞らざる著者の筆は、若き人々、家庭の主人、更に多くの人々に、一讀。共鳴と深き記憶とを與ふべし。

「町の兄弟」一卷之を分てば、春の雨、丘の國へ、と云ひ、虫干し、靜寂と、なす。

短篇二十、之を合すれば一個清新の長篇となる、著者の筆の赴く所、如何なる人生の展開されたるかを見よ。

發賣所　東京市丸の内　振替東京二四一七　籾山書店

信用な[illegible]掲載は謝絕す

驚く可き新事實

鴻林生

▲生死を賭して肺病患者の身代りとなる

▲全治實驗秘密眞相の公開▼

▲肋膜氣管支患者も助かる▼

社會の出來事としては熱き血と冷き涙の痕を示し肺病全治の事實としては治療界の闇に一道の曙光を放ちたる安原氏の經歴は肺病救濟の破天荒の福音なるのみならず感慨無限の實話として一般讀者に報道せんとす。
現に今日も吾人が厚き交誼ある安原氏は國税納額數千圓に上り體重十八貫もある愉快活潑に奮闘されつゝある紳士なるが安んぞ知らん氏は數年前恐る可き肺病に呻吟し瀕死の狀態をさへ傳へられし事もありき氏は假令家産を蕩盡しても身命には代へられじとあらゆる療治に手を盡し又は函根鹽原鎌倉の如き山青く波白き地にも靜養せられしも氣力は次第に衰弱し身體は削らるゝが如く代るゝの病に攻られ喀血さへ見るに至り親戚知人は涙ながらに同情し縞蛇黒猫の黒焼まむし酒スッポンの生血加持祈禱は愚か云ふに忍びざる療法までも勸むる人ありき。
然れど氏の生家は醫家で令弟等二人の名醫を出せし程なりしかば流石に舊時代の迷信などには耳を傾けず何れ危ふき一命なりとせば進歩せる學理を指針として研究し有効也と信ずる以上は前人の未だ試驗せざると思ひし奇抜の療法にても生死を賭して自己肉體に實驗し一面より之れを見れば一身を以て幾多同病者の爲め身代りとなれる觀あり又奇獸穿山甲が肺病に特効あるを聞き之を手に入れ綿密なる研究を重ね又氷海に棲息する妖怪の如き動物ウニコールを實地研究しつゝある折柄旭日山川を照らすが如き醫學の光明と獻身的熱心の結果と相須つて研究完成せる確信ある一奇藥を服用するに及んで不思議にも咳嗽喀血胸痛等の病苦を日毎に減じ約三ケ月後には別人かと驚ろく様に全治せりされば此事實を聞ける同病者は氏に療法を聽き實驗するに奇効を奏するより再び訪問し又は書狀にて心の限り感謝を表するもの日を逐ふて多く今日迄救濟の患者は既に數千人に達し居れりと云ふ幸に氏は一人にても多く患者を救はんとの考へより秘密眞相を公開せる肺病全治の事實を論述し同病者を救ひ居られるが其實驗療法の内容は意外の興味と適切なる實效を有し肺病治療上の新權威なるが氏は此の大冊を同病者に無代領本しつゝあれば肺病、肋膜、氣管支患者は取敢ず東京日本橋兜町二安原尙親氏へ宛て中央公論紹介と記しハガキで申込み一讀して全快の新道程に急進せられよ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京京橋

大正六年 重要日記

清新にして
完備高尚
優美にして
實用的なる
模範的三
大日記！

▽好評嘖々、一年は一年と愛用者を激増し來れる我が重要日記は、紙質の精良、體裁の優美、製本の堅緻、記入の至便、附錄の澤山、價格の低廉に於て他の日記に冠絕し、趣味と實益を期し來れるが、更に明年度よりは今日民間大勢力を有する九星表を附し一切の行事に便せり！

▼定價四十五錢
▽送料八錢　四六判
▽總クロース美本

十六頁の九星表

大正六年 懷中ノート

▽大きなる銀行會社、及び個人の年末贈答品として最も應はし。
▽本年は特に大部數を製本せるも註文續々として來り好評嘖々たり。

▽日記と手帳を兼ねたる、頗る便利にして氣の利きたる理想的懷中日記は是れ！

特製三十五錢（總皮天金）
並製二十二錢（總クロース）
――（送料各二錢）――

大正六年 婦人日記

▽家計簿兼用の理想的婦人日記は斷じて他に求むべからず！

▽日々の記事欄や、會計欄の完備整頓せるは勿論、家庭の年中行事より家計のとり方、子女の躾方、料理衞生其他諸規則に至るまで不易親切に記載し說明せり。

▼定價四十錢　送料八錢
▽四六判總布美本九星表付

實業之日本社發行　振替東京三二六番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ

五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話京橋一九三・三二一二　長一〇五九

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話[illegible]一七一一

大阪出張所　大阪市西區[illegible]一丁目五番地　電話[illegible]一〇九五

御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な説明書を差上ます

御住所

御姓名

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第卅一年十二月號目次

▼公論

寺内内閣を監視すべき三要點
人格を第一義とする米國大統領の選擧……社論……一

日本畫に對する西洋畫の感化……澤村專太郎……二五

再び朝野論爭の焦點となるべき減債基金問題……法學博士 堀江歸一……四三

現代史に於ける澁澤翁の位置……山路愛山……五二

來るべき政戰に對する憲政・政友兩黨の態度……法學博士 超政爭樓主人……七〇

太平洋及び東亞大陸にも膨脹の翼を張りつゝある米國の研究

◎米國海軍の將來……海軍中將 佐藤鐵太郎……八〇

◎米國陸軍の大擴張……某陸軍將校……八四

◎米國魂の表象たる各州のモットー……齋木仙醉……八七

◎米國の對東洋政策……法學博士 吉野作造……九〇

▼説苑

女夫情話「袈裟懸の辻斬」……田中貢太郎……一

ヤドローヲ村の一日……片上天弦……二三

俳趣味の官人・政客・實業家……鐵拳禪……四四

吾人が見たる南洋の眞相……海軍中尉 白瀨知……五五

妬婦傳……笹川臨風……六四

東宮殿下御教育の大任を擔へる人々

◎東宮御學問所の人々……鵜崎鷺城……七三

◎帝王學の進講者たる杉浦氏の人格……河上謹一……七七

◎東宮教育の任に膺れる人々……吉野臥城……八一

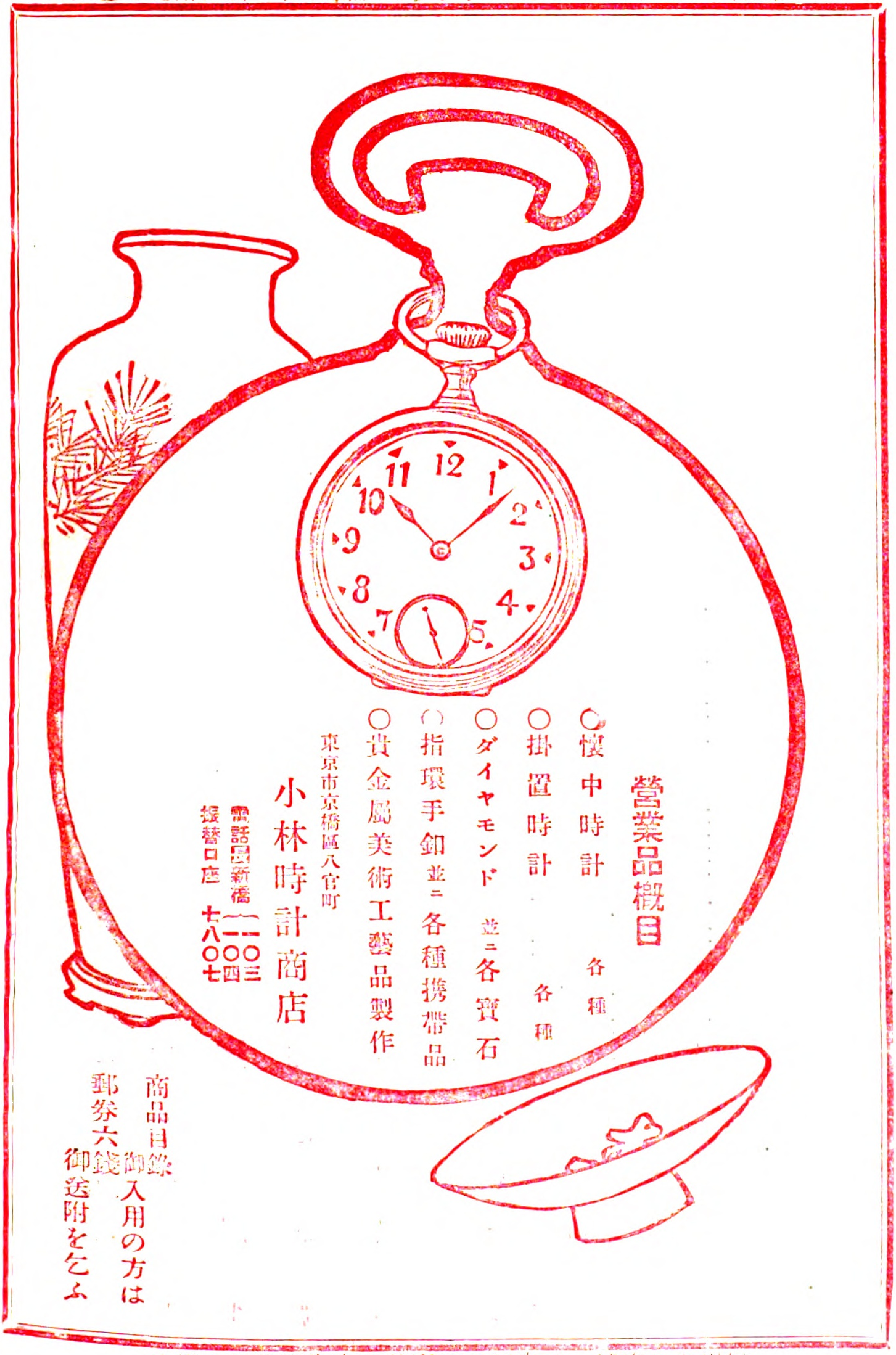
◎東宮御教育の人々に對する希望……古川學人……八四

《小説》

■蛇……田村俊子……一

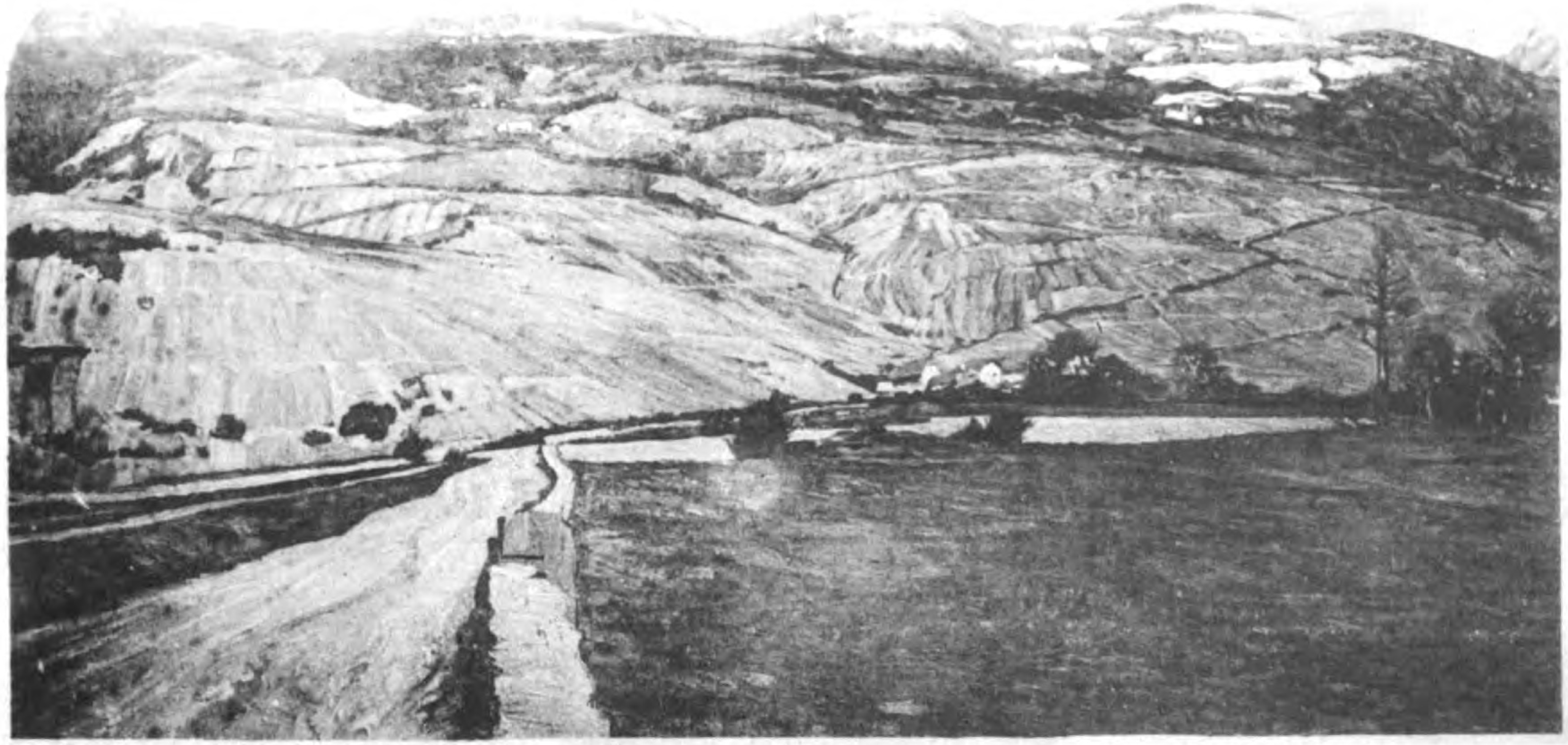
■厄年……平塚らいてう……三〇

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ED BILLE



Les Vignes En Mars

中央公論

十二月號
第卅一年第十三號
第三百三十八號

寺内内閣を監視すべき三要點

(一)

寺内内閣の出現に對しては、世上或は之を以て時勢の要求に應ずるものとなすものありと雖も、其の明かに憲政本來の常道に反し、我國政治的進化の大勢に悖るものたるや、識者の定論として最早異論を許さゞる所なり。然れども、現時既成政黨の無氣力なるに乘じ、宮廷の厚き御信任を蒙る元老の擁護によつて、兎も角も一旦出現したる以上、輕々に之を壞滅し去らんとするは、亦無謀の擧たるを免れず。吾人は我國政治の健全なる進歩の爲めに、深く超然内閣の出現を憂ふるものなりと雖も、又他の一面に於て世の聵々者流に雷同して夫の所謂討閥運動なるものに同情を表する能はざるものなり。罪の子も生

れたる以上は無下に之を見殺しにするに堪へず。然らば之より鋭意寺内内閣を監視して、我國憲政の順當なる發達を紛更せしめず、其施設をして出來る丈け國家當面の要求に合致せしめ、以て其變則的成立の理由を完うせしめんことは、正に吾人の攻究すべき緊喫の問題たらずんばあらず。

以上の見地よりして、吾人は今後寺内内閣の施設を監視するに當り、次の三點について最深の注意を加ふるの必要を思ふ。一は寺内内閣が何を立てゝ、其存在の理由となすかの點、二は如何なる手段を以て其内閣の存續を圖るかの點、三は何の施設を以て國家に貢献せんとするかの點即ち是れ也。

（二）

寺内内閣は果して如何なる合理的基礎を取つて其存在の理由を説明せんとすべきか。政黨政治が立憲の常道なりや否や、將た從來の諸内閣が立憲の常道に照して如何の批判を受くべきものなりやの論は暫らく之を措く。たゞ新内閣の成立毎に唱へらるゝの例なる立憲・非立憲の論議の喧しかりしこと、現内閣成立の時程著しきはなし。是れ豈國民の多數が、現内閣の存立を是認すべき根據について、多大の疑惑を存するの明證にあらずや。故に寺内内閣にして、首相自身が地方官會議に於て訓示せるが如く、所謂「公ヲ秉リ平ヲ持シ」、其施設を國民に徹底せしめて、以て擧國一致の實を擧げんと欲するならば、先づ其存在の理由について、天下の群疑を一掃する所なかるべからず。固より余輩は、此點に關する明白なる説明をば、必ずしも直接に政府當事者の口に求めんと期待するものにあらずと雖も、之を知るに自ら他に道あるべし。加之幸にして此等の點に關しては、民間に亦種々の説を提供するものあるが政府は果して之等の如何なる説明に與するものなるかは、其各般の事情より、自然之を忖度するに難からず。

是れ予輩が茲に政府が果して如何なる根據に立つて其存在の理由を説明せんとするかを論ぜんと欲する所以なり。

寺内内閣の存立を論ずる世上幾多の論議中には、絶對に之を否認せんとするもの亦少からずと雖も、こは差し當り吾人の論究に係はりなければ暫らく之を省略に附す。獨り寺内内閣の存立を是認せんとするの説について之を觀るに、或は絶對的に之を是なりとするものあり、或は相對的に之を是なりとするものあり。又絶對的是認論の中にも、或は超然内閣のみが眞正最良の政治なりとするものあり、或は超然内閣亦他の政黨政治等と相並んで齊しく是認せらるべきものなりとするものもあり。然れども此等の説の悉く謬妄の見なるは極めて明白にして、政府亦恐らくは斯の如き根據に立つて自己の存在を主張せんとするものにあらざらん。内閣組織後種々の機會に於て發表せられたる所謂當局者の意見なるものを見るも、中に多少の例外なきにあらずと雖も、大體に於て立憲政治の歸趨が政黨政治に存するを認むるに一致し、只日本今日の時局に際しては、變則ながら超然内閣を認めざるを得ざるを許さんとするが如し。然らば現内閣、亦自ら所謂相對的是認論の立場を取つて自己存立の理由となさんとするものと謂はざるべからず。

相對的是認論の中にも、更に細分すれば、超然内閣存立の根據を「擧國一致」てふ軍國の急務に求むるものあり、又は議會多數黨を根據とする前大隈内閣の失政に置くものありて、所説必ずしも一に歸せず。現内閣は此二説の中果して何れの説を取るものなりや。此點は予輩の未だ明白に知り難しとする所なりと雖も、暫く予輩の觀る所を以て斷ずれば、現内閣は實は擧國一致を標榜すべき事實上の基礎を缺くも

のなるが故に、結局するところ、前內閣の失政の結果、憲政進行の途上に一時の紛更を來たし、遂に變則的に超然內閣の成立を見たるものなりといふ論據に立つの外なきに似たり。抑々今日所謂軍國多事の際に當り、擧國一致を叫ぶは固より其必要なきにあらず。人或は我國は形式上交戰國の一に伍するに止り、今や直接に戰爭に干與するに非ざるが故に、擧國一致の論據の下に內爭を制禁するの必要なしと說くものあり。成る程之にも一應の理由はあらん。然し他の一面に於ては戰後に於ける世界形勢の變轉を思ふ時、我國亦之に應ずるの對策を攻究するが爲め、暫らく內爭を避けて全國協力以て此大變に處するの準備に努むるの必要なくんばあらず。あらゆる障礙を排して直に擧國一致を實現すべきや否やの實際問題に關する意見の相違は、暫らく之を別問題とするも、兎に角擧國一致の實を擧げんとして現內閣を組織したりといふならば、吾人は又現內閣存立の理由を此點に認むることを厭ふものに非ず。然れども現內閣は事實上擧國一致の主義を體現すべき資格を具ふるものなりや否や。抑も擧國一致內閣は、政爭の上に超然たるべきも、政黨の上に超然たるべからず。見ずや、英佛諸國の擧國一致內閣は、悉く各派の代表者を集め、各般の意見を網羅せることを。擧國一致內閣の實は、この各黨派網維の事實的基礎に存す。而して我が寺內內閣は不幸にして全然此基礎を缺くに非ずや。而かも尙擧國一致を標榜して己れに反對するの聲なからしめんとするは、恰かも曾て大隈侯が政友會に挑戰しながら口頻りに擧國一致を要求せるの類のみ。徒らに敵黨の反感を挑發して益々政界の紛亂を甚しからしむるに終らざれば幸なり。寺內內閣にして若し强て此點に其存在の理由を立てんとせん乎、必ずや政界の混亂を誘致して、遂に靜かに其經綸を行ふの暇なかるべきなり。

然らば寺内内閣に取つて其存在の理由を明かにする爲めに殘る所は、前内閣の失政の結果として成立せる變則的内閣なりと云ふにあるのみ。是れ予輩も亦認めて以て、寺内内閣存立の唯一の理由と爲す所。而して予輩は此理由の明白なる意識の下に各般の施設を爲す時、寺内内閣は初めて國家の前途を誤ることなく、我國政治的進歩の上に多少の貢献をなし、以て其存在の理由を完うし得べしと信ずるもの也。若し之に反して寺内内閣が其の政權を掌握したるの勢に乘じ、正當なる存在の理由を超越して、更に不當に其存續を主張するが如きことあらん乎、必ずや遂に自ら傷き又國を誤るに至らん事疑を容れず。故に予輩は、切に寺内内閣に向つて此存在理由の認識を要求し、又國民に向つては、此意味に於ける監視警戒を怠る勿らんことを希望せざるを得ず。

變則的内閣永久の存續を主張すべからざることは固より言ふを俟たず。故に吾人は變則的なる寺内内閣に向つて、適當の時機に於て潔く退隱すべきことを要求す。係爭物件の管理を托せられたる者は、正當なる所有者の決定と共に其地位を退かざる可らず。政界安定に歸し其進行の常道に復するの時は、即ち寺内内閣の勇退すべき時なりとせざる可らず。然らば問ふ。何の時を以て政界常則に復するの時機とするか。曰く次期總選擧の時是れ也。蓋し現内閣は、現在議會に於ける多數黨が、正當なる方法によつて多數黨たりしにあらずとか、又は此多數黨の擁護する前内閣が、失政の結果權力を失墜したるに拘らず、之に代るべきものを他に見出し能はざりしとかの理由によつて出現したるものにして、此等異常の理由は、すべて次期の總選擧の結果一擧にして消滅すべきものなればなり。而して次期の總選擧の結果として現はるゝ多數黨は、そが憲政會なるにせよ將た政友會なるにせよ、國民多數の輿望を有するもの

として正當に政府を繼承すべき新地位に立つものなるが故に、寺内内閣は正に此時を以て潔く高踏勇退せざるべからざるものなり。尤も寺内内閣にして仍ほ引續き其經綸を繼行して國家に貢獻せんと欲するの微衷あらば、更に新多數黨と結托提携するも亦必ずしも之を妨げず。官僚と政黨との總體的結托は、往々各種の腐敗と罪惡とを伴ふの惧あるが故に、吾人は固より之を歡迎するに躊躇すと雖も、我國現時の狀態に於ては——殊に「元老」なる有力なる障壁ありて政黨の直に入つて廟堂に立つを許さゞるの我國現時の政情の許に在つては、——又色々の行掛上政治的經驗に富む官僚系の幾多の才人が容易に政黨に來り投ずるを見難き事情ある我國今日の實際の問題としては、——暫く兩者一時の變則的結合を默認するも亦止むを得ざるべき歟。是れ亦一面に於て遠からざる將來に於て、所謂官僚一派の結局全然政黨に没入するに至る迄の一道程たるやも知る可からず。現に從來官僚の政黨に結托せるの跡に依るも、中には往往官僚が徒らに黨人の節操を弄べるが如き外觀を呈するものなきにあらざるも、之を大局より觀れば、漸次官僚系の來投に依りて政黨の膨脹を促せるの結果を見たりと言はざる可らず。此意味に於て吾人は官僚と多數黨との結托をば、必ずしも否認せんとするものにあらざるが、(官僚との結托を甘んずる、若くは之を喜んで期待するかの如き政友會の態度そのものには、又別に議すべきものある言を待たず)只寺内内閣の超然内閣としての壽命は、次期の總選擧を以て一期とすべきことは、其變則的内閣たるの性質上當然の結論たりと主張するに於て一歩も讓歩せんと欲するものに非ず。若し夫れ全然多數黨に明け渡すか、若くは之と結托して、依然其地位を存續するかは、固より其選むところに一任して可なるのみ。

　但し玆に所謂次期の總選擧とは、現議員の任期滿了の時を以て起るものたると、期に先つ解散の結果

として起るものたるとを問はざるものにして、吾人の上述の論理は二者に通じて固より其適用を殊にせず。今議會に於て果して解散を見るべきや否やは、今之を豫斷するを得ずと雖も、若し議會の多數黨にして、重大なる問題について政府に反對し、以て政府存立の基礎を動かさんと試むるに於ては、政府の必ずや議會を解散するの英斷に出でざるべからざるは言を待たず。蓋し現内閣は本來、從來の多數黨に對する國民的信任疑ありといふの主張に基いて乘り出せる者、故に適當の機會だにあらば改めて國民の信任を問ひ以て政界の變調を復正するの責任を負ふものなれば也。姑息の手段によつて、一時の窮通を計るが如きは、例へば明白なる國民的信任の上に立つ内閣が、貴族院などの反對を蒙れる際に、一時の難局を救はんが爲めに取るの手段にして、變則的内閣が其存續のために賴るを許さるゝものに非ず。議會多數黨自ら解散を避けんとするは猶恕すべし。寺内内閣に至つては斷じて議會の挑戰を回避するの資格を有せざるものなり。

（三）

吾人は寺内内閣の永續的存在の主張を否認するものなりと雖も、前項所述の條件に反せざる範圍に於て内閣自身其永續を希望するの衷情に向つては、亦多少の同情なきにあらず。丈夫苟も經綸を提げて政權を握る。一日も永く其地位に留らんと欲するは、必ずしも大隈侯一人の弱點と言ふべからざればなり。吾人は固より、速かに斯くの如き變則的内閣の消滅して憲政發展の常道に復するを望むも、超然内閣が其存續を計るが爲めにするの苦心をば全然否定し去る程に慘酷ならんと欲するものにあらず。況んや憲政會其他の政黨は、機に先つて寺内内閣を顚覆せしめんとして、種々不當不法の悪聲怒罵を放つべき

に於てをや。故に吾人は現內閣が一つには之等の非難に對抗し、又一つには其存續を希望する點よりして各種の手段を執るべきを豫想し、密かに之を諒とするものありと雖も、只其執るところの手段如何については、國民と共に最も嚴密なる監視を怠る可らざるを思はずんばあらず。而して若し予輩をして寺內內閣の爲めに計る所あらしめん乎、此點に就て最良の手段とすべきは一に所謂「善政」を布くことの外に出づ可らず。善政を布くことを以て內閣存在の理由たらしめんとするの愚論なるは、已に屢々多くの人に論ぜられたり。故に之に賴つて寺內內閣が永遠に其存在を要求するは許すべからずと雖も、之に依て出來得る丈け其地位を維持し、少くとも機に先つて瓦解せしめんとする隱謀に對抗せんとするは、何の妨げなきのみならず、又此希望に刺戟せられて努めて善政を布くに至らば、亦是れ國家の大幸なりと言はざるべからず。

然れども寺內內閣は、果して專ら此一事によつて、其存續の目的を達せんとすべきや否や。予輩の最も憂ふるところは、現內閣は或は更に一歩を進め、政黨の攪亂を企て、之によつて其內閣の不當なる永續を計らんとせざるやの點にあり。此等の點は、寺內首相の人となり、並びに從來の言動施設之を掛念せしむるのみならず、閣員の最近に發表せる諸般の言說又た之を裏書きするものあるが如し。官僚系一派が、從來政黨の發達を嫌惡し、其攪亂の爲めにあらゆる手段を選ばざりしことは、今日何人も疑はざるところ。彼の產業組合の如き、在鄕軍人會の如き、其趣意は極めて良好なるも、官僚系一派のものが從來之等を利用して政黨の撲滅を計り來りしことは、今日何人も之を疑はず。例へば總選擧の度每に、平田總裁の名に於て訓辭を發し產業組合員の選擧運動を制肘するが如き、又は各地に於ける在鄕軍人會

長亦中央の命を奉じて、陰に陽に團員の選擧行動に干渉するが如き、從來心ある者の顰蹙して止まざりし所なり。而して我が寺内首相は實に斯かる頑迷なる思想乃至運動の最も明白なる證現者として知らるる者にあらずや。若し夫れ現内閣の副首領を以て目せらるゝ内相後藤の「自治團宣言」に至つては、最も露骨に政黨攪亂の意圖を示すものにして、實に言語道斷の妄擧なりと言はざるべからず。斯くして予輩は此點に關して大に現内閣他日の行動を監視するの必要を感ずるものなり。

後藤男は其「自治團組織宣言」に於て「國家憲政ノ建立ハ健全ナル自治生活ヲ基礎トセザルベカラ」ざるを説き、我國現時の自治生活の甚しく不健全なるを慨し、國家の爲めに自治生活の進歩改善を計り、「同憂達識ノ士ト共ニ戮力攻究セント欲スルヲ主題」として、自治團を組織せんとすと宣言せらる。其趣意たるや大によし。而して男は其の自治生活の擧らざるを以て、地方人士の「妄リニ政論ヲ上下シ、好ンデ政黨ニ出入シ、政熱昂騰ノ極不知不識ノ間ニ相驅ッテ渦中ニ投ジ、專ラ郷黨ノ利害ヲ心核トスベキ問題スラ捨テヽ省ミズ、却ッテ是自非他ノ弊ヲ激成スルニ至ル」にありとなす。其意蓋し地方自治の問題に黨爭の混入するを憂ふるにあるならん。此點に於て吾人亦男の説に異議なし。地方問題に黨爭の混入するは、吾人も亦男と共に、其憂を同じうすと雖も、而かも此弊を去り自治生活の健全なる進歩を計る所以の途として、男の擧ぐるところの條項に至つては、不幸にして多く贊同するを得ざるを遺憾とす。蓋し自治生活の進歩改善を計るを目的とする以上、自治團の活動は純然たる地方の問題に限らざるべからず。然るに男の示す「自治團綱領草案」には、擧ぐる所の十數ヶ條の項目中、適切純粹に地方的事務と認むべきもの極めて尠なく、否殆んど全部みな國家全般に渉る問題に關するものに非るはなし。殊に「社

會各階級ハ善良ナル代表者ヲ國家及ビ地方自治團體ノ行政ニ干與セシムル事ノ重大ナル責務アルコトヲ自覺セシメ、之ヲ實行セシムルコト」を要すと言ひ、又「本團ハ其目的ヲ達スル一方法トシテ政黨政派ヲ問ハズ、本團ノ主義ト相合フ者ニ帝國議會議員並ビニ地方自治體ノ機關トシテ選出セラル、事ヲ援助スベシ」といふに至つては、是れ實に地方自治の團體をして、直ちに中央の政爭に與からしめんとするものにあらざるか。男は頻りに地方人士の「國家憲政ト地方自治トノ差別アル事ヲ適當ニ辨識」せざるを以て、地方行政の擧らざる一因となすと雖も、是に至つて吾人亦實に男自らの果して地方自治と國家憲政との差別ある所以を適當に辨識せりや否やを疑はざるを得ず。殊に自治團を地方團及び本部より成るとなし、全然地方自治に關係なき口舌の士を以て東京の本部を組織せしめ、本部の研究及び鼓吹の作用によつて地方自治團を動かさんとする仕組の如きは、最も明白に自治本來の精神に反す。要するに後藤男の提案たる自治團は、其組織に於て自治の本義に違ひ、其爲さんとする所の事業に於て全然政黨と其趣を同じうす。是れ自治行政を救ふものにあらずして、寧ろ更に自治體の紛亂を促すものに非ずして何ぞ。蓋し予輩の觀る所によれば、地方の問題に黨爭の混入するの弊は、一朝一夕の事にあらず。男の提案する自治團の組織の如きを以てして、到底解決せらるべきものにあらず。此等の點に關する予輩の積極的意見は、今茲に贅せずと雖も、自治區域の徒らに大なる、自治體に對する國家委任事務の煩多なる、繁文縟禮の弊の自ら自治行政事務をして一種の專門的技術たらしめたる、敎育其他の方針の誤れるよりして地方に精神的中心の存立を妨げたる、此等の諸原因は相依り相集まつて地方自治をして今日の如く混沌たらしめたるものにして、地方人士が「政論ヲ上下シ、好ンデ政黨ニ出入」する事それ自身は、も

と必ずしも何等の弊因となるべきものにあらず。政論を上下し政黨に出入するはもと立憲國民の尊貴なる特權に屬す。吾人は寧ろ地方人士が一層盛んに政論を上下し、一層熱心に政黨に出入し、只之を貫くに一誠を以てすることを、憲政の發達の爲に必要なりと思惟す。唯全國の問題につきて爭ふべき所謂政爭を、地方問題に援引して無用の爭をなすを戒むべきのみ。地方の問題に黨爭の混入するを避けんとして、政論の上下、政黨の出入其物を呪ふが如きは、角を矯めんとして牛を殺すの類に外ならず。男又曰ふ「自治生活ハ郷黨ノ集團ニシテ恰カモ一家ノ如シ、一家ニ政見ノ隙アルヲ許サズ、郷黨豈ニ政黨ノ爭ヲ許サンヤ」と。而かも郷黨に政見政派の爭あるは、寧ろ自治體の組織其物に根本的の病弊あるを認むべきに非るか。其根本の病弊に觸れずして、只地方人士に戒むるに現在の政黨に近かざらんことを以てするは、啻に其目的を達し得ざるのみならず、更に從來の政爭に一新當事者を加ふるに過ぎずして、益益自治行政を紛亂せしむるに終らんこと必せり。是に於て吾人は男の自治團を斷定して、寧ろ無用有害の提案なりと論ぜざらんとするを得ず。人或は曰く、男の此提案は、男の平素讃嘆して止まざる獨逸のハンザ同盟に倣へるものなりと。ハンザ同盟若し心ありて之を聞かば、彼必ずや其曲解の著るしきに呆然たるものあらん。

然れども自治團の提案が、果して男の期待するが如き目的を達し得べきや否やの詮議は、茲に重要とする問題にあらず。吾人の之に關聯して頗る懸念に堪えざるは、若し此計畫にして實行せられんか、そが直に政黨攪亂の具に供せらるゝ事なかるべきや否やの點なり。少くとも此計畫は如何にかして政黨を攪亂し、既成政黨の外に超然內閣存立の基礎を見出さんとする思想の代表的表現と觀るべきものにあら

ざるやの點是なり。男の提案の果して實行せらるべきものなりや否やは甚だ疑ありと雖も、此計畫を透して或は揣摩する事を得べき一種の反動的思想が、若し現内閣の周圍に磅礴するものありとすれば、吾人は彼等が今後其内閣存續の爲めに執らんとする所の手段について、國民と共に大いに警戒の眼を睜るの必要あるを思はずんばあらず。

(四)

變則的なる寺内内閣は、頑迷なる元老の後援あるの外、元來立憲の常道に乘ずるものにあらざるが故に、夫れ自身に於て已に一弱點を有す。故に專心一意善政を布き、以て辛うじて民望を繫ぐは、動もすれば起るべき批難攻擊に對する殆んど唯一の障壁たらずんばあらず。予輩は寺内内閣の何時までも存續するを希望せざるものなれども、既に存立する以上此内閣が徒らに政權の維持に齷齪して、政界の腐敗を誘致するの因を作ることなく、一に國家民生の爲めに盡くすところあらんことを希望して熄まず。吾人は今後此の意味に於て常に寺内内閣の實際的施政を監視するを怠る可らず。

寺内内閣は、十月廿八日以後數日に亙つて開かれたる地方官會議に於て、首相初め各大臣をして交々其の所謂施設の大綱なるものを表示せしめたり。元來内閣組織の當初、出來る丈け詳細なる施設の大綱を以て主義と抱負とを明かにし、之が實行を他日に公約するは、總ての内閣に通ずる政治的の責任なり。苟くも經綸を以て政府を組織する以上、此男らしき態度に出づるは當然の事にして、政治道德上の原則としても、亦固より此の如くならざるべからず。彼の所謂「不言實行」といふが如きは、言多くして實行の之に伴はざるものに對する一つの皮肉として多少の意味なきに非るも、素より堂々たる政治家の執る

べき態度にあらず。殊に寺内内閣の如き變則的内閣に在つては、其變則的なる丈け、特に其存立の理由と政策の大要とを明かにするを要するものにして、斷じて不言實行の名に隠れて他日の爲めに言責を避くの措置に出づべきものに非らず。否な、却つて他の内閣よりも一層詳細に一層具體的に、其政策の綱目を發表すべき責任を有する者なり。

然るに此點に關して、現内閣は未だ何等の公表を敢てせざるのみならず、地方官會議に於ける寺内首相以下各大臣の訓示演說の如きも、實は甚だ粗漫茫漠を極むるものなり。只中に就き首相の訓示演說は、やゝ細目に渉つて說く所ありと雖も、其言ふところ餘りに抽象的にして、何人が朝に立つも同じく之を言ひ得る種類のものに屬し、寺内内閣としての何等特別の色彩を帶びず。是れ豈群議を排して蹶起せる所謂軍國内閣の態度ならんや。予輩は私に寺内内閣の爲めに施設大綱の宣明を避けんとする卑怯を遺憾とす。傳ふるものあり、二三の閣僚は他の機會に於て現内閣の不言實行を主義とすべきを說き、暗に大隈内閣の多言不實行を笑ふものありと。不言實行は、多言にして不實行なるよりも優ること言ふを俟たずと雖も、初めより其爲さんと欲するところを示さずして、巧みに國民の批判を他日に避けんとするは、立憲的政府のなすところにあらず、少くとも變則的内閣の斷じてなすべきところにあらざる也。

然れども、寺内首相の訓示は兎も角も各般の綱目について其施政の大要を掲げたり。只其粗漫茫漠たるを惜むのみ。例へば外交方針については「日英同盟ハ我外交ノ機軸トスルトコロ、日露日佛協約ト相俟ッテ益々偉大ナル効果ヲアラハシツヽアリ」といふは可なりとして、「正義ヲ重ンジ、微ヲ愼ミテ外交ヲ信ニシ、殊ニ隣邦支那ニ對シテハ益々親善ノ誼ヲ明カニシ、以テ極東全局ノ平和ヲ確保センコトヲ期

ス」といふは、幾分對支外交の刷新に意あるを語るに似たりと雖も、而かも之によつて寺内内閣が、如何なる政治的乃至道徳的責任を國民に對して將來に帯ばんとするやは、尙未だ明瞭を缺くものあり。若し夫れ國防の要務を擧げて「其充實ハ國民品性ノ向上、民生ノ保健、產業ノ發達ニ俟ツモノ極メテ多シ」といふが如きは、茫漠殆んど雲を摑むが如きものあり。陸海軍の擴張充實の問題について、多少其程度を推測し得べき位の說明を與ふるにあらずんば、目して以て内閣の政策となすを得べからず。國民品性の向上、民生の保健、產業の發達の三事の如きは、獨り國防の充實のみならず、他の如何なる種類の政務についても皆同樣に云ひ得べくして、敎育も、財政も、警察も、外交も、皆等しく、此三事に「俟ツモノ極メテ多シ」といふを妨げず。又敎育について「近者智育ニ偏シ、德育之ニ伴ハザルノ傾向ナキニアラズ」と言ひ、財政について「其放漫ヲ妨ギ、國債ノ整理ニ勉メ、以テ戰後ノ經營ニ備ヘントス」と言ひ、經濟について「此機ニ於テ正貨蓄積ノ方法ヲ講ジ、正貨利用ノ途ヲ按配シ、兌換ノ基礎ヲ鞏固ニシ、國際金融ノ調熟ヲ計ラントス」と言ひ、又地方自治については「黨ヲ樹テズ、私ヲ圖ラズ、和協ヲ尙ビ、簡易ヲ主トシテ、以テ委任セラレタル事務ノ處理ヲ全クシ、住民共同ノ基礎ノ上ニ堅實ナル施設ヲナシ、以テ其健全ナル發達ヲ期スベシ」といふが如き、何れも多く言つて何をも言はざるに等し。社會事業については、貯金保險の奬勵とか、貯蓄銀行無盡業の取締とか、職工の保護とか、農村の改善とか、產業組合の發達普及等を擧ぐるも、是れ皆從來施設し來たりたるもの丶列擧に過ぎずして、他に何等社會政策的方面に於ける新施設の計畫あるを示さず。其從來施設するところについても、更に一層の注意と努力を加へんとするの意氣も亦之を窺ふに由なし。青年團、在鄉軍人會についても多少言及する

ところありと雖も、近時の教育が智育に偏し、德育之に伴はざるの傾向を救濟するの最も主要なる手段として、「此旨ヲ青年團體、在郷軍人會其他耆英ノ各機關ニ及ボシ」以て其改善を計らんと主張するに至つては、寧ろ其見識の低劣なるに驚かざるを得ず。之を要するに、訓示の要領は、各般の綱目に亙りて殆んど洩す所なしと雖も、言辭餘りに抽象的にして、多ゝ云つて而かも何事をも說かざるに等しきが故に、吾人は之を以て寺內內閣今後の施設如何を論議するの材料と爲すことを得ず。而かも漠然ながら其訓示の全體より窺ひ知るを得るは、其政治的見識の極めて卑近低劣にして且つ何等政界の耳目を聳動すべき新施設を有せざるの一事之のみ。若し夫れ後藤內相の尊祖敬神を國民彝倫の大本、世界無比なる我國體の心核なりとなし、西洋物質的文明の進步は、自ら此尊祖敬神の觀念に影響を及ぼすとなし、「各位ハ深ク憂ヲ茲ニ用ヒ、益々國家ノ宗祀タル神社ノ本義ヲ明カニシ、夙夜恭敬奉仕ノ誠ヲ竭サシメ、今後益々國民ヲシテ國體ノ自覺ヲ固ウシ、以テ一般ノ敬虔心ヲ篤カラシメ」云々といふに至つては、宛として時代後れの村夫子の言に類し、吾人をして殆んど現內閣が果して戰後經營の大任に當るの精神的準備を具ふるやを疑はしめざるを得ず。我々日本國民は遠からず、戰後一大變革と共に大いに覺醒すべき列國競爭の渦中に投ぜざる可らざるの運命に在り。國民は果して此間に在りて堂々濶步し以て國威を發揚するに足るの精神的資格を具ふるや。抑も內閣諸公に國民を啓導して其途を謬らざらしむるの覺悟ありや。新時代に於ける新國民敎導の先達として現內閣の理想と識見とは餘りに淺薄低劣を極めずや。

斯く觀じ來れば、吾人は甚だ現內閣將來の施設に期待すべき所以のものを知るに苦しまざるを得ず。强ひて現內閣が一種の覺悟を以て事に當らんと期しつゝあり、又實際上現內閣にして始めてよく見事な

る解決を爲し得べしと思惟せらるゝものを求めんか、そは恐らくは對支外交の刷新ならんか。此點に關しては、寺内首相も特に、正義を重んじ、外交を信にし、隣邦支那に對して益々親善の誼を明かにせんことを聲明せり。蓋し從來の日支關係は、表面如何なる言辭を以て之を飾るも、恒に親善の大義に背き來りしことは疑なき事實に屬し、特に大隈内閣の對支外交に至つては、矛盾暴戻を極めたるの甚しきものなりき。今にして之を悔ゆるは時機已に晩れたるの感なきにあらざるも、悔いて爲めに恢復の事に熱中するは、全く拱手爲す無きに勝る。而して此日支親善の恢復については、吾人は特に大に寺内内閣の努力に待つべきものあるを思ふものなり。蓋し從來日支外交の大本を誤らしめし根本の禍因は、常に軍人一派のショーヴィニズムにあり。抑々軍人の政務に干與するは、近世立憲國に於て齊しく最も意を用ひて之を避くるところ、中にも軍人の外交に容喙するは、其弊最も甚しとせらる。然るに我國の對支外交は、從來常に軍人一派の容喙によつて左右せられ居りしことは少しく事情に通ずるものゝ熟知する所なり。陸軍當局は由來多數の英才を支那各地に派し、各種の事情を研究調査せしむること至れり盡せるものあり。此點に於ては支那の研究をやゝ等閑に附せる外務省は、遠く軍人一派に及ばざるものあり。然れども軍人は到底外交官にあらず。彼等の多くは支那あつて世界あるを知らず、甚だしきは滿洲あつて支那あるを知らず、即ち其居る處の小局部に執して以て動もすれば直に對支外交を語らんとするもの少からず。而して此等の偏狹なる各般の報告に根據して立てられたるものが、即ち我が軍人一派の對支外交策に非ずや。而して我が外務省は常に此の偏狹なる外交論に左右せられてやまず。是れ一見甚だ意氣地なきに似たりと雖も、事情亦已むる得ざるものあり。蓋し對支問題は事對歐洲の外交と殊なり、一

衣帶水を隔つる隣邦の事とて、重要なる外交問題については、一々陸軍側と協議するの必要あり。其結果往々にして軍人の左右するところとなるは、また免るべからざるの數なり。況んや我國の軍閥は、概して餘りに我儘にして、我意に違へば、外務省の方針も、又は内閣の方針も、平然として之を無視すること、從來の例に珍らしからざるに於てをや。第一革命の當時、外務省と陸軍側と全然正反對の方針を執り、爲めに日本政府の對支政策を支離滅裂ならしめしの大失態は、今日未だ吾人の耳目に新たなる所なりとす。斯くて從來の我對支外交は、主として軍閥の強壓により、往々侵略的の色彩を帶ぶるものありき。是れ豈兩國の親善を妨ぐるの重要なる原因ならずとせんや。而して其弊根は常に繋つて軍人一流の偏狹なる外交論にありて存するを思はざる可からず。世人對支外交最近の失敗を以て一概に之を大隈内閣の責任に歸するも、政治上直接の責任如何の問題は暫く之を措き、若し眞に事實上の根本的責任者を求むるならば、予は之を軍人側に歸せざるを得ずと認むるものなり。故に對支外交の刷新の爲めに最も緊喫の問題ありとせば、そは軍人を制して外交上常に外務省の方針に乖離することなからしむるより急なるはあらじ。而して能く此事を爲し得るもの、我が寺内首相を措いて豈容易に他に適任者を求め得んや。何となれば今日軍閥の結束は、外に對しては極端に強硬なれども、内に於ては全然長上の命に盲從するの常なればなり。彼等は軍閥以外の勢力には何物にも服從を肯んぜず、否他をして無理にも自己の權に服從せしむるを以て、軍人の面目なりとなす。彼等の執拗なる態度によりて從來政界に波瀾を生ぜしことも一再に止まらざるに非ずや。然れ共外に強き彼等の内に弱きは又驚くべき程にして、一度軍閥長老の命あれば俄然從來の態度を一變し、平然として之に盲從して憚らざるは、又驚くべきものあ

り。故に彼等を制して其正きに復らしむるには之を軍閥長老の力に頼むの外に途なし。果して然らば、寺内首相は正に此問題を解決する最も恰好の人に非ずや。寺内内閣にして、若し眞に日支親善の回復を計り、大隈内閣の失政を正さんと欲せば、鄭家屯事件の要求を緩和するとか、從來各種の懸案問題の解決を急ぐとかの枝葉の問題に齷齪するの外に、更に此根本の病弊に向つて大斧鉞を加ふるの英斷に出づることを要す。斯くの如くんば、寺内内閣亦變則内閣を以てして而かも國家の爲めに一大貢献をなせるの美名を擅にし得べき也。

〆人格を第一義とする米國大統領の選擧

十一月七日の投票の結果、次期大統領の月桂冠は、再びウイルソンの戴く所となれるものゝ如し。投票數の精密なる計算を終るまでは、約二週日を要するの例なれば、結局の勝敗は、本文の我が讀者に見ゆる頃に至らざれば明かならざるべきも、最近の電報は、最早や殆んどウイルソンの再選を疑はざるものに似たり。而して今次の選擧委員の選擧が、事實上最終の決定にして、來年三月の大統領の正式選擧は殆んど一片の形式に過ぎざるべきは論を俟たず。

抑々米國に於ける大統領選擧の政戰は、通常五月を以て開かるゝ民主・共和兩統の大統領候補豫選大會を以て始まるを例とす。今次の豫選大會に於て、民主黨は殆んど滿場一致を以てウイルソンを擧げ、共和黨は多少の曲折を經て結局ヒユースを擧げ、而してルーズヴエルトの進步黨が、遂に快くヒユースを

援くる旨を宣言するや、ヒユースとウイルソンとはこゝに各々陣容を整へて、初めて活潑なる政戰を開始することゝなれり。兩者互角の勢を以て久しく相對し、勝敗の數容易に明かならざるものありしも、然し大體に於て外間の觀察者中にはヒユースの勝利を信ずるもの比較的多きに居りしが如し。蓋し世界の形勢は今や戰亂漸く闌はにして、人皆國力の統一、國勢の發展を念とす。時勢は自ら一般の民心を驅りて帝國主義の渴仰者たらしめずんば已まざるの時に當り、ウイルソンが平和政策と勞働者保護とを掲げて、專ら內政の充實に努力するは、如何にも時勢後れの政治家なるが如くに思はれしを以て、米國の人民も恐らく次期の大統領としては、彼を捨てゝヒユースを擧ぐるならんとは、世界の人々の一般に信ぜし所にして、殊に斯の考は我國に於て最も深く識者の間に確信せられたるものゝ如かりき。然るに結局は意外にもウイルソンの勝利に歸し、米人はヒユースの帝國主義よりも、ウイルソンの平和政策を歡迎するものなるの意外の實證を呈して、轉た世人をして呆然たらしむるものあり。言ふ莫れ、選擧は往々にして偶然を含むと。ウイルソン當選の報に接し、米人一般の間に別に不平悔恨の聲を聞かざるを見ば、吾人豈にウイルソンの當選を以て、米人多數の本意に出でざる偶然の結果なりとするを得んや。是に於て吾人は知る。米國の民心は、今なほ國民の幸福と其平和的繁榮とを專一とする政策を可とし、國勢の外面的膨脹の爲めに輕々しく內部的犧牲を提供するを喜ばざるものなることを。米國の民心が、今尙ウイルソンの政策に對して著しき不平を有せざるは、吾人の特に注目を要する點たらずんばならず。

然れども、ウイルソンの勝利を以て全然之を彼の政策の勝利と觀るは、また恐らくは正當の見解にあらじ。我國操觚家の政治家を品隲するもの、動もすれば其政策と手腕とを見て、其人格を見ず。歐米諸

國民の公人を評する、之に反して最も重きを人格に置く。ウイルソン勝利の原因を說くに當つて、彼の人格がまた確かに其一主要因をなすことは、吾人の看過すべからざるところなりと信ず。予輩曾て之を聞く。彼の米國人民の間に信任せらるゝ所以のもの三ありと。第一は彼が其所信に忠實なるの點にあり。彼もと一學究より身を起し、一度顯要の位に上るや、その多年研究せるところを何等情實に顧慮せず、金權其他の外部的壓迫にも屈せずして、遠慮なく斷行して憚らず。その勇氣に對しては、敵も味方も嘆賞して措かざるところ也。第二は、彼が適切に時勢と國民との眞要求に通ずるの點にあり。彼の深甚なる敎養と、其卓拔なる見識とは、時勢と國民の眞要求を洞察して誤らざるのみならず、又從來の傳說約束に囚へられて、思想行動を不徹底ならしむることなし。故に一方に於ては、生活費の低減を企てて何人もなし得ざりし關稅組織の上に一大變革を斷行すると同時に、他方に於ては、民主黨年來の傳說に反し、寧ろ敵黨の主張を取りて軍備擴張を斷行し、而かも平然たり。是れ彼の見識の卓拔なると、其所信に忠實なるの致すところにして、而してかくも多大の國民の信賴を博する所以也。我國の操觚者中、往々彼が一方に平和政策を取りながら、他方帝國的施設をなすを以て、老猾纖說となし、又は今次選擧の結果、平和政策の多數國民の贊成を得たるに安心して、從來遣りかけし帝國主義的施設は近く之を拋棄するならんといふが如きは、共にウイルソンを曲解するの甚しきもの也。一時の民衆を繋ぎて永く其地位に留らんとして、朝には帝國的施設を採り、夕に之を捨てゝ顧みざるが如きは、往々東洋諸國に見るが如き沒理想實際政治家の事のみ。第三は彼が正義と平和との維持に熱心にして、之を以て其外交政策の根本となせしの點なり。彼が對支六國借款團より米國の撤退を斷行し、又對墨西哥問題について毅

柔不斷の態度をとり、爲めに米國國勢の發展を阻礙したるが如き觀あるは、一部の國民の不平を洩らす所、且つ目して以て彼の外交上の失態と爲す所なるも、其失態たるや、必ずしも怠慢の結果にあらず、無政策無方針の結果にあらずして、一個の主義の結論なるに於て、國民は亦概して彼の政策を諒とするものなるに似たり。要するに、彼は一言にして言へば、ピユーリタンの精神を最もよく體現して、その不動の所信の下に、國政を率直に指導せんとせるの人。此高潔にして卓拔なる人格が、實に彼をして今日再び最高の榮譽を擔はしめたる原因なりといはざるべからず。但し斯くいへばとて、予輩は必ずしも反對黨のヒユースの敗れたるは是れウイルソンよりも人格劣れるに由るといふものにあらず。ヒユースも亦多少其肌合を異にするところありとはいへ、人格の崇高なるに於て、固よりウイルソンと甚だしき軒輊なしと稱せらる。是れ彼が一代の雄ウイルソンを敵に廻はして、其得票殆んどウイルソンの壘を摩せるものありし所以なり。選擧の結果につき當初の電報が却てヒユースの勝利を報ぜるに徴しても、以て彼の人格の非凡なるを推測し得べし。又之と反對に、ウイルソンが前回の選擧にはタフトの八十八票、ルーズヴルトの八票に對して四百三十五票の多數を得たるに、今回は全體の投票の約半數を敵のヒユースに讓れるを以て、ウイルソンに前回程の人氣なしといふも亦必ずしも正當の見にあらじ。之れウイルソンに對する信頼の念の民間に減却せしを語るものにあらずして、寧ろ敵黨のヒユースが亦ウイルソンに劣らざる程の人物なるによるものならん。之を要するに、米國の大統領選擧には、常に手腕政策よりも人格を第一義として中原爭鹿の局に當らしむる所、實に嘆賞に堪えずと云はざるべからず。而して共に人格の崇高を以て鳴る兩雄の堂々の政戰を張れる今回の如きは、史上稀れに見るの一大偉觀なりとす。

八

我々日本人の立場よりすれば、吾人は固よりヒユースよりもウイルソンの當選を歡迎す。何となれば、彼の從來の政策は、概して適切に我國貿易上の利益に適合し、而してヒユースの主張する保護主義は、必ずや日本貿易の上に少らざる消極的影響を與ふべきを以てなり。然れども、吾人は日本人としての利己的立場のみより米國大統領の選擧を觀察するを欲せず。公平の見地に立つて之を觀るに、米國人中亦其立場の異同によつて贊否各々其見を異にすべきも、共に同じく崇高なる人格の人なるに於て、ヒユースの當選を見るも、ウイルソンの當選を見るも、恐らく敵味方共に多大の遺憾を感ぜざりしならんを疑はず。ヒユースが尙政治家としての未知數なるに對し、米國民は既に試驗濟なるウイルソンを得たるに於て、多少の安心を感ずといふことはあらんも、之は特にウイルソンを推すべき重大の原因とはならず。若し夫れ選擧後米國大統領の、戰亂調停者として必ずや猛然として起ち來るべしとする內外一般の豫想については、假りにヒユースの當選を見るも、又はウイルソンの當選を見るも、何の異なる所なけん。如何にヒユースが積極的外交論者なればとて、彼を以て直に戰亂の渦中に米國を投ずべしと觀るは、餘りに米國の民心を知らざるの論なり。蓋し適當の機會に於て戰局收拾の大業を成就せんとするは、政黨の分野を超越したる米國民心一般の野心なればなり。只强ひて二氏の間に此點に關する多少の差を求むるならば、ウイルソンが二代續いて大統領に擧げられたりと云ふ點に於て、其言動幾分內外に重きをなすを擧ぐべきか。之とてもまた特にウイルソンを擧げざる可らざるの重大の理由となすに足らず。之を要するに、ウイルソンの當選は種々の意味に於て之を喜ぶべき理由あるに相違なしと雖も、然し米國民の幸福と云ふ着眼點よりすれば、其何れの當選を見るも著るしき逕庭なかりしことは疑を容れざるも

のに似たり。

米國大統領選擧の政戰を觀察して、特に吾人の羨望に堪へざるは、彼等が政戰の遂行に當つて、常に人格を以て攻防兩面の第一の武器となし、次に始めて才識を問ひ、而かも門地情實の如きは全然之を顧みざることにあり。故に米國の政界は常に活潑清新の意氣に富む。殊に其選擧道德に至つては、實に羨望に堪へざるものあり。彼等は其爭ふべきに於ては死力を盡くして爭ふを避けざるも、勝敗の數一旦決すれば、怛然として和協し、何の蟠　所なし。例へば之を前回の例に見る。民主黨の候補豫選大會に於ては、ウイルソンとクラークとの競爭殆んど白熱的昂騰の極に達し、前後四十六回の投票を繰返して辛うじてウイルソンの入選を見たるが、一旦ウイルソンの當選に定るや、民主黨は共同一致して全力を敵黨の對戰に注げり。今年六月十四日セントルイスに於ける大會に於ては、幸にして殆んど全會一致を以てウイルソンの當選を見たれども、六月六日シカゴに於ける共和黨の大會に於ては、又前回に於ける民主黨の狀態と些か相似たるものあり。共和黨に於ても、大統領候補の豫選は前回以來一致の投票を見ず。前回はタフイとルーズヴエルトとの競爭の結果、遂に進步黨の分立を見しが、今回も共和黨内に意見の分立ありて、ヒユースの得票容易に、定足數に達せず、三回目に漸く大多數の投票をヒユースに集むる事を得たり。而して一旦ヒユースの當選と決するや、共和黨はまた全力を擧げて勁敵ウイルソンに當るの決心と計畫とを定めたり。私見を固執して惡感を他日に殘すが如きは、最も政界の公壇に忌む所。米國に於ては殆んど全く此弊風を見ず。殊に吾人の玆に甚だしく嘆賞の念を禁じ得ざるは、今次の投票に於てウイルソンの當選と決するや、即日共和黨の有力なる某新聞が發表せし論評なりとす。其一節に

曰く「此驚クベキウイルソンノ勝利ハ、全體トシテノ米國人ガウイルソンノ政策及ビ政見ヲ信認スル所ノ證左ニシテ……若シ假リニ現在未決ノ投票計算ノ結果ガ、反對ニヒユーズノ勝利ト變化スル事アリトスルモ、之ガ爲メニウイルソンガ今日最モ有力ナル政治家タルヲ否定スル事トナラズ。已ニ國民的選擇ニヨツテ當選セル以上ハ、ウイルソンハ最早反對黨ノ候補者ニアラズ、次期ノ大統領トシテ全國民ノ上ニ臨ムベキ人ナリ。今ヤ國家ノ前途ニハ國民ノ共同解決ヲ要スベキ事業少カラズ。此等ノ解決方法ニ關シテハ、吾人ハウイルソン及ビ其與黨ト必ズシモ其觀ル所ヲ同ジウセザレドモ、ソハ自ラ爭フベキ別箇ノ形式アリ。選擧時期ノ黨爭的精神ハ、玆ニ終リヲ告ゲザルベカラズ。願クハウイルソンノ今後四年間ノ施政ガ、更ニ國家ト國民トノ上ニ幸福ト光榮トヲ齎ラサンコトヲ」(十一月十二日の東京朝日新聞に據る)と。何ぞ其襟度の光風霽月の如きや。之を我國政黨諸領袖の、動もすれば彼此惡罵を交換するものに比する、其差實に霄壤も啻ならずと云はざるべからず。

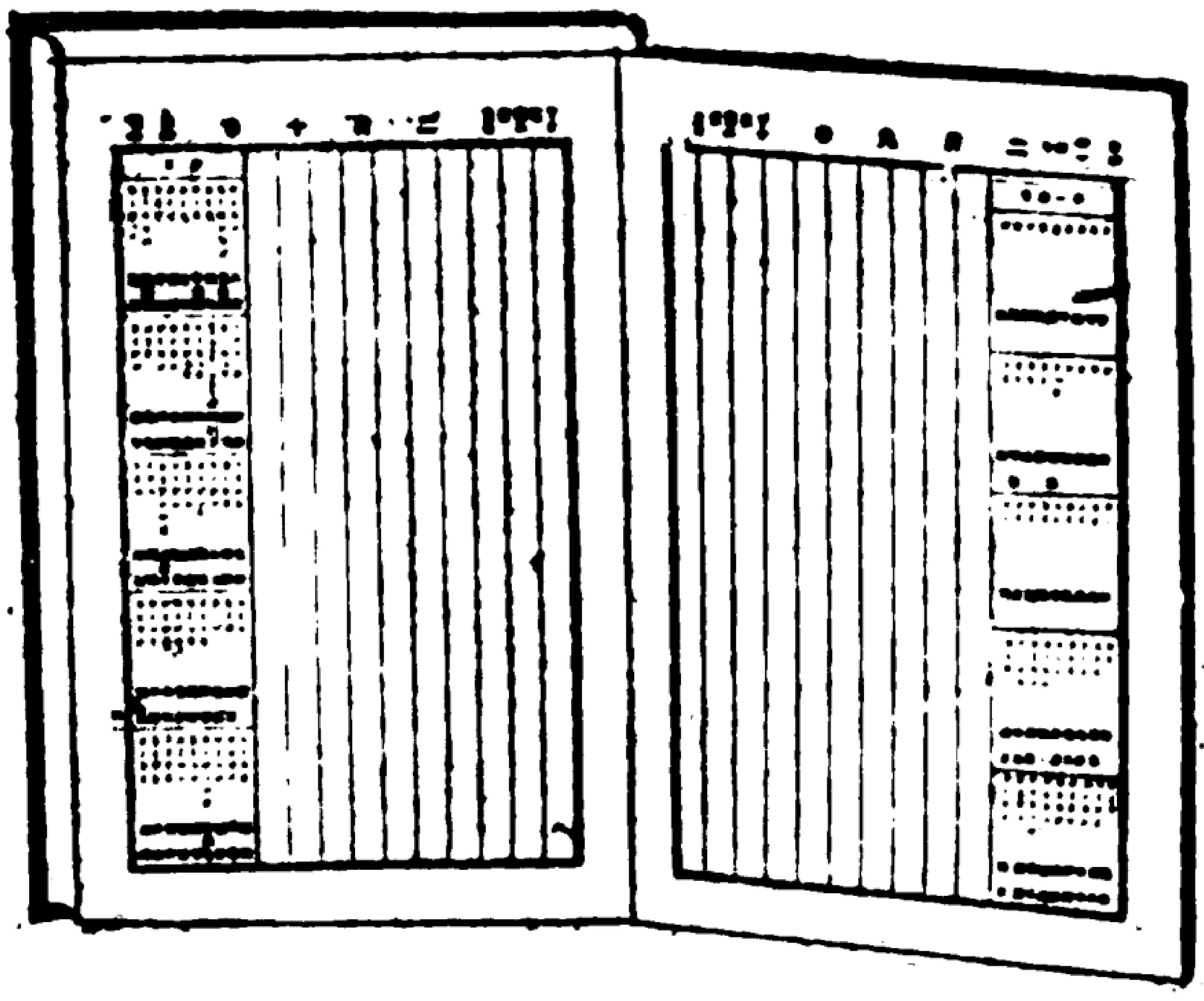
此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

分らない字がスグ分る字引のついた當用日記

五十音引 辭書日記

定價金六十錢 郵税金八錢

特色



(1)本日記の第一の特色は五十音引普通語辭書を巧みに各頁の間に配置し之れに依つて日記執筆中忘れたる文字、思出し得ざる文字、知らざる文字を容易に檢出し得るにあり。

(2)第二の特色は製本特に綴方の堅牢なるにある開閉の烈しき『日記と辭書』に兼用さるゝものなるを以て特に此點に注意せり。

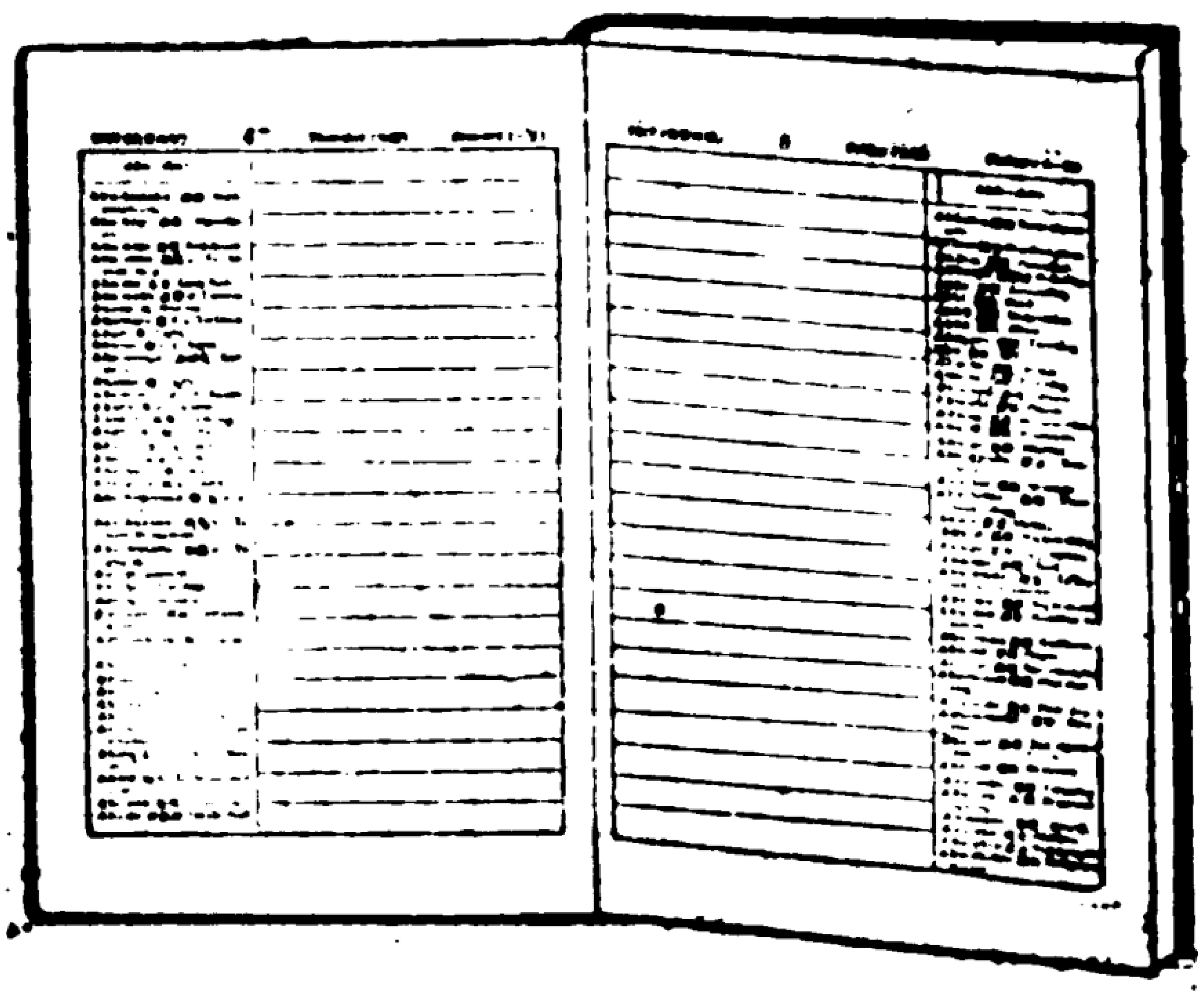
(3)第三の特色は他の日記に殆んど其類を見ざる程用紙の優良なるにあり。紙面滑かにしてペンのスベリよく而もインキのノリよし紙質堅くしてインキの滲む事なく紙の裏へ通らず又破れ易からずゴム消に堪ふ。

(4)第四の特色は冊物の厚さウスクして日々の使用に便なる事なり。普通の日記に有りふれた餘り必要ならざる附錄を除き其費用を以て前述の改良を施したるを以て自然冊物の厚さウスクなれり。

ローマ字引 辭書日記

定價金七十錢 郵税金八錢

特色



(1)本日記の第一の特色は簡潔なるローマ字引普通語辭書兼和英辭書を巧に各頁の間に配置し之れに依つて日記執筆中隨時隨所に容易く必要の漢字と英語を檢出し得るにあり。

(2)第二の特色は横罫の組織に在り從つて英文日記に代用し得るにあり、ペンを使用する場合日本文も横書を便とするは學生諸子がノートブックを横書となす事に依つて明なり、横書なるを以て日記中に英文を挿入し或は又全然英文を以て日記を記すに都合よし。

(3)第三の特色は本日記は日記として使用し得るのみならず簡潔なるローマ字引國語辭書並に和英辭書として單獨に使用し得るにあり。

(4)五十音引辭書日記の特色として擧げたる前記(2)(3)(4)の特色は勿論又本日記の特色として之れを數ふるを得。

見本 御入用の方は往復ハガキを以て御申越あれ

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一 振替東京二〇〇〇番 **新橋堂** 賣捌所は市内並に全國各地書店

(中付一の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

天然甘味 サンラヘール藥用葡萄酒

御一報次第攝生法を詳述せし說明書贈呈
賣店ハ全國ノ和洋酒罐詰食料品ト藥店に有り

本酒は眞に補血强壯劑を兼ねたる天然甘味藥用葡萄酒にして病中病後、貧血又は產前產後に用ふれば其功一層顯著なり現に世界で有名なる佛國巴里府病院。同府衛生病院に於て本酒を用ふること實に五十有餘年其功能一つとして誤る事なく快癒せり又曾て帝國醫科大學に在りしベルツ博士の稱賛措かざりし所以のものは獨り本酒が機那の主成分たるタンニンを多量に含有するを以てなり而して本酒の特色たるタンニンを多量に含有するは多年の實驗より會得したる配劑と釀造法に依るものにして和製機那鐵葡萄酒の到底企て及ばざるものなり又本酒は他の機那酒の如き苦味毫もなく温和なる天然の甘味を有するを以てよく何人の嗜好にも適す

合名會社
橫濱市境町 尾張屋本店 電話三一〇

新早稻田叢書

米國大統領 ウィルソン著
法學博士 高田早苗譯

訂正増補 政治汎論

背皮上製函入
全二冊
一千五百五十餘頁
定價各貳圓卅錢
郵税各十貳錢

著者嚮にプリンストン大學の政治學講座を擔任するや學殖の博大を以て贊歎せられ同大學の總長となるや教育行政に偉大の功を擧げニュージャーシー州の知事となるや政務の實際に非凡の手腕を示し遂に選ばれて大統領となり世界的政治舞臺に立ちて其大手腕を振ひつゝあり。其心血に成れる本書が政治學の全般に亙れる學理と世界各國の政治の實際とを詳にすべき世界随一の良書として雷名ある豈偶然ならんや。而して譯者は政治家として又政治學者として令名藉甚なる高田博士なり。本書の價値豈之を言ふを要せんや◉本書の前版が好評嘖々忽ち十餘版を重ねしは公知の事實なり。今最新版の原書に照して大訂正を加へ原書發行以後に於ける各國の制度統計等の變化は最近の群籍を渉獵して之を補ひ無慮五百頁を増して二大冊をなせり。則ち之を世界の名著すべき新早稻田叢書の第一編と爲して江湖に薦む。

續刊

法學博士 浮田和民譯幷に批評
トライチユケ **政治學** 全二冊

早稻田大學教授 大山郁夫譯
エリネツク **國法學** 全一冊

發行所 東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

(賣捌) 東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂、大阪盛文館、名古屋星野

(中付一の四)

公論

近代の日本畫に對する西洋畫の感化

澤村專太郎

（一）

支那大陸に於ける藝術上の諸運動が、近世に於けるわが畫場にも波及し來つて、幾多の新運動を喚び起してゐる事は、更めて云ふまでも無い。西洋畫のわが畫場に及ぼせる影響を考へて行くに於ても、亦この大陸藝術の移入と云ふ問題は、除外する事の出來ないものである。一體近代の日本畫に對する西洋畫の感化を考察するには、少くとも二個の異つた道が横つてゐる。其一は間接に日本畫に及ぼして來た方向、其二は直接に日本畫に及ぼして來た方向である。就中大陸藝術の移入が西洋畫と日本畫との接觸に對して關係を有するのは、この第一の間接的なる意味に於てゞあつて、要するにそは大陸藝術移入の一個の副産物と認むべきものである。

第一の間接的方面に就て考へると、明の神宗の朝、萬曆十年の頃に於てゼェスイット派の宣教師として有名な伊太利人利瑪竇が支那に來てゐるが、彼は支那畫が陽面のみを寫して凹凸なきを譏つてゐる。この前後から明末に至る頃迄には、漸次に西洋畫法も入り込んでゐるので、明末清初には殊に此法が著しく行はれて來

た。かの清の聖祖の時に於てゼェスイット派の宣教師にして畫名のあつたゲラルヂニ及びベルビルの二人が支那に來た事があり、此二人の後カスチリオン、アチレ等も渡來してゐる。かくて洋畫を試みることも漸く盛んに行はれ、從つて又支那畫に對する西洋畫の感化も次第に顯著なるものがあるに至つた。殊に清朝に於ける畫院の製作、所謂院畫に於ては、多量の洋畫的分子の存在を否むことが出來難くなつてゐるのである。その一例とも見るべきものは、焦秉貞が勅を奉じて製した有名なる耕織圖であつて、是は康熙年間に於て印刻成り、後乾隆年間に重刻が成つてゐるのだが、是は洋畫の法を參酌したので、隨分廣く世に行はれたものである。その他康熙年間に於てまた洋畫風なる銅版畫が印刻せられてゐる。これは戰爭を圖したもので、回部得勝圖と稱してゐるが、その種類もなかなか多い。而して其畫法を見ると、極めて巧みに西洋畫法を驅使してゐるので、その作風とその技巧とに依つて推察するに、そは支那人の手に成つたものとは云ひ難い。寧ろ當時在留の西洋畫家の手に成つたものと認むべきである。然るに此銅版畫は乾隆期に於て重刻せられてゐるが、この重刻は全く支那人の手に成つたものゝ如く、この重刻の版畫と康熙版のそれとを比較するに及んで、愈々康熙版の洋人の手に成つたものなる事が知られるのである。即ち是等の古き銅版畫は現に往々世間に存する所の郎世寧等の肉筆遺作と共に、その頃支那にゐた西洋人の遺物として興味あるものと云はねばならぬ。

當時大陸の畫風は絶えずわが畫場に感化を及ぼしてゐたのだから、今や頭を擡げ來りし西洋畫の支那畫に對する感化も亦其儘わが國に移入せらるゝに至るべきは自然の勢である。例へば陳賢の畫の如きは洋畫の感化を蒙つたものゝ一であるが、之れが承應の頃に於てわが畫場に入り込み來つてゐる。又かの耕織圖の如きも、早くから我國に舶載せられてゐるので、木村巽齋の如きはその一本を愛藏してゐたが、文化年間この巽齋の珍藏に基いて、遂に日本に於ても重刻を見るに至つてゐる。かくてその感化も稍々著しく、殊に明清畫

派の人々の上にその影響を及ぼすに至つたのである。けれども之を全體の上より見れば、この間接的影響は到底第二の直接的感化には及ぶべくもないのである。

然らば第二の直接的方面は如何と云ふに、此問題に就いては勢ひ西洋畫法のわが國に移入せられた徑路を考へて見なければならぬ。元來近代日本に於ける西洋畫の消長は、二個の部分に大別して考へる事が出來る。その第一は耶蘇教に關係して發達して來たもので、その第二は耶蘇教とは獨立に和蘭との交通に伴つて發展して來たものである。前者を第一期の洋畫、若くば前期のそれと云ひ、後者を第二期の洋畫、若くば後期の洋畫と稱して兩者を區別するを便宜とする。

凡そ第一期の洋畫が本邦に於て發展したる事に就いては、耶蘇教の宣教師と彼等の經營してゐた耶蘇教學校とが最も與つて力があつた。もと天文年間から漸次に勢力を得て來た耶蘇教は、天正七、八年の頃に至つて愈々勢力を得て、遂に各地に學校を設くるやうになつたのである。是等の學校に於ては繪畫を一個の學科目としてゐたのであつて、例へば有馬の學校に於けるその狀態に就いては、千五百九十四年三月十五日わが長崎から宣教師のピートロ、ゴメッの發した報告書の中に見えてゐる。(千五百九十七年羅馬版の "Lettera Annua del Giapone")。是れによると、當時水彩畫及び油繪を八人の學生が學んでゐた事が知れるのである。その他の宣教師の報告書に於ても、尚多少繪畫と云ふ科目に言及してゐる事より考ふれば、洋畫の學習が行はれてゐたのは、一二の學校に止まらない事も察せられる。

同時に西洋畫の實物が、當時わが國に多數に入り來りつゝあつた事が推想せられる。固より實物の輸入は、西洋との交通が開けると殆ど同時に行はれたとも考へられるが、宗教畫の移入に就いては、文献上最も古く且つ最も有名なものゝ一は、千五百四十九年に於て宣教師のフランソア、ザビエーが我國に來つて鹿兒島に入つた時の事である。當時彼は聖母耶蘇を抱く圖を齎らしてゐたので、ある機會に於て國主が之を見て侍臣

と共に大に感嘆し、更に母公にも之を見せしめた。母公も大に感に入つて侍女と共に之を拜し、その模寫を作らしめんとて、鹿兒島にその技術家を求めたけれども、遂に之を得なかつたと云ふ事である。其後ザビエーが豐後侯に面接せんとした時、その行列の一人が緋綸子を以て包んだ聖母畫像の額を携へた事があると云ひ、又葡人にて外科術に長じてゐたアルメイダと云ふ宣敎師が平戸にゐた時、葡萄牙の軍艦一隻が同港に到着した。其指揮官は本國から聖母の畫像を齎らし來つて之を艦內に安置し、信徒を集めて之を見せしめたが、その像は非常に美麗であつたと云ふ。是は葡萄牙から豐後の天主堂へ奉納したものと云ふ事であつて、之を觀んとて艦內に集り來るもの船室に充滿したと云ふ事である。又九州の大村純忠が曾て宣敎師を訪問した時、聖母耶蘇を抱く圖があつたが、彼れは之を見て大に驚き、殊にその生くるが如き畫像の表情に對して太たく嘆稱したと云ふ。又少しく降つて小西行長が刑死の際に於て、手に耶蘇と聖母とを表はせる圖像を捧げたと云ふ事であるが、殊に此像は葡萄牙の女王が耶蘇敎の宣敎師に付與したもので、宣敎師が曾て行長に送つたものだと傳へられてゐる。又かの石田三成等もその刑死の際には、手に耶蘇の畫像を捧げてゐたと云ふことである。

(二)

是等の狀態に依つて想察せられ得る如く、當時宗敎關係の繪畫が多數に移入せられ、且つまた日本に於ても製せられたのだが、各敎會に於て此種の繪畫が存した事は勿論、各信者の家にも這般宗敎的彫像若くば宗敎畫の廣く行きわたつてゐた事は、てうど佛敎に於ける佛畫の狀態に似たものゝあつた事は云ふまでも無い。此事實は耶蘇敎に對する壓迫が初まると共に愈々明かにせられるのである。蓋し耶蘇敎に對する壓迫と云ふ事實には、必ず此種の畫像類の破壞と云ふ事が伴つてゐたので、之れが爲めに多數の耶蘇敎關係の繪畫類の破壞せられた事が、記錄上に續々見られるのである。かの有名なる天草の亂の端緒の一も、此畫像類の

破壞と云ふ事から出てゐるのである。從つてかの林道春が京都のある南蠻寺で耶蘇と聖母との像を見たと云ふ事が、羅山文集に見えてゐるのも、固より奇しむに足らない事と云はねばならぬ。

けれども當時舶載の洋畫の今日に殘つてゐるものは極めて少數である。その中にて有名なるは、伊達家に藏せらるゝかの支倉六右衞門一行の將來した油繪であつて、天帝圖、支倉六右衞門畫像等である。又現に東京帝室博物館に藏せられる三聖僧圖もさうであつて、是れには同一圖樣のものが二面あるが、其一面か舶載品で、他の一面は日本に於て古く之を模寫したものである。是はもと長崎奉行所の宗門藏にあつて、永く折たゝまれた儘、つかねられてゐたものである。又かゝる大畫面の洋畫では無いが、板金の面に畫かれてゐるものゝ如き、比較的小なるものに至つては、頗る多數に傳へられてゐる。是は伊達家にもあるが、帝室博物館にも多數に存する。

舶載品のほか、當時邦人の手に成つたものと覺ぼしき洋畫の遺物を求めると、そは可成に多い。その中にて世間に知られてゐる二三のものを擧げると、舊會津侯松平家の泰西王族騎馬圖、南部伯の風景屛風、盛岡圓光寺の西洋婦人圖、西村濟氏の西洋貴族圖屛風、神田男爵の西洋人物圖二面、福島啓三郎氏の西洋騎士圖二面等であつて、尙ほ別に是等と同種のものもあり、又全く異つてゐるもので其頃の製作と認むべき遺物も三四に止まらない。就中松平家の王族騎馬圖は從來山田右衞門作の手に成つたものと云ふ說のあるもので、固よりその傳說は確かで無い。是は別に同種のものが世間にあるのだが、とにかく從來最もよく世人に知られてゐるものである。此畫を以て當時在留の宣敎師の手に成つたものと云ふ說をなす者もあるが、是は固より取るに足らない。南部伯の洋畫屛風も同種のものが世に殘つてゐる。圓光寺の西洋婦人圖は額面であるが、之は延寶の頃に先ち、岩井與市郎と云ふ材木商があつて切支丹宗に歸依した事發覺して梟首せられたが、その所持品であつたと傳へられてゐるものである。殊に

西村氏の洋畫は、島原の亂に際し、松平信綱の臣西村次右衞門爲正が主に從ひ、旗奉行として戰地に臨みしが、落城の時に之を得て携へ歸りしものと傳へてゐる。舊豐橋藩の某家には是れと同種の畫二圖を存し、何れも此時の戰利品だと云ふ。又神田家の二面は信方と讀まるゝ落款のあるを最も珍とする。今一一是等の作品に就いて論ずる事は姑らく措き、第一期の作家としては、山田右衞門作が最も有名である。彼は島原の賊徒であつたが、後征討軍に內應して落城後死を赦されたものである。かのゴメッツの報告にも見ゆるが如く、天正文祿の頃には耶蘇教學校で洋畫を學んでゐたものも少くなかつたのだから、山田も恐らく此種の學校で學んだものであらう。かの西村氏の洋畫が其傳說の通りであるとすれば、是こそ最もよく山田の畫風を想起せしめるものである。即ち山田の作でないまでも、山田一派の畫たる事は疑はれ難い。とにかく是等の遺物に就いて見ると、その作法は中々に侮り難いものがあるので、第一期の洋畫は從來の研究家が信ずるやうな幼稚なものではない事が知れるのである。

けれども洋畫の特有なる技術が當時の日本畫に對して何等かの感化を及ぼしたかと云ふと、日本畫の題材に於て南蠻人來朝の圖、又は南蠻船入津の圖の如き異

〔神田男藏〕西洋人物圖

國情調の題材が多く現はれて來たのは事實だが、これとても適切な感化と云ふ事は出來難いものである。從つて之を日本畫全體の歷史から見れば、大なる影響を蒙つてゐるとは認め難い。即ちその洋畫としての獨立的技術の方面に於ては、立派な發展を遂げてゐたのだけれども、日本畫に對する感化と云ふ方面に於ては、殆ど見るべきものを止めてゐないのである。固よりその基く所は多々あるべきが、其主要なる素因の一は、當時の洋畫が耶蘇教に育くまれて生長し、同時に之に對する壓迫に殉ずるに至り、自己の確固たる基礎を得るに先ちて、衰滅に陷るを餘儀なくせられた事である。而して其二は當時のわが日本畫界が、かの東山時代に於て發展した所の主觀主義的傾向著しく、當時に於ける洋畫の客觀主義的特調を容るゝの熱情に乏しかつた事である。

要するに前期の洋畫は、大體上天草の亂を以て一區劃となして、全く衰亡に瀕するに至つたのであつて、其作家の如きもかの山田の後に於ては生島三郎左と云ふものが之を傳へてゐた。彼は鹿兒島に行きて此地に於て畫法を葡萄牙人に學んだと云ひ、その門下に野澤九右と云ふ者があつて、長崎方面にあつて其畫法を傳へてゐたのである。けれども是等作家の製作は現今には殆ど傳へられてゐない。殊に宗教畫の如きは最も甚だしく破壞せられて了つたのである。けれどもまた信者中には密かに之を傳へてゐた者が無いでもない。例へば文政十二年十二月に申渡されたる大阪の邪宗門事件の如きは、軍記と云へる者の所持せし天帝繪像を拜した多くの信者が刑せられたのであるが、その中にて豐田貢と云ふ陰陽師が『天帝繪像代りに仕組有」之三像の畫を表具いたし所持』したと云ひ、また平藏と云ふ僧侶あがりの男が同じく『軍記所持の天帝の畫像を拜し』たと云ひ、又軍記が『長崎へ罷越留守中、妻子の世話まで引請遣し候上、此度吟味に付軍記自筆の宇犬女と申成候天帝の替像燒捨候上は云々』と云ふ科人捨札の寫しが傳はつてゐる。是に依つて考へると、恐らく天帝畫像は洋畫風のものであつたらしく、又軍記が聖

像を畫いたとすると、之れも洋畫風のものであつたらしく察せられる。若し果して然りとすると、前期洋畫の遺鉢は、かゝる壓迫の底にひそんで、暗き世界から暗き世界へと傳へられてゐたとも言はれ得るのである。

(三)

第二期の洋畫の起つて來たのは、第一期とは其趣を異にし、全然耶蘇教とは無關係に現はれて來たのである。即ち西洋の學術技藝を究めんと欲する熱情の高まつて來た事に伴隨せる出來事であるが、此意味からして寶永六年を前期と後期との分界點とするのが適當である。即ち此頃から西洋學研究の熱心が漸く現はれて來たのだが、而かも其研究の實の愈々揚つて來たのは、享保期以後と認めて不可なきがやうである。尤も西洋學と云ふもその主要なるものは醫學であつて、次で天文、地理、曆數、博物、物理諸學の研究が重きをなし、砲術、兵學の如きも勿論研究せらるゝに至つてゐる。要するに是等諸學の研究熱に伴つて洋畫の研究熱も頓に高まつて來たのである。

一體この第二期の洋畫の研究に從ひし最初の一人の平賀源內である事は、既に史家の說く所である。而して司馬江漢、安田雷州、金田江淵等の江戸を中心とする一派のほかに、永田善吉、安田東獄、遠藤田一、新井令恭等の須賀川派、佐竹曙山、佐竹嘯月亭、小田野羽陽等の秋田一派の洋畫家が現はれてゐる。その他九州には荒木元融、同融、同如元、若杉磯八、南嶺等の長崎一派があり、また芳井閑古齋以下の京攝を中心とする一派もある。今是等の作家に就いての詳しい事に至つては姑らく之を措き、當時の洋風を喜んでゐた一派の人士は、再起の運に向ひ來つた洋畫を如何に考へてゐたかと云ふと、先づ大槻玄澤は其蘭學階梯に「叉蘭人從來此に舶來する所天文、地理、及草木、禽獸、蟲魚の諸譜、或は肢體內景解剖、或は內外治療の書、其の諸說は姑く舍き、其圖狀を寫す物を見るに生物は生のまゝを模し、乾腊の者は乾腊の狀を寫す、必盡しく設け空しく說かず、位置精密、墨色の濃淡自ら其宜しきに適し、各種の諸圖、色澤體態宛然として眞に逼

る」と云つて、頻りに和蘭の畫圖が精到の描寫を示せる事を嘆賞してゐる。又『紅毛雜話』にも森島中良は『紅毛の畫たるや至れり盡せり，凡此道を學ぶ者、初に男女の骨節を精にし、夫より赤裸の人物を書習ひ、其上にて衣服を穿たる所を畫くに至る、下に出す畫法は「シキルデル、ブック」に載る、一二圖を模寫して好事の人の看に呈す」とて、人物の描寫法を説明してゐる。渡邊崋山の如きも其友人小關三榮と云ふ蘭學者の説く所を手記して『畫學曰ニシキルテル、指畫曰ニシキルテレイ、凡畫家有ニ解體家、鳥獸草木皆割ニ其體、察ニ氣質、自ニ骨法ニ而肉法無ニ一所ヲ漏」と云つてゐる。何れも洋畫の描寫が概ね客觀的に精妙にて、其製作が大に實寫的なると共に、その研究方法が科學的なる事を指摘したのである。

更に一步を進めて、當時好んで洋畫を學んだ作家は、此問題に就いて如何に考へてゐたか。之を此方面の代表者と認むべき司江馬漢の言に聞くと、彼れは洋畫の寫眞の法なることを說いて、『西畫はたゞ能く造化の意をとるのみ、和漢の畫は翫物にて用をなさず、且つ西洋の法に至つては濃淡を以て陰陽、凸凹、遠近、深淺をなす者にて、其眞情を模せり」と云ひ、更に東洋畫を罵つて「世人の西洋畫をたゞ浮畫と覺えたる輩多し、捧腹に堪へざる事と云ふべし、如何とならば畫は每に云ふ如く寫眞にあらざれば妙とするに足らず、又畫とするに足らず、其寫眞と云ふは山水、花鳥、草木、昆蟲の類を畫くに、每見新にして、畫手の品物悉く飛動するが如し、是は西洋風にあらざれば能はざることなり、故に寫眞をなす者よりかの和漢の畫を視れば、誠に小兒の戲れに近くして畫となすに足らず」（西洋畫談）と云つてゐる。かく江漢は氣焔を吐いてはゐるが、要するに實寫と云ふ問題に止まつてゐるのである。又かの秋田一派の洋畫の思想を代表してゐる所の佐竹曙山の『畫圖理解』に於ても、遠近明暗の理に言及し、所謂線的遠近（リニアー、パースペクチブ）及び氣的遠近（エーリヤル、パースペクチブ）の問題にも接觸して畫法を論じてゐる。例へば『畫之爲ㇾ用也天文地輿、動物生植、人目所ㇾ見、皆以可ㇾ爲ㇾ畫矣、故陰陽之理、及萬物之形

體、以レ所レ見而爲ニ規矩準縄ニ也」と云ひ、また『故畫物明暗之理、因ニ照物之向背一、淡墨濃墨、分ニ遠近一、辨ニ高低一、而後球圓之三體、望臨之實様」と云つてゐる。更に『樹之近、綠色更濃、樹之遠、綠色淡、此非ニ眼力之所レ不レ能レ到、地氣覆レ物也』と云ひ、又一歩を進めて『全圖曰、人目之視レ物矣、近者大、遠者小也、故其遠至ニ數里一、則眼力盡而不レ能レ視、此所レ畫則地平線也、以降一點即割圓之權輿、畫圖之中心也』と說いてゐる。即ち在來の日本畫に於けるよりも遙かに科學的精神に富み、實寫の要道を得んとするものある事が認められるのである。

(四)

かく當時洋畫が寫實的方面に長じてゐた事と、又此點に當時の畫人が一齊に着眼した事とは、やがて洋畫が日本畫に影響を及ぼして行く方向を決定するものである。即ち第一洋畫が自己の勢力を日本畫の上に及ぼして行くに際して、先づ接近して行つたのは寫實的態度の畫である。此種の態度の畫として近世の日本畫中、圓山四條の流派の如きは最も注目すべきものである。即ち西洋畫は先づわが應擧一派に影響を與へて、彼れの寫實的態度を助成したのである。尤も圓山派の寫實風な作風を激成するに於て與つて力のあつたのは、南蘋派であるのだが、之れと共に洋畫も亦之に對して感化を及ぼしたのである。併ながら彼れの偉大な點はその痕迹を露骨に殘さずして、充分によく自己の力によつて消化した事である。尙ほ此流派の作家の中には、後に洋畫法を參酌したものも少く無い。例へば鹽川文麟の如きは最もよく洋畫を研究して之を活用した一人であつて、彼れの一種の癖のある着色法、布置法、遠近的調節の如きは、正さしく其感化を蒙つたものと云はねばならぬ。

かの谷文晁が山水畫を圖するに於て、進んで洋畫の法を取入れてゐる事は云ふまでも無いが、崋山、椿山また其影響を受けてゐるのである。もと寫實と云ふ事が、日常必要なと云ふ點に就いては、山水や花鳥を圖する事よりも、より以上に肖像畫の場合に於て認めら

れる。故に洋畫の影響は一面には山水に於て遠近深淺の辨別と云ふが如き問題に接觸してゐるが、他面には肖像畫の上にも骨格筋肉の描寫と云ふ問題に觸れて現はれてゐる。もとわが國の肖像畫は足利時代に於ける禪僧肖像の發展を以て一時期を劃してゐるのだが、近世の初頭に至つては全く見るに足らなくなつて了つてゐるのである。然るに今や洋畫の影響の蒙つて、新たなる肖像畫を見んとするに至つてゐるのである。かの谷文晁もこの種の新肖像畫を畫いてゐるけれども、此方面に於て最も成効の實を擧げたのは、渡邊崋山であつて、彼れの門下、椿山も亦肖像畫家として大に手腕を發揮したのである。菊池容齋の如きは何人も知るが如く、人物畫に最も長じてゐたのだが、彼は洋畫の法を參酌して、之に依つて人物を圖したものであつて、其畫く所にも健實性の存せるは、恐らく是れが爲めであらう。要するに是等日本畫の寫實上の缺點に乘じて、努めて此方面に洋畫が自己の特色を發揮して來たのだと見られる。

第二には異國趣味若くば異國情趣を喜ぶ所の風潮が、日本畫に對する洋畫の感化を大に助長してゐるやうである。殊に極端に新奇を尙ぶ所の一個の畫派に對しては、此風潮が著るしく關係してゐる。謂ふ所の畫派とは即ち浮世繪に外ならぬ。尤も此方面に於ても實寫の問題は離れる事は出來ないのであつて、例へば風景に於ける遠近的調整の如き事が洋畫に學ばれ、又事象の觀察の方面に於ても新たなる誠實な態度が示さるるやうになつた。而して此派の作家は紺靑の空、光を失へる夜の街頭、雨の降頻る野外など、從來の畫家に依つて全く閑却せられてゐた方面に向つても、眼を啓きゆく事が出來初めたのである。北齋にも廣重にも淸長にも春章にも、其半面に於てはこの洋畫の樣式と內容とが入り込んでゐるのである。從つてかの北齋に對する西洋人の嘆美も、廣重に對する彼等の稱讚も、或意味に於ては西洋人が自己の姿の一部分を喜んでゐるやうな所が無いとも云はれぬ。少くとも彼等が比較的に容易に浮世繪を理解し得た理由の一にも、而して又他の

流派の諸名家よりも浮世繪師を一層過重せんとした理由の一にも、洋畫の感化が、全く與つてゐないとは云はれないのである。けれども此派の新運動が國人に迎へられた事由の大なるものは、それが異國情調を示してゐた事、而してそれが如何にも彼等の眠れるが如き魂に對して、新らしく生々と映じた事に歸せられる。而して作者の側に於ても此方面は閑却してゐるのでは無い。この方面に於て先づ極端な一例をあげると、かの國貞が、『紅毛油畫風』と銘をうち、或は『浮畫』と呼び、又は落款を横に『このみにまかせくにさだゑがく』など蘭文に眞似て試みたるもの丶如き、或は落款に覺束なき蘭語を記するなど、皆その發現であつて、從つて其畫風の方面にも彼れの風致を加味したもの丶あつた事は怪しむに足らないのである。かの亞歐堂田善の如きは人物を圖するに於て、日本人を西洋人風に圖してゐるのだが、今日より考へると極めてをかしく思はれる。而して此種の異國趣味的風潮を最も明確に發露し來つたものは、即ち銅版畫の流行であつて、次に胡粉繪の盛行である。

永田善吉筆「東海遊覽」

(五)

銅版畫や胡粉繪を考へる以前に、洋畫の感化と云ふ問題に就いて更に一歩を進めて考へてみる必要がある。上述の如き實寫的要求や異國趣味に刺戟せられて發展してゐた洋畫の影響は、或點まで力強く現はれてはゐるが、然し洋畫に於ける殊にある流派の影響とか、ある

作家の感化と云ふが如き深い性質のものは、殆ど認め得られないのである。然しながら尙ほ此問題に就いても、其半面には意外な特徵を藏してゐる事が認められる。之れを見るに先つて第二期の洋畫の特性に就いて考へて見なければならない。

凡そ第二期に於ける洋畫の研究を試み初めた時に、その師となつたものは、來舶の和蘭人であるべきも、作家の研究の最も重要な參考となつたものは、固より多くは西洋畫の肉筆ではなかつたのである。此點に於て第一期のものは可成に力量のあつた西洋の作家に從つて研究する事も出來、而して肉筆の洋畫も亦、乏しくなかつたのである。然るに今や第二期に於ては是等のものは、殆んど全く失はれて了つたのだから、而して蘭人との交際も種々なる障害があつたから、研究の畫家は實際上豫想外の困難を感じてゐたのである。從つて作家が研究上の參考としたものは何かと云ふと、第一が舶載の典籍である。第二が版刻の畫圖である。この二類のものを彼等は最もよく參考したのであつて、當時の洋畫家の研究は、要するにこの範圍の外へ出づる事は殆ど出來なかつたのである。尤も舶載の典籍中には江漢が和蘭商館長イサーク、チチングから送られたと云ふ『コンスト、シキルド、ブーク』と云ふ書の如きは、江漢に多大の影響を與へてゐるので、彼は之に依つて大に發明する所があつたと稱してゐる。其他繪畫に關係したものには、千六百六十四年アムステルダム版のテザルグの透視畫法が、松浦靜山の手澤本中に見える。けれども概して云ふと、作家は是等の專門書に依つて研究したのでは無いのであつて、寧ろ動物畫若くば、植物の圖譜類を始めとして、博物・歷史・地理等の書に在つたのである。今當時わが國に舶載せられてゐた動植物の圖譜類の二三のものを擧げると。一六一三年版ベスレル和蘭本草書。一六六〇年アムステルダム版ヨンストン動物圖說。一六〇八年ライデン版ドドネウス本草書。一六四四年アントウェルペン版ドドネウス本草書。一六六二年アムステルダム版ウエインマン植物書。一七六八年ウトレヒト版パラス動

植物學。一七五九年―一七六三年アムステルダム版ブッフオン及ドーペントン博物書。一七九六年アムステルダム版藥草記等がある。

是等のうちヨンストンの動物圖說は殊に著しい感化を及ぼしたもの丶やうである。此書は一六六〇年に於て出版せられたものであるが、舊楓山文庫の藏本の首端には蘭人ヘンドリック・インチクの江戶に於てせる題書があつて、之には一六六三年四月八日の書記がある。之は現に東京帝國大學圖書館に藏せられてゐる。一六六三年はてうどわが寬文三年に當るのだが、當時例の如く蘭人が江戶に來つて種々の献上品をなしてゐる。其中に阿蘭陀本草一册の品目があるが、インチクの題書した圖說は即ちこの書に相當するものであらう。何れにするも此書が出版後程なく輸入せられてゐる事が知れる。かの平賀源內の如きは之を得んと欲したけれども高價の爲めに購ふことが出來なかつたから、遂に家財を賣拂つて之を手にし得たと云ひ（江漢後悔記）又蘭人カランスよりドドネウス本草書、アンボイス貝譜等と共に此圖說を贈られて愛藏したとも云ふ（蘭學事始）。伊勢小津氏の藏する宋紫石の獅子圖には、源內秘藏の蠻獸譜中から寫したものなる事が記せられてゐる。即ち『此獅子圖平賀先生秘藏蠻獸譜中所載與ニ世之所ㇾ畫者異、蓋蠻人之寫畫云。明和五年戊子仲夏、宋紫石描□□』とある。是れ恐らくヨンストン動物圖說の類を指すものなるべく、宋紫石が之を摸寫したと云ふ事も頗る興味がある。江漢もヨンストンの圖譜は見たもの丶如く、盛んに其插圖の精巧なことを稱贊して『阿蘭書ヨンストン（生類の譜なり）を始め、近年齎來る書中の畫は、銅版の法に鏤めたるものにて、其精妙を盡せり、宛然として眞に逼る（西洋畫談）と云つてゐる。勿論是等の書籍以外に於て歷史、地理、醫書等の插圖に就きても畫家は研究を重ねたのであつて、かの亞歐堂田善が銅版畫や銅版下繪の類を見ても、當時舶載の蘭書の初頁（タイトルページ）の畫などを多數に摸寫してゐる狀が窺はれる。

この種の典籍に於ける插圖としては、木版や銅版の類が用ゐられてゐた事は云ふまでもないが、是等の插

圖以外に於て一枚物または續物の銅版畫——其多くは名所風景を圖したもの——も亦逸することが出來ない。もと銅版畫がわが國に舶載せられたのは、極めて古く、遲くも天正の頃を降らない。記載の上に之を辿ると、その最も古きものゝ一は、かの九州の大名が羅馬に送つた使者が歸國の際に將來した羅馬市街圖、彩色本の類である。その和蘭陀人が本邦と外國との關係を中斷するに及んで、彼等の手から多數に輸入せられたのであつて、例へば前記の寛文三年蘭人の江戸參府の時の献上品中、阿蘭陀繪大小廿一枚、ビイドロ鏡、同繪板五十枚等があつたが、此中の廿一枚とある分は恐らく銅版畫であつたらう。而して此種の銅版畫には着色のものと着色ならざるものとの別があるが、その實物も可成に多く傳はつてゐる。京都某氏の藏する古銅版畫二葉は殊に珍とすべきものにて、その一はサム・マルタン塞攻圍圖、他の一はヘルトーヘンボッス乘取圖であつて、就中前者は銅版畫家の大家カルロー(一五九二——一六三五)が西紀一六三一年三月十二日ルイ王の命に依つて畫いた事の知れるものである。之には京都の蘭學者辻蘭室の說明書が添ひ、之れに文化十年なる年號があつて、少くともそれ以前に舶載せられたものなる事が知れる。然るにかの源内の出づる最初の頃に於ては、世人は未だ銅版畫に興味を持たなかつたらしく、源内曾て江漢に語つて『往年阿蘭陀人、彼國の銅版數百枚舶し來り、日本にて之を鬻がんことを示す、其頃の人思ひ淺く敢て之を奇巧とせず、終に蘭人に反す』(西洋畫談)と云つてゐる。之に依つて一時は未だ行はれなかつたが、漸次に之れに對して興味を覺えるやうになつたらしい。

次に銅版に次で石版であるが、石版は一八〇〇年に獨逸ババリヤ人アロイス・セ子フェルデルの發明する所であるが、是れまた日本へも入込んでゐるので、鷹見氏の藏する一八三一年印行のチロル諸景を始めとして、西洋婦人の像など舶載せられたものゝ中である。

要するに是等の諸版畫の研究に依つて、第二期の洋畫が發展したのであるから、其畫風に於ても版畫殊に

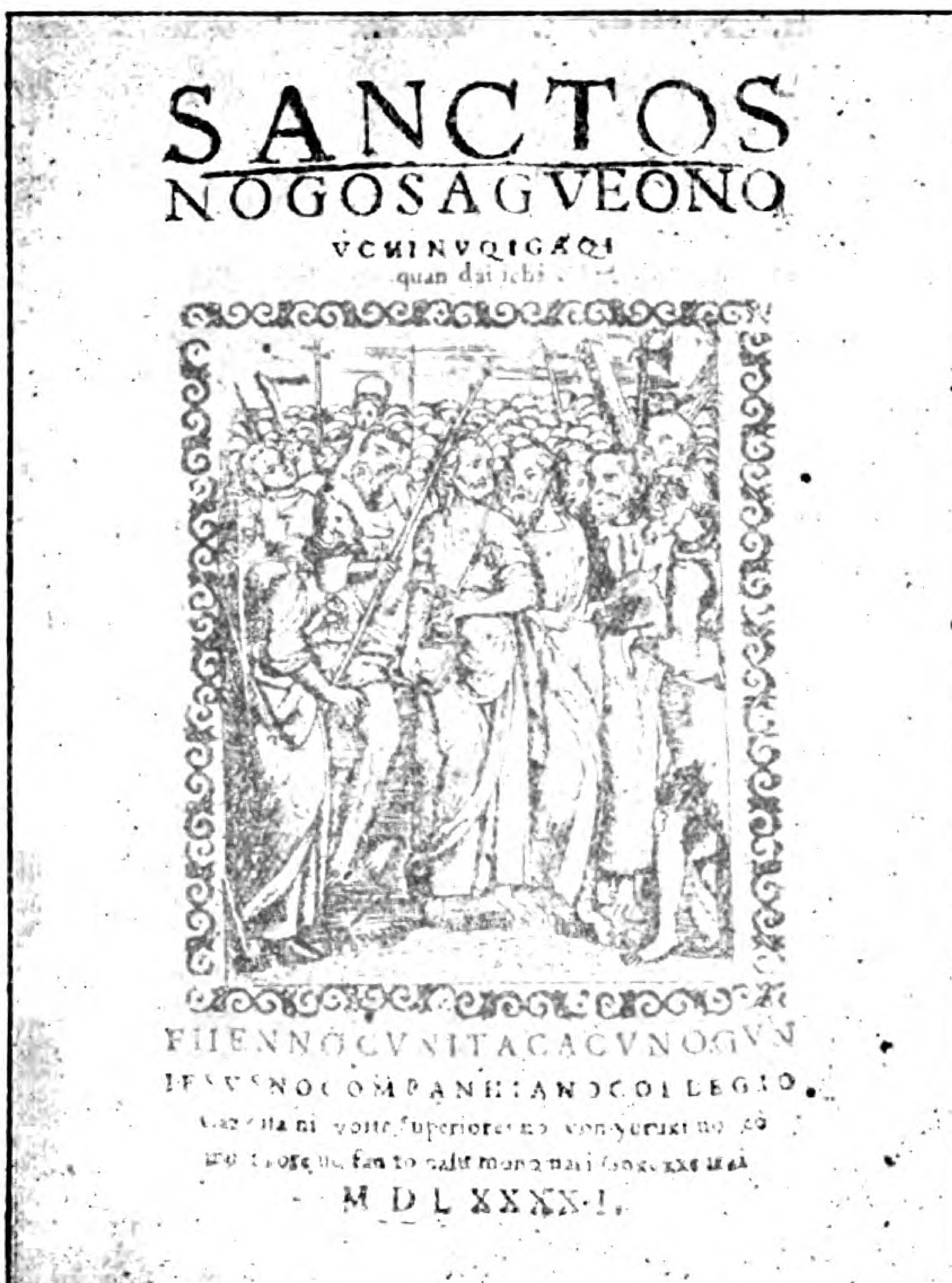
銅版畫式のものが多いのである。從つてまた洋畫の感化の方面に於ても版畫的なるものが多量に存するのであつて、是れやがてわが日本畫に及ぼせる洋畫の感化の一大特徴となすべきものである。而してこの版畫的特徴を考へるには之を二個の方面からするが好都合である。即ち其一は肉筆の方面、其二は版畫の方面である。

(六)

先づ肉筆の方面に現はれた版畫的特徴に就いては、第一に西洋版畫の直寫を試みたる洋畫的製作の多數に現はれてゐる事である。例へば京都文科大學に寄託せられてゐる荒木如元の西洋風景圖（文化二巳八月下旬、崎陽木如元寫の落款あり）の如きそれであつて、その細部の技巧に於ても西洋版畫を摸寫したものなる事が認められる。また東京美術學校に藏せらるゝ若杉磯八筆鷹匠圖の如きは寧ろその甚だしき形迹を留めてはゐないが、多少また版畫式なるものが無いでもない。此の畫には蘭語にて『長崎若杉磯八が自ら意匠し且つ畫く』旨の落款がある。その他東京美術學校に於ける波止場圖の如き、神戸川崎家の西洋風景圖巻の如き、その類は決して二三に止まらないのである。第二に西洋版畫を參酌して畫きたる日本畫が現はれてゐる事である。浮世繪の作家がものした肉筆中には此の類が多いのだが、世間に知られてゐる繪畫の中にて此の種のものを求めると、先づ松平定晴子の藏する文晁筆『公餘探幽』二卷である。是れは文晁が寛政五年樂翁公に從つて伊豆相模を巡見した時、途上目睹の風物を圖したものである。是れは一見して洋畫法の感化を受けたる作物なる事が知れるけれども、從來の鑑賞家は單に洋畫の影響と考ふるのみにて、其の西洋銅版畫の感化を受けた特調のある事に留意しないのである。尚ほ此の種の作例は甚だ多いのであるが、玆には從來餘り世間には知られてゐない一例を擧げてみよう。それは永田善吉の『東海遊覽』と題する畫帖である。此の畫帖は須賀川の內藤新次郎君の所藏にて田善が東海道を旅行して西下した時、目睹の風景を描寫した

ものである。その一々の筆線の如き全く西洋版畫式であつて、その遠近の如きは全く洋畫的である。第三に徳川末葉に是て一時世に行はれた胡粉繪であるが、是はそのすべてが西洋畫の模倣に成つたものである事は、云ふまでも無い。けれどもその意匠の基く所は一枚摺の西洋版畫、殊に着色銅版畫にありと云はねばならぬ。而して此種の胡粉繪の行はれたことの基底には、明かに異國趣味を喜ぶ所の時代風潮の存することを認めるのである。

次に第二期に於ける洋畫研究の版畫的特徴よりする一大產物は、銅版畫の發展である。此發展は一は例の異國趣味を喜ぶ風潮と、他は寧ろ實用的方面との二方向より來てゐる。殊に後者は地圖を畫き、書籍の說明挿圖等の必要に逼まられた方面である。一體日本の銅版畫は一に『かなばんゑ』とも云ひ、その起原に至つては可成に古い。即ちかのビートロ・ゴメッの報告書の中に、五人の者が銅版術を學んだ事が見えてゐるから、天正文祿の頃には既にこの術の試みられてゐた事が分かる。今日その頃の遺物としては、一五九一年に於て我が肥前の加津佐と云ふ土地の耶蘇教學校（コレギオ）から出版した『聖徒（サンクトス）の御作（ごさ）業（げふ）の中抜書（うちぬきがき）』(Sanctos no Gosagueo no uchi Nuqigaqi)



一五九一年印行の日本銅版畫

と題する二卷本の各卷頭に於ける一枚の銅版畫である。その書の今日に傳はれるものは今オックスフォード大學に藏せられてゐる。

之に依つてとにかく本邦に於て製せられた最も古き銅版畫を見る事が出來るが、是等はかの洋畫と等しく耶蘇教の衰滅に殉じて、殆ど地を排ふに至つた。然る之を再び興隆の運に向はしめたものは何人も知るが如く司馬江漢であるが、彼は當時「銅版に刻するものなかりしに、阿蘭書ボイスと云人の著はす書中に、銅刻を作るの技巧の法式あり、向きに我玄澤大槻氏と謀りて天明癸卯竟に其製作を考へ、日本始めて草創するものなり」(西洋畫談)に云つてゐる。尤も銅版術は江漢を祖とし、その他は何れも江漢を繼承せしものゝ如く說く人があるけれど、江漢とは別系の人も少くない。江漢に次で永田善吉が出でゝ之を發展せしめ、又之れと少しく後れて尾張の牧墨仙また此術に長じてゐた。その他新井令恭、中屋伊三郎、安田雷州、玄々堂龍山、同綠山、井上九皐、中川信輔、岡田春燈齋等が相亞で現はれてゐるのである。此中にて殊に永田善吉は有名であるが、彼れは江漢の門流なるかの如く說くを普通とすれど、實は彼れは江漢とは別系のものと認むべきである。是等の銅版術の發展と共に種々なる銅版畫の一枚物又は綴物なども現はれて世に行はれたが、是等の中には西洋銅版畫を複刻したものも決して少數ではなかつた。且つその畫風は純日本畫風のものも無いではないが、そは寧ろ少數であつて、多くは日本風景を圖するに於ても、洋畫風に作なしてゐることは固より恠しむに足らない。

更に珍とすべきは、日本の木版を以て西洋銅版畫を模したやうなものが現はるゝに至つてゐる事である。西洋銅版は凹版式であるが、之を凸版式の木版にて模せんとする事である。その例は浮世繪の版畫に多々存するのだが、かの國貞、北尾政美、昇亭北壽などの作品には殊に多い。かの永田善吉が自己の作つた銅版畫を眞似て、之を木版色摺になした彼れの「鈴ヶ森」圖の如きは、その最も奇なる作例である。

要するに所謂第一期の洋畫は、技巧に於ては大いに見るべき發展を遂げてゐるけれども、本邦畫場に及ぼせる影響に至つては甚深なるものはなかつた。然るに第二期の洋畫は技巧は不充分であつたが、わが畫場に及ぼした感化は頗る大なるものがあつた。殊に後期の洋畫の生長に就いては、西洋版畫は最も重要なる位置を有するものであつて、同時に洋畫の日本畫に及ぼせる影響に就きても亦頗る重要なる意義を帶有するものと云はねばならぬのである。(完)

〔此稿を草するに方り種々なる材料を提供し、又研究上便宜を與へられた神田男爵、新村博士及び須賀川に於ける諸友人の好意を感謝す〕

再び朝野論爭の焦點となれる減債基金問題

法學博士　堀江歸一

基金制度の由來

我國に於て當面の財政問題を擧げんか、敢て少なしとせざれども、減債基金問題の如き紛糾錯綜したるものに至つては、他に其比を求むる能はず、啻に一箇の財政問題として、其處理に困難なるのみならず、今や內閣の與廢、政權の移動亦此問題に依つて決せられんとするが如き政治的關係を有するに至れり。曩に大隈內閣が基金還元の公約を果さゞるの故を以て、貴族院の非難を蒙り、將に瓦解の危きに臨み、全然內閣の面目を失墜するの醜態を演じて、一縷の命脈を繫ぎたるは、吾人の記憶に新なる所なり。而して寺內內閣亦此問題に對して根本的解決を試みず、極めて姑息なる方法に依て、貴族院の攻擊を緩和するの方針に出でんとする以上は、基金問題が永く我國の政治並に財政に於

て死活問題たる可きや論を俟たず。然も基金復舊の成否は其實質に於て、斯る重大なる價値を有する問題なりや否や。是れ吾輩が本論に於て、最も公平なる立場より批判を試みんとする所なり。

純平たる財政上の見地より言はんか、減債基金制度は公債償還を或る規律の下に置かんとする一の方便に過ぎず、旣に一の方便に止まる以上は、法律を以て特に減債基金制度を設けざるも、一國の立法部行政部共に公債償還の必要を理解し、而して其償還を行ふ可き財源の歲計に存するものありとすれば、優に公債減却の目的を達するに難からず。明治初年以來我國財政當局者は公債償還の必要を認め、永く二千萬圓を以て、償還の定額としたる時代ありたれども、此金額たる、當局者の自由に裁量するを得る所に屬し、必ずしも基金制度の下に法律の效果として、特に收入の一部を之に供用するが如き、拘束の存せざりしや論を俟たず。彼の大藏省官僚の執筆編纂に係る「明治財政史」中公債償還の方案を論じたる一節の冒頭に於て、「概して之を言ふときは、國債償還の敢て急遽に行ふことを要せざるものたるや、殆ど多辯を俟たざる所にして、宜しく國力の盈縮に鑑み、時勢の緩急に應じ、徐々に其步を進めざる可からず」と論じたるは、財政上の正論と認めざる可からず。然るに日露戰爭に臨み、軍事費支辨の爲めに、巨額の公債、內外國の市場に發行せられ、公債現在高に急劇の增加を來すや、財政當局者は從來の償還方針を以て、晏如たる能はず、明治三十九年國債整理基金特別會計法なるものを制定し、日露戰爭關係の公債に對する元利金支拂の爲めに、一般歲計より每年一億一千萬圓以上の資金を右の特別會計に繰入ることゝしたり。是れ我國に於て今日に至るまで財政上の議論の紛更して已まざる減債基金制度の發生したる端緒にして、政府が一般會計に於て、國債整理特別會計に繰入る可き資金の餘裕を求むるや、實に戰爭後一年內に廢止す可き公約の下に戰時賦課したる非常特別稅を永久に繼續したるものなるが故に、減債の一事に熱中して、減稅の希望を犧牲に供したることゝ爲れ

る次第なり。

桂公の公債政策

政府が公債現在高の劇増に驚愕して、減債基金法を案出し、約三十年間に戰爭關係の公債を償還し了せんとするの計畫を定めたるは、事情の諒とす可きものなきに非ずと雖も、吾輩の如き該法制定の當初より熱心に之に反對したり。蓋し公債償還の如き財政計畫の一部分に過ぎざるものにして、當局者が如何に公債の償還に熱中するも、日露戰後に於ける財政計畫の如く、一般財政の整理を閑却し、放漫なる政策を濫行して、禍害を後年に貽すに於ては、公債整理の實効を擧ぐるに難きことを確信したればなり。果せるかな、政府は毫も一般財政の整理に意を致さず、減債基金法の制定と時を同じうして、鐵道國有の計畫を敢行し、私設鐵道買收の爲めに、巨額の公債を發行したるのみならず、公債財源を必要とする事業費の膨脹は每年の豫算編成に公債の發行を必要とし、減債基金法の實行せらるゝに拘はらず、却て公債現在高を増加し、我國財政の信用を中外に失墜するに至らしめたること、吾輩の記憶に存する所なり。

斯くて明治四十一二年の交、公債の市價甚だしく低落し、日露戰爭以來公債に應募し、尙ほ其大部分を所有する諸銀行は營業資金の固定、所有財産の減價に苦しむや、公債市價恢復の運動は先づ銀行業者の間に起り、偶々第一次西園寺內閣倒れて、第二次桂內閣の之に代るや、銀行業者は減債基金の增額、非募債主義の勵行等數箇條の政策を桂內閣に建議し、桂公亦財政の眞相を理解せず、一意彼等の歡心を結び、金權者流の間に自家の權勢を扶植せんとする私心の盛なる、直に彼等の建議を採用し、斯くて國債整理基金中公債の元金償還に供す可き金額を每年五千萬圓以上とすると共に、非募債主義なるものを聲明することゝ爲れり。然も我國財政に於て或る年間募債の必要なからしめんとするには、公債財源の諸事業に要する經營に緊縮整理を施さゞる可からず。幾多の官業を擁し、多數の特別會計を有する我國の財政に於て、之を爲すは、桂公の

如き財政に何等の見識を備へざる輩の企及する能はざる所にして、公の非募債主義なるもの、畢竟公債財源の事業費を後年に繰延べて、以て一時を糊塗せるに過ぎざりしのみ。斯の如くして公債を整理するを得んか、世間何人と雖も、之を爲すを難しとせざるなり。桂公の公債政策なるものは果して如何なる結末を告げたりや。年處の重なるに隨ひ、非募債主義は遂に勵行せられず、公債を財源とする事業費に對して種々の遣繰を行ひて財政を紛更し、政府をして右手に公債を償還しながら、左手以て公債を發行せしめ、新に發行する公債は償還する公債よりも條件の不利なる結果、國民に對する公債の負擔を加重し、內國に於て公債の發行に窮するや、外國に於て公債を發行するの結果、對外債務の增加を致す等種々の弊害を暴露し、殊に山本內閣の時代に於て此弊害の甚だしきを加へたり。

大隈內閣の公債政策

故に大隈內閣が其成立の當初に於て、財政整理の要目として、再び非募債主義を聲明し、且つ之を實現する爲めに、減債基金に二千萬圓の削減を加へ、一般會計に生ずる餘裕を鐵道會計に貸付けて、以て同會計に於て募債の必要なからしめんとしたるは、財政策として稱揚するに値せずと雖も、當時の狀況に於ては已むを得ざるの窮策なりしのみ。唯桂內閣の時代に、桂公を助けて、基金增額の財政方針を遂行し、基金を以て神聖不可侵のものとするが如き、將た又基金法に依て日露戰爭關係の不生產的公債を償還するを以て、我國財政上に於ける當面の急務なりとするが如き說を唱道して、世間を惑はしたる彼の若槻氏が大隈內閣の大藏大臣として、飜然態度を一變し、非募債主義を裝ふが爲めに、減債基金を削減するの處置に出で、其言論に操守なきを暴露したるは吾輩の一驚したる所なれども、氣節の見る可きものなきは、我國官僚の常なるを以て、此一事亦深く咎むるに足らず。然も大隈內閣が非募債主義を行ふに、官業縮小特別會計整理の根本方針に出でず、基金削減に依て一般會計に生じたる餘裕を鐵道會計に貸付けたるが如き、非募債主義の外觀を

粉飾するに止まり、一方に減債基金を削減して、他の一方に何等財政の整理に資するものなきに至らしめたる所以なり。

故に大隈內閣の公債政策に對して、異見を挾まんか、基金削減額を鐵道會計に供するの不合理なること、非募債主義の徹底せざることの二點を以て根據とせざる可からざるの道理なるに、貴族院の多數は毫も此根本問題に接觸せず、單に基金の神聖不可侵論を以て、大隈內閣の計畫に反對し、大隈內閣の財政上に定見を有せざるの甚だしき、貴族院の所論に屈服して、基金の還元を公約するに至れり。然れども公債財源の事業費に何等の整理を加へずして、減債基金を五千萬圓に復舊するが如き、即ち我國の財政をして一方に公債を發行し、而して他の一方に公債を償還する不合理なる狀態に陷らしむるものにして、斯くて我國財政の整理せられ、又公債政策の確立する時ある可からざるなり。

基金還元論亦不可なり

今や政機一轉して、寺內內閣組織せられ、曩に貴族院に於て、基金還元論を標榜して、大隈內閣を攻擊したる後藤、田、仲小路の諸氏は寺內內閣の閣員に列したり。諸氏にして曩日の言論に對して忠なる以上は、先づ基金還元の計畫を實行して、以て大隈內閣の公債政策を一變せざる可からず。然も寺內內閣は此問題に對して、幾何の誠意を示さんとするや。頃日寺內內閣の發表したる明年度豫算案に據れば、基金還元を實行せんとするもの丶如く、即ち減債基金を五千萬圓とし、一般會計の鐵道會計に對する貸付二千萬圓を削除し、鐵道事業費千百八十萬圓を公債財源に仰ぐの諸點を決定したり。斯の如くすれば大正六年度に於て基金の還元せらる丶ことは確實なれども、七年度以後に於ては、此點に就て如何なる方針に出でんとするや。基金還元論者が大隈內閣の公債政策に反對したる精神より云ふ時は、大隈內閣時代に改正せられたる基金法の規定即ち公債償還額を三千萬圓以上、公債現在高の萬分の百十六以上としたる規定を改正し、第二次桂內閣の時代に一箇の不文律と爲れる五千萬圓償還の一事を成文律

とせざる可らざるの道理なるに、彼等の爲す所、斯の如く爲らず、單に明年度の豫算案に於て、基金の還元を實行するに止め、基金法其もの丶改正に着手せず。抑も寺内内閣は明後年以後に於ける基金の還元に就ては、如何なる所見を有するものなるか、世人の糺さゞる可からざる所なり。

基金還元と海軍補充費財源

思ふに明後年以降に於ける我國財政に累を及ぼす可きものは海軍補充費に對する財源の調達是れなり。大隈内閣の財政上に於ける施設の無責任なる、海軍補充費に對する財源に就て、何等確乎たる成算を有せずして、補充費の支出を決定したり。大隈内閣が貴族院に對する公約上、當然減債基金を還元す可き地位に居りながら、百方辭柄を設けて、基金の還元を回避したるは、此問題に就て、定見のあれるが故に非ず、大正七年度以降年々海軍補充費に五千數百萬圓の財源を要し、收支均衡の維持せられざるの時に當つて、鐵道費の財源を公債に仰ぎ、斯くて一般會計に生ずる二千萬圓の餘裕を海軍補充費の財源に充つるの胸算を懷きたるものと認めざるを得ず。手段の巧拙、政策の當否は姑く措き、此處置たる、尙ほ一箇の計畫を以て許すに足る可し。然らば寺内内閣の此點に於て爲さんとする所果して如何。寺内内閣が明年度に於て爲すが如く、減債基金を還元し、一方に鐵道會計の財源を公債に求め、而して此方針を將來に續行して、以て基金還元の政策を厲行せんとする以上は、第一に年々公債の發行を必要とするのみならず、第二に海軍補充費の財源調達に支障を招かざるを得ず。寺内内閣が基金法其ものに何等の改正を試みず、隨て五千萬圓償還の成文律を設けず、單に明年度豫算に於ける一計畫として、基金を還元するに止め、將來に之を削減するの自由を留保したるは、要するに海軍補充費の財源に窮したるの曉に、基金を削減するの餘地を存したるものに非ざるか。然も斯の如くして、還元論者の精神に適ひたるものとせんか、還元論なるもの丶世人を愚にすること亦甚だしきに非ずや。

玆に於てか基金還元論を財政上に實現し、之を一箇確定の計畫たらしめんとする以上は、海軍補充費に對する財源を確立せざる可からず。今日の財政狀態に於て、此種の財源たるものを數へんか、經費節約、公債自然增收、增稅等の數目を擧ぐるに難からずと雖も、是等は果して如何なる程度に於て、海軍補充費の財源たるを得るや。經費の節約は山本內閣幷に大隈內閣に於て、共に之を企てたれども、實際の成績顯著なる能はず、寺內內閣が此點に如何なる抱負を有するや、之を知らず、又假に之に着手したりとするも、其結果の大なるを期待する能はず。自然增收は歐洲開戰以來內地經濟社會の好景況を呈しつゝあるの今日、內國諸稅幷に專賣業の收入に於て、或る程度まで之を期するを得るが如しと雖も、從來我國の歲計に於て、自然增收の最も著しかりしものは關稅の收入に外ならず。然らば近き將來に於て、我國が關稅の增收を豫想するを得るなれば、甚だ可なりと雖も、關稅の增收には輸入貿易の增進を必要とし、輸入貿易の增進には歐洲戰爭が遠からず終熄し、然も戰後交戰諸國の經濟狀態が戰時の打擊を蒙らざる程度に於て恢復することを必要とす可し。歐洲戰爭の前途幷に戰爭終熄期に於ける交戰諸國の經濟狀態に就ては、今日正確なる豫想を下すに難きものありと雖も、尙ほ戰爭の近く終熄せず、又終熄期に於て諸國の經濟社會疲弊し、戰時內國に堆積せる物質をダンピングに依て、外國に輸出する場合の外、大に諸外國に販路を開拓す可しと思はれず、隨て我國が戰後輸入貿易の增進を打算し、關稅增收を見越して、將來の財政計畫を定めんか、大なる違算を免かれざるなり。

海軍補充費の財源を公債に仰ぐが如き、一箇の計畫たるを失はずと雖も、既に基金還元の結果として、鐵道會計に募債を必要とし、朝鮮事業費の資金亦明年度より公債財源に屬せんとする際、更に海軍補充費をも公債財源に仰ぎて、能く募債の目的を達するを得べきや否や。內地の金融は永く今日の狀態に居る可きに非ず、必ず反動時代に移る可きの時ありとすれば、公債

財源に依頼して、財政の急を凌ぐが如きは、即ち我國財政をして危険なる募債政策に陷らしむるものにして、寺内内閣にして求めて此危道を踏まんか、財政の紊亂を促すの責を免かれざるなり。斯の如く論じ來れば、減債基金の還元と海軍擴張とを併せ行はんとする財政計畫は增稅の斷行を强要するものと云はざる可からず。然も增稅の如き、如何なる非立憲政治家出でゝ、之を盲斷せんとするも、遂に國民の容るゝ所と爲る能はず。寺内内閣が基金の還元を大正六年度豫算に止め、將來の方針を不定の間に置かんとする亦已むを得ざるものとす可し。

減債全廢論の價値

世間の一部に減債基金全廢論を主張する者あり。吾輩の如き基金法制定の當初より之に反對し、桂内閣の基金を增加せんとするや、更に之に反對し、其間機會ある每に其廢止を提唱し、自由償還法を以て、之に代らしむることを主張し來れり。故に今日一部の論者が基金全廢論を唱道するも、之に對して何等新とし、異とするの念を懷かず、唯論者が七八年前に於ては基金法維持の必要を存したれども、今日其必要を失ひたりとするの意見に對しては大なる誤解の伴ふことを指摘せざるを得ず。我國が日露戰後減債基金を設け、又桂内閣時代に之を增額したる原因の外債償還の急を要するに存したるや、論を俟たず。外債償還の急を要するとするは、一箇の主張として、承認するを得べし。然も外債を償還するには、我國をして國際貸借上有利なる地位に居らしめ、有利なる貸借差額の維持に依て、正貨を吸收することを第一の要件とせざる可からず。基金論者は基金法の制定若しくは基金增額を實行するの間、此點に就て、幾何の思慮を廻らし、又幾何の施設を講じたるや。彼等は是等の點に就ては、何事をも爲さず、單に基金法に依て、定額の外債を償還せんとしたるが故に、一方に外債を償還しながら、他の一方に外債を發行し、基金法の効果を抹消するの結果を生ぜしめたるに非ずや。而して今日論者が基金法を全廢せよと云ふは、我國の正貨增殖し、外債を償還せんと欲

すれば、法律の之を拘束するものなきも、優に償還を行ふを得るに至れることを以て、重なる論據とするものゝ如し。即ち知る可し、外債の償還は一に我國の國際貸借上に有する差額の有利なると不利なるとに基くものなることを。國際貸借上に於ける差額の有利なること、今日の如き場合に基金法は不用なるを以て、之を廢止す可しと云ふ論者の所説にして正當なりとすれば、其差額の不利なること往年の如き場合に、減債基金法を實行するは、一の外債に代ふるに他の外債を以てし、其間國家に不利の影響を及ぼすの故を以て、有害のものたるや、論を俟たず。吾輩が終始一貫基金法の廢止を主張するは、其維持が有害ならざれば、即ち無用なることを確信したるが故にして、論者が單に國際貸借上に於ける趨勢の一變に藉口して、曩日其必要としたるものを今日に至つて無用なりとし、以て變説改論の責を免かれんとするが如き、陋とせざるを得ず。

吾輩が寺内内閣の財政計畫に對して、滿足する能はざるは、第一に還元問題に對する解決宜しきを得ず、將來の公債政策不定なるのみならず、第二に有利なる國際貸借の維持に就て、何等の成算の存せざる諸點に外ならず。還元論者を閣員とする寺内内閣に對して、基金の全廢を要求するが如き、無理なる註文に似たりと雖も、歐洲戰時幷に戰後を通じて、我國が有利なる國際貸借の狀態を維持し、正貨を以て外債を償還するの見込定まらんか、減債基金法の如き、廢止せらるゝとするも、正貨處分策として、外債を償還せざるを得ざる可く、內國債に對しては、基金廢止の曉に一般會計に生ずる剰餘を以て、之を償還するを得べく、軍備擴張の急に驅られて、此剰餘を軍事上の經費に奪はるるの恐ありとせんか、基金法存在するの今日に於ても、其危險を免かれざるの道理なり。之を要するに基金の還元と云ひ、廢止と云ひ、共に枝葉末節に捉へられて、議論を闘はしつゝあるは即ち今日の狀態にして、吾輩は兩論者共に財政の大局に向つて着眼するに至らんことを望むものなり。

現代史に於ける澁澤翁の位置

近代史・現代史に於ける澁澤翁の地置（其三、完）

山路愛山

（一）

翁は小資本家なり

時事新報社にて作りたる五十萬圓以上の資産家一覧表を見れば現代の金持角力番付に於ては澁澤翁は決して幕内に入り得べき大資産家に非ず、まして今度の世界の大戰に依り春雨の後の筍のやうににょき〳〵と出來たる所謂船成金を始め、相場の亂高下が生み出せし新米の金持でも加へたらば翁の番付は更に一段低くなるやも知るべからず。然るに今日にても翁が猶ほ金持社會の小大名ながら其社會に天下の大老として尊敬せらるゝは何故ぞ。是には仔細ありと見へたり。元來何時の世にても高持は高持だけの力量あるものなり。たとへば安田善次郎などは日本の大金持の親玉にして三井、三菱、住友に並びて五本の指に數へらるべき大關なり。銀行世界の安田一派は其勢天下を三分して其一を保つと云ふ程の勢力にて日本全國の津々浦々に根を張り、枝を伸ばし、日本人民より貸金の利足を吸收すること、大きなる蜘蛛が巣を張りて蟬、蜻蜓、蚊、虻の生血を貪るが如し。地方の銀行、身上持が惡るく、立行かぬやうになり、安田に療治を賴めば安田は其銀行の病體を診察し、物になりそうなれば惠然、慨然として其急に赴き化して安田系の銀行となす。此恩惠を仰ぎて日本全國の金融機關の安田系と云ふ蜘蛛の巣にかゝり居るもの甚だ多し。其の勢力の偉大なることを云へば、古の加賀、薩摩は比較にならず。其陰に立ち、其銀行を金親に賴みて生活するもの山村水廓到る處に在り。是れ皆

安田が大金持たるが爲なり。されば持高の多少が其勢力の大小に關係あるべき事は勿論なれば、單に其持高に依りて人物の高下を定めたりとて强ち無理の批判に非ず。世界は畢竟力較の舞臺に過ぎずと思へば力あるものが相應の尊敬を受くるは當然の事なり。さりながら人物の價値は唯だ持高に依りてのみ定まるものに非ず。たとへば慶長庚子の役、石田三成は僅に江州佐和山二十萬石の小大名に過ぎざれども事實に於ては西軍の總帥となり、關東を一手に握りたる扶桑第一の高持德川家康を向ふに廻はして天下の取り遣りをしたり。黑田如水父子の身上は其頃豊前國六郡に過ぎず、しかも如水は隱居の身なり。さりながら石田、兵を上國に擧ぐると聞きたる如水は忽ち此小藩より起りて熊本の加藤淸正と聯合し、二氏の兵を以て連戰し、その威風、直ちに鎭西を壓したり。高持ならずとも、其力を善く用ひ、更に他人の力を借用する術を解したらば猶ほ以て大きなる仕事を爲し得べきこと此の如し。源平氏の時代より、足利の世までは關東の大名には高家と、黨の二種類あり。高家は高持なり。黨とは持高少き大名が組合ひて一黨を爲し以て高持に當るものにして聯合體なり。聯合體には相違なけれども、既に一體となりて旗頭を定め、進退、攻防を同しくすれば以て高家の專横を抑ゆべきが故に是亦力なり。何程の高持なりとも、其力をのみ賴みて天下の利害を壟斷する能はざるは一方に此聯合の力あるが爲なり。澁澤翁は金持として云へば必しも高持に非ず。金持の番付に於ては必しも幕の内に列し難しと雖も、翁は身を實業界に投じたる初より實業界の口利なり、他の語を以て云へば一黨の旗頭なり。或る意味より云へば日本の實業界をして今日あらしめたる案内者なり。金持番付に於ける翁の位置が餘り高からずして而も猶ほ其の社會の大老として尊敬せらるゝ所以のものは是が爲なるのみ。

(二)

商人の世界も革命の運に會す

明治の初年までは日本の實業家は誠に意氣地なきものにて所謂官尊民卑の風甚しかりしとは翁を始め誰も

言ふ所なれども、其實必しも然らず、舊幕の時代にても士族の側より云へば金持の跋扈却て甚しく、士族の威權は逆に町人に奪はられ、天下の大名ゝ金持の鼻息を窺ひ、其顔色を見て一喜一憂したる狀態は誠に見るに堪へざりしなり。たとへば長州は尊王攘夷の本場にしてその大賭奕が甘く圖に當り維新の改革に於て成功者の位置を占め其御蔭にて長州侍は、田舍翁も忽ち卿相の位置を占め唯今にても長閥は日本の政治界に雄視し居れども、その長州の人が尊王攘夷の芝居を打ちし金主は誰が勸めたりと云へば江戸、大阪の町人なり、若し江戸、大阪、別して大阪の町人が財布の口を堅くして長州の金談に應ぜざりしならば長州人何程あがきたりとて、決して面白き芝居は打てざりしなるべし。されば長州人も金主たる金持に對しては町人なりとて侮らず。長州家の重役より大阪の町人に宛てたる書札を見れば其の辭令は敵國對等にて隨分丁寧なるものなり。それが噓だと思ふならば大阪の舊家廣田、鴻池など云ふ家に行きてその古文書を詮義すべし。水戸家なども御三家の勢にて表向きは大威張りに威張居たれども寛政文化の時代には金錢の事に掛ては何事も大阪町人の鼻息を窺ひ、年々支拂ふ利息の爲に財政窮乏し、武士も殆ど其體面を保つこと能はず、大困りに困りたることあり。國持大名すら斯の如し、まして十萬石以下の小大名に至りて全く金主に權を取られ、所謂勝手掛の役人は金主の手代やら主人の家來やら分らぬ程の境遇に陷りしもの天下皆是なり。斯樣の大名は借金の爲に百姓より取立てる年貢米を自身にて始末する權利を奪はれ之を債權者たる町人の倉庫に輸送す。藏元と云ふは是なり。此藏元は關東ならば通例、百石につき五石の倉敷料を取る。則ち町人は大名より貸金の利息を取るのみならず、年貢を自身の倉庫に預り倉敷料をすら取るものなり。天保三四年の頃關東にて大名貸しの利息一ヶ月分三十兩に付一分なり。則ち一年一割なり。一年一割の利息を取り、其外五分の倉敷料を貪る。町人の大名を惱ませしこと甚しと謂つべし。其上、左樣に自身に都合善き利廻りにても往々金を出し

澁ぶり、町人の方より借上にも藩政に就て條件を持出し、公儀の御勤向きは斯樣斯樣に致さるべし、藩内の御制度は斯樣に立てさせらるべしなど丶指圖がましきことを申出で、財政當局者の人物をも選り嫌ひをなすことあり。それでも金が無ければ埒が明かぬ故背に腹は換へられず。堂々たる御大名が一國の政治を町人の胸中に任じて其仕送りを得るを幸としたるものあり。此段幕府時代の常態にして町人、逆さに武士を制したるものなり。されば翁が昔の日本は官尊民卑の極端なるものなりなど云ふも、其說法は翁の慶喜論と同じく大割引して聞くべきものにて必しも事實に非ず。古も町人の實力は隨分大きなるものにてありしことなり。此事實を知りたればこそ生粹の武家に相違なかりし井上聞太、後藤象次郎なども明治の初年より政治界に志を得ざれば直ぐに牙籌を執て町人とならんと思付きたるものにて、町人誠に翁の如く卑しきのみのものならば後藤、井上のやうなる婆婆氣多き人物が直ぐに丸腰の町人になりたしなど丶とは思付くまじきなり、但し

維新の改革は獨り政治上の改革たりしのみに非ず、又實に町人の改革なり。舊幕時代の武士が其始め戰國の新人物より起りなる征夷大將軍たりしは徳川家の先祖が三河の松平村と云ふ山家の大庄屋同樣の豪族なりしにて明かなるが如く、其時代の大町人も其昔を尋ぬれば、徒手空拳を以て身を一寒人に起したるものなるに井原西鶴の永代藏に『總じて大阪の手前よろしき人、代々つゞきしにはあらず、大方は吉藏、三助がなりあがり、銀持になり、其時を得たるものなり』とあるにて明かなり。さりながら是は創業時代の事なり、金持が大名の金主になり、金持と大名の經濟が入組みたる徳川時代の中世以後は双方の釣合にて金持も追々舊家になり、大阪の今町、高麗町筋などは大名に均しき金持の門閥が出來、番頭手代の政治にて世家の門戸を支へ自ら一種の貴族を生じたり。同じ社會の殊なる仲間も其形式は自ら相似るものなり、唯今の金持の家法を見るに、其規模の大小はあれども何れも何處か國の憲法に似たり。それと同樣にて封建時代には金持の世家

も其家法は自然、大名の政治に類し、馬鹿主人にても家が持て先祖の株を守り、先祖の仕來りに從ひ、先祖の出入りたる大名に出入し、先祖の家業を『ステロ』にとりたるやうに敢て違はず、其儘出精致し居ればそれにて、世家一分の業は濟みたるものなり。然るにペリー提督渡來以來、日本の世界に於ける位置、俄然として一變し、政治社界が根柢から顚覆したる上は、其れと相倚り相支へたる町人の社會も激變の運命に逢ひたるは當然にして第一、國内貿易のみを營業としたる町人が外國貿易と云ふ前代未聞の商海に乘り出したることが先づ其膽を寒からしめたるものなり。次には金銀の比價も昔とは全で變り、物價の高下、恰も大暴風雨(おほしけ)の風波の如し。其上國内には戰爭起り、債務者たる大名の位置は全く安靜を失ひ、財界の權利を保護したる將軍の權威は輕きこと毛の如し。事此に至ては金持の門閥も亦倒れざることを得ず。されば維新の改革は獨り政治社會の古態を一掃したるのみならず、町人の社會に於ても門閥世家悉く亡びて新時代に移りなるものなりと謂つべし。斯樣の時に町人の品位が昔よりは一段も二段も落ちしやうに見へたるは當然なり。町人にても大木の如く舊き歷史を有し鬱然として一種の品位を持つもの多ければ、官吏何程威ありとも容易にそれを侮るを得ず、多少は敬意を表したるべきに、其大町人も維新改革の時化(しけ)に逢ひて難船したるが多く、さらずも商界の波瀾定まりなきに避易して閉息し居れるもののみなりしかば、明治の始は町人と云へば卑屈なる奴ばかりのやうに見へしも尤の事なり。翁は斯樣の時期に身を商界に投じたり。

(三)　合本論

『ダイナマイト』にて山を崩し、其破壞の跡に立ちて此邊には山らしき山なし、唯だ土塊のみと云ふは當然なり。澁澤翁が維新の改革に依りて町人の世家、殆ど日本國より一掃せられ或は無勢力に陷りたる時に大藏省の窓より日本國を見渡し、日本の町人は卑屈の奴ばかりなりと思ひたるは之に似たり。實際其時代の日本

の町人は「ダイナマイト」にて破壞したる大岩石の破片の如く小さきものゝみなりしに相違なし。さりながら日本國の町人を斯樣の卑屈の奴ばかりにして濟むべきや。此形勢を以て萬國に對比すれば眞に以て心細しと云はざるを得ず。翁は是に於て此卑屈の町人を何とか立派のものにして見たしと考へ、合本法と云ふことを思付きたり。是は必しも翁の發明に非ず、其頃西洋見物をして歸り來たる當年の高襟者流はいづれも西洋には株式にて仕事をすると云ふことあるを知り、是は善い工夫なり。何卒して此法を日本に移し、大きな商賣をして見たしと思ひ付きたることならん。其證據には栗本鋤雲などは商賣の世界には緣遠き人なりしかども、その明治二年に著述したる曉窓追錄と云ふ書物を見れば立派に株券の事の記しあるなり。死すもの貧乏とやらんと云ふ諺あり。早く死にたるものは所謂死人に口なしなれば其人の折角思ひ付きたることも、早く國民より忘れられ、老て死なず、何時までも生殘りて口を利く男が、何事も一人にて切り廻はしたるやうに思はるゝが常なり。翁は人惡き男ならねば自身の發明にあらぬものを自身の手柄のやうに風聽せざれども、昔を知らぬ若き人などは翁のみ合本法の發明者にして大藏省の役人たりし時、立會略則會社辨と云ふを作り、株式の事業を日本國民に敎へたる唯一の豪傑なりなどゝ妄信するもののなきに非るべければ左樣の次第に非ず、株式にて零細の金を集め事業を起すべしと云ふは其時代にても翁一人の發明に非ず。世間の識者の多く氣付きたる所にして、何れも株式を始めよ、株式を始めよと、株式事業の曉を鳴き連れたる鴉の群にて翁は唯其中の其聲殊にかしましき一疋の鴉に過ぎずと云ふことだけを記して、さる妄信家を驚かし置くものなり。さりながらたとひ合本法は翁の創見に非ずとするも、それにて翁の價値が低くなりたるには非ず。仔細は他人は多く株式を始めよと口にて述べたるのみなれども、翁に口舌の雄に非ず身を挺して實行の任に當り、自ら天下の小資本を集めて大事業を起さんとする陳勝、吳廣となりぬ。是れだけは何と云つても翁の獨

り其功に居るべき所なればなり。翁の述懐に依れば一旦幕臣となりたる身は官海に居るも面白からず、何とぞ他の方面にて國家に貢獻したきものなりとは翁の在官中常に其念頭に往來したる思想なりしと云へり。翁は愚痴を言はぬ樂天家と見へ、今日まで翁の世間に發表したる著述物などを見るに藩閥者流に對して別段苦情を言はざれども幕臣たりし經歷を以て維新以後の官海に居るは翁と雖も肩身の狹きを感ぜざるを得ざりしものならん。榎本梁川先生存生の時、我等は唯一回、先生を向島の邸に訪問したりしが其節先生の話に舊幕臣には實業家多しと云ふ一語ありしと記憶す。先生、久しく官海に浮沈し、藩閥政府にも大臣として列席、し圭角なく、議論なく、圓滑に世を渡りたる如くなれども、其胸中には天下を我物顏にする薩長氏の擧動を喜ばず、早く青雲の志を拋ち、竊に實業界に於て捲土重來せんことを豫期したりしものに非りし歟。然らば則ち其志亦悲むべし。さりながら是は我等の推測なり。梁川先生の眞意は何處に在りしや、故人、逝水の如し。今は何をか尋ねん。澁澤翁に至ては思ふに其實業界に投じたる理由の一はたしかに幕臣の名を帶ぶるものに取ては官界は久戀の地に非ずと思ひ切りたることに在るべし。官界は既に久戀の地に非ず。さりとて人民は卑屈賴むべからず。大きなる商賈と云へば政府の世話になり、其金を借り、其保護を受く。周の粟を食はずと覺悟したらば周の蕨も亦食ふべからず。官界を見限りながら役人の蔭に立ちて商賈を營むは不快の事なり。如何にして善かるべき。合本なるかな。合資なるかな。是れ以て貧弱なる人民の爲に虹氣を吐くに足れり。翁は此處にその立脚地を發見して例の關東男子の馬車馬氣質を出し、唯だ此一途に向て猛然として進まんとす。

(四)

小資本家の雄

三菱三國の創業の大王岩崎彌太郎、或時澁澤榮一と經濟を論じ、澁澤は合本論を唱へ、岩崎は之を非とし相執て下らず、大議論となりしと云ふことを往年何か

の雜誌か、新聞に讀みたるやうに記憶す。眞僞は知らざれども兩雄の實業界に於ける位置は應さに斯の如くなるべし。岩崎彌太郎を唯だ土佐藩と明治政府の蔭にて身上を作りたる好運兒なりとするは酷論なり。彌太郎は豪傑なり。其事業はやはり彌太郎の人格を基礎にして成上がりしものなり。さりながら彌太郎は何處までも自身の財產を自身にて大きくしたるものにて其王國に於ては專制君主なり。翁は之に反し、其志は天下の小資本家を株主とし、其株に依りて事業を爲さんとするに在り。翁の志は衆と與にするに在り、而して一家經營も亦其中に存す。彌太郎の志は先づ一家を經營するに在り。而して其天下の利を計るものも亦其中に在り。一の環を右より廻りても、左より廻りても結局一點に會するものなれども、其迹を見れば則ち大に同じからず。岩崎家は日本富豪の日の下開山となりて澁澤家は富の程度に於ては遙に下りて其下風を仰がざるべからざる小家數となれり。さりながら是は唯だ一身一家の富を比較したるのみなり。若し日本の小資本家に合資、合本の利益を敎へ、人と事業を共にする道德を敎へ、大資本家の壓制に抗し小資本家の立場を定め得たる功績を論ぜば彌太郎と雖も何ぞ榮一に如かん。

翁の關原懷古に曰ふ。

壽定將軍樹霸牙。　俄然西風亂如麻。
可憐石郎見機拙。　漫賭乾坤附大爺。

翁、請ふ左樣に石田を馬鹿にする勿れ。僅に二十萬石の大名にて西國諸大名を語らひ、狸爺の家康と對陣して善戰したる可憐の石郎は翁が小資本家の雄となり、合本、合資の主義に依りて日本國の產業界に大功を建てしに似たり。唯だ翁は割合に成功し、石田は失敗したるの差あるのみ。其小家數を以て大家に抗衡するものたるに至ては則ち同じ。ただ翁の合本法に執着したる初心は是に依りて商人も時勢相應の事業を營み得べきものたるを示し官途を我物顏に壟斷する薩長氏の傲慢に一矢相酬ひて以て官尊民卑の陋習を破り、二には文明國の商人に對して、日本にも是程の商才、商魂ありとの氣を吐く積りだけの事にて今日のやうに日

本にも、其富を以て大王國に比すべき『ミリオネア』を發生して翁などを眼下に看下し、此に小資本家と大資本家の戰を開き、翁は小資本家の旗頭となりて其惰氣に鞭ち、其怯心を叱るべき一種の熊谷次郎直實の位置に落つべしとは翁と雖も蓋しその豫期せざりし所なるべき歟。是れしかしながら翁が始めより合本法に執着したる結果にして、翁の大資本家たり得ざりし此時より定まりたる宿命なり。翁の一身一家より云へば其富の持高に於ては一個の俗町人に過ぎざる安田善次郎などの後塵を拜せざるを得ざるは氣の毒のやうにも思はるれども其代り天下に益を爲したること多きを思へば翁の內心には竊に自負することもあるべし。翁の今日まで手を出し、世話を燒きたる仕事は甚だ多し。曰く製紙業、曰く保險業、曰く鐵道業、曰く海運業、曰く紡績、曰く織物、曰く煉瓦、曰く瓦斯、曰く製糖。曰く何、曰く何、數へ來れば限なし。餘り仕事が多過ぎて中には長鞭、馬腹に及ばざる憾あるものあり。或は翁の俠氣を惡用して翁の名を筋の宜しからぬ會社の看板に用ひたる奴もあり。或は翁の部下にて翁の信任に背き大なる引負をし翁の名にて經營したる仕事に汚點を殘したるものもありとは聞きたれども概して言へば絕大なる翁の精力は能くその關係事業の全般に行渡り大抵は甘く行きたるが如し。是れ皆日本國民の翁に向て感謝すべき所なり。此點より言へば翁の功勳は一個の富家翁に過ぎざる安田輩が幾個の階子を掛けても及ばざる所なり。

（五）

一にも澁澤さん、二にも澁澤さん

明治維新より明治十年までは日本の經濟界は唯だ零細の資本のありしのみ。尤も舊幕時代の遺物たる金持の世家、三井、住友、鴻池など云ふものは其頃にても魏然として財界の雄たりしに相違なかりしかども此等は大抵維新の大暴風雨に辛ふじて難船を免れたるもののみにて未だ元氣を恢復せず、其外は翁の所謂卑屈なる町人のみなり。翁は此時代に於て合本論を唱へたり。さりながら此時代よりそろ／＼大富豪の生ずべき

下地の見へざりしに非ず。明治七年の臺灣征伐より明治十年の西南戰爭に至りて唯今の大富豪は大抵其家業の基礎を作りたり。岩崎、大倉孰れも此時に其覇業を開きたるものなり。此時に方りて銀行業に執着したる二人の豪傑あり。翁と安田是なり。しかも其行方は全く種類を殊にす。安田は唯だ金貸、兩替の本業を後生大事に守り、塵を積んで山と爲すの商人道を確守し、段段と一家を肥し、而も天性商才ありて時運に後れず。遂に日本大金持の幕の内に進み入り、其の富を以て三井、岩崎の壘を摩するに至れり。翁は之に反し、第一銀行に根城を構へながら獨り其業に專らならず、日本國の產業に就て色々の世話を燒き、日本國は之が爲に益を受けたること多かりしかど翁の一身は必ずしも富まず、富の道中双六に於ては翁は大に安田に後れたり。さりながら翁に依りて小資本家は善き案內者を得たり。翁に依りて日本の政治家は小資本家と聲息を通すべき好個の總代人を得たり。たとへば京釜鐵道は日露戰役に大功を爲したる鐵道にして日本が露西亞に勝ち得たるも此鐵道の蔭に依ること多し。さりながら之を建つるには第一先に立つものは勿論金なり。其頃にても唯今のやうに日本に大富豪が澤山ありたらば政府も彼等に相談すれば其位の金は直にも出來さうなる事ながら其頃にては日本は猶ほ小資本家の國なり。大金が入用ならば是非共彼等の財嚢を開かしめざるを得ず。さる場合に翁のやうなる世界の大勢を知り、公共心に富み、而も實業界の各方面に渡りて世話役、總代人たる位置にあるものが音頭を取りて金を集むるは最も好都合の事なり。小資本家に於ても翁の如き親切なる先達に導かれて商賣の山に登るは危險少し。翁は是に依て世間より重寶がられたり。井上馨は或時代には日本町人の總元締なりき。政府の大藏大臣、國債を募らんとする時、資本家の腹が分らず、財布の口の堅さや、弛さを測量するに苦み、或は少々の無理は資本家にも聞いて貰ひたしと思ふときは必ず井上大明神を拜み、其託宣を請ひ奉れば大抵の資本家は大明神の威に恐れて金の用も勤めたり。井上の政界の大隱居にして、

日本國の財政に大功罪ありしは實に此總元締たりし隱然の力に依れり。翁も亦此の點に於て井上に似たり。其殊なる所は井上の町人を押へ付けたるは一種の强持にて苟くも身を實業界に置く程のものが井上大明神の御機嫌に逆らひては恐ろしきこともありし故、大抵は其號令に從ひたるものなれども翁は何處までも親切の世話人にて畢竟賴母しづくにて資本家の間に奔走したるものなり。されば井上が日本町人の總取締たる威は夏日の畏るべきが如く、翁の日本町人に世話役たり、總代人たる恩は冬日の愛すべき如くなりしとも謂ふべき歟。翁の人望高くして長く實業界に感謝せらるゝこと誠に當然なり。さりながら斯樣に政府にも、金持仲間にも重寶がられ、一にも澁澤さん、二にも澁澤さん、三にも澁澤さんと賴まれては翁は勢、繁忙に苦しまざるを得ず。世間の人に重寶がらるゝは結構の事なれども是と同時に身を世間の事に役するに過ぎては自身の計は却て疎ならざるを得ず、翁は論語を好む。請ふ論語を以て譬へん。孔子の時代にも孔子が餘り他人の事に肝を煎り過ぎて安靜の生涯をなし得ざるを冷笑し、なぜそんなに急がしそうに騷いで歩くのだ。口巧者の人氣取りの樣な眞似はしないものぢやと云ひし人もあり。世間の濟度し難きを知りながら未練がましく世を棄て兼ぬるを嘲りしもあり。此段論語憲問の篇に記したる所にして仲尼が世の爲め人の爲に老の至るを知らずして苦勞したる其有樣を傍人より見れば人の爲になりながら自身の安靜を失ひしに相違なく心あるものより氣の毒にも思はれしなるべし。されば莊子の雜篇などにも孔子が身を他人の事に役し、一生苦勞して終りたるを嗜慾に身を役して、死にたる人に同じとて深く養生の本意に背きたるを笑ひし文章もあるなり。さりながら孔子自身より言へば濟世救人の親切心、自ら已む能はざるものありしならん。翁は天性律義の人にて贈答の書簡は何人より來りたるものにても大抵自身にて認め、訪問の客は已むを得ざることの外は之を延きて善く其說を聽き、且善く自ら語る。賴まれては他人の事も我關せず焉と突き放すこと能はず。斯樣の性分

の人が世間より澁澤さん澁澤さんと珍重せらるゝこと敢て怪むべきに非ず。翁が公生涯の爲めに私生涯を役し、安田、大倉たる能はずして小資本家の雄たるに止まりしものも亦已むを得ずと云ふべし。されど翁が斯樣に小資本家たるに止まりしが故に日本國の小資本家は翁に依りて善き代表者を得、善き案内者を得、善き先生を得たり。然らば則ち翁の大に富まざるだけ、それだけ日本國民は翁に感謝すべき理由あり。

（六）當代の二宮金次郎

世の諺に金持になるに三かくの法ありとか云へり。義理をかく、人情をかく、恥をかく。此三かくを敢てすることを忍ぶものに非れば金持になり難しとぞ。さりながら是は大きなる間違なり。金が無ければ義理も缺き、人情も缺き、恥をかくこと多し。金あれば富は身を潤し、併せて人を潤すべし。我等は金持なるが故に仁侠の人多きを知る。さりながら之と同時に金持なるが故に仁侠ならざる人も亦少からず。別して關東人には一種の男氣あり。頼まれては後に引かぬと云ふ侠氣ありてそれが金持として損にも、得にもなること多し。按ずるに翁の父澁澤仁山翁は世話好きなり。維新の時、德川民部卿の學資の乏しくなりかけし時、仁山翁は一時其資産を擧げて民部公子在歐中の費用を支へんと決心したることすらあり。其人非凡の侠氣あるに非んば何ぞ能く此に至らんや。是れ誠に純乎として純なる關東男兒と稱すべし。加之翁の母なる人も慈悲ありて施を好みたり。或時村の女子に病あるものあり。翁の母はそれを氣の毒に思ひ、數ば近村の湯治場に連れ行きて親切に介抱したり。人々驚きてその病人は世に忌まるゝ惡疾あるを貴女の平氣にて連れ歩きたまふこと餘りと云へば勿體なしと諫めしに、それにも頓着せず、愈々平氣にて親切を盡したりと云ふ。斯樣の父母の間に生まれたる翁が、世間より頼まれて後へ引くこと能はず、段々と深身（ふかみ）にはまり、實業家の先生、長者になりたる代りに金持番付に於ては幕の内たること能はざりしは餘儀なき運命なりと謂つべし。天保の昔、

相模國の土民二宮金次郎は天性貨殖の才あり。身を貧見に起して農業に精出し、後には相應の身代になりたれども、此人慈悲の心も亦强く、善く他人の世話をなし、貧村を立直すことなどには殊に巧者なりしかば時の賢諸侯たりし小田原侯に値遇し、老農より一轉して濟世の業に從事し報德講の祖となりたれども其代りに二宮一家の富はそれが爲に餘り增したりとも見へず、畢竟するに二宮は其俠骨の爲に世間に用ひられ、世間に用ひられたるが爲に富家翁になるべき性分ありながら富家翁にならず、一生他人の世話をして死にたるものなり。論語に仁者は富まず、富むものは仁ならずと云ひたるは則ち此所の事なり。米國の富豪グールドの死にし時、或人グールドを評して人間若し唯だ富と云ふことをのみ目的とし、それに向て心を集中せば凡庸の人物にても富人たること難からず、さればグールドは大金持なりとて唯だ其大金持たることに依りてさばかり其德を頌するには及ばぬことなりと云へり。人若し金持たることのみが目的として金持となりたるだけならば成程其通ならん。さりながら世に生まれたる甲斐に、世間の爲にもなり、人に賴まれたらば、相應の力も出し、公人として涯分を盡さんと思はゞ勢、獨り金に專らなること能はず。仁者の富まず、富者の仁ならざること自然の勢ひなり。我等は翁を當代の二宮翁なりと云ふものに非ず。そは翁は華族樣にして二宮は土百姓なり。翁は兎も角三百萬圓とか五百萬圓とか云ふ金持にして二宮はさる金持に非りしと思はるればなり。さりながら此節、三百萬や、五百萬の持高は日本國の富豪に比して必しも高持に非ず。第一何の事業を經營しても直ぐ資本金千萬圓と出掛ける今日に於ては三百萬や五百萬の身代にては大きなる仕事は獨立を以て經營し得べからず。然らば則ち其位の金持にては未だ必しも金持を以て誇るに足らず。往年王子製紙會社の出來し時なりしと覺ゆ。日本一の株式會社が出來たりとて評判したりしが、その資本金は驚くこと勿れ、僅に一百萬圓なり。(此事我等の暗記に出でたれば間違あるやも知らず)。其時分には十萬圓を持ちても金持顔をなし

得べかりしも、今日にては東京に於て一個の新聞社を創立するにも、それが基礎の定まるまでには五十萬や百萬はかゝる時節なり。かゝる場合に於ては三百萬や、五百萬の身代は未だ必しも富家翁とするに足らず。貧富は比較の感情なり。千圓持ちたるものより萬圓持ちたるものを見れば萬圓持ちたるものは金持に相違なけれども、十萬圓の身上より言へば萬圓の身上は貧乏人なり。日本國の富の進歩の激甚なるに較べて今の澁澤家は昔の澁澤家に比すれば段々迹じさりしたるものにて金持大名の武鑑よりすれば翁は氣の毒ながら小諸侯の列に落ちたりと謂はざるべからず。然らば則ち翁を以て當代の二宮氏なりとするも必しも大に倫を失したるものに非ず。兎角自身の事より世間の事が氣にかゝり、日本國に工科大學、農科大學ありて商科大學なきは商業の位置を卑く見たるやうなりとて商科大學設立の爲奔走し、日米關係の將來を心配し數々太平洋を横斷して兩國の交情を厚くせんと試み、養育院の常設委員長若くは院長となりて多年の間、忙しき身にも關はらず、其事に奔走し、歐米の慈善事業を視察すると云ふ人あれば身銭を切りて其人の手傳を爲し、工場法が出來ると云へばそれに就て政府に忠告するなど孔子の席暖かなるに暇あらざりしに似たる程、色々周旋盡力したる翁の生涯は是亦二宮式を變形にしたるものなりと言はざるを得ず。

(六)

論語は是れ翁の註脚

前文の次第に依り、少々無理ながら強て翁を以て二宮金次郎に配合し、翁は第十九世紀の下半期より第二十世紀に亙りたる新式の二宮なりとする時は其似たる點も亦少からず。殊に翁の論語を宗旨にして人生を論じ、孔子を説きて已まざるを見れば二宮の報徳宗を建てたる面目の眼前に彷彿たるを覺ゆ。翁は勿論學者に非ず。從て翁の論語に關する議論なども其道の書生より見れば至て粗末のものなり。翁は孔子の教旨を世に誤り傳へたるは宋朝の朱子なりなどゝ放言して朱子を叱りたれども、若し朱子を地下に起して解嘲させたら

ば朱子も默つて居るまじきなり。總じて翁の論語に關する議論は思想家としては何等の價値あるものに非ず。三島中洲先生は翁の議論に同感し論語十露盤論と、云ふものを作りて翁に與へたる由なれども、漢學の權威中洲先生の允可ありと雖も、我等は猶ほ正直に語るべし。翁の論語に關する說は學問としては取るに足らぬものなり。それを感心するものは蓼喰ふ蟲も好きなれば評論の限に非ず。下手の淨瑠璃にても親類なれば致し方なく、誠に御上手なりと云ひて聽聞することもあるべし。長屋住みの悲しさに大屋樣の鹽から聲をも善い御聲やと賞賛してその都々逸を喝采せざるを得ざる場合もあるべし。翁は兎も角も金持なり。天下の大老なり。左樣の人物の御說なれば成程御尤なり、御卓見なりなどゝ心にもなき愛嬌を云ふもあるべし。或は所謂讀まぬ同志、書かぬ同志の悲しさに實際翁の論に感服して孔子の眞髓を得たりなどゝ難有がる人もあるべし。世間の輿論は恐らくは翁の論語の說に賛成せん。何となれば輿論は大抵愚論なるが故なり。さりながら我等は如何にしても翁の論語の無價値なることを主張せざるを得ず。仔細は論語は孔子の言行錄なり。論語を研究すると云へば孔子を研究することなり。孔子を研究すると云へば先づ其時代を研究せざるべからず。其の上に論語の何時、如何にして、如何なる目的にて書かれたりやと云ふことをも穿鑿せざるを得ず。斯樣の穿鑿をなさんとならば一生を犧牲にしてそれに打込む程の覺悟なくては出來るものに非ず。出來た所が孔子の眞面目に達し得べからず。然るに斯樣の研究に身を委ぬる上は翁よりも十倍も廿倍も貧乏となり、或は一生貧生を以て終るの覺悟なきを得ず。孔子の研究に一生を費し、妻子を溫飽ならしむる能はず、甚しきは始終無妻にて暮らし、その死するに及び、一二の親友に其棺を送らるゝのみにて空しく草莽と共に朽つるは羨ましからぬ生涯のやうなれども左樣の研究をする當人に取ては樂も亦其中に在り。井を掘る三尺なれば濁水を得べし、更に三尺ならばやゝ清みたる水を得べし。精苦巳まず、熱心加はり、掘りて十丈、二十丈

の地下に達すれば眞に玲瓏珠の如き水を得ん。古人を研究して誤傳、謬傳、迷信、妄信の地層を突破し、雲霧を排て青天を見る如く、眞に其眞面目を知るを得ば是れ黄金の鑛脈に達したるものなり。其快言ふべからず。學者の興味、實に此に在り。さりながら斯樣の興味を得んとせば貧乏暮しは覺悟の前ならざるを得ず。翁のやうに飯を喫ふ暇さへ惜しと云ふ繁忙の身にて其事の成り難きは勿論なり。翁若しそれが成ると云へば我等は翁の獨天狗を冷笑せざるを得ず。是故に我等は翁の論語に關する評論を以て一顧の價値なしと斷ずるものなり。人才は區にして別なり。論語を說き、孔子を研究するは一個の町人澁澤の辨じ得べき事業に非ず。斯く言へば翁の論語論は三文錢にも當らぬやうなれども決して然らず。それを論語の研究として正面より承れば三文の價値は愚かのこと全く一文の價値もなきに相違なしと雖も翁自身の長き經驗より得來りたる一種の安心立命を論語の文句を假りて說明したるものとして見る時は是れ實に我輩後生に取りて得易からざる教典なり。昔し信玄、孫子の文を其の旗に書きたり。賴山陽、此事を評して曰ふ。信玄と甲斐の老將馬場美濃守の問答を甲陽軍鑑に記したるを見れば信玄も馬場も孫子の文意を解し得たるものに非ず。二氏の學問は粗末にして孫子を解し得ざりしものなりしかども、其實戰の結果より得たる自得の兵法に至ては胸中眞に一個の孫子ありと謂はざるを得ずと云へり。翁の論語論亦之に似たり。翁は論語と云へる書物の位置を眞實に批判し得たりや否や、抑も亦翁は歷史上の孔子に達し得たりや否や。左樣の事は暫らく翁の爲に之を問ふこと勿れ。單に翁の長き生涯に於て自得したる安心立命の說法なり、則ち孔子の論語に非ずして翁の論語なりと見る時は翁の論語論は其眞價値を發輝す。曹孟德武人を以て孫子を注す。孫子の意を得たるや否は別問題なれども孟曹德自身の兵學は則ち此に在り。翁を以て論語を說くも之に似たり。我等は是に於て註脚の意味の顚倒したるを知る。則ち翁は自身の經驗を以て論語の註脚としたるものに非ず。論語を以て自身の

經驗の註脚としたるものなり。此段二宮金次郎も全く同樣なり。二宮は翁の如く論語に偏執せず。神道も、儒學も、俳句も、川柳も、軍記も、巷談も悉く自身の智嚢に收めたれども、それが二宮の說となりて現はるる時は全然二宮流に化せざることなし。則ち二宮は聖經、賢傳、小說、童謠までも、二宮宗の註脚となして憚る所なきものにて、其趣は翁が論語を以てその自得したる安心立命の註脚たらしめしに同じ。かく翁と二宮の相似たること多きを思へば翁は當代の二宮金次郎なりと云ふも必しも其謂れなきに非る歟。

(八)

財界第二の維新來る

我等は翁を論じて其論語宗にまで及べり。下手の長談義は讀者も迷惑を感ずべければ此所等で切り上げんと思へども翁の天下國家に功勞あることは甚だ多し。何分割愛するに忍びず。殊に銀行家として實業界に對したる翁の心掛の如何にも親切にて、銀行家と企業家の職分の差異を解し、一方には企業者の仲間に入りながら他方には其誘惑に克ち善く銀行家たるの立場を守り、第一銀行頭取として始終したること。朝鮮に第一銀行支店を作り、其事業を韓國銀行に引繼ぎ、第一銀行の利益をも失はず、同時に大日本帝國の亞細亞大陸に發展すべき大計畫に手傳ひたることなどは是非共特筆大書して、此雜誌の讀者と共に我等も亦翁に感謝する一人なることを說かざれば些か氣の濟まぬ心地すれども、さることは總て此には省き、唯だ一事猶ほ翁の爲に言はずして已む能はざるものあり。他なし日本國の財界、既に第二の維新に達して翁も亦漸く過去の人とならんとすること則ち是なり。こは翁老ひたりと云ふに非ず。翁たとひ百歲の頽齡なりとも時世が翁を要求する間は翁は猶ほ若し。さりながら時世若し翁を要せざれば金屋に阿嬌を貯へ、待合に花合戰をなしたる壯年時代の翁と雖も猶ほ時世の圈外に取り殘されたる老人なりとせざるを得ず。悲い哉。翁も此意味に於て遂に過去の人とならんとす。聰明なること翁の如くにして時勢を解せざる筈はなし。翁も恐らくは此點に氣付

きたらん。是れ他なし。日本國に於ても小資本家の時代は既に一轉じて大資本家の時代に入りたること則ち是なり。先日時事新報の發表したる五十萬圓以上の資産家表は正に此事實を語るものにして今までは亞米利加の噂なりと思ひし大富豪全盛の時代も遂に日本に襲來したものなり。まして今度の歐洲戰爭は所謂船成金を初め色々の成金を生みたると共に今迄の金力集中作用を更に活潑にし、金持の富を加へたること眞に驚心駭魄に堪へたり。斯様に天下の富が小數の人の懐中に集まりたる大富豪の時代になりては、大仕掛の生産業家は小仕掛の生産業を壓倒し、小資本家は今までの氣樂なる位置を失ふべし。第一、大富豪の世となれば政府も金の相談に翁の様なる總代人を頼まず、直ちに小數の富豪と密室に會合するのみにて金談の埒を明くべし。日本の金が小資本家に散り居りたるときこの翁の合本論も調法がられ、翁の周旋も必要あり、翁の説法も感謝して聽聞すべき價値ありしなれ。天下の富、既に小數の富豪に集り、小資本家の半分以上は此富豪に雌伏し、系統も立ち、勢力範圍も定まらんとする現代に於ては政府は復た翁の如き世話役を要せず、小資本家も亦翁の説法に耳を傾くる必要なきに至らん。形勢既に此に至る。財界の漸く翁を要せざるに至らんこと已むを得ざる數に非ずや。我等が翁の時代將に去らんとすと云ふは是が爲なり。尤も翁の年、猶ほ若ければ翁に取ては誂向きと云ふ今後の仕事もなきに非ず。則ち小資本家を代表して大資本家と抗戰すること是なり。抗戰と云へば不穩に聞ゆれど詰りは大資本家と小資本家の折合を付て餘り喧嘩をせず對等に利益を分つやうに骨折ることを云ふ。翁は數ば米國に遊べり。我等は翁を米國通なるべしと信ず。その米國は大資本家と小資本家と抗戰しつゝある國なり。此事情は翁の呑込み居る所ならん。翁、或時我輩位の身上は金持と云ふべからず、眞の大金持と云ふはもつと大そうなるものなり、左様の大金持は時としては國家の利益にならぬものなりと云ひたりと云ふ。之に依れば翁も亦多少は大金持と抗戰する場合あるべしと豫期するものに似た

り。翁若し攘夷論者時代の元氣を出し小資本家（我等は翁なども小資本家の部分に入るべきものと思ふ。尤も日本に於ては極上等の小資本家たるべきは勿論なり）の旗頭となり、大資本家に對して商戰を開きたらば傍觀者たる我等に取りては白髮を黑く染めたる齋藤實盛を見るやうにて面白き芝居になるべしと雖も、翁何ほど壯健にても、年が年なり。左樣のことは今はた翁に望むべからず。然からば則ち翁の爲すべきことは何處に在りや。やがて死ぬものとは見へず蟬の聲。草は終に秋に逢はざるべからず。世には藩閥打破を口にしながら老て死なず、その藩閥に愚弄せられ政界に浮沈しても臭い物、身知らずとやらん、其の舌猶ほ存し、相變らず、へらず口を利き大言壯語以て快とする老人なきに非ず。是豈翁の如き關東男兒の拙ゆる所ならんや。四時の序、功を成すものは去る。翁の今後に爲すべき所は商界の老雄として其商戰の經歷を語り、翁一流の論語宗を廣めて實業家の空氣を淸淨にし、時としては老人甲斐に他人の世話をなし、靜かに餘生を終るべきのみ。さりながら今より後大資本家、小資本家の爭鬪甚しくして日本國の爲にならぬこともあらば翁を勞して調停を試みねばならぬ場合もあるべき歟。さる場合にもならば我等は信ず。翁は必ず出陣を辭するものに非るべし。（完）

來るべき政戰に對する憲政・政友兩黨の態度

法學博士　超政爭樓主人

寺內內閣成立後、之が立憲的だとか、非立憲的だとかの論が起つて、一時色めき立つた政界は、今や政治

期節となつて政戰の機いよ〳〵迫り、憲政・政友の二大黨亦各々陣容を新たにし、現に加藤・原の二首領自ら馬を陣頭に進めて三軍を指揮して居る。たゞ兩者の接戰今のところ尙細目末葉に拘はつて、小ぜり合ひを繰り返すに止まつて居るけれども、遠からず根本の問題について大決戰の行はるべきは、之を期待して過ちがなからう。而して此決戰の一つの目標は、無論寺內內閣に對する態度如何の問題にあらねばならぬ。

政友會も憲政會も、昨今各地方で何々大會とか何々支部の發會式とかを擧行して、加藤・原の兩總裁各々陣頭に馬首を整へて大演說を試みて居る。然しながら彼等の言ふところを細かく調べて見ると、我々は何時もながら其內容の貧弱なるに呆れざるを得ない。双方共互に敵黨の批難攻擊、而かも我々の公平なる第三者の見地から觀れば、餘り肯綮に當つて居ないやうな批難攻擊が、演說の半ば以上を占め、積極的に國家の爲めに如何なる經綸を提げて起たんとするやの點は、極めて粗略に取扱はれて居る。大隈內閣に失政が多かつたとか、加藤外相の對支外交が失敗であつたとか、又は政友會が從來常に官僚と結托して其走狗たるに甘んじて居つたとかいふやうな類は、我々の必ずしも政黨首領の口より聞かんと欲するところではない。苟くも彼等が起つて國民の前に堂々と其政見を發表するといふ以上、吾人の聞かんと欲する所は彼等が何を以て國家に奉公せんとするか、如何なる政策を以て民生の幸福に貢獻せんとするかの大經綸大政策である、この大經綸大政策を與り聞いた上でなければ、我々にはどうしても是非彼等に政權を託さねばならぬといふ見極めがつかない。前內閣の失敗位の事なら、毎日の新聞の記事で澤山だ。此點については加藤氏の演說にも原氏の演說にも、吾人は殆んど感服することが出來ない。原氏の演說は殆んど大隈內閣や加藤總理やの攻擊を以て終始して居り、如何にも氏の政治的理想の頗る低級なるを想はしむるもので、氏の爲めに甚だ之を遺憾とするのであるが、加藤氏の演說とて、或は原氏を攻擊したり、或は不當に大隈內閣の成功を强辯したりする

などは、又吾人をして嘔吐を催さしむるものである。吾人は此際肝心の寺内内閣より國民に對する政策經綸の宣言を聞かざるを遺憾とし、又不言實行などゝ唱へて故らに宣明を避くるの態度を陋とするものであるけれども、適ま〱宣言を試みても加藤氏や原氏のやうなことを言ふものでなるならば、寧ろ默つて居る方が利口だとも言へる。少くとも、原・加藤の二氏があんな下らない事を繰り返すやうでは、世人は所謂立憲の常道に反する寺内内閣の沈默主義の方に同情を寄するに至るだらう。否、同情を寄せるのではないが、下らないことを言つて惡感情を挑發しない丈け、寺内内閣の方が得する譯けになるのである。物言うて脣寒しとは、下司の社會の戒めである。堂々たる政治家の社會に於ては、多言益〻以て其光彩を發揮するやうにあらねばならぬ。

兩黨首の演説中、多少でも政界の大局に關係ある部分ありとすれば、そは寺内内閣に對する態度如何の點である。寺内内閣は明白に政黨政治主義に反對して起つた所謂純粹なる超然内閣であるけれども、之に對する態度は兩黨の間に全然相反して居るのは、甚だ奇と言ふべきである。政友會の方では、説明の言葉はいろいろ婉曲にあらはされて居るけれども、實際のところ寺内内閣に贊成して居るやうである。少くとも反對ではないと認めねばならぬ。十一月十九日大津市に於て開かれたる近畿大會の宣言は、盛んに大隈内閣を攻擊して居るけれども、現内閣に對しては一言も觸れて居ない。のみならず、所謂決議案の第一項には、『現政府の施設を監視云々』とあるからして、其存立を必ずしも否認するものでない事は明かである。更に原總裁の演説を觀るに、『主義に於て寺内内閣を認め難し』と言ひながら、『誠心國家の爲めに盡すところあらば、其政策に贊成するを躊躇せざるものなり。』と言ふて居る。一體主義に於て其存立を認め難き寺内内閣を、其政策次第では必ずしも反對しないなどゝ言つて、暗に包括的の同情を之に向けるといふことは、甚だ謂はれなきことである。尤も予輩は主義に於て認め難き超然内閣

に對して、何時でも無條件に反對すべきものと云ふのではない。主義に於て反對するものは、無論無條件に之を助くべからざるは論なきも、若し其内閣が豫め具體的の政策を公表し、其政策が偶々我黨の政策と同一であるといふ場合ならば、無理に之に反對するを得策としないといふ事情もあらうと思ふ。故に寺内内閣が若し内閣組織の當初、明白に自家の經綸を天下に公表して居るものであつたならば、其經綸が政友會の從來の政策――と云ふものも有るやら無いやら解らないが――と一致するといふ條件の許に、暫らく寺内内閣に極端に反對しないといふ態度を取るも亦已むを得ない。然しながら寺内内閣は、老獪にも、他日の言質を取られんことを怖れてにや、何等具體的の政策を發表して居ない。已に主義に於て認め難き超然内閣である。而かも何等の政策を發表して居ない。然らば政黨として、何を以て之に同情すべき根據があるか。一々其具體的の政策を觀てから贊否を決するといふ言分夫れ自身は、間違でないか知れぬが、其言分に托して政策も經綸も豫め發表しない超然内閣を、初めから包括的に同情せんとするが如き政友會の態度は、甚だ奇怪至極と言はねばならぬ。要するに政友會の寺内内閣に對する態度は、其宣言の言ひ分丈けでは全然理窟が通らない。そこで世間は之に對して、何等か他の内部の事情があらうなど〻、兎角暇に任せていろ〳〵揣摩臆測を逞うするものがある。

或人は言ふ。是れ政友會が現内閣に好意を賣り、他日總選擧でも行はれる時、其直接間接の保護を得る準備とするものなりと。又或人は云ふ。他日現政府が行詰つて辭職する時、後繼内閣の組織を自分達の方に振り向けて貰ひたいといふ魂膽に出づるのであると。果して然るや否やを知らずと雖も、若し政友會がそんな積りで居るなら、是れ實に公器を弄ぶものにして、政界の風氣を害するの罪決して輕くない。又或人は言ふ。政友會は現内閣の代表する官僚派と已に默契する所ありと。若し果して默契あるならば、我々は彼等に向つて、もつと男らしく堂々と遣ることを希望したい。政

黨政治家が平素國民の前に大言壯語しながら、密かに欺を非政黨主義者に通ずるのは、決して男らしい態度ではない。況んや政黨主義者が自ら節を屈して、官僚の走狗たらんと欲するに於てをや。吾人は我國今日狀況のに於て、必ずしも官僚と政黨との結托を絶對に否認するものではない。官僚も一個の牢固なる勢力たる以上、之を政黨の中に引つ込むのは、我國政治界の分野を簡單明瞭ならしむる所以であつて、其遣り方にさへ注意すれば、之れ亦政界の一進歩たるを失はないと考へて居る。故に官僚系が若し到底政黨を無視しては遣り切れないといふ考から、助力を我に求めて來るならば、政黨は須らく官僚系の勢力を取つて、以て我黨の勢力に加ふる所あらしむべきである。此意味に於て予は、若し政友會と現内閣との間に果して既に何等かの默契あり、若くば默契あらんとして居るならば、男らしく其計畫を進めんことを希望して熄まない。兩方で見ず識らずの人のやうな顏をして、陰でコッソリ手を握る密通的關係を結ぶやうでは、恐らく國民が承知しないだらう。何れにしても政友會の現内閣に對する對度は、今日の儘では、我々は全然之を承認することは出來ない。

此點に關する憲政會の態度は、昨今甚だ明瞭となつた。寺内内閣成立當時は、世上此點について多少疑ひを存する者もあつたが、近頃は幹部の意見も一致したものと見えて、最近各地に於ける加藤總理の演説に觀ても、元老官僚に對する憲政會の戰意は、極めて明白になつた。大隈内閣を賞めたり、前内閣の日支交渉の味噌を上げたりする點に於ては、甚だ感服しないけれども、寺内内閣の非立憲を論ずる點については、加藤總理の言分は確かに理論が徹底して居る。憲政會が果して此意見に一致したものであるならば、吾人は彼等に向つて又大いにやれ〳〵と嗾しかけたくなる。

加藤總理があれ丈けの宣言をし、憲政會があれ丈けの强硬なる態度を取る以上、議會開會の劈頭彼等は早速内閣不信任案や彈劾上奏案でも提出して、現内閣に喰つてかゝるべきものであるといふ說もあるが、之に

は予は其儘に贊成することは出來ない。現内閣が已に主義に於て認め難き超然内閣である以上、初めより包括的に之に反對するのは、必ずしも不當とは言へないが、斯くては軍國多事の際徒らに事端を醸すの譏を免れないだらう。何か重大の具體的問題があつて、之で爭ふのならば、戰時と雖も多少の意味はある。漠然と不信任とか彈劾とかいふ問題で、抽象的の反對を固執するのは、時機でもないが又賢明なる策でもないと思ふ。何んとなれば、國民は之を以て國家多事の際徒らに紛擾を好むものと觀るかも知れないからである。尤も不信任案や彈劾上奏案は、政府に與ふるに議會解散の機會を與ふるものである。議會に於ける多數黨を以てして、而かも政府の要路に立てないといふやうな變則の狀態は、議員の改選によつて初めて安定に歸すべきものであるから、解散は即ち速に此安定の機運を齎らすものとして、之を歡迎すべき理由がある。然しながら如何なる事情の下に議會が解散せられたかは、解散後に於ける選擧の運動に重大の關係があるから、解散の原因を作るものは餘程愼重の態度を取つて、國民の疑惑を招かぬやうに勉めなければならない。此點から觀ても、彈劾とか不信任案とかいふ抽象的議論で、政府をして巧に解散の機會を捉へしむるのは政黨の爲に計つて決して得策ではない。斯く考へれば、憲政會は加藤總理の演説で明白に戰意を宣言して居るけれども、恐らく議會開會早々、不信任案とか彈劾上奏案とかを提出することはあるまいと考へらるゝ。之を提出するは、得策でもないし、又之を提出しないからと言ふて、憲政會に其言説の不徹底を責めらるゝ理由もない。

然し不信任案や彈劾上奏案で政府と爭ふことを避くべしと言ふたからとて、一々政府の爲す所に盲從するのも、亦憲政會の爲めに取らざるところである。一々の政策について何も反對すべき問題がないなどゝ言ふならば、之は政友會の態度と何等選ぶところがない。斯ういへば如何にも憲政會に向つて、何か爭ふべき問題を强ひて求めて故らに政府と衝突せよと言ふやうに聞へるが、必ずしもさういふ意味ではない。

問題がなくして强いて爭へと言ふのでなくして、重大なる問題にして眞に政府と爭ふべきものを提げて、之によつて大いに爭へと言ふのである。然らば斯くの如き重大なる問題は容易に求めらるゝかといふに、予輩の考ではそれは幾らでもあると思ふ。只此點について甚だ遺憾であるのは、政府も憲政會も共に、今日まで未だ十分詳細なる積極的の政策を宣明して居ないことである。政府に此種の宣明があつたならば、憲政會は直ちに之に對して、贊否の態度を明かにすることが出來るのであるが、政府は何も宣言して居ないから、之は致方がないとして、若し憲政會の方が之等の宣言を十分になして居つたならば、政府の之を容認するや否やの點に就て、十分に政見を鬪はすことが出來る筈であつた。而して此種の重要問題は幾らもある。差當り選擧法の改正問題があるではないか。現政府が民權思想の發達を怖れて、選擧權の擴張を欲せず、又政黨の發達を妨げ得るといふ點から、小選擧區制に極力反對して居ることは、極めて明白であるが、此等の點は全然政黨主義と相戻る所のものであつて、憲政會が此點に關して、『選擧權の適當なる擴張をなす』などゝ言ふに止らず、更に一歩を進めて細目の案を提唱したならば、必ずや玆に國家民生の利害休戚にかゝる重大問題、而かも之の勝敗が內閣其物の死活に關するが如き重大なる問題について、堂々と政府と爭ふことが出來るのである。斯ういふ種類の問題で爭ふこそ、初めて彼等の現政府に對する反抗は、國民の眼の前に極めて意義あるものとなる。斯ういふ問題について、堂々雌雄を決するといふことになれば、國民も亦從つて大いに啓發せられ、我國一般の政治思想も亦大いに進步發達を促さるゝに至るのである。憲政會は果して此等の點について、如何なる考を有つて居るであらうか。議場に於て各派の陣笠が揚足をとるやうな態度で、政府と小さい低い喧嘩をやるのみでは、折角の加藤總理の演說に望みをかけた我等も、再び深き失望の淵に沈まざるを得ないだらう。

加藤・原二氏の演說は、前にも述べた通り、積極的

の政策については餘り多くを述べて居ない。けれども最近此兩黨は、他の機會に於て各々數ヶ條の政策案を發表して居る。然しながら、之とても極めて抽象的なものであつて、彼等が之れ丈けの政綱を提げて朝に立てば、果してどれ丈け現狀を改善するだらうかの見極めが付かない程のものである。或は時局に應ずる國策を建てるとか、日英同盟、日佛・日露協約の精神を尊重し、日支親善の誼を進めて東洋の平和を確保するとか、經濟財政の適當なる調節を講じて戰後の經營を計るとか云つたやうなこと丈けでは、朝に立つて現狀のま丶投げて居つても一通りの責任は濟むだらう。其外細かい點にいろ〳〵言及して居る所があるけれども、然し國家の大局からは何れになつてもい丶やうな小問題で、眞に國家百年の大計に關するものとしては、恐らく教育制度と選擧權擴張に關する二點位のものであらう、教育の點については、憲政會は專ら高等教育機關の增設を掲げ、政友會は國民教育費の國庫支辨を說いて居る。兩方共重大な問題であるが、殊に國家百年の大計より云へば、政友會の掲ぐる所のものを重しとすべきである。今日教育上最も憂ふべきは、教育者の地位を市町村に從屬せしめ、各市町村の精神的嚮導者たるべき教師をして、所謂地方有志家なるもの丶鼻息を窺はねばならぬ地位に置いて居る事である。之れ教育上最も憂ふべき事にして、風教の揚らざる一に玆に原因する。少くとも今後教育の効果をして十分に揚らしむるには、國民教育者の生活を保障し、彼等をして直に子弟の教育者たらしむるのみならず、又鄕黨全體の指導者たるの獨立の地位を得しめなければならない。身、精神的の事業に當り、而かも總ての國民が一度は必ず其薰陶を受くるものといへば、國民教育者の外にはない。教育事業を効果あらしめんとせば、先づ是非とも此點に着眼しなければならぬ。此點に於て政友會の案は誠に重大な問題であると言はねばならぬが、政友會は果して他日朝に立つた時、之を斷行するの用意ありや否や。否、朝に立つを俟たず、速かに此意味の提案を以て議會に叫び、更に現政府に之が實行を

迫るの決心ありや否や。是れ余の刮目して觀んと欲する所である。

教育の問題と共に兩黨の共に觸れて居る重大な問題は選擧擴張である。之については、政友會は『立憲の本義に遵由し選擧權の適當なる擴張をなす事』といひ、憲政會は『立憲政治の本義に顧み選擧法を改正し、選擧權の適當なる擴張をなすべし』と言ふて居る。憲政會の新政策の説明として、諸新聞記載する所の濱口總務の談話なるものに據れば『選擧權の擴張については、納税資格の低下と、智識階級の加入との二方法を意味するものなるも、實際の問題としては、二者孰れか其一つを選むものにして、前者にあつては納税額の程度、後者にあつては選擧資格を中等學校卒業以上とするか、又高等學校卒業程度とするかの如きは、未だ具體的に決定し居らざるも、若し夫れ現内閣にして將來選擧權擴張を含蓄せざる選擧法改正案を提出するが如き場合には、我黨は進んで此政策の遂行に資すべき修正案を提出すべし』(十二月十六日「時事新報」所載)とある。之に由つて觀れば憲政會の選擧權擴張に關する具體的の考は、殆んど未定であり、唯漠然擴張が必要だといふに過ぎない。何となく最小限度の擴張に止めたいといふ希望のやうに見える。時勢の要求として擴張の止むべからざるを認めつゝ、餘り擴張すれば弊害があるといふ固陋の謬見に囚へられて居る點がありありと見える。現に大隈内閣も一時相當の選擧權擴張をなさんとしたのであるが、實際の提案は彼等の在野當時の威勢好き宣言に似もやらず、極めて煑え切らざるものであつた。それすら貴族院を憚かつたり、樞密院を懸念したりして後には、全然擴張を思ひ切るやうな態度に出でた。我々は其腑甲斐なさに呆れ果てたのであつたが、今度は態度を改めて、現内閣にして將來選擧權擴張を含蓄せざる選擧法改正案を提出するが如き場合には、斷然反對すると意氣込んで居るけれども、反對した所が碌な擴張は出來ないやうに思ふ。此點は政友會とても同樣である。政友會も適當の擴張はすると言つても、何を以て適當の擴張とするかは眉に唾して見るべ

き點である。現に十月央ばの政務調査會の決議案なるものに據ると、直接國稅十圓を五圓に低下すべしとの說は、我國現時の民情に照し適當にあらずとて削除するに決し、專門學校及び高等學校若くは之と同等以上の程度の卒業者に選擧權を與ふるの項だけを採用するといふのだから、是れ亦最小限度の擴張と言はなければならない。政友會も亦憲政會と同じく、此點については極度に出し惜みをするものと言はなければならない。現內閣が選擧權擴張の絕對的反對論者なることは言ふを俟たないが、之に對して政友會や憲政會が是非選擧權の擴張をせよと言ふたところで、國民の之によつて受くるところの恩惠は極めて微々たるものであらう。只若し政友會の政務調査會の決議にある如く、現行の大選擧區を小選擧區に改むるといふことになるならば、之は確かに一つの大いなる進步である。憲政會は此點について何等言及して居ないが、此點は兩黨共に大いに主張すべき點でなければならぬ。なぜなれば、大選擧區にして而かも單記といふ天下に一あつて二なき我國獨特の奇制度は、政黨以外の候補者に當選の機會を著るしく與ふるものであつて、從つて政黨の發達を阻害する事最も甚しきものである。我國の制度の如何に不都合なものであるかは、世界中斯の如き制の何處にも行はれてゐない事と、世界の學者中何人も斯の如き制度を主張したものがない事によつても明かであらう。我國の制度は、實は官僚の跋扈、政黨の抑壓に最も都合のよい制度である。此制度は何を差措ても改めねばならぬのに、之によつて最も大いなる不利益を得る政黨が、多く之を主張せざるは甚だ不思議といはなければならない。

要するに選擧法の問題などは、超然內閣主義と政黨政治主義との最も明白に意見を異にすべき問題であるから、此點について大いなる論戰の起る事は、我等の最も希望する所である。けれども、現在の政府政黨は、果してかゝる國家的大問題について堂々の論陣を張るだらうかは甚だ覺束ない。(十一月廿日)

太平洋及び東亞大陸にも膨脹の翼を張りつゝある 米國の研究

▽米國海軍の將來

海軍大學校長 海軍少將 佐藤鐵太郎

米國海軍の擴張といふことをお話する前に、先づ米國と我日本との關係を述べる必要がある。米國は其國民が常に唱ふるが如く、又有識者の指導しつゝあるが如く、平和と始終すべき國民であつて、我日本國も世界の諸方面で、好戰國として誤解して居るものもあるが、實際日本人位平和を望む國民は少いと思ふ。殊に此平和を望むといふことの證據としては、日本人は慘酷なことを非常に嫌ふ國民である。敵を愛し敵を敬する國民である。肚の裏に暖き血の流れて居る國民である。自己の名譽を毀損せらるゝ時はいざ知らず、利害問題の爲めのみに戈を執ることを絕對に嫌ふ國民である。日本が若し外國に對し劍を取つて立つ時は、何うしても面目上默止することの出來ない時で、すべて武士道の見地から出るのである。それまでは出來る丈け戰を避ける國民である。故に此二つの國民の間に戰爭を惹むるのは杞憂の甚きものと思はなければならぬ。外人の誤解はいざ知らず我々日本人が米國と戰ふべしといふ意見の人は一人もない。萬々止む事を得ずんばお相手をしようといふのが、總ての人の考である。實は日本も已に止む事を得ぬ爲めに此卅年間に三回の戰爭に從事して居る。此點は彼の皮相の觀察者に好戰國と誤解せらるゝ所であらう。然し三回共皆悉く自己の面目の爲めと友邦に對する友誼を重んずる爲めに止むを得ずして立つたのである。此僅かの間に三回干戈を交へたのであるから第四回の戰爭を見るは、餘程の事でなければならない。之は云ふ迄もない事である。況んや日米兩國は太平洋の平和の保護者を以て任ずべき國で、太平洋の平和は是非共全力を盡し相提携して守らなければならんので、其保護者としては、西にあつては日本、東にあつては米國の外にはない。此點から見て、商賣上の利害の衝突があつても其他の事では衝突があり得ないと吾輩は思ふ。又決してあつてはならんのである。然し如何に相提携すべき義務あり意志ある國民の間でも、兩方の間に實力の懸隔が甚だしく、相敬し相重んずるの精神が成立ち得ない程の關係であつたならば、今日の文化の程度では、戰爭絕無といふことは言へない。米國の今度の海軍擴張の如き、我に於ては風馬牛であるけれども、然し米國が餘り强くなり、日本が餘り弱くなつては、兩國の永遠の平和に果して得られるであらうか。

人によつては歐洲諸國は戰亂に疲れ眞率に戰を倶るゝやうになり、夫れと同時に平和を望む心が心底から起つて、軍備を論ずるものを見ること、殆んど蛇蝎の如くなるべしといふ平和論者もある。之は世の中は歐洲のみならば或は此通りになるかも知れぬが、幸か不幸か此戰爭に發醒せられたる米國は、陸海軍の大擴張をやり出した。海軍の如きも從來と其方針を異にし、世界第一の英國のそれを摩せんとして居る。即ち世界の他の一方では軍備を最少限に減ぜんといふことはあつても、吾等は此際の米國の計畫が或は歐洲の軍備熱を高むる憂なきかを怖れるのである。願くは斯ういふ事のないやうにしたいが、此希望が實際に行はるゝかは疑問である。米國が何ういふ意味で軍備を擴張するかはハツキリ言ふ事が出來ぬが、其議會に於ける少數者の意見として傳へらるゝ處によれば、(但し之は少數者の意見ではあるが從來の意見なるが故に、多數者は反對だといふのではない)。米西戰爭後合衆國は如何なる大陸軍國よりも優勢なる海軍を打立てゝ之を維持するといふ方針を取る事にしたのである。換言すれば英國のみに第二位に立つといふ方針をとるといふ事になつた。其意味はつまりこうである。如何なる大陸軍國でも自分よりも強い海軍を持つては其國から侵害せられる惧があるので、強い國の侵略を免るゝには是非とも其國よりも強大なる海軍を要するといふ意味で一九〇三年より實際の施設にかゝり、一九〇七年に實際實行の結果が現はれ、一九一一年まで此方針を繼續して居つたのであるが、其後獨逸が急激の擴張を遣つた爲めに其計畫に狂ひを來したのであつたが、今度の擴張の目的

は、此豫定の方針を實行するにあるのである。それからまた、合衆國の國防は地理上の關係から第一に効率ある方法として海軍を認めて居るのである。其理由は海岸線の長き事、海岸に近き都市の多い事、それから隔絶せる領土がある事、海上貿易に對する自國の經濟上の利害、パナマ地峽開通の結果、それからまた大體上自國の世界的位置を維持せんが爲めの目的の爲めに、一九〇三年の海軍計畫を復活せねばならぬといふ事で此點は誰しも米人の同意する處であるが議會に於ける委員會の結果としては少數者の意見として顯はれたのみであつたが本會議に於ては海軍省の要求以上に有力なる艦艇を製造することになり、上院の方は更に夫れ以上に增加することに決したのである。加之海軍省の五年計畫が手緩いといふことで三年計畫につめて實行する事になつたのである。約り此れによつて考ふると、米國の海軍大擴張は何處の國と何うしようといふ意味で遣るのではない。之も報告によつても分る如くに、自分の國の世界的位置を維持する爲めの防禦であつて、決して外の國と何うするといふのではないと云ふ事を宣言して居るのだ。決して今度の戰爭の結果に顧みて世界各國との關係が不安固なる事、又頗る多くの國民間の意思の不疏通が起るといふ事を考へて、それに對するの防禦に過ぎないことは明かである。然し何に致せ、外の國は當局者の要求に對して削減を加ふるのが通例であるのに、米國では當局者が五年間の計畫としたそれ丈けの大なる計畫を三年間に仕上げるといふやうになつたのは、同國の意氣込の想像以外に激しいことが考へられる。「プレペアドチス」(對戰準備)と

いふ事は米國人の最も嗜好に適した言葉で、總てプレペアドネス熱から若干影響を受けて居ると考へられる。然し熱の如何に拘らず其結果は同樣であるから、我日本がもしもどこまでもアメリカとの平和を維持することを考へるならば矢張り相當の注意を拂はなくてはならぬハメになつたのである。約り海軍省の次年度の要求約二億弗は委員會で二億四千萬弗に増加され、更に本會議には二億七千萬弗に増加され、更に上院に於て三億一千五六百萬弗に増加せらるゝといふことは、決して注意せずには居られぬのである。米國では日露戰爭の當時も大なる擴張が實行されたので(千九百三年頃の擴張がそれである)日本海軍と大懸隔を生ずることになつたのであるが、今度の戰爭で斯くの如き大擴張をして段々大懸隔を生ずるといふ事は何となく異樣の感じはあるけれども、かういふ事について米國を疑ふ事は面白くない。何處の馬鹿が、日本が亞米利加を衝くと考へぬと同樣に亞米利加が日本を衝くと考へるものがあらうぞ。軍備上で米國と競爭するといふ事は、少しく考へる人の口にすべき事でなく、又考ふべき事でもない。唯兩國は互に相侮らざる準備をして金輪際平和にして行くことが必要である。

そこで今度の擴張の内容は、政府の要求案に據れば、一九一七年より一九二一年に亘る五ヶ年間に、大戰艦十隻、大巡洋戰艦六隻、輕巡洋艦十隻、驅逐艦五十隻、出征艦隊附屬潜水艇十五隻、海岸用潜水艇六十五隻、砲艦四隻、病院船一隻、給兵船二隻、給油船二隻、工作船一隻を作つて、戰時の勢力を第一戰艦隊戰闘艦二十七隻、巡洋戰艦六隻、第二戰艦隊戰闘艦二十五隻、裝甲巡洋艦十隻、輕巡洋艦十三隻、驅逐艦百〇八隻、艦隊附潜航艇十八隻、海岸用潜航艇百五十七隻、モニトル六隻、砲艦二十隻、給糧船四隻、給兵給油船合せて十五隻、運送船四隻、水雷戰隊附屬船三隻、給兵船二隻、他の特務船八隻丈けを一九二一年迄に備へるといふ計畫であつて、下院の委員會では、一九一七年に着手すべき戰艦は弩級大戰艦二隻、大巡洋戰艦二隻、輕巡洋艦三隻、驅逐艦十五隻、艦隊附屬潜水艇五隻、海岸用潜水艇二十五隻、病院船一隻、砲艦二隻といふのであつたが、下院の少數者の意見として先づ外の細かい事は政府の意見でいゝが、兎に角弩級二艦に巡洋戰艦六隻を作らなければ到底國防の適當なる準備をする事は出來ないと討論した。處が議會の決議としては、それと若干違つて戰艦の製造をやらないで、巡洋戰艦五隻(各々二千四十三萬三千二百三十一弗)輕巡洋艦四隻、(各々五百五十七萬一千九百弗)、驅逐艦十隻、(各々百三十二萬五千三百十四弗)、それから八百噸型(水上)の潜水艇三隻、(百二十萬六千三百二弗平均)、其他に、十七隻の小さな潜水艇、(各七十三萬千三百〇二弗)、石炭船(百三十六萬三千二百七十二弗)、給兵船(二百七十萬四千六百五十弗)、病院船(二百二十五萬弗)といふやうなものを作りたいといふので、其他に航空隊費用として二百萬弗を計上して居る。其結果つまり二億七千萬弗となつたのである。其他注意すべき點は政府の要求よりも海戰に必要なる補助機關を速に作る事である。即ち石炭船給兵船等の完備して居る事は注意すべきである。其他一千萬弗を投じて製鋼所を作ると云ふのにも積極的な意味がある。それが

上院の方では此外に委員が今年度戰艦二隻を加ふることゝし、其結果、三億千九百萬弗を加ふる事になつたのである。この金額は日本の六億三千萬圓程に當るので何人も驚かざるを得ない事だと思ふ。併しそれより尙驚くべきは海軍省よりの要求よりも遙かに以上のものを備へやうといふ國民の意氣込である。今度決定された豫算で見ると九百十九年七月一日以前に即今後三年間に戰艦十隻（内四隻は出來得る丈け早く着手）巡洋戰艦六隻（内四隻は出來る丈け早く着手）偵察用巡洋艦十隻（内四隻同上）驅逐艇五十隻（内二十隻又同上）艦隊附潜水艇九隻、海岸用潜水艇五十八隻、給炭船三隻、工作船一隻、運送船一隻、病院船一隻、水雷母艦二隻、潜水艇母艦一隻、給兵船二隻、砲艦二隻を建造するので誠に驚嘆の外はないのである。

是丈けの事は別に秘密な事でないから、忌憚なく話したのであるが、呉れ〲も考へなければならぬのは、米國が海軍を擴張したからといつて日本の準備の極めて消極的で及又悲觀的であるのを憂ふるの餘り、米國を野心あるものとして、非常な恐れを抱くといふやうな事あつてはならんのである。日本は今一奮發て國防の見地から、如何なる敵とでも戰ひ得る一つの堅實なる艦隊を持ち得るのであるから、平和の維持といふ事に對して相當の自信を起し得るのである。米國が日本の三倍あるとか五倍あるとか云つて恐れて居つた日には、威嚴も何もなくなるので反て戰を惹起するとにもなるのである。實際戰爭と云ふものはソンなに勘定高いものではない。實際數の上で優勢なるものが必ず勝つと云ふ譯ではない。例へば敵艦隊が二で味方が一でも味方に二倍以上の命中彈があれば勝つ。寧ろ數が少い丈け得である。第一は士氣の訓練である。然し如何に士氣の訓練あつても一隊も完全といひ難い編成では如何なる訓練も士氣も施すに餘地ないのであるから何よりも大切な點は早く堅實なるしかも完全なる一單位を得るにあるのである。詰り問題は、完全なる中堅となるべき一隊が必要なのであつて、それより以上の事は無論望ましい上にも望ましい事であるが、今日の海軍の全般の希望は早く檜舞臺で戰ひ得る海戰艦隊一隊が欲しいのである。三十七八年役には何處の國にも劣けない立派な艦隊があつて、クワイト、アプトウ、デートな艦隊、即ち戰鬪艦六隻、巡洋艦六十二隻の立派な、ホモゼニアスな艦隊を編成し得たのであつて、之に匹敵し得る艦隊を編成し得るのは英國一つよりなかつた。然ういふ有樣で日露戰爭が起つたのである。あの戰爭については不思議の天佑と又東郷大將以下の將卒が難有い御稜威を戴て働いた忠節によることとは無論であるが、日本艦隊の立派であつた事も勝因の一である。吾々は其力を今日も持ちたい。が今日の有樣は仲々然う行かんので、極新式な八四艦隊、即ち要するに十二隻の戰略的海戰單位を備へたいといふに過ぎんのである。之は餘談なるも亞米利加の平和を維持するが爲めに熱心なる態度に比べて見て、日本が平和を維持する態度の如何に貧弱なるかを考へて見ると、如何も少し心配になつて來る。もし萬一の事でもあつたなら平和の破壞者は（平生の不用意といふ點から見ても）反て日本であるといはなければならぬかも知れぬ。兵力の足らざる者却て平

和を破るに至つた事は歴史上非常に明かなる事である。白耳義をして恐るべき獨逸の敵たらしめば、白耳義にあの慘害を受けなかつたであらう。勢力が懸隔甚だしいと戰が起らんでもないのに起るのである。此事を十分心得なくてはならぬ。兎に角、我々日本人は米人の立派なる覺悟に對しても奮勵しなくてはならぬと思ふ。何に致せ太平洋の平和を永遠に維持する爲には其の對手國に己れの主張を尊重せしむる丈けの力が大切である。敢て必ずしも均當とはいはぬが侮ることが出來ぬと思はしむる丈けの用意は必要であるので、かくてこそ平和の擁護に誠實なりといひ得べきである。(文責在記者)

▽米國の大擴張

陸軍某將校

(一)軍備擴張熱の勃興

大凡そ一國の軍備といふものは、其國の國是に伴ふものであつて、米國の軍備擴張の計畫について考へても、亦之と同樣である。米國が其母國の英國に叛旗を飜して、米大陸に自由の國家を建設した當初に於ても、軍備の目的といふものは常に對内政策に限られて居つた。そこで革命戰役には、僅かに歩兵一聯隊、砲兵一大隊、總計一千餘りの正規軍を有するに過ぎなかつたから、米國大統領として第四代目のモンローは、初めて島國の對外政策を確立した。是れが彼の有名なモンロー教書として發表されたのであつて、米國は歐羅巴の米大陸のことに容喙するを禁じたのである。此國策の遂行としては勢ひ正規軍の勢力を增加するやうになつて、遂に一萬に之を殖やした。それ以來米墨戰爭及び南北戰爭等があつたけれども、十九世紀に於ける米國といふものは、自分の國の地理的形勝を頼みとして、鋭意米大陸内に於ける領土の擴張及び其國力の開發に力を傾注した。斯く設備たる米海岸の十三州から起つてから、今や四十八州を領して、西半球の北半球に面積約三百萬方哩人口約一億を有する一大共和國を建設した。此間正規軍の兵力といふものは、南北戰爭の直前に於て五萬と決めたが、段々其兵力を減じて、西米戰爭の直前には約三萬に減少した。然るに十九世紀の末葉に於て、キユーバの獨立を援助する爲めに西と開戰をして、其戰勝の結果キユーバを保護國として、西印度諸島中のポルトリコを獲得し、太平洋で比利賓を獲得し大いに領土を擴張して、世界の大國となるや、其正規軍を十萬人と決めた。此時機を劃して以來、米國の國是といふものは一進化をなして、從來米國人の米大陸であるからして敢て他の干渉を許さないと共に、自ら米大陸以外には超然主義をとつたモンロー主義なるものは、茲に一轉して、自ら進んで列强の問題に發言權を得んとするに至つて、或はモロッコ問題に容喙して軍艦を送つたり、或は滿洲鐵道の中立提議を持ち出したり、甚だしきに至つては波斯の財政問題にまで口を出すやうになつて、そして世界政策の渦中に投じたから、そこで米國の識者は夙に米國の國是の遂行の爲めには、軍備の擴張を必要として、ルーズヴェルト時代に先づ海軍

の大擴張を計畫したが、獨り其陸軍は當局者の熱心の慫慂も社會に徹底せぬので、議會は常に之が擴張に反對の態度を取つて來た。が、現歐洲戰爭の影響として國防を等閑に附した國土の悲慘なる運命を眼前に目擊して、而かも米國の對獨抗議或は對獨抗議が失敗に了つて、國際關係が兎角自分の意の如くならざるを知つて、米國國民は急に自國軍備の薄弱に不安の念を起した。そこで一昨年の秋以來軍備擴張問題は輿論の焦點となつて、本年の春ワシントンに於て大統領自ら先頭に立つて、軍備行列を行つたのを初めとして、紐育、シカゴ、桑港などの大都市は勿論、其他の都會といへども、此軍備行列が盛んに行はれて、今や米國の軍備熱は沛然として其上下に漲つて居る。今年の秋の大統領の選擧の爲めに、共和民主の兩政黨が發表した政綱を見るに、共に軍備の擴張を主張して居る。本年の議會が已に海軍の大擴張案と共に、陸軍の大擴張案を通過して、玆に米國の軍備に一新期を劃して、今や其實行の時期に入つて居る。以下米國の陸軍の擴張のことを話しませう。

(二)參謀本部の擴張計畫

米國の現在の民主黨政府は、初め軍備擴張論が沸騰するや、極めて沈靜の態度をとつて、一昨年の議會に於て大統領の教書中にも、寧ろ非擴張的の意見を發表して居る程であつたが、國民一般の熱誠なる輿論の强制によつて、遂に議會に軍備擴張案を提出するに至た。そこで昨年三月大統領は、陸海軍大臣に命ずるに、米國の將來に於て國防上必要なる軍備擴張に關する具體的調査を以てした。此調査の結界米國の參謀本部は左の擴張案を作成した。即ち米國がモンロ：主義及び孤立的國際政策を維持して、世界の大强國として積極的政策をとつて、其國利國權を擁護する爲めには、海陸兵に十分なる準備を必要とする。而して其海軍は制海權獲得の爲めに攻勢に出で敵艦隊を求めて之を砲擊するから、陸軍の任務といふものは敵國に對して沿岸を確實に援護して、海軍をして自由に行動せしめねばならぬ。そこで陸軍の兵力を決定する爲めには、列强の外征に使用し得る兵力と、其輸送に要する日子とを考へねばならぬ。之に基いて算當したところの數によるといふと、米國は開戰の初期に五十萬の正規軍を準備すること必要なり。開戰後三ケ月以內に戰鬪に使用し得べきところの五十萬の野戰軍を增加し得ることを必要とする。更に此百萬の補充の爲めに五十萬の兵を召集する制をとらなければならぬ。即ち今回の軍備擴張の基礎は悉く戰時百五十萬の兵員に置いて居る。

(三)陸軍大臣の擴張案

前陸軍大臣のガリソンは、前記の參謀本部の調査に基いて、昨年の十一月陸軍擴張を決定して之を公表した。其說明するところによれば、氏は自分の陸軍擴張案を以て理想的のものとはしないけれども、現實の憲法と法律の下に於ては最善のものとして居る。其擴張案は五ケ年計畫で、其豫算十億三千四百四十萬ドルである。此豫算を以て擴張せんとする陸軍の兵力は左の如くである。

(一)正規軍。の人員を將校七千百三十六名、下士卒十三萬四千七百〇七名に增して、現在の服役年限を更へて、現役を二年、歸休を四年に改正

する。右の増員を以て新たに編成せんとする團體は次の如し。歩兵十聯隊、野戰砲兵四聯隊、海岸砲兵五十二中隊、砲兵十五中隊、飛行隊四中隊、即ち米本國内に於て、歩兵三師團、騎兵一師團を編成しようとするものである。

(二)大陸軍。大陸軍なるものは、昔ワシントンが率ゐたところの米國の獨立の爲めにするところの革命軍の稱呼をとつたものであつて、其目的は正規軍の補足として今回新たに作らうとするもので、一種志願兵制度による豫備軍である。戰時募集する無敎育の義勇軍に豫め軍事敎育を施さんとするもので、其定員を四十萬人とし、十八歲以上廿八歲以下の志願者から成り、六ケ年を服役期限とし、最初の三ケ年間に毎年二ケ月間正規軍に加つて軍政敎育を受ける。後の三ケ年間は歸休するが、其間に敎育召集を受けない。只戰時事變の際に召集をされて、正規軍と合して野戰軍となるもの也。これは三ケ年に完成し、一年度を十三萬三千人とする。

(三)第一民兵。從來中央政府は第一民兵に對して、其經營を毎年六百萬弗の補助をして來たが、本年度から一千萬弗に増加をし、間接に新民兵を增加せしめ、之を使はせようとする。

右の擴張案といふものは參謀本部の立案を基礎として決定したものである。が、正規軍の擴張は參謀本部の計畫のものより殆んど三分の一に制限して、大陸軍の兵數も十萬も減少して居る。

(四)議會に於ける陸軍擴張案の經過

右の陸軍大臣の擴張案が、議會に送らるゝや、此陸軍大臣案に對して、色々の反對論が出て來た。其中最も反對を受けたのは、大陸兵を新たに造るといふことである。其譯は第一に中央政府の直轄下に一つの軍隊を組織して、それを各州の有して居る民兵の上位に位せしむるといふやうな計畫であるからして、一面から言へば、之は中央政府の權利の擴張と同時に、州權の縮少を意味するもので、殊に米國は歷史上に於て、中央集權については今日と雖も、尙有力な反對者が多い。更に各州の民兵の將校下士卒あたりと、其州の代議士に向つて自分等の屬して居るところの民兵の上に、他の軍隊を置くといふことは、彼等の最も不快とするところであるからして、之に對して盛に防害運動を初める。又各州の知事は自分の從來隷下に屬すべきところの壯丁が、中央政府の手に移るといふことは、著しく其權利を傷けられるものと考へて、議會の單に反對黨のみならず、政府黨たるところの民主黨に於ても、此大陸軍の創設についたのは、多大の反對者があつたので、大統領は最初ガリソン陸軍大臣の陸軍擴張案なるものに對して、之を議會に提出せしめたものであるに拘らず、一般の輿論が之に對して反對する傾向を見て、强ひて大陸軍の新設に對しては之を固守しないといふ態度に出たものであるから、そこで陸軍大臣は責を引いて、本年三月頃に更迭を見るに至つた。爾來上下兩院は各々執るところの陸軍擴張案を作成して、議會の本會議にかけた。そこで幾多の修正を經て下院は、歩兵十聯隊野砲兵六聯隊、海岸砲兵五十二中隊、工兵十二中隊、正規軍人員十四萬人を議定した。此下院案なる

ものは大體に於て陸軍大臣の擴張案を採用したものであつて、只其擴張兵力が更に少し尠いのと、大陸軍なるものを全く削除したるのにある。卽ち之れ消極的の擴張案である。

上院の方に於ては本年四月頃正規軍平時人員廿五萬、中央政府に屬する義勇軍廿六萬一千、州の民兵廿七萬五千、合計七十八萬六千の兵力を設けると云ふ擴張案を通過した。此上院案は大體に於て參謀本部の調査した擴張案を採用したものである。そこで上下兩院の通過案が多大の懸隔があつて、下院の方は正規軍が十四萬といひ、上院の方は廿五萬といふので、兩院の協議會に附して玆に一つの妥協案を議定するやうになり、いよ／＼決定した兵數は正規軍平時廿萬六千、戰時廿五萬四千、州の民兵廿四萬八千、それによつて編成すべき所の正規軍の兵力は步兵六十五聯隊、騎兵廿五聯隊、野戰砲兵三萬人、信號隊三千人餘であつて、之を完成する時期は五ケ年で兵役を現役三年、豫備四年と定めた。結局此擴張計畫の完成の曉に於ては、米本國に正規軍としては步兵四師團、騎兵二師團、其屬領地に於ては布哇、比律賓、パナマに各一師團と、步兵七師團、騎兵二師團の正規軍を置いて、其他に民兵軍が四十四萬ばかり出來る譯だ。此兵力を擴張前の兵力に比べるといふと正規軍に於て二倍の擴張、民兵に於て四倍の擴張である。之を我國の二箇師團の擴張に比べると其擴張の規模の大なる事は同日の論でなからう。

正規軍なるものは全部志願兵から成つて居つて、滿二十歳から三十五歳に至るものから本人の志願によつて召集する。其服役期限七年で、初めの三年を現役、後の四年を豫休とする。服役三ケ年を經過すれば本人の希望によつて數回服役を希望する事が出來る。斯の如く義勇兵であるから兵卒の俸給なども其時に於ける所の勞働者の賃銀と權衡をとるやうに定めなければならぬ。故に、從つて軍隊の經常費は兵數の少ないに拘はらず、何時でも莫大の豫算を要するのである。

▽米國魂の表象たる　各州のモットー

齋木仙醉

日米關係の密接なるだけ、我が國民の米國研究は日一日と高まるの觀あり。此の時我が國民は諸種の方面より米國研究を怠らざるべからず。吾人の見を以てするに、米國諸州のモットーの研究は確に此の研究に一光明を抛つものなりと。

米國の諸州は殆どモットーを有せざるものなし。而して此のモットーは各州のシール(印)に作られ、其の精神を萬事に普及す。如何に米國民が自家の國體を擁護せんと欲しつゝあるか、又民族的精神の維持に努めつゝあるかは之によりて明瞭に知らる。予は彼地滯在中多少之に就きて研究し置けり。今米國研究の旺盛なる時に當りて之を發表せんと欲す。

米國諸州のモットー之を分類すれば、宗教的のものと、政治的のものと、道德的のものと、愛鄕的のものと、四に分る。

第一宗教的のものより紹介せんに、アリゾナのモツトーは、『神により て打建てられたる』なり。彼等は神を以て建國の理想とす。彼等豈侮り易からんや。此の觀念は彼等の國歌能く證明して餘りあり。吾人は唯之を敬虔的なりと評するものを以て已むべからず、米國人が實際的に哲學的能力を保するを看取するに難からざるなり。次にコロラドのモツトーは『何事も攝理ならざるなし』にて、此のモツトーは一面米國民の氣輕にして、天命に安んずるといふ氣分を能く代表するものといふべし。眞に彼等は能く其の分を知る國民なり、米國民には一面確に此の樂天的の大國民たる態度あり。コンネクチカツトのモツトーは『移し植ゑし彼は尙ほ之を支ふ』にて、能く巡禮者なる父等の信を保持するものといふべし。實に米國の善良の分子は此の信仰によりて保持せらるゝといふも決して溢言にあらざるなり。フロリダのモツトーは『神の中に我等の信賴は在り』なり。是れ彼等が輝ける植民歷史の證する所。サウス・ダコタのモツトーは『神の下に此の民は支配す』なり。彼等が一のセオクラシーを理想とする樣明瞭なり。米國は建國日尙淺し。然れども彼等は神の上に、永遠の神の上に其の國を建つといふ大理想を有す。米國民豈迨ひ易からんや。

第二に政治的のものを觀察するに、是れ亦多し。アルカンサスのモツトーは『民治む』なり。彼等は此處に其の旗幟を鮮明にせるを見る。デレウエヤーのモツトーは『自由と獨立と』なり。此の二者は實に米國民が英國民より離れたる所以。コロンビヤ地方のモツトーは『總てに正義』なり。吾人は此に彼等の機會均等其の他の政治的趣味の指鑑を見る。イリノイスのモツトーは『國民的結合、國家的主權』なり。是れ實にワシントン、リンコルンの理想とせし所。アイオワのモツトーは『我等の自由を我等は賞讃し而して我等の權利を我等は保持せん』なり。是れ彼等の日常生活法の理想にして、東洋の義務の觀念を印象するに急なると好對照なり。吾人は今假に其の是非を言はず。而も米國民の研究としては此の手心を知らざるべからず。彼等は權利を主張せざるものを恐人と同一視せん。ケンタツキーのモツトーは『合へば我等は立ち、分るれば我等は仆る』なり。是れワシントン、リンコルンの理想を反覆せるもの。ルイジヤナのモツトーは『結合、正義と確信』。是れ又リンコルンなどの人格の反映と見ば見らるべし。メーンのモツトーは『我指揮せん』なり。帝國主義の萠芽も此の中に在らん。米國人の負けず魂は有名な話なり。マツサチユーセツツのモツトーは『劍もて彼女は自由の下に靜かなる場所を求む』と、彼女とは無論自由の女神なり。ミゾリーのモツトーは『人民の安寧は最上の法なり』『合へば我等は立ち、分るれば我等は仆る』の二つを有す。ネブラスカのモツトーは『法の前の平等』なり。是れ司法觀念のエンフアサイズにして、米國の如き國柄に在りては特に必要なることとなるべし。ネバダのモツトーは『我等の國の爲に』なり。彼等の愛國心の反響なり。ニエー・メキシコのモツトーは『行くに隨ひて增加す』なり。是れ米國の好運兒なることを語るものなり。ノース・ダコタのモツトーは『自由と結合とは一にして離るべからず今も永遠も』なり。オレ

ゴンのモットーは『結合』なり。ペンシルバニヤのモットーは『二つながら生き延ぶること能はず』なり。是れ恐らくは獨立戰爭當時の回想より來れるものならん、而して今は自由と壓制との兩立不可能を寓するものか。テンネッシーのモットーは『農業と商業と』なり。流石に實利主義の國柄なり。一此のモットーなかるべからず。バーモントのモットーは『自由と統一と』なり。統一の觀念此に高調せられたるを見る。是れ幾分地方分權の制度の困難をも聯想せしむるものと見て可なり。バージニヤのモットーは『暴君には常に斯くの如くならん』なり。ワシントンのモットーは『追々』『自由と確固』の二つなり。前者は漸進的態度を言ふものか。之を要するに、政治的のモットーの中には、幾多の彼等の政治的經驗を見出すことを得ん。彼等が單に宗教的のみの國民にあらずして、政治的、實際的國民たるは明らかなり。吾人は斯くの如き國民を對手にしつゝあることを一日も忘るべからざるなり。

第三に予は道德的のものを述べん。アルカンサスのモットーは『慈善正義』なり。慈善の觀念此に高調せられたるを見る。是れ米國民一部の榮冠なり。ジョージヤは『智慧、正義、節制』を以てモットーとす。餘程希臘的觀念の強きモットーと評すべし。メリーランドは『男らしき行、女らしき言葉』といふモットーを有す。餘程文學的、社交的。ニュー・ヨークは『より高く、より多く高舉せられて』といふモットーを有す。是れ蓋し人格の向上を意味するなり。ノース・コロラドのモットーは『有ることにして見ゆることにあらず』なり。是れ西洋の訓戒の一。オクラホマのモットーは『勞働は總ての事に打勝つ』なり。げにも尊敬すべきモットーなり。而して米國民の實際服膺する所のものなり。ロード・アイランドのモットーは『希望』なり。何等アレキサンザー的モットーぞや。米國に一なかるべからざるモットーなり。サウス・カロライナのモットーは『心と資産とに於て準備して、生命と財産とを與ふるの用意をなす』『我が呼吸する間は我は希望せん、希望せん』の二つなり。前者は文明人の心掛と共の愛國心とを見るべく、後者はロード・アイランドのと同樣なり。ウイスコンシンのモットーは『前へ』なり。奇抜ならずや。ワイオミングのモットーは『武器をして衣に讓らしめよ』にて、流石に羅典的修辭を語りて床しからずや。道德的のモットーも亦極めて實質的、進取的なるを知らん。

第四に而して最後に愛郷的のものを記載せんに、アラバマのモットーは『此處に我等は憩ふ』にて、彼等の安住の様を見るべく、カリホルニヤは『我之を見出しぬ』にて、原語ユーレカーはかのアルキメデイスの比重の理を發見したる時の叫なり。米國人が加州の富と美とを見たる時の狂喜の樣を見るべし。アイダホのモットーは『慶賀』にて萬歳の意味を有す。カンサスのモットーは『總ての困難を通じて星にまで』なり。げに一般人の善き教訓なり。ミシガンのモットーは『汝若し美しき半島を求めんと欲せば此處を見よ』と、彼等の自負と開放的なる性格とを見る。ミネソタのモットーは『北の星』なり。モンタナのモットーは『金と銀』なり。げに能く彼等は彼等の抱負、理想、趣味を發揮せるよ。米

國諸州のモツトーはげに吾人の深く味ふの價値あるものなりと信ず。予は明治天皇の御製が日本各府縣に分布されて、大御心の痛切に我が國民に打ち込まんことを希望するや切なり。

▽米國の對東洋政策

法學博士　吉野作造

米國の對東洋政策と云ふ與へられたる問題に對して、詳細なる答案を作ることは、一朝一夕の事業ではない。唯玆に此問題の研究をなすについて、差當り我々の念頭に浮ぶ二三の點を列擧するならば、次の如くである。

第一に考ふべきは、米國の東洋に發展せんとするは、他の歐羅巴諸國の東洋發展と同じく、自然の勢であることである。少くとも米の經濟的に發展せんとするの趨勢は、到底之を沮止し得べきものではない。さらでも最近米國の經濟的發展は素晴しいものがある。而して今次の戰爭は更に此發展の勢を驚くべき程に激成した。我日本でさへ、戰時に膨脹した事業の捌け口を戰後如何に之を調整して行くやを、今から苦心して居るではないか。況して米國の如きに在つては、其豐富なる資力を以て、猛然として我東洋方面に發展し來るに相違ない。而して此發展の目標となる最も著るしい所を尋ぬれば、言ふまでもなく支那である。

第二に考へねばならぬ事は、米國の此對支那（東洋中特に支那について云ふ）の發展は、勢ひ支那と特殊の關係にある諸外國の所謂專屬的勢力範圍主義と衝突することである。外交的辭令を弄する事を避けて、事實を有りの儘にいへば、斯く斷ずるの外はない。蓋し我日本を初め、英吉利や、露西亞は、それぞれ勢力範圍を確定獨占して、他國の侵入を許さない。此獨占的勢力範圍の確定と云ふ事についても、論ずべき點は少くないが、之は今予の直接に問題とする所ではないから述べぬ。要するに此等の諸國は、其勢力範圍を擁して所謂門戶開放機會均等主義の文字通りの適用を許さない。而かも此適用を許さない範圍をば、漸を以てヂリヂリと擴張せんとして居る。此等の獨占的勢力範圍が段々に擴張せらるゝものとすれば、他國が默つて見て居れぬのは當然である。況んや初めより此種の勢力範圍を有せざるものに於てをや。況んや又米國の如く、早晚支那に大發展をなすべき必要に迫られて居るものに於てをや。故に米國の對支那發展を自然の勢已むを得ずとすれば、支那に勢力を有する諸國は、之と何等かの形に於て一種の衝突を感ずるのは亦已むを得ない。我等も亦少くとも米國の經濟的發展との衝突を覺悟し、之を如何に折衝して兩者の經濟的利益の調節を計るべきやを豫め攻究するの必要がある。

第三に右の如き意味の一種の衝突は、米國自身が已に餘程前から自覺して居つたと云ふ事を記憶せねばならぬ。其一つの例は明治三十二年九月から十二月にかけて米國國務卿ヘーイ君が、我國を初め英、佛、露、獨

與、伊の六國に向つて、支那に於ける機會均等門戶開放主義を提案した事である。恰度此頃諸外國は、獨逸の膠州灣占領を初めとして、それぞれ租借地の確定を競爭して居つたから、米國では餘程氣が揉めたものと見えて、將來に於ける自國の經濟的發展の妨害せられざらんが爲めに、勢力範圍又は租税地を極めても外國の既得の權利には何等干涉すべからざる事、又以上の地域內に於ける各國商船、各國商品は全然同等の取扱を受くべき事等を提案したのである。要するに之は自國の支那に於て有する、又は有し得べき權利の、將來に於て傷けられざるべきの消極的要求であつた。然るに之は紙の上では大體贊成されたけれども、實際に於ては十分に尊重されないので、米國は遂に積極的に進んで支那に自國の利權を設定せんと欲するに至つた。之は即ち明治四十二年十一月國務卿ノックス君が、滿洲鐵道の中立を提議し、若し之を聽かずんば米國は進んで錦愛鐵道を布設すべき事を提議した事によつて露はれて居る。之は日露兩國より翌年一月二十一日を以て叮嚀に拒絕せられて泣寢入となつたが、要するに此頃から米國の態度は餘程積極的になつて來た。此所從に對して、世上には餘りに米國が無遠慮だとか、或は外交界の儀禮に嫺はないとか、又は言ひ出した事を直ぐ引つ込ませて平氣で居るとかいふやうな種々の批評があつたが、其等の點はどうでも可い、兎に角米國の人心は支那に對して、消極的態度より漸次積極的態度に進んだ事を認めればよいのである。

第四に、其頃奉天の總領事たりしストレートと唐紹儀との默契の結果米清同盟の說が起つたのも、考の中に入れて置く必要がある。之も明治四十一二年の出來事である。當時唐紹儀の親分の袁世凱は、段々に排日に傾き、特に滿洲に於ける日本の跋扈を抑へんとして、東三省の經營に大改革を加へた。即ち總督に徐世昌を擧げ、其下に三省の巡撫として唐紹儀（奉天）、朱家寶（吉林）、段芝貴（黑龍江）を配し、而して唐紹儀を奉天に駐めて滿洲外交の中心たらしめた。此時奉天駐在の米國總領事ストレートは、卅餘歲の青年を以て盛んに活躍し、或は法庫門鐵道問題を起し、或に卑濱川濱鐵道借欵問題を起し。米清兩國の接近を暗示して、交々我國の不安を激成した。此等の事から、自然支那中央の要路の人の間には、米清同盟を空想するものが起り、やがて米の好意に恃んで日本の跋扈を抑へようといふ底の發案が、袁の容るゝところとなつて、團匪事件に關する賠償金の返却（明治四十年）に對する答禮使といふ名義で、唐紹儀自身米國に使することゝなつた。明治四十一年十月の初、彼は本國を發し、暫らく我が東京に足を休めて、十一月八日横濱を發し、月の下旬桑港に着いた。傳ふるところによれば、彼は袁の密旨を受け、福建省内に一海軍根據地を提供するの條件の下に、米清同盟を訂せんと欲したとのことである。その後日本の新聞には、十二月三日發紐育電報として唐の白堊館に米大統領タフトを訪問したことを報じ、又十二月廿一日の電報は突如『米國政府をして米清同盟に等しき外交上の聲明をなさしめんとするの計企は失敗せり』と報じて來た。要するに米清同盟は一場の惡夢に歸して了つたけれども、之は必ずしも支那人の空想にのみ歸す

る譯けには行かない。其年の夏、紐育ヘラルドの如きは、日本の侵略的行動によつて米と淸とは同樣に損害を蒙つて居るから、兩國は同盟して日本に當るべきであるといふやうなことを唱へたこともあるから、此同盟說の芽は、或は米國方面にあつたのかも知れない。聰明なる政治家は固より斯かる愚論にとり合はないとしても、兎に角、斯くの如き思想が一部の米人の間にあつたことは、之を見逃してはならない。現に同盟說はお流れになつたけれども、之につゞいて淸國と米國政治家との間には、いろ〳〵密接なる關係が出來、所謂三都澳問題なる厄介な事件もこれから發生したのである。三都澳は臺灣の對岸なる福建省の一港にて遙に我が淡水港に對峙するものである。こゝに支那政府が米國の金で海軍根據地乃至船渠、貯炭所を建てるといふ事件が起つたのである。之には日本も餘程面喰つて、嚴重なる抗議を以て、やつと收まりをつけたと聞いて居る。去年日支交涉の談判に於て、福建省沿岸に於ては造船所、軍用貯炭所、其他軍事上の施設は、何國にも許さゞる事、又外國の資本によつて之を爲さゞることを約せしめたのも、其の由來するところは蓋し偶然ではない。要するに、這般の米淸接近は、一時の極端なる反感的現象に過ぎないものかも知れないが、然し兎角、米人中には、一部の排日支那人と相應じて、支那を助けて日本を抑へようといふ考のものゝあつた事は明白である。

終りに注意すべきは、米國は明治四十五年三月、六國借款團より脫退して、對支政策の方向轉換をしたけれども、之によつて米國は、全然支那に對する積極的經營の希望を拋棄したものとは見るべからざることである。米國の脫退は畢竟片意地なるウイルソンの一人の考に出でたもので、之が果して米國民多數の意見なりや否やは、一の疑問である。且つ又支那の經營から手を引くといふことは、少くとも今日の米國の大勢が許さないだらうと思ふ。故に大勢論の見地から判斷すれば、米國は今後益々東洋に發展の手を進むべきものと見なければならない。而して今日まで實は、米國は飽くまで所謂專屬的勢力範圍主義に反對し來つたので、容易に他國と相並んで、思ふ通りの發展をなし得なかつた。米國にして今後大に經濟的發展をなさうとするならば、或點までは＝不便であらうが＝專屬的勢力範圍主義を承認しなければならない。少くとも旣成の事實(fait accompli)は、之を承諾してかゝらなければならない。然るに最近米國は、此點について餘程悟つて來たやうである。先般渡來したゲーリー氏の歸國後に於ける議論の如きは、卽ち此風潮を代表するものではあるまいか。卽ち氏の說は一口にいへば日本の支那に於ける政治的地位を承認しつゝ、尙之と提携して大いに米國資本家の經濟的發展を計らうといふのである。斯ういふ考に基いて、果して如何なる具體的の提案が提出せらるゝか、又其提案によつて、果してどれ丈け兩國の政治的經濟的利害が調和せらるゝやは、固より今後兩國當事者の研究交涉に俟たねばならぬ問題であるが、兎に角戰後米國の產業が、猛然として支那に押寄せ來ることは、今より之を覺悟せねばならない。我々が之に對して果して如何なる態度をとるべきか。將た如何の方策を以て、此等の米國の勢力を利用すべきか。之れ予輩のそれ〴〵の專門家に對して、愼重に講究せられんことを希望するところである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

黒頭巾 **横山健堂先生著**

小杉未醒畫伯裝幀・岡落葉畫伯挿繪

義民宗吾

四六判四百餘頁上製美麗本
口繪挿繪寫眞等十數葉挿入

定價壹圓貳拾錢 送料八錢

暴君虐政の下に三百村民將に餓死に瀕す宗吾敢然として挺身難に走る、事成らず一家を擧げて慘刑に斃る、恨事之に過ぐるものあらんや。然れど千載の下、義神として崇拜せらる。國民犧牲の念世界に卓越せるもの彼に負ふ所なからむや。著者夙に宗吾の仁俠に感激し舊地を踏査し古老に探り群書に渉り、半載の日時を費し、幾度か稿を改め遂に此書成る。從來坊間に行はれたる附會の說を排し、彼が生立より終焉に至る迄、其眞面目を捉へ全卷に躍如たらしむ。

切に愛讀を乞ふ。

（廿付の一）

東京市本郷區本郷一ノ大通
日東堂
電話下谷四三六二
振替東京一二五五八

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■晩秋燈下此快著を繙け■

大戰餘錄

最新刊

湖畔の落人

法學博士添田壽一閣下序

東京朝日記者 杉村楚人冠先生　法學士 太田正孝先生著

◎四六判洋裝上製頗美本紙數二百頁紙質優良三色版コロタイプ版風景畫數葉入 **定價六拾五錢** 送料金六錢

楚人冠先生本書を激賞して曰く

特に僕の敬服措く能はざる所のものは彼が開戰當時の歐羅巴を叙するに始終大森の家や、ウインダミアの下宿や、倫敦のホテルを背景として出沒自在（中略）なる手並である。眞面目の中に滑稽も交つてゐる。訓戒もあれば諧謔もある。

著者曩に戰禍を避けて獨逸より英國に遁れ、ウインダアミア湖畔山紫水明の境に悠々自適して靜に大戰裏面の歐羅巴を觀察し隨感隨錄、茲に此快著を成す。敎訓あり、諧謔あり、涙あり、笑あり、才筆流麗、情趣横生一たび之を繙けば復た卷を措くに忍びざらしむ。加ふるに挿畫の精巧錦上に花を添ふるものあり乞ふ愛讀を賜へ。

▲至廉の定價は最近出版界の一異例也▲

東京日本橋區本銀町三丁目　**啓成社**　振替東京一二〇五五　電話本局二一〇〇番

（中付二の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本年度ノベル賞金の受領者ロオラン氏が戰爭論出づ

ロマンロオラン原著　木村莊太氏譯＝製本出來發賣＝

爭ひの上にあれ

總クロース美本
四六判三百餘頁
定價九十錢
送料八錢

最近の外電は曾て誤り傳へられしロオラン氏ノベル賞金受領の一事が愈々本年度に於て確實なる事實として現はれたる事を明にせり。然も其の榮冠は實に此書一卷の爲めに贈られたりと言ふに至つては正に内容の眞價を證明して餘りあるものと謂ふべし。(十一月十三日東京日日新聞参照あれ)本書は實にロオラン氏が其のヒロイックなる戰爭に對する宣戰に於て世界の民衆に訴えて愛と正義の上に立つ人道を擁護せるもの、一度原著出づるや歐洲全土の一問題となり忽ちにして數十版を重ねたるものなり敢て悲慘なる歐洲戰爭の渦中の間に呼ばるゝ悲壯なる巨人の叫び熱烈なる當來の建設の聲を諸君に送る。

ロオラン著「トルストイ」
譯者在米成瀬正一氏曰く

私は先日市中のある大きな店へ行つた所がロマンロオラン氏の「亂鬪の彼方に」――(爭ひの上にあれ)――が澤山重ねてあつたのを見て吃驚した。(中略)併し私は嬉しかつた。ロオラン氏の書いたものゝ中でも、氏の最も切實な叫びであるこの本が多くの亞米利加人に讀まれてゐることは、國中錢勘定にばかり狂奔してゐる下に、何所かに眞摯な心を持つ偉大な聲を　めて止まない人があることを示してゐるからである。無論此本を讀む人の中には好奇的興味を以つて戰局を眺めるやうな態度で讀む人もあるかも知れないけれ共、中には　慘な歐洲戰爭によつて起された氏の熱烈なる叫びを通じて眞面目に人道に對する解決を求めやうとする青年も少くはあるまいと思はれるからである。

――新思潮――

東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地　天弦堂　振替口座東京二九五九番

(中付二の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

□東京帝國大學
□文科大學講師 紀平正美先生新著□□

新刊發賣

自我論

（學界の權威）

四六判最上製美本
全壹册紙數四百五拾頁

正價金壹圓卅五錢 郵稅金八錢

■本書『自我論』一編に全く自分の觀念論の上に立脚して組織したものである。從て缺點が多からうと■思ふが同時に又自分のものであるとの自信をも有つて居るのである。前篇『自我の分析』に於ては出■來得る限りの分析を試みた。廣義に於ける教育者或は人の上に立つ人には其の方法上に多少の參考■となるべきものと信ずる。後編『人格の價値』に於ては人格の意義と價値とを論理的に定めんと企て■た。即ち理想の何ものたるかを論じて哲學宗教道德其他一般に人文現象の根柢となるべきものを定■め以て現代人の趨くべき方向を示さんと計つた積りである。切に學者の批評を待つ。—（著者識）—

□□熱狂的歡迎初版旬日にて賣切□第貳版本日出來□□（類書中の白眉）

日蓮宗大學講師
『法華』編輯主幹
文學士小林一郎先生新著

日蓮主義講話

四六判上製美本
全壹册箱入
紙數五百五十頁

正價金壹圓卅五錢 郵稅金八錢

好評激甚

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸着點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れる者は之によりて現今の時勢と宗教との關係を領解し得べし。特に青年の人々に本書の熟讀を勸む。

■■新しき解釋に成れる聖日蓮の教義

東京市神田區表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番

女太夫情話「袈裟懸の辻斬」

田中貢太郎

安政も最う五年となつた。米艦が浦賀に來た嘉永六年からは六年目、幕府は內治外交に苦しんで、その年の四月、彦根藩の伊井直弼をあげて大老にしたが、時局は益々困難となり、六月には米國、七月には蘭、露、英の三ヶ國、九月には佛國と言ふやうに假條約を結んで通商を許した。その一方では、七月六日に將軍家定が薨じ、九月には閣老間部詮勝が上洛して、勤王の志士を捕斬するなど、非常に騒がしい世の中となつてゐた。

斯うした時代にあつても、遉に江戸市中には、太平の氣象が溢れて、市內至る所の遊び場所には、二百餘年の豪宕な生活が生んだ華やかな空氣が漂つてゐた。芝の切通も、兩國や上野の山下のやうに、附近の遊び場所として、小さいながらも夫れ相應に賑つてゐた。其所は青瀧寺の横手で、少し小高くなつた所に、雨天には興行の出來ない蓆張の小屋が並んで、芝居、輕業、新內、義太夫などの土場藝を競つてゐた。

この土場の藝人は、市內の定席に出る者よりは、一段格の低い者であつた。相手にする客は、主に江戸勤番の諸藩士で、これを土場者と言ひ、女藝人の方は、又、女太夫とも言つて、夜は客に伴はれて藝妓のやうに

酒席に侍した。尤も女太夫とは、もと、四ヶ所の非人小屋の嬶や娘で、白粉をつけ、菅笠をかむり、三味線を鳴らして市中を廻つてゐた者を呼ぶの名稱であつたが、當時は最う前に云つた女藝人の意味と混交してゐた。

この女太夫に關係して、痛ましい終りを遂げた有馬家の若い藩士の情話は、爛熟した江戸文明が生んだ犧牲の一つであつた。

一

春も三月頃、杉檜の古木が暗いまでに生ひ茂つて、晝も梟の聲のする増上寺の山内では、春を象徴する櫻の花は見られなかつたが、上野向島には花見の客の雜踏しようと言ふ日であつた。愛宕下の道場を出た虎三郎は、近頃雇入れた仲間の孫と言ふのを從へて、赤羽根の有馬の屋敷に歸りかけたが、切通の下、愛宕下の人家はづれ、俗に赤玉本多と言はれた門柱に赤い朱塗の玉をつけた本多の屋敷の前まで來ると、頭の上から落ちかゝるやうに、増上寺の時の鐘が鳴つた。

「もう二時だな。」と虎三郎は言つた。孫は何か考へながら歩いてゐるので、平生の口の輕い愛憎の好いに似合はず、返辭をしないので、虎三郎はチラと背後を振返つた。木刀を差して、尻を端折つた三十を越したばかりの仲間は、右の手に主人と己れとの辨當を包んだ風呂敷包をさげて、ぼんやりと歩いてゐる。

虎三郎は二十三歳であつた。水天宮の有馬家の定府の士の伜で、毎日赤羽根の屋敷から、愛宕下にある淺山越前流の達人津田武太夫の道場に通つて、目錄以上を取つてゐた。脊のすらりとした青年で、八丈島の産と言はるゝ一分許の篠の割竹を編んで造つた島笠と言ふのを深々と冠り、定紋の付いた羽二重織お納戸茶の小袖に川越平の袴を穿き、黒羅紗の柄袋をかけた刀を二本落し差しにしてゐた。

傾斜の緩い切通坂を上つて行くと、見付が土場小屋の立ち並んだ青瀧寺の横手で、路は左に折れ曲つて見える。其所の右側の隅には、時の鐘の鐘樓が、青銹を吹いた大きな釣鐘を抱いて立つてゐた。路の左側は松蓮院、それに並んで鑑蓮院、その鑑蓮院の中程から路は又

折れて、瑞蓮院、惠松院など言ふ院坊となつてゐる。淸瀧寺はその惠松院と向合つてゐた。惠松院の續きに光實寺と言ふ寺があつて、其所の小門を涅槃門と言つて、本山の僧侶で密に肉食したりした者は、乾魚(ひもの)を口に啣へさし、野良犬を追ひ出すやうにして、その門から追ひ出してゐた。

土場の小屋には客の群がる時刻であつた。太皷や三味線の音に交つて、客を呼ぶ木戸番の聲が入り亂れて聞えた。拍子木の音もした。仲間を連れた勤番の田舍侍、日傘をさした町家のお神さん、頭巾を冠り手に珠數を持つた福々しい老人、腰衣をつけ檜木笠を著た僧侶、包みを首にかけた丁稚、色の蒼白い手代らしい若者、菅笠脚袢掛けの田舍爺親と言つた風に、さま〳〵な風俗をした客が、木戸口を出たり入つたりした。

虎三郎主從も、平生のやうに、その人通りの中に交つて、小屋の內を覗きながら、輕業小屋の次の義太夫小屋の前まで行くと、木戸口の腰掛けに腰をかけて、若衆髷に結つた面長の二十一二の綺麗な女が、揚羽の蝶の縫紋ある肩衣をつけて、客を迎へてゐるのが眼に注(つ)いた。當時の風習として、小屋の眞打ちとも言ふ者が、客の出さかる時刻を見計らつて、斯うして木戸に立つて客を引きつけたものであつた。

女は虎三郎の背後の孫を見ると、莞爾として、『今お歸り、』と言つた。虎三郎にはその顏が、この上もなく婀娜(あでやか)に見えた。『あア今お供して歸つてゐる所だ。何時見ても姉さんの小屋は、好い景氣だな。』と孫は言つた。『あゝお蔭樣でね、』と言つた女は、木戸口に來た三尺帶を尻下りに結んで手拭を肩にした若衆を迎へて、木戸錢を取つてゐた。小屋の中からは三味線の音が聞えてゐた。

虎三郎は少し行き過ぎると、小さな聲で、『孫、あれは何んだ。』と聞いた。『あれは藤間照吉つて言ふ女太夫で、あすこの看板で御座ります。好い女でしよう、藝は大した事はないが、一番容姿(きりやう)が好いから、皆に騷がれますよ。若旦那も一度買つて御覽なさい、なか〳〵面白う御座りますよ。』と孫は言つた。孫は千住の生れ

で、もう十年も其所此所の仲間部屋を渡り歩いて、斯うした社會の事情には明るかつた。

　小屋のある所を過ぎて青瀧寺の前に行くと、虎三郎は孫と並ぶやうになつて、『買ふつて、女太夫を買ふには、何うするんだ。』と言つた。彼は客が土場藝人を連れて行くと言ふ事は聞いて知つてゐたが、何うして之を自由にするか、その手續きを知らなかつた。

『なに、茶屋か料理屋へ連れて行くか、女の家へ行くかすれば、それで宜しう御座ります。』

『お前は買つた事があるか、』

『一二度買つた事があります。』

『照吉も買つた事があるか、』

『いや、私の買つたのは、七八年も昔の事で、照吉なんかではありません。』

　光寶寺の前を過ぎて金地院の前に行つた時、虎三郎は又聞いた。『孫、女太夫は幾何かゝるんだ。』

『一分もあれば澤山で御座ります。』と言つた孫は、『まア、どんな者か一度買つて御覧なさいまし。』と附け加へた。

『左樣だね、』と虎三郎は輕く言つたが、心は嬋妍な照吉の笑顔に引きつけられてゐた。

二

　暮六時の鐘が鳴つた。夕飯を濟ました虎三郎は、愛宕下の田村の屋敷内にゐる友達の所へ行くと言つて、孫に提燈を持たして屋敷門を出た。最う本門を鎖す時刻であつた。虎三郎主從の背後から、袴を短く履いた門番が出て來て、左右に開いてあつた黑い大きな扉をギイと合せて、貫をゴトンと喫はした。日の落ちたばかりの空は、その上に碧く澄んで、暖で物惱しい夕暮であつた。

　二人は赤羽根橋の上に立つた。虎三郎は待ちかねてゐたやうに、『孫、女太夫を呼んでみたいな。』と言ひ出した。

　孫には若旦那の心が讀めた。從來夜外出する事があつても、腕自慢の彼は、何時も一人で出掛けてゐたのに、今晩に限つて一所に連れて出たのは、橋渡しさせよ

と言ふ謎であらうと思つた。同時に橋渡しをして遣れば、幾何かの小使に有り付けると思つたので、『お呼びなさいまし、譯はありません。』と自分の事のやうに乘氣になつて言つた。一つは若旦那が羞澁んで、折角思ひたつた事を引込めるのが惜しいやうに思はれたからでもあつた。

『まだ小屋に居るだらうか。』

『もう小屋には居りません。今からなら住宅に行くが宜しう御座ります。客に呼ばれて行かなければや、屹と住宅に居りますから。』

『お前は住宅を知つてゐるのか。』

『へイ、私は御屋敷にあがる前は、古川の土州の中屋敷に居りましたが、彼の女は、直ぐ前の長屋にお袋と一所に住んで居りますから、好く存じて居ります。』

『左様か、では之から行つてみやうか、』と言つて、一寸間を置いて、『何だか變だね。』

『何も變な事は御座りますまい。賣者に買者で御座ります。金さへあれば大威張りぢや御座りませんか、』

『まさか左樣も行くまい。』と虎三郎は笠の中で微かに笑つた。彼の腰にしてゐる天鵞絨の前提げには、一兩位は這入つてゐた。

二人は後戻りをして、有馬の屋敷の前を古川の流れに添うて上つて行つた。夜は最う眞暗に暮れて、闇の底に水の音が微かにするのみであつた。

土州の中屋敷は、直ぐであつた。孫は先に立つて、屋敷の向側に軒を並べてゐる町家の唯ある路次を這入つて行つた。その突當りは五軒長屋になつてゐて、照吉の家は、手前から二軒目であつた。入口には御神燈も釣してあつた。

孫は軒下に虎三郎を立たして置いて、格子戸を開けた。

内から足音がして障子を開けた。小さな老婆の顏が御神燈の火に浮き出て見えた。

『お母さん、乃公だよ、孫だよ。』と孫は言つた。老婆は漸く氣付いた。『おや、土州さんにゐなすつた孫さんか、暫くだつたね、お上りよ。』

『今晩は若旦那のお供をして來たんだが、姉さんは家かな。』

『お湯に行つてるが、もう追付け歸つて來るよ、お上りよ。』と言つて孫の頭越しに戸外を透すやうにして、

『何うぞお上りなさいましよ。』

二人は奧まつた部屋に通された。一方が中敷になつて、其所は障子の外に小さな欄干が著いてゐた。古川の水はその下を靜に流れてゐた。虎三郎は薄赤い行燈で火で、色の白い眉の濃い顔を見せて、モヂ〳〵してゐた。老婆は箪笥の上から艶かしい座蒲團を取つて勸めた。

老婆が出て行くと、虎三郎は小さな聲で、『孫、これから何うしたら好いんだ。』と聞いた。

『私が好いやうにしてあげますから、貴君はそのまゝで平氣でゐらつしやるが宜しう御座ります。』と言つた孫は、今の中に小使も貰つて置かうと思つたので、『それではお金を預つて置きましようか。』

虎三郎は腰の前提げを拔いて、中を覗くやうにして一分金を二枚取つて渡した。『これで好いのか、』

『これは二分で御座りますな、少し多いやうで御座りますが、初めての事ですから、皆遣りましよう。』

虎三郎は心付けの事に氣が付かないので、前提げの口を締めた。孫は周章てて、『照吉が歸つたなら、私がゐては邪魔になりますから、私は若旦那のお歸りまで、其所らあたりを迂路付いて、夜鷹の姉さんでも戯弄つて居ります。』と言つて謎をかけたが、虎三郎には通じない。『左様か、では十時までに歸らうなア。』

『なに十時でなくつても、何時でも宜しう御座ります。』

『でも門限は十時ぢやないか。』

『なに、私が何時も門番に心付けがしてありますから、何時でも宜しう御座ります。』

『左様か夫れは知らなかつた。ではゆつくり歸らう、お前は其間、夜鷹を買つてゐるのか。』

『いや、金が無いから買ひは致しませんが、若旦那のお歸りになる頃まで、戯弄つて居ります。』

虎三郎には孫の謎が漸々分つて來た。『夜鷹を買ふのに、幾何かゝる。』

『百もあれば蕎麥もたべられます。』

『左樣か、では百文あげやう。』と言つて虎三郎は、一度締めた前提げの口を開けて、天保錢一枚を出して、孫の手に渡した。

其所へ格子戸を開ける音がして、照吉が歸つて來た。

『お母さん、お客さん、』と言ふ聲がした。

孫は天保錢を袂に入れ、二分を掌に入れて出て行つた。虎三郎は獨りになると、襟をかき合せたりした。勝手の方では、孫の聲と老婆の聲とが聞えた。

照吉が靜に這入て來た。派手な縞物の南部縮緬の小袖に、繡模樣のある黒繻子の帶をゆるく締めてゐた。晝間の厚化粧をお湯で落して、口紅ばかりした顏は、輪廓に柔らか味と暖か味とを添へて、晝間よりも親しみのある美しさであつた。虎三郎は極まりが惡いので、その顏を眞正面に見る事が出來なかつた。

女は客の取扱ひになれてゐた。『先刻は耻かしい所をお目にかけました。』と言つたりした。

老婆が廣蓋に二品三品の肴を添えて、酒を持つて來た。

『さアお一つ。』と言つて女は盃を勸めた。虎三郎は極り惡さうにして、盃を唇の傍に持つて行つたが、滅多に酒を飲んだ事のない彼は、二三杯飲むと少し醉つて來た。彼は女に盃を遣るやうになつた。二人の話は漸く榮えて行つた。

女は起つて平床の薄暗い所から、三味線を持つて來て、爪彈しながら何か中音で歌ひ出した。行燈の火の微かにさした顏は、酒に熱つて濃艶に見えた。虎三郎は片手を疊に突いて、うつとりとしてその顏に見入つてゐた。女は氣が付いたやうに、『お苦しう御座りますか。』

『あゝ、少し醉つたやうだよ。』と虎三郎は有意と苦しさうな顏をして見せた。

『それでは少し横にお成りなさいまし。』と言つて三味線を片寄せ、平床の並びの押入から赤い小枕の付いた船底枕を出して來た。

三

その翌日から虎三郎は、愛宕下の道場へ行つても、稽古が身に入らない。直ぐに厭になつて切通にまで歸つて來て、照吉の小屋へ這入つたり、水茶屋に腰をかけたりして、その邊に日を暮すやうになつた。そして夜は三日にあげず古川の照吉の家にその姿を見せてゐた。

併し虎三郎の樂みは長くは續かなかつた。春が暮れて、花見に使つた緋毛氈を二階の欄干にかけて、強い太陽の光に晒らしながら、花見の日の酒宴を忍ぶやうになる頃になると、虎三郎は金に困つて來た。第一金を汚れた物として、その勘定を知つてゐると言ふ事さへ恥辱とせられてゐた當時の習慣では、金を作るに見當が付かなかつた。夫れに未だ部屋住の身であるから、僅に母の手から、種々の口實の下に少し宛取り出すより外に途がなかつたが、夫れも度々は言へない。夫れ故に數回照吉の許へ金を持つて行かないので、女の態度が冷かになつてゐた。虎三郎には夫れが苦しかつた。

彼は最う武士としての威嚴を保つ事も忘れて、ある日、道場の歸りに、孫に向つて聞いた。『孫、金を作るには、何うしたら好いだらうな、』

孫もこの頃、若旦那からの心付けがないので、大に不自由をしてゐる所であつたから、悦んでその言葉に耳を傾けた。『左樣で御座りますね、何か拂ひ下げる物でもありませんか、』

『拂ひ下げる物と言ふと、』虎三郎には合點が行かない。

『何か古道具屋に賣る品物でもありますと、』

『左樣か、古道具か、さア道具と言ふと。』

『何か金目になる黃金か銀かの細工物でもありますと、好い金になりますが、』

『左樣だな、黃金か銀の細工……』と虎三郎は考へた。奥の長持の中に、十四五本の刀があつて、その中には黃金の目拔や切羽などがあつた。彼は夫れを思ひ出した。『黃金の目拔や切羽などがある。』

『好い金になりますよ、澤山御座りますか、』

『そんなに澤山はないが、四つや五つはあるだらう。』

『一兩にはなりますよ。』
『左樣か、お前は夫れを賣る所を知つてゐるか。』
『土橋の傍に一軒知つた家があります。』
　二人は家に歸つて、虎三郎は玄關を上つた。來客があつて、父親は客間で、その客と何か話して笑つてゐた。母親はと見ると、臺所で下婢を相手にして、客に出すらしい料理を拵へてゐた。刀の金具を取り出すには復たとない時である。
　虎三郎の姿は、奧の襖の蔭に消えた。
　夕方になつて虎三郎と孫の二人は、切通を下りて行つた。四方は暮れて、人の居なくなつた土場小屋は、眞暗な中に淋しく立つてゐたが、路の兩側には、何時ものやうに夜店が出て、莚の上に道具を並べた大道商人が、手行燈の火を擁して、前を通る客を待つてゐた。白桟留の帶を結んだ夜鷹が、その前を縫うて歩いて、客になりさうな仲間姿の者を探してゐた。孫は虎三郎の背後から歩きながら、擦れ違ふ夜鷹の白粉をつけた顏をジロ〳〵見た。

　それから一時刻ばかりして、虎三郎は一人になつて、照吉の家の格子戸を開けてゐた。
『どなた。』と言つて來た老婆は、虎三郎と見ると、『おや若旦那で御座りますか。』と言つたが、奧の方を向いて、『照ちやんや、若旦那ですよ。』と不精無精に言つた。
『左樣。』照吉も冷やかな氣乘りのしない聲で返辭をしたが、直ぐには出て來ない。
　虎三郎は非常に不快を感じたが、怒る氣にはならないで、早く金のある事を知らしたいと思つた。で、急いで上らうとしたが、老婆が上口に立ち塞がつて上れない。仕方なく庭に衝立つてゐると、やつと照吉が出て來て、『ゐらつしやいまし、もう少しで、行違ひになる所でしたが、丁度好かつたのよ、ねえお母さん。』と母に向つて何か意味のありさうな事を言つて、『まアお上りなさい。』
　虎三郎はやつと上つて、女の背後から歩きながら、
『何所かへ行く約束でもあるのか。』と聞いた。
『お店の旦那に呼ばれてゐるのですよ、まア、好いか

ら、何うぞ。』

照吉は何時もの部屋へ虎三郎を連れて行つて、蒲團を勸めた。虎三郎は金を持つてゐる事を知らしたいので、座りもせずに、『お前が出かけるなら、乃公も歸つても好いが、今日は少し金を持つて來たから、お母さんに遣つてくれ。』と言つて前提げを拔いた。

『左樣、すみませんわねえ。』

虎三郎は二分金を四五枚出して、照吉の手に乘つけた。

『眞箇にすみませんわねえ。』照吉の眼は活々して、態度がみる／＼中に變つて行つた。『ぢや、一寸待つてゐらつしやい、お母さんに見せて、何んとかさせますから、妾は厭ですけれども、年寄りはやかましう御座いますからね。』

虎三郎は安心して腰を下ろした。照吉は勝手の方に行つたが、やがて引返して來て、『お母さんに左樣言つて、行くのを斷はらせましたから、何うかゆつくりして下さいまし、年寄りはお金さへ見せると、何うにでもなりますからね。』と言つて笑つた。黒い大きな眼をした女の媚に、虎三郎は又引付けられた。

四

虎三郎はその後も、孫に數へられて小道具を賣り拂つたが、そんな金は直ぐ無くなるので、その半月ほどは、照吉の家にも行かなかつた。同時に道場の方へ行く事も廢したので 彼は日々町から町を當て途も無く歩いて行つた。

その晩も彼は一人で歩いてゐた。高く底深く見える空には、星が薄赤く光つて、風は袴の裾をヒラ／＼と吹いてゐたが、何だか蒸し暑い妙に人の氣を靜まらさない夜であつた。

氣が注いてみると、飯倉四筋の葉茶屋と紙屋とを兼業にしてゐる萬屋と言ふ店の前を歩いてゐた。入口に屋號を書いた行燈を點して、縄暖簾を垂れた店の中には、客の聲もしてゐた。半紙を一折さげた若いお神さんは、今しも暖簾を潜つて店を出て來た所であつた。

虎三郎も鼻紙が無くなつてゐるので、一帖買つて行

く氣になつて、引返して還入つて行つた。法念頭の品の好い、薩摩の甘飛白を著た老人が、店先に腰をかけて、番頭が秤で茶を量るのを見てゐた。傍には點けて來た提燈を疊んで、蠟燭を燃やしてあつた。

番頭は大きな茶壺の中から、茶の葉を摑み出して、秤皿の上の袋に入れながら、行燈の光で、秤目を見い見いして、『三十目で御座りましたな。』と言つた。

『左樣だ三十目だが、量りを好くして下さいよ。』と老人は言つた。

『それはもう、これ、こんなに好くして置きます。』と最後に茶の葉を少し足して、秤尻をピンと上げて見せた。

老人は承知して微に頷いた。番頭は袋の口を折りながら持つて來た。老人は懐から天鵞絨の財布を出したが、その重みのある尻を疊の上に置いて、中から文久錢を二つ三つ出して番頭に渡した。

庭に立つてゐた虎三郎の眼は、その財布にぴつたり付いて動かなかつた。うつかりしてゐると番頭が、『何をさしあげます。』と言つた。

彼は驚いて、『半紙を一帖貰はふか。』と鷹揚な口の利き方をしたが、言葉の何處かに周章てゝゐる所があつた。

番頭が見付の臺の上から半紙を持つて來た時には、老人は片手に提燈を持つて、暖簾を潜つてゐた。番頭は虎三郎に半紙を渡しながら、『毎度有難う御座ります。』と言つた。

虎三郎は半紙を受取つて、數文の錢を拂ふと、老人は後れまいとして、急いで其所を出た。

老人の提灯は、片町の上杉屋敷の方へ靜に行つてゐる。虎三郎の足は、その方に向つて行つた。淋しい屋敷町の事とて、未だ宵の口であるけれども、人通りは絶えてゐた。虎三郎の頭に、この時恐ろしい考が浮んだ。

老人は上杉の屋敷の角を曲つて、麻布の市兵衛の方へ折れやうとする我善坊の出鼻まで行つた。老人の背後には、惡漢がつけてゐたが、少しく遠くなつた耳に

は、その跫音が分らなかつた。と、惡漢の手に氣味惡く光る物が閃いた。老人は仰向けに倒れて了つた。提灯の火はフッと消えた。その消える拍子にチラ〳〵した微かな光は、血刀を持つて衝立つてゐる虎三郎の姿を照らした。

虎三郎は老人の著物で血刀を拭つて、鞘に納めた後に、老人の懷に手を遣つた。懷の中には彼の求める天鵞絨の財布があつた。

その夜、老人の歸りの遲いのを氣遣つて、提灯を點けて探しに來た二人連の若い男は、老人が右の肩先から左の脇下にかけて、只一刀に斬られて死骸となつてゐるのを見付けた。

五

老人の財布の金は二十餘兩あつた。虎三郎はその金を持つて、照吉の家に入浸るやうになつた。時とすると二人で、小屋の放ねから芝の神明前の出合茶屋に行つて、酒を飲んだりした。

神明には天保の改革まで、增上寺の僧侶を客とする蔭間茶屋が繁昌してゐたが、禁令後、其所は男女媾曳の場所となつて、出合茶屋と言はれてゐた。その席料は一分位であつた。虎三郎は、その出合茶屋の奥で、照吉と夜を更かした。そして金が無くなると、夜、廣尾、六本木、三河臺のあたりへ忍んで行つた。

ある夜、照吉が、小屋許に關係のある客に連れられて、汐留の船宿に行つた事があつた。虎三郎は仕方なく一人でぶら〳〵と神明の方に歩いて行つた。最も秋口で、冷々する涼しい風が、海の方から吹いてゐた。月はあつたが空が曇つて通りは暗かつた。鳥居の前に行つてみると、赤い提灯をつけた蟲賣が、其所にも此所にも蟲籠を据ゑてゐた。蟲は聲々に鳴いてゐた。松蟲鈴蟲の朗らかな聲に交つて、轡蟲が騷がしい聲を立てゝゐた。鳥居の内には、夜店商人の小さな燈火がぽつぽつ見える。

虎三郎は何だか淋しいので、行きつけの大和屋と言ふ茶屋へ上つて、女中を相手にして、一杯飲まうと思

つたので、鳥居の前から引返さうとした所で、背後から來た二人の若い侍に肩を叩かれた。

振返つてみると、松崎金太郎、松田伊三郎と言ふ津田の相弟子で、この二人は豫てから、神明あたりの茶屋を飮んで歩るくと噂のあつた者であつた。

『これから出合茶屋で首尾しようと言ふ寸法ですかな。』と松崎が笑ひながら言つた。

『佐久間氏は、この頃めつきりお痩になりましたね。』と松田も冷やかしに懸つた。

虎三郎は驚いたが、言ひ譯をしては面倒と思つたので、唯笑つて聞いてゐた。

二人は虎三郎と照吉の事を知つてゐた。二人で交る交る虎三郎を冷かしたが、『お邪魔をしては氣の毒だが、一晩位二人に付合つても好いだらう。』と松崎が言ひ出した。

虎三郎は氣が進まないので、『今晩はこれから金杉の親類に行く事になつてゐるから、この次にしよう。』

『その親類が何う言ふ親類かな。』と松田が言つた。

虎三郎は聞えない風をして、二人と離れて歩いた。二人も笑ひながら何か言ひ言ひして、向ふの方に行つて了つた。

虎三郎は最う大和屋に上る氣が無くなつたので、切通の方に歸つて來たが、ふと何か思ひ出して、赤羽根の方に歸らずに、先づ六本木の方へ向つて歩いて行つた。

八時過ぎになつて、虎三郎は江戸見坂に來てゐた。

坂の下から提灯の火が見えて來た。虎三郎は左側にある土堀に添うて待つてゐた。首に小さな風呂敷包をかけた四十前後の肥つた商人が、着物を尻端折つて、白い股引を露はしてゐた。虎三郎は三四間手前から堺を離れて、坂を下りて行く人の風をしながら、擦れ違つて少し遣り過ごして置いて、不意に背後から切り付けた。商人は右の肩先から左の脇下かけて、一刀に切り割かれて、聲を立てる間もなく打ち倒れた。手を離れた提灯は、轉んで行つて、メラ〳〵と燃えた。

虎三郎は刀の仕末をして、靜に懷に手を入れた。指

先に觸れた財布は、可成りの重味があつた。彼は財布を取上げて、仰向くやうにして、雲際から滲み出る微かな月の光に透して、その多寡を吟味して後に懷に入れ、着物の塵を拂つて、坂上の方に行かうとした。

『おい、その割前に預からうぢやないか。』と言つた者がある。

虎三郎は僄へ上つた。刀の柄に手をかけて、聲のした方を見た。黒い頭巾を着た侍が二人立つてゐた。

『佐久間氏、驚かなくつても好いよ、二人だ二人だ。』

と言つて寄つて來た。それは松崎と松田であつた。二人は酒色の料に窮して、言ひ合はせて辻斬に出かけた所が、期せずして虎三郎と行き合つたのであつた。

その夜から三人組の辻斬强盜が出來上つた。

六

虎三郎は照吉の家で酒を飲みながら、照吉の歸るのを待つてゐた。彼はその頃、切通の方へ出かけて行つて、小屋の放ねるのを待つて、連れ立つて神明に行くか、それでなければ、照吉の家に出かけて行つて、その歸るのを待つかしてゐた。

併しその日は、平生の時刻になつても照吉は歸つて來なかつた。又客に連れられて何處かへ行つたらしい。女を愛するばかりに、暗黑な世界を作つてゐる虎三郎は、自分を此樣にまでして置きながら、それを思はないで、呼ぶ客があれば、氣兼もせずに小鳥のやうに自由に飛んで行くとは薄情にも程があると思つて、女がこの上もなく惡く思はれて來た。彼は靜としてゐられないので、時々杯を投げるやうに置いて、中敷の所に行つて立つたり、欄干に肱を凭せて考へ込んだりした。戸外には明るい月が出て、靜かな晩であつた。眼をやるともなしに欄干の下を見ると、狹い川の水にも月の影があつて、綺麗に見えた。向ふの川縁を通る人が月の光の下にチラ〳〵見える。

『お母さん、何時歸るか分らないから、今晩はもう歸ります。』

虎三郎は銚子の暖かいのを持つて來た老婆に向つて言つた。最も八時に近かつた。老婆も持てあましてゐ

た。『いや、もう歸りますよ、もう少し待つて遣つて下さいまし、もう屹とかへります。』

　虎三郎は欄干を背にして、中敷に腰をかけてゐた。

『さアどうだか、又汐留へでも行つたら、一晩歸らないでしよう。』

『なに、彼の時は、小屋許の寄合ひで行つたから、宿つて來たもの丶、他ではそんな事はありませんよ、もう直ぐ歸ります。まア暖かいのを一つ。』

　老婆は膳の前に座つて、銚子を構へてゐる。虎三郎は夫れを知らぬ顏で見てゐる譯に行かなかつた。座に返つて一杯受けた所で、格子戸が開いた。

『それ歸つた。』と言つて老婆は急いで行つた。

　虎三郎は苦い顏をして、盃を嘗めてゐた。照吉が這入つて來て、『隨分お待せして、』と聞いた。

　虎三郎は默つて、澄して酒を飲んだ。照吉は笑ひながらその傍にぴつたり座つた。『怒つてゐなさるの、』

　虎三郎は未だ默つてゐた。彼の不滿は未だ收まらなかつた。これを見ると照吉の感情が反れて行つた。照吉は馴染の客と神明に行つて酒を飲んでゐた。默つて澄まして、戸外の方に顏を向けた。

『馬鹿ッ』と言つて虎三郎は、盃を女の横顏を目かけて投げつけた。盃は肩に當つて、疊の上にひつくり返つた。照吉は驚いて眼を睜つたが、又横を向いて默つてゐた。

　虎三郎は最う忍へられなかつた。突然拳をあげて、その横顏を撲つた。『何をなさるんです、何をッ』と女は狂氣のやうになつて男の腰のあたりに武者振り付いた。髷の元結がハゼて、若衆髷が亂れた。

　虎三郎は女を振拂つて、中敷の所に行つて、『何處まで乃公を馬鹿にするんだ。乃公は手前にこれ程まで馬鹿にされるとは知らずに、今日も苦心して金を持つて來たんだ。そんな薄情な奴に呉れてやるよりは、斯うする方が晉でもするんだ。』と言つて懷から財布を引出して、川の中目がけて投げた。照吉は呆氣に取られてゐた。

　月の光は益々冴へてゐた。この時向うの川縁に立つ

て、この狀を見てゐる者があつた。最う五十前後の痩せた男であつた。『はてな、』と言つて、男は首を傾げながら中敷の上に半身を露はしてゐる虎三郎の姿を透し透してゐた。

七

虎三郎の家では、虎三郎がこの頃の出歩きを非常に心配し始めた。虎三郎が照吉の家で癇癪を起してゐる時分も、家では父親が、今しも歸つて行つた客から聞いた辻斬の話から、我子の行を聯想して、母親に話しかけてゐた。

『この頃麻布から赤坂にかけて、辻斬が度々あつて、それが皆一刀に斬つた袈裟懸の切口である上に、懷中物が無くなつてゐるので、何でも腕に覺えのある武士が、金に詰つて遣る仕業らしいと言つて、嫌疑が家中の放蕩者に懸つてゐると言ふ事だが、まさか虎三郎でもあるまいと思つてゐるが、併し何時邪道に踏み込まないとも限らない。』

父親は煙草を喫み喫みして言つた。虎三郎の事に就いては、母親の方が初めから胸を痛めてゐた。それは虎三郎が切通の土場藝人に關係してゐると言ふ噂を下婢の口から聞いてゐるからであつた。併しそれは夫の前では言へなかつた。

『辻斬の事なら私も聞いて居りますが、あれに限つてそんな大それた事をする子供でないのは、私がお受合ひ致します。』

『私も虎三郎だとは思はないが、何うも虎三郎のこの頃の身持ちが私に分らない所がある。』

虎三郎の夜も晝も外出ばかりして、家にゐても落ち付いた所がなく、何となく感情の荒んで見えるのは、第一に母親の不安を感ずる所であつた。『それでは一つ杉村樣にでもお願ひして、彼の腹を探つて貰ひましようか、』

翌日、母親は仲間の孫を連れて家を出た。虎三郎は自分の部屋に這入つて、寢不足の苦しい身體を橫にしてゐた。

正午近くなつて母親は歸つて來て、虎三郎と一所に

晝飯の膳に向つた。

飯の後で虎三郎は、又部屋に寢轉んで、昨夜の事を考へてゐた。それは嵐のやうな憤激の後に起つた樂しい繪書であつた。亂れ髪になつて上氣した女の紅い唇の色は未だ生々として眼に殘つてゐた。

『虎三郎さん、』と聲をかけて、三十前後の小肥のした童顔の侍が這入つて來た。

虎三郎は驚いて起直つた。杉村と言ふ親類續きの者で、虎三郎とは津田の同門と言ふ關係もあつた。

『これから私の家へ遊びに行かうぢやないか、』と杉村は言つた。

虎三郎は杉村の眼の鋭い事を知つてゐるので、照吉と關係が出來て以來は、なるべく避けて逢はないやうにしてゐる所であつた。虎三郎は返辭に困つた。併し厭とは言へなかつた。

杉村と虎三郎の姿は、やがて黄ろく光る西日に照されて有馬家の門を出た。空は高く碧々と晴れて、五重塔の上あたりで、一羽の鳶の輪を書いて舞つてゐるのが、ふと仰いだ杉村の眼に見えた。

八

杉村の家は金杉の裏通りにあつた。古い借家の庭は荒れて、竹垣に絡んだこぼれ種の朝顔は、最うすつかり線が褪せてゐた。

杉村と虎三郎とは、その庭に面した座敷で差向つた。

『虎三郎さんに聞きたい事があるが、貴君は切通の女太夫に懇意な人があると言ふぢやないか。』と杉村は何時ものやうに打ち解けて言つた。

『懇意と言ふ程でもないが、一寸知つて居ります。』と虎三郎も安心して答へた。

『何と言ふ女だね。』

虎三郎は他の女の名を言はふとしたが、知つてゐて有意と聞いてゐるかも知れないと思つたので、『照吉と言ふ女です。』

『それを買ふには、幾何位金がかゝる。』

『さア、私は別に買つた事はないから、それは知りません。』

「併し酒位は一所に飮むだらう。」
「それは飮みます。」
「女と酒を飮むには、幾何位かゝる。」
「一朱か二朱あれば澤山です。」
「それでも毎日だと大變なもんだね。」
「左樣ですなア、」
「近頃麻布あたりで辻斬があつて、懷の物を取ると言ふ事だが、あれなども、矢張り何かにする金だらうぢやないか。」
　虎三郎は何か知ら深い深い所へ引入れられるやうに感じて恐れを抱いた。『左樣ですなア、矢張り必要な金でしようよ。」
「それに皆斬られるものも、斬られるものも、袈裟懸だと言ふぢやないか、腕に覺えのある者らしいね。」
「何者でしよう。」
「私は貴君ぢやないかと心配してゐる。」と杉村は笑ひながら言つた。
　虎三郎は心が顫へた。併し杉村の態度が平生と少しも變らないので、稍々安心した。『いや、私ぢやないです。」
「まさか貴君ぢやないだらうが、近頃貴君の身持ちが惡いから、お父さんもお母さんも心配してゐる。」
「以後は謹みます。」
　杉村は何か思ひ出したのか、勝手の方を向いて下男を呼んだ。二十五六歳の下男が次の室から顏を出した。
「何うだ湯は沸いたか。」
「もう沸きました。お這入りになりますか。」
「左樣だ。這入つてから直ぐ酒にするから、酒お早く構へてくれ。」
　下男が引込むと、杉村は虎三郎に向つて、『ぢや一つ這入つたら何うだ。」
「後で戴きますから、貴君から何うか。」
「好いぢやないか、貴君はお客さんだ。」
「まア何うぞ、私は後にします。」
　虎三郎が這入らないので、杉村は先づ座を立つた。
虎三郎はのび〳〵した氣になつて、待つてゐた。間も

なく杉村は顔を艶々さして上つて來た。
　虎三郎は置いてある大刀の傍に寄せて小刀をはづし、丸腰になつて湯殿の方に行つた。杉村は虎三郎の足音がしなくなると、虎三郎の刀の傍に躙り寄つて、その大刀を取上げて、半分ばかり拔いて、一眼見た後に、全身を拔いて、刃を反へして睨むやうにして見た。拭つても拭つても拭ひ切れない生々しい血曇が斑らにあつた。切先にも三所ばかり毀(こぼ)れてゐる所があつた。確に新らしく人畜を斬つた證據である。杉村は靜に鞘に收めて虎三郎の上つて來るのを待つてゐた。
　虎三郎は下男に口を利きながら、部屋に這入つて來た。杉村は手にしてゐた虎三郎の刀を再びスラリと拔いて、腰を下ろさうとした虎三郎の眼の前に差出した。
「虎三郎さん、この刃が見えるかな。」
　虎三郎の顏色がみる〳〵變つて來た。彼は頽れるやうに坐つて、「一言もありません。」と言つて兩手を突いた。
　杉村は刀を鞘に收めた。「斯うなつては仕方がない、愚圖々々してゐては兩親に繩をかけるやうになる。これから直ぐ、何所へも寄らずに、久留米の方へ武者修業に行くが好い。」
「お言葉に從ひます。」と虎三郎は俯向いたなりに言つて、顏をあげやうとしない。

九

　杉村の注意で、虎三郎は我家へも歸らず、その足で久留米に向けて出發する事になつた。杉村は持ち合せの旅費を遣り、葛籠(つゞら)から己れの旅着を取出したりした。
　その夜は半時位の宵闇があつた。虎三郎はこの闇に紛れて、市中を離れる積りで、黑羅紗の襟の付いた半合羽を着、檜笠を冠つて玄關を下りた。
「虎三郎さん、必らず路寄りをしないやうに、好いかな。」と杉村は弟にでも言ふやうに言つて聞かせた。
　虎三郎は涙を滴して頷いて、其所を出ると、大通りを品川の方に向つて歩いた。右の手に點した旅提灯の火は、佗しくほつかりと身のまはりを照してゐた。
　札の辻に行つた所で、虎三郎は照吉に會はずに行く

のが殘念になつて來た。惡事が露見してゐると言ふでもないから、一寸位寄つた所で、何の事もないだらう、それに今別れたなら、二度と會ふ機會があるやら無いやら分らない女である。染々顔も見て行かうと言ふやうな心になつて來ると、彼の足は、向くともなしに札の辻から右に折れて行つた。

その日の朝の事であつた。照吉の家では、照吉が小屋に出かけた跡で、老婆が臺所の仕末をしてゐると、格子戸をガラッと開けて、「お母ア居るのか。」と言つて這入つて來た者があつた。

老婆が出てみると、痩せつぽちの皮膚が澁紙色をした五十前後の男であつた。表面は屑屋で、岡ッ引を本業としてゐる屑傳(くづでん)と言ふ者であつた。

「おや、これは親方好うこそ。」と老婆は愛憎好く迎へた。

「相變らず繁昌で結構だな、時に、照坊は未だ居るかね、」

「今、出かけた所ですが‥‥」

「一寸聞きたい事があつてね、いや、お母アでも好いよ。」

「おやお上りなさいよ。」

屑傳は老婆に隨いて、勝手の長火鉢の傍に行つた。老婆は氣を利かして、茶碗に冷酒をついで出した。屑傳はそれを飲んで、赤い吹出物のした鼻の上をチョイチョイ擦りながら、小聲で何か言ひ出した。老婆は時時驚いたと言ふ表情をして見せた。二人の話は半時ばかりも續いた。老婆は三度ばかり屑傳の茶碗に冷酒を滿たした。

夕方になつて照吉が歸つて來ると、老婆は待ち構へてゐて、照吉の耳に何か囁いた。照吉は眼を瞬つて聞いてゐた。

夕飯が濟んだ後にも、照吉と老婆は、勝手の長火鉢の前で、その事に就いて話し合つてゐた。

其所へ虎三郎が這入つて來た。二人は虎三郎の聲を聞いて、顔色を變へた。虎三郎は草鞋を解いて上つた。

「何うかなさいましたか。」と照吉は虎三郎の風體を見

て言つた。
『あゝ、急に、親爺の言ひつけで、上方まで行く事になつてね。』と虎三郎は出鱈目を言ひながら、何時もの部屋に這入ると、刀をはづし、合羽を脱いで坐つた。
『何時お歸りになります。』
『來月の末には直ぐ歸へる。』
照吉はその顏をまじ〳〵と見て、『本當、』と有意らしい聲で言つた。
『本當とも、』
『今晩直ぐお起ちになります。』
『今晩少しでも行つて置く積りだ。』
『朝になされても好いでしよう。』
『朝でも惡るくはないが……』
『では朝になさいましよ。』
老婆が顏を出した。『お母さん、若旦那が上方へゐらつしやる相ですから、今晩はどつさり御馳走をして下さい。』と言つた照吉は、老婆が頷いて出て行かうとすると、『お母さん、彼所へも、それ、ね。』と何か注意した。
二人になると、照吉は虎三郎の胸に顏を當てゝ、涙聲を出したりした。虎三郎も感傷的になつて、眼をうるました。
やがて老婆の構へた膳が二人の前に出た。虎三郎は脚絆を解き、寢卷になつてゐた。照吉は三味線を鳴らしたり、虎三郎の膝に縋つて、片手で酌をしたりした。
二人は何時になく醉つた。老婆は雨戸を閉めて膳を下げて行つた。照吉は身體をフラ〳〵さして床を延べた。そして、行燈を枕頭に直し、それから帶を解きかけた。虎三郎は簞笥に半身を凭せて、艶かしいその狀を見てゐた。
と、トントンと玄關口を叩く音がした。後暗い事のある虎三郎は、きき耳を立てた。老婆が返辭をして出て行つたが、直ぐ引返して來て、襖の外から、『照ちやん、一寸、』と呼んだ。照吉は帶を背後に引摺りながら出て行つた。
虎三郎は不安に襲はれた。照吉は直ぐ歸つて來て、

その耳に口をつけて、『小屋許の親方が醉ばらつて、お客を連れて來ましたから、一寸隱れてゐて下さいまし、直ぐ歸しますから。』と笑ひながら言つた。

虎三郎は心が靜まると共に、口の邊に微笑を浮めながら起き上つた。これまで逢つて都合の惡い客を避けて押入の中に隱れた事は、珍らしい事ではなかつた。照吉は音のしないやうにさうッと押入の襖を開けた。一間の押入の中には、二枚ばかりの蒲團が疊んだなりに入れてあつた。虎三郎はそれを枕にして横に寢ると、照吉は敷いてあつた夜着を持つて來て、その上にふはりとかけて、後を閉めた。

虎三郎は暗い中に眼をつむつて、どんな客が來るであらうかと耳を立てゝゐた。照吉が床をあげる音をさした。簞笥の引抽をガタ／＼鳴らす音もした。そして少し靜になつたかと思ふと、三四人の足音がした。で、虎三郎は大勢の客だなと思つた。

その内に一人が、『何處だ。』と囁くやうに言つた。虎三郎は驚いて身を起さうとすると、『御用だッ、』と言つた。彼は突然襖を蹴開いて飛び出した。府傅が手引した五六人の與力同心が、十手を振上げて待つてゐた。彼は前に立つた一人を突き倒して、自分の刀を取らうとしたが、既に照吉が隱してあつたので、其所らあたりには見えなかつた。虎三郎の投げた灰神樂がパッと立つた。

虎三郎はその隙に勝手に逃げて行つて、窓に足をかけると共に、引窓に飛付いて、ヒラリと屋根に出た。空には月が出て、屋根瓦が露にしつとりと濡れてゐた。捕吏の一人が追ひすがつて、その片足に組付いた。虎三郎の手は、その襟にかゝつた。捕吏は屋根から下に轉がり落ちた。虎三郎の姿は、フと消えた。

三田の魚籃坂に、罪人の逃げを張つてゐた與力同心の一團があつた。丸腰の虎三郎は、逃れ逃れして、その夜遲く、其所へ姿をあらはした。捕吏は折り重つて繩をかけた。

同時に松崎金太郎、松田伊三郎の二人も捕へられて、同じく一年の入牢の後、皆切腹を命ぜられた。

ヤドローヲ村の一日

片上伸

一

露曆四月廿七日、日本の五月十日、朝から薄曇りの空が夕方から小雨になつて、いかにも春らしい溫かな風が微かに吹くともなく前の並木のポプラの若葉を動かしてゐる。石を敷きつめた前の通りを行く馬車の蹄の音も心持ち濕りを帶びてゆるやかにカツパ〳〵と硝子窓越しに響いて來る。室の內の電燈の光りも何となく睡いてゐるやうなしめつぽいやうな晩になつた。プロトポポフのボリスへ電話をかけて、今夜夜更けに田舍へ行くから明後日の夕方でなくては逢へないが家(ウチ)にゐてくれるやうにと確めて置いて、晩食をすまして待つてゐると、八時頃にボリス、イワヌイツチが戶をたたいてやつて來た。プロトポポフのボリスもその友人の家が夏は田舍へ行くので、そこへ一緒に行つて暮して見てはどうかと勸めて吳れてゐる。ボリス、イワヌイツチも自分の村へ行つて見てはどうかといふのである。ボリス、イワヌイツチは苗字はニコリスキー君と言つて、モスクワ大學理科の出身で、今は工兵少尉である。二週間復活祭(パースハ)の休暇を貰つて西の戰線から歸つて來て、田舍の兩親の家からモスクワの町へ出て來て知りあひや友人の家をまはつてゐたのである。自分はつひこの間イワン、イワヌイツチの紹介で知りあひになつたばかりの人であるが、丁度そのニコリスキー君の嚴父が村の小學校の先生で、そこで一と夏を送るつもりなら、何とか萬事の都合を整へるやうにしようといふことから、ともかくもニコリスキー君が近く戰線へ歸る途中兩親の許へ立ち寄るのを幸ひ、先づその方へ一緒に行つて見ることになつたのである。

ニコリスキー君はまだ二十六七の背の低い青年である。極おとなしい好人物らしい感じのする人で、軍服や長い劍は着けてゐても、軍人といふ感じのしない人である。少し吃るくせのあるのが、その表情に殊に一種の善良稚醇な趣きを與へる。顏だちや手つきや背格好などの樣子が、いかにも秋田雨雀君を想ひ出させる。外套のまゝでは入つて來た彼は、少し青ぎつたやうな温い手をしつかりと握つて、待つたかと聞くから、いや、今食事をすませたばかりだ、しかし時間はどうか、僕はもう仕度はよいのだがと聞くと、なに十一時二十分の汽車だから、まだ大丈夫だ、少し話さうといふ。彼と逢つて話すのはこれが二度目であるので、例の如く日本の氣候や花の話が出る。自分はウラデーヲストックの軍團に屬するものであるから、戰爭がすんだら君のお國の近くへ行くことになる。そしたら必ずお國へ行つて見たい、行くにはいつの季節が一番よいか、汽船は何時間かゝるか、旅費はどの位か、ロシヤ語で用が辨ぜるか、日本人は皆英語なら知つてゐるだらうなどゝいふ。そんな問答をしてゐるうちに九時過ぎになつたので出かける。直ぐ近くの停留場から出る筈のBの電車が、生憎といくら待つても來ない。キンダーフスキー停車場までは電車でも小一時間はかゝるので、馬車屋は六ルーブルとか五ルーブルとか吹く。しかし小一時間も待つたが電車が來ない。馬車でアルバートまで行つてそこから十七番の電車に乘る。折柄小雨は霽れて、月が出て來た。電車が大學の前を通る頃、ニコリスキー君は思ひ出したやうに千九百五年の騷ぎの折の話をし出したが、それが段々現在の狀態に及んで、學生を軍務に召集することに就ての批評めいたことになつて、ふと氣がついたと見えて、あたりを見まはして、いやこの話は村へ行つてゆつくりしようと言つて默つてしまつた。

二

キンダーフスキー停車場でサンドヰッチを二つ三つ喰べて、西行の列車に乘る。客車には軍人が多くて、一杯である。やつと場所を見附けて僅かに腰をかける。

自分の隣りは軍人と田舍ものらしい老婦人、その向ひは女子大學生らしい若い女とその連れの女子中學生、その隣りは地主らしい田舍の人である。ニコリスキー君は別の場所を占領した。場所を占領してからまた下りて上官らしい士官と話してゐた。列車の窓の內と外、待合室の光景などが、さすがに多少戰くさい。三等の待合室には、たゝきの土間の上へ、夜更けか夜明けかに出る列車を待つてゐるらしい百姓や避難民が、二人三人あちこちに重なりあつて寢てゐる。革の匂や汗の匂ひが室內の溫氣で蒸すやうに鼻を撲つ。聖燭はあたりの色彩と不釣合ひに金碧燦爛たる大きな聖像を照らしてゐる。

客車の中は薄暗いランプしか點いてゐないので新聞も讀む譯には行かぬ。どうせ向ふへ着くのは早朝であるから、狹苦しくはあるが腰をかけたまゝで出來るだけ眠ることにする。筋向ふの地主らしい老人は發車すると間もなく鼾をかき出した。自分の隣りの老婦人は車が動き出すとかたの如く十字を切つて口の中で何か言つた。女子大學生らしいのはその連れの娘さんに頻りに話しかける。娘さんは言葉少なに聞かれたゞけ返事をしてゐる。自分は眼を閉ぢて眠らうとするがあまりよく眠られさうにもない。女子大學生が聲を低めてひそ／＼と話すのが何だか耳につく。何でも寄宿舍の樣子を尋ねてゐるらしい。その寄宿舍の舍監をしてゐる女の先生の噂をしてゐるらしい。さうするとこの女子中學生らしいのは寄宿舍にゐてこれから田舍の親の家へ歸らうといふわけらしい。それとも尼さんのやうにして嚴重に監督するといふ學院の女學生か知らんなどと思つてゐるうちに、自分もいつの間にか眠つた。

ふと眼がさめて見ると朝の四時近くなつてゐる。汽車はまだ走つてゐる。窓の外はもう明るくなつて兩側とも靑々とした草野の原である。時々遠くの森が靑く長く地平線を限つてゐるのが見える。シベリアの秋を見て、ペトログラードからモスクワへの雪景色を見て來た外に、ひろいロシアの野原の靑草の眺めを見たことのない自分の眼には、そしてモスクワの半年をまつ

白な雪景色の中で暮して來た自分の眼には、この窓硝子の範圍に限られて野原の青い色が不思議なもののやうに見えた。長い間探しあぐんで忘れたやうになつてゐたものを突然見つけたやうな、やつぱりこゝにゐたかといふやうな驚喜の情を感じた。しかし窓外の空は灰色に薄暗く、雲低く野を蔽うて、曉の夢のまだ深きことを思はしめる。青い野の若草のみが夙に目ざめて、朝露に濡れた葉を風にそよがせてゐるかと思はれた。窓外には遠くの村らしいものも見えず、唯うね〳〵とした廣野原が朝靄に斷續して、遠く迄も見えるかと思ふと、窓際まで迫る靄に全くかくれてしまつたりするばかりである。そのうちに段々外も明るくなり、森も窓近く迫り、青塗り丹塗りのブリキ屋根も朝の空氣にしめつて鮮やかに眼に入るやうになつた。二つ三つ小さな停車場を過ぎて、ニコリスキー君が身仕度をし出したので、もう近いかと聞くとこの次ぎだといふ。シャホフスカーヤの停車場へ着いたのは朝の五時過ぎであつた。

シャホフスカーヤはほんの田舍の小驛である。こゝで下車したのは自分等二人きりであつた。朝早いので汽車見物に出てゐる人たちもゐない。ニコリスキー君が馬車を雇ひに行つてゐる間、自分は二等の待合室へ入つて待つ。こゝの聖像も二等待合室のは三等待合室のよりずつと小さくて粗末である。これはどこの停車場でもさうである。この聖像の大小の差がやがてロシアの社會の上下に於ける信仰の狀態の相異を語つてゐる。ある人は農民の信仰を一と口に迷信と言ひ卻けてしまふかも知れぬが、それはたゞ、生れて齒揚子や齒磨き粉といふものを使つたことのない百姓たちが、聖像の前に跪いて、その聖像の足や手などに、交る〴〵熱いキッスをする樣子を見ただけでの話ならともかく、一人でもその農民と親しく話して見たら、迷信の形を帶びた彼等の信仰の力は容易に感知することが出來るであらう。お寺へ行つて見れば、自分のやうなものはいつでもその金碧燦爛、ゴテ〴〵と金銀珠玉で飾り立てた內部の裝飾や聖像を見て馬鹿々々しい感じが

するいかにも帝王の權威の表現といふ心持の勝つてゐることを感ずる。そして王のものは王にかへせと言ひたくなる。大抵は肥えて金持ちである坊さんたちを見ると、ロシアの知識階級が彼等を輕蔑するのも無理はないといふやうな氣の毒な感じもする。金殿玉樓ともいひたいお寺の中で、床(ゆか)に跪いて三拜する膏じみた汚ない無智な百姓たちを見ると、その對照を哀れにも滑稽にも皮肉にも思ふ。しかし自分の知る限り、暗流の如く底を流れる信仰の力は知識階級や富の階級にはなくて、農民の間に、迷信の、また迷信らしい厚い皮を着けて保存せられてゐるといへる。少くとも愚かなる汚らしき農民は信仰を恥ぢない。知識の上流の人々は、近頃ではお寺の前で十字を切るやうなことは殆んどない。そして十字を切り祈りを捧げるものも人前ではそ知らぬ顏をしてあまり神信心をするらしい様子を見せぬのが當世風であるといふことである。これがもし、福音書の意に導(したが)うて信仰を誇示せぬといふ心持ちからならば、ロシアのやうに人前で自分を現はし過ぎるかと思はれる風習の國ではたしかによくなつたとも言へるであらうが、これは寧ろ自分の信仰を何となく舊式なものとして恥ぢる心持ちから來てゐるらしい。しかしこんな事を言つても、自分は農民の肩を持つて無智の單純をひとへに讚美するわけではない。たゞ、知識階級の信仰が乾いて行く間に在つて、農民の心には稚醇な神を愛する熱情があると言ふのである。

待合室の聖像(イコナ)を見てこんなことを思ふ。窓の外を見ると、線路の向ふは野を隔てゝ長く續く白樺の森である。早朝の火の氣のない待合室は可なりに薄寒い。日本で着る冬服に冬外套では心持ち不足を感ずる程ではあるが、森の木も已に悉く芽を吹いて淺綠になつてゐる。澄んだ空氣の中に深い沈默を守つたまゝじつと黑ずんで遠く立ち並んでゐる松の林が、異國の寒驛の朝早く馬車を待つ心持ちを語つてゐるやうな氣がする。窓の直ぐ下には名も知らぬ雜草がもう二三寸も伸びてゐる。春が來たとはいふものの、花一つ咲かうとするでもない。春寒のうちに若葉になつたやうな具合であ

る。

一時間餘りも待つてやつとニコリスキー君が歸つて來た。今は丁度農繁の季節で、百姓は朝の三時過ぎから畑へ出て働くので、仲々馬車がない、やつと賴んで行つて貰ふことにしたが、二人前で八ルーブル呉れといふ、まア仕方がないから乘つて行かうといふ。こゝからヤドローヲの村までは十二露里(約三里)である。馬車といつても普通のイッヲースチクではなくて、タランタスといふのである。二人乘つては狹い程であるがともかくも無理に乘つて行く。宿屋やパン屋雜貨店などの五六軒立ち並んでゐるステーション前の小さな町を出拔けて街道(シヨツセー)へ出る。道は石ころの多いでこぼこ道で車の動搖は可なり烈しく、腰が痛い。まばらの人家を離れてしまふと、兩側は茫々たる草野で緩漫なうねりをなして遠くの森まで遙かに連なつてゐる。草は已に芽を吹いて寸も伸びてはゐるが、朝風(あさかぜ)の寒さに車の上では春らしい心持ちもしない。兩側の草野の間を眞直につゞく街道をガラ〳〵と走つて行く自分等の馬車が、いくら進んで行つても目標にして見る向ふの森の恰好は一向動いたらしくもなく、同じところに默つて黑く立ち續いてゐる。シベリアの汽車の窓から見た秋枯れの野原も隨分廣いと思つたが、自分が今かうやつて廣野原の眞中を車を走らせて見ると、急に自分の身體が小さく低くなつて、兩側の廣野が直ちに翼をひろげて天に接したやうな感じがする。

道はやがてだら〳〵坂を下つて行く。廣野の翼が尙更に迫る。どこを見ても近くに畑打つ百姓も見えない。どこの土地も耕耘せられぬ草野である。遊んでゐる土地がこんなにあるのかと思ふ。やがて一人の百姓婆さんが馬を追うて畑を耕してゐるところへ來た。それが廣い草野の單調を破る唯一の點景で、又唯一つの動くものである。何だかそれが大波の上へ浮び上つたやうな、天から降つて來たやうな感じがする。婆さんの被つてゐる赤地の風呂敷のやうな頰冠りの曲線や馬の背中の上は、卽ち直ちに茫々たる廣野の薄黑い線(ふち)であつて、それは卽ち直ちに漠々たる灰色の曉の天に連なる。

坂を下り切つて小村に出る。樫や白樺やポプラの若葉はもう大分出てゐる。まだ皆寝てゐると見えてどこも戸をあけた家はなく、人の子一人見えない。働くものは遠くの畑へ出かけてゐるのでもあらう。村といつても何だか廢村のやうな感じがする。黒く腐つたやうな藁葺きの百姓小屋が、可なりゆつくりした間隔を置いて盲目の如く並んでゐる。日本の田舎家のやうに庭らしいものもなく垣根といふものもない。小屋と小屋とがゆつくりと並んで默りこんで黒く腐つたやうに並んでゐる。中には人も何もゐさうな氣がしない。黒い低い小屋があたりの緑に一層黒く見えて陰氣である。茶釜の下をたく烟があがるわけでもないから、ことりともしない村の様子が全く氣味の惡い程である。たゞその中で目に立つ建物は、青く屋根を塗つて、茶店の看板をかけてゐる茶屋である。

その小村から道は左に折れて、街道から村道へ入る白い辷りさうな土の上を今度はおとなしく馬車が行く。その道は森へ行く。その中途で向ふから來た婆さんと孫らしい十二三の男の兒とに出逢た。ニコリスキーは知りあひと見えて心安さうに挨拶する。どこへ早くから出かけますかと聞くと、モスクワの病院へ息子の見舞に行くといふ。負傷して戰地から返つて來たのである。森の中ではもう雀が啼いてゐる。名も知らぬ小鳥が賑やかに啼いてゐる。しなやかな淺みどりの白樺の若木の奥からいり亂れた小鳥の歌が朝の爽やかな空氣の中を響き渡る。白樺の若木の幹が黒の斑點をつけて白くどこまでも／＼奥へ奥へと立ち並んでゐるのが不思議な繪のやうに眼に映る。白樺の幹は何だか描いたものゝやうに見えてならぬ。しかしシベリアの野で見た秋枯れの白樺の林は雨風に曝されて白くなつた骨の林立してゐるやうな感じがして、美しいとは思ひながらどうかすると物凄いとも思つたが、淺緑の若葉を着けた白樺の若木の林は見透す限り白珊瑚の林のやうで、いかにも貴いものを見る心地がする。じめ／＼した林の中の空地をがた／＼とひどく揺られながら行く。一尺あまりもあるかと思ふやうな土筆がいくらで

も生へてゐる。それがもうそろ〳〵袴を出してひろげかけてゐる。寒國の植物の成長の急なことを思ふ。しかし花らしい花はこの邊にはまだ見えない。森を少し行くと若い女の人が急いでやつて來た。ニコリスキー君は又挨拶をする。朝日が白樺の若木の梢の上からさして來た。森を出離れると今度は麥の畑になつて、その右手には白い村莊風の瀟洒な建物が見える。それはガリーツイン公の別墅であるといふ。やがて又一つ小さな森の側をまはると、そこはそのガリーツイン公の兄なる人の莊園(イメーニエ)で、前のよりも更に立派な村莊、それと大分離れて林の中に事務所や雇人の住宅などが建つてゐる。その側を通つて、更に白樺の森の中を可なり長く行くと、小さな橋一つ渡つて坂を上る。ガリーツイン公の莊園(イメーニエ)にはドイツの俘虜を十人程農事に使役してゐるとニコリスキー君が言つたが、其坂を上ると、そこで二人の俘虜が畑を耕してゐた。勿論監視人などはついてゐない。道ばたに一軒ぽつんと立つてゐる鍛冶屋の前を通つてしまふと、向ふは又茫漠たる野原である。その野原の此方の端に村が見える。村の左の端に珍らしく白壁の四角な家が見える。それが學校である。馬車はやがて畑だか野原だか分らぬやうな草地を通つてその白壁の家の前へ止つた。朝の七時半である。

三

窓から覗(のぞ)いてゐる十歳ばかりの少年が跣足のまゝで走り出て、ボーリヤと呼びかける。黒い風呂敷のやうなものを頭に被つて、黒つぽい着物を着た色の黒いむつつりした顏の婆さんが出て來る。色のさめた淺黄のルバーシユカの上に粗末な上着を羽折つた瘠せ形の老人がニコ〳〵して出て來る。ボーリヤお前かいと言つて自分の方を不思議さうに見てゐたが、わが子の歸つて來た方に氣を取られてか、案外じろ〳〵見もしない。ボーリヤといふのはニコリスキー君の名前ボリスの通稱である。ニコリスキー君の簡單な紹介で戸口のところで挨拶をする。色の黒い跣足の頬冠りの婆さんは即ちこのボリス、イワヌイッチのおつかさんで、同じく跣足でニコ〳〵してゐる老人は父君である。おつかさん

は唯默つて握手をして、サア〱まア內へ御はいりなさいと、愛嬌はないが實意のある田舍人らしい言葉つきである。父君の方は、ホオ、日本から來られたか、それはまア珍らしい、ボーリヤお前は一體どうしてこのお方とお近づきになつたのか、などゝ氣忙しく尋ねかける。少年はこの家の末子で、いかにもきかぬ氣らしい、いたづら小僧らしい面構へである。名はコーリャである。ニコリスキー君の劒につかまつて、ボーリャ、お前何を買うて來たかなどゝもう尋ねてゐる。戶口をは入つて次の次の室が、客室とも食堂ともの部屋で、八疊位まではない狹さである。例によつて聖像が何よりも立派に光つてゐる。それから少しばかりの本棚、片隅に素木の大分古い食卓、同じく素木のベンチ、二三脚の粗末な古い椅子、いかにも貧しげな汚ならしい室であるが、窓にはゼラニウムなどの四つ五つの鉢を置き、壁には交戰地域の地圖、大小新古さま〲の寫眞、モスクウ近くの名刹新イエルサリーム寺全景の着色銅版畫などをあちこちに揭げて、室の中には汚ならしいながらに何だかゴタ〱と賑やかである。自分もその片隅のベンチに腰をかける。ニコリスキー君と父君との間には、近日再び西の戰線へ立つこと、自分が夏の間田舍へ來てゐたいといふので、一度樣子を見せに一緒に來たことなどの話があつて、とにかく朝の茶になる。茶は隨分粗惡な茶であるが、牛乳はさすがに新らしくて旨い。いろ〱の話はあとにして、昨夜の寢不足を補ふためにニコリスキー君と自分とは入り口の長方形の室で眠ることになる。その室には祖母さんが今迄寢てゐたのを、起こして來て敷布や毛布を取りかへて自分等のためにベットの用意が整へられたのである。その祖母さんとも挨拶する。何だか祖母さんがあまり大事にされてゐなさうな感じがして尙更氣の毒に思ふ。窓には特に黑い布が懸けてある。低い小さい寢臺で少々具合が惡いが、何にしても一と寢入りせねばと冷たい薄い上掛けの下へもぐり込む。

町中にばかりゐて初めて田舍へ來たので馬鹿にあたりが靜かで、冷や〱した靜かさが快く腹の底へ沁み

わたるやうな、何ともいへぬのんびりした落ち着いたアト、ホームな心持ちになつて手足を伸ばす。ぐつすり眠つて目をさまして見ると午後の三時過ぎである。ニコリスキー君はまだよく寢込んでゐるらしいので暫くじつとしてゐたが、少々空腹にもなつて來たので、そろそろ起きて身仕度をする。ニコリスキー君もやがて目をさました。ざつと顔を洗ふ。こゝの洗面器は、小さなブリキの水桶の底に穴をあけて、そこに同じくブリキの細い棒のやうなものが上の方を少し太くして差し込んである、それを下から突き上げると、底の穴から、水が漏れて出る、これを掌に受けて洗ふといふ極めて幼稚な可なり不便なものである。モスクワの町でもあまり立派な家でないと大抵これで、一寸手を洗ふ位には都合がよいが、顔を洗ふときには少々雀の行水のやうで物足りない。井戸傍で釣瓶からたつぷり汲んで惜しげもなく水を濫費したのは、一つは日本人の潔癖からでもあらうが、一つは淸水が豊富なためでもあらうなどゝ思ふ。顔を洗つてから吾々二人だけで晝飯をすます。肉なしの馬鈴薯料理である。肉がなくて困ります、あつても豚ばかりでとおつかさんが氣の毒さうに言ふ。なる程豚肉の可なり大きな塊が煮てあつて、銘々切つて取るやうに別の皿に置いてあるが、それよりも自分には新らしい馬鈴薯の方が旨かつた。食後ニコリスキー君とコーリヤと三人で散歩に出る。今日は天氣はよいが、風は可なり烈しい。ガリーツイン公莊園の森さへ地平線の彼方に沒して見渡す限り茫々たる草野の原である。吹き通す風に外套も帽子も飛ばされさうである。春の土は黒く、草はこのあたりは既に長く伸びて風になびいてゐる。小學校の白壁をあとにして丘を下ると、じめ〳〵した窪みになつて、そこの向ふはまた小高い丘になり、これを越えると小さな小川である。臂や袖や裾の破れた村の小供が三四人川で遊んでゐる。コーリヤは得意さうに長兄や遠來の客の來たことを彼等に説明する。皆ニコ〳〵して珍らしさうに見る。川を飛びこえて爪さき上りになだらかな丘を遙かに十餘丁も上つたところに二三本の松や白樺が寂しく

立つてゐる。そこに何か穴でも掘つたやうな跡が二つばかりある。それが約千年前のロシア人の祖先の墳墓のあとで、去年モスクワから大學の教授たちが來て發掘して行つたといふ。この松の木の下に立てば四方は遠く廣く青く、森林は海の如く蜿蜒逶迤として雲烟の彼方に沒してゐる。ニコリスキー君は自分に向つて、シローカヤ、ルーシ（ひろきロシアの國）を見よといふ。いかにもシローカヤ、ルーシである。ひろき國原といふ感じがする。遠くの線の森の間に見えるお寺の塔の白いのが折柄雲間をもれる日光に光つてゐる。遠くの小村の草小屋が黒くいぢらしく點々として見える。顧みれば小學校のあるヤドローヲの村は、五六十の草小屋が例の如く半町あまりもある道を隔てゝ兩側にばら／＼と黒く腐つたやうに踞つてゐる。そして不思議にも村の方には人一人動いてゐる樣子が見えない。どうしても廢村の感じである。風は松の枝を鳴らして強く吹く。あたりの草は髮の如くに靡く。黒い雲が日をかくして忽ちこのシローカヤ、ルーシに宏大な陰を落とす。滿目光を沈めて、徒らに廣大にして人稀なる地域の寂しさを哀しむが如くにも見える。半ば丘を下つて漸く一人の若き女の馬を追うて耕してゐるのに逢ふ。畑は廣く丘をなして、女の姿も馬の姿も遮るものなき背景の中に異常に大きく見える。耕し耕して馬は地平線を越えて天に行くかとも見える。丘を下り切つて、村の方へ出て見る。村へ上るところで向ふから一人の白髮の老翁が來るのに逢ふ。コーリヤが、あれは聾で啞だといふ。しかし吾々を見て、ニッコリして、丁寧に帽子を取つて行き過ぎた。赤い着物の跣足の娘が、牛を追うて下りて來る。村の家は例の如く丸太を橫へたロシア風の建て物で、これを赤や青に塗つたのもある。傾きかゝつた硝子窓からゼラニウムの赤い花が透いて見える。あちこちに出て見る女や小供もゐるにはゐるが、ばら／＼と散在してゐる家並、黒くなつた草屋根、跣足でぽつり／＼と立つてゐる人の姿などが、綠の柳や草の色に尙更寂しく黒ずんで見え、やつぱり何だかひつそりと死に絶えた村か、戰亂で

人の逃げたあとの村でもあるやうな感じを與へる。夏住まうかといふ小屋を一つ見て村の端から端まで歩いて小學校へ歸る。十歳ばかりの小供が二人ついて來る。一人は學校へ上つてゐるが、一人は上つてゐないといふ。一人は自分の名を書いたが一人は書けない。コーリヤが、ヤイ貴さまは書けないぢやないか、と言ふと恥かしさうにしてこそ〳〵と戶の陰にかくれた。

四

夕方の茶になる。今日は近村の小學校に特別の試驗があつて、手つだひに行つたのでこゝの小學校の授業はなく、今やつと歸つて來ましたといふ父君の話である。夏來て住まれるなら小屋は勿論見つけてあげる、食事は私の家へ來てなされればよい、モスクワ近くの村の小學校の先生をしてゐる娘も、モスクワ中學へ行つてゐる二人の息子も夏休みには歸つて來るから、お相手をして方々御案內もさせます、こゝの村には私はもう十三年もゐますから、村の者も皆懇意で、何かにつけて御不自由はさせません、もし御氣に入つたら御出でなさい、私たちも思ひもよらぬ遠い日の出る國の珍客をわが村に迎へることはまことに愉快であると言つてくれられる。小屋は一ヶ月今迄は一ルーブルか二ルーブルで借りられたが、今年は五ルーブルか三ルーブルも取りませうといふ話である。しかし御覽の通りのところ故モスクワのやうな便利はないし、貴族的にやることは萬事につけて出來ませんが、もし御都合がよかつたら御出でなさいといはれる。それから例によりて日本の話を取りとめもなく聞かれる。祖母さんは自分でこしらへたのだと言つて苺のジャムを取り出して來てすゝめる。コーリヤが自分にもくれといふと、やらぬと言つてお婆さんは仲々きかない。コーリヤの茶の飲み方とかパンの喰べかたとかと亂暴だとてお婆さんの小言が出る。ニコリスキー君が、うちのお婆さんは仲々やかましいのでといふ。成る程やかましさうなお婆さんである。そしてお婆さんの方では話の仲間入りをせうとするが、皆で何だか邪魔くさがつてゐるらしく、それでお婆さんが尙更機嫌も惡く意地も惡くな

つてゐるやうにも見える。老人が貴方は平民か貴族かと尋ねるから、平民の子ですといふと、それで安心したといふ風に、あゝさうですか、私は貴族はあまり好きませんといふ。この老人は仲々きかぬ氣の一寸皮肉なところのある、しかしよい人のやうである。ルースキヤ、ウエードモスチの愛讀者で、この新聞が一番よい、ルースコエ、スローヲなどは罵報ばかりで、肝心のロシア國内の重要な問題に就いての報導が甚だ簡單であるといふ。なる程これはよく聞く批評であつて、自分も同感であるといふと、それでは貴方もウエードモスチを讀んでゐますか、さうですか、昨日は丁度議會の開けてから十年目だといふので、この新聞にもいろいろそれに關係の記事があつたが、いや議會も困つたものですといふ。さういへば四月廿七日は丁度十年目の紀念日であつた。近頃は教育の革新の氣運が著しく見えて來たやうですねといふと、老人は急に元氣づいて、えゝ、今の大臣(イグナティエフ伯)は仲々やります。何しろ私の國では文盲のものが多くて、モスクワ縣下でも就學兒童は甚だ少なく、千人の住民に就いて九十人に足りません。兒童の數はそんなに少ない筈はないのですがと言つて、一つ私の學校を見て下さいと言はれるので、此方もさつきから賴まうと思つてゐたところ故、早速お茶を切り上げて見せて貰ふ。學校と言つても、自分等の晝餐をした室の次の室で、教室は唯一つ、勿論單級教授である。正面の左隅にこの教室に不似合に大きな立派な聖像がかけてあり、その側には聖燭を點す用意も整うてゐる。正面には聖像よりもずつと小さいニコライ皇帝の御眞影がかけてある。御眞影といつても彩色石版畫である。左側は硝子窓になつてゐて、右側の壁にはいろ／＼の繪や地圖がかけてある。繪といふのは、動植物標本圖が二枚、人種標本圖が二枚、何れも可なりの古さうな、貧弱な石版畫である。地圖はロシア地圖で、大分古い版と見えて、極東の方の日本のところは、朝鮮の色も勿論變つてゐない。塗板が一枚ニコライ皇帝の右寄りに立つてゐる。後方の左寄りに可なり大きな本棚があつて、教科書類が

ぎつしりつまつてゐる。勿論こゝでは本など生徒に貸すものと見える。老人はボーリヤ、少し本を御目にかけて御覽、私の學校の文庫（ビブリオテカ）にはいろんな本がありますから、夏來られたら御讀みなさいといふ。ニコリスキー君が出して見せたのは、ネクラーソフの全集、トルストイの全集、ツルゲーネフの全集、ドストイエーフスキーの全集、ベエーリンスキーの全集さへあつた。貧弱な標本圖と古い地圖とのかゝつてゐるこの貧しげな學校の文庫に、こんな全集のあることは一寸意外でもあつた。しかしこれは珍らしいことでも何でもない。どんな村の小學校でも文庫があつて、そこにはかういふ自國の文人の作品を藏してゐるのが普通であることを後に至つて知つた。それで思ひ出すのは、自分が初めてペトログラードへ着いて、僅か半月あまりそこにゐた間下宿したうちは、妻君の内職に貸家周旋業をしてゐたが、その事務所で使はれてゐたイワンといふ小僧は、ペトログラードの北の田舍から來てゐて、月給三十ルーブルのうち毎月母親に六ルーブルづゝ送つてやると話してゐたが、そのイワンはやはりかういふ村の小學校（三ヶ年修了）を卒へたので、本を讀むことは大好きでツルゲーネフとゴーリキーとが好きだと言つてゐた。ニコリスキー君はネクラーソフの田舍の生活を歌つたものが殊に好きであるといつて、「オイ、レフカ、レフカ、カロブーシユカ」といふ歌を少し歌つてきかせる。教室の机は隨分使ひ古した不具のものが多く、どこからどうして寄せ集めたものか、二十脚程の生徒の机がどれも大抵形や恰好が違つてゐる。こゝで十三年餘りも村童を教へて來た老人のことを思ひ、先生も生徒も跣足でゐる騷がしい單級教授の教室の有樣を思ひ浮べて見る。丁度今日生憎授業のなかつたのはかへすがへすも殘念であつたと思ふ。

もとの室へ歸つて今度はコーリヤの卒業證書を見せて貰ふ。なか／＼立派な意匠のしてある美しい證書である。その文句には、初めに證書とあつて、ヲロコラムスキー郡學區會は、ヲロコラムスキー郡ブロスコフスカヤ、ヲーロスチ（ヲーロスチは幾つかの村の集まつ

た一つの行政區である）ヤドローフスカヤ村立初等國民學校敎師の男、ニコライ、ニコリスキー、一九〇四年三月二十七日生、ロシア正敎信徒が、一九一五年ヤドローヲ初學學校に於いて規程の學科を完修せることを證す。とあり、月日の下にはその學區會の會長、初等學校の監督、學區會の議員の自署がある。そしてその輪廓には、上の正面にニコライ皇帝その左右に皇太子殿下、ニコライ、ニコラエキッチ太公殿下の肖像が寫眞版で入つてゐて、その下の方には、銃を前に立てて祈つてゐる兵士の繪が描いてあり、戰ひの前の祈りといふ文句がその下に書いてある。またカザック兵ドイッ輕騎兵と奮戰すと題する圖、トルコ沿岸に於ける吾が戰艦と題する圖などが描いてある。この繪は時節柄の意匠であるが、毎年いろ〳〵に變るのだといふ。後になつて中學校の優等生に與へた賞狀を見たが、これは更に美しい見ごとなもので、古いロシアの文化のあとを示すやうな極めて華麗なものであつた。

あまり暗くならぬうちに、老人はガリーツイン公の莊園まで郵便物を取りに行くといふ。郵便局といふものは勿論ないので、ガリーツイン公の莊園の事務所で取り扱つてゐるといふ。それで郵便物は凡てこの莊園宛てで來るのである。ニコリスキー君があすこには俘虜もゐるし、散歩がてら一緒に行つて見ませんかといふので、老人とコーリャと四人づれで出かける。道でニコリスキー君が、ドイツの俘虜はイギリスと日本とを一番恨んでゐますよといふ。先刻の俘虜がまだ畑で働いてゐる。もう彼是れ八時であるが、まだ明るい。老人は顏なじみと見えて俘虜は帽子を取つて挨拶をする、白樺の森は夕方の濕りを帶びてかすかに青葉の匂ひがする。事務所へ行つて聞くと今日は郵便が來ないといふ。停車場へ受け取りに行つたアレクセイはどこへ行つたかと皆で探してもゐない。老人は、馬鹿な奴、またどこかで寢込んでゐるのだらうといつてゐる。そのうちタランタスを驅つて來た肥えた人を見かけて、ニコリスキー君も老人もかなり丁寧に挨拶する。これがこの莊園の管理人であつて、全權を握つてゐるので

ある。日にやけた夷子さまのやうな顏だちの人で、新聞が今日は來なかつたのだらうかと老人が聞くと、事務所にゐた婆さんに、バーシヤ、よう探して上げろよと言つて向ふへ行く。婆さんがどうも見えませんといふので、自分たちは森を越え、池の堰を越えて、廣い靑い芝生の上に建つてゐる白い村莊の建物を右手に見て向ふの隅の小さな溫室を見に行く。溫室の中にゐた園丁に挨拶して中を一巡する。一巡するとはいつても小さいもので、大隈伯邸の溫室の翼の一つ位しかない。設備も不十分で水をやつたあとでそこらが一面に泥まりになつてゐる。そこを出ると向ふで鐘が鳴る。仕事を終へる八時の合圖である。女たちも五六人歸つて行く。一人のやゝ小綺麗な娘は、先刻から事務所の近邊にぶら〳〵してゐた若い男と森の中で何か頻りに話しを初めた。老人が、ニコリスキー君に、何か言つて笑つてゐる。事務所の側の納屋へ俘虜が二人農具を片づけに來て、自分等を見て丁寧に帽子を取つて挨拶する。ニコリスキー君の話では、その中の一人眼鏡をかけたしまつた顏附の人は畫家であるといふ。日露戰爭のときに此方の者は日本で大事にして貰つて皆喜んでゐましたが、今ドイツではひどい目に逢つてゐます。この俘虜を雇うて使ふのも、却つて高いものにつきますなどと老人が言ふ。森を出はなれる頃、俘虜のゐる小屋を行つて見ますかと言ふ。何だか氣の毒なやうでもあるので、どうでもよいと言ふと、ニコリスキー君は折角こゝまで來たから寄つて行からうと言ふ。床の小高い純ロシア風の爐のある小屋で、汚れた淡いカキ色の服を着た俘虜が六七人ゐる。ニコリスキー君がドイツ語で二た言三言話す。自分を紹介して、この方は日本の大學の先生だ言ふと、俘虜が今更のやうに起立して敬意を表してくれる。永くゐるのも氣の毒であつたので、さよなら御機嫌ようと言つて出る。此方からはアウフ、ヰーダーゼーエンと言つても、向ふは默つたまゝ擧手の禮をするばかりであつた。ニコリスキー君はなる程ロシアの工兵少尉である。外へ出て、あゝして君と一緒に行

つて見せてやつたら、あの連中も、成る程ロシアと日本とは仲よくしてゐるなと思ふでせう。こんな片田舍まで日本の大學の先生が來て、ロシアの士官と一緒に歩いてゐるのだからと言ふ。もう大分薄暗くなつて來たが、村の方をも一度歩いて見ようと言ふので、外れの茶店のところまで行く。村中もう暗くなつてゐるのに一軒も燈火のついてゐる家はない。何故一軒も燈火がついてゐないのかと聞くと、百姓たちは朝は三時頃から明るくなるのでその時分から起きて働きに出る。それで夜は七時半位に仕舞つて、茶を飲んで早く寢てしまふのだといふ。たゞ茶店だけにランプがついてゐて、二三人茶をのんでゐる人があるのが往來から見える。もう暗くてチャイナヤ、ラフカの看板も見えなかつたので、こゝに一軒だけ燈火がついてゐるが、こゝは何ですと聞くと、これはチャイナヤ、ラフカで、こゝへは百姓たちが茶を飲んだり話しをしたりしに來るといふ。君ももしこの村で暫く住むことになつたらこゝへも來て御覧なさい、それとも今一寸寄つて見ようかと言ふので、もしよければ寄つて見ませうといふと、老人もそれでは茶でも飲んで行かうと言つて皆では入る。可なり廣い室に廣い机が三つ四つ据ゑてあつて、奥には菓子や煙草などが棚に並べてあり、釣ランプが二つついてゐる。奥の机には村の若い衆らしいのが三人茶を飲んでゐる。手前の少し薄暗いところには年寄の百姓が一人茶を飲んでゐる。勘定臺のところには鼻の長い上品な顔だちの主人、頰冠りをした婆さん、痩せた十五六の娘などが立つてゐる。自分等がは入つて行つたのを見て皆こちらを向く。主人と百姓とは老人やニコリスキー君と懇意らしい。茶を貰つて飲みながら話す。主人の息子が去年の春俘虜になつて、その後一度五月とかにたよりがあつたきり消息がない。モスクワの俘虜情報局へ尋ねてやつたが、その返事が至極簡單で、又その文字が走り書きで、一語どうしても分らぬ、無事だといふ意味の言葉とも讀めさうだし、地名で、そこにゐるといふ風にも讀めるが、どうだらうかと手紙を持つて來て見せる。前置詞があるところでは

地名らしいが、どこだらうか分らぬので、當て推量で地圖を探しても分らぬ。ニコリスキー君が、うちへ歸るともつと詳しい地圖があるからよく探して上げようといふことになる。それから戰場でのロシア兵のいろいろ滑稽な悲慘な話をニコリスキー君から聞く。日露戰爭のときには、兵隊が何故戰爭するのか分らぬと言つて、「何うでもよい」といふやり口で甚だ氣乘りがしなかつたが、今度のは違ふといふ話を此方へ來て後も度々聞いたが、多少の例外もあるやうな風の話なのである。ロシアの百姓といふのは譯が分らないし、氣象が第一「何うでもよい」といふ風なのだからとニコリスキー君が言つて、この中には未來の兵隊さんはゐないかねと三人の若い衆の方へ話しかけると、何れその中取られませうといふ。間もなく三人は勘定して出て行つた。薄暗い隅の百姓が自分に向つて、日本は廿年前には支那と戰爭して勝つ、十年前にはロシアと戰爭して勝つ、今度はドイツと戰爭して勝つ、一體どこまで勝つてどこまで取ればよいつもりですかいと言ふ。それを聞くとニコリスキー君が慌てゝ叱りながら、その百姓に、この人は戰爭のことなど少しも知らない人だからね、日本はたゞ已むを得ず戰爭したのさ、誰だつて好きで戰爭するものはないからと言ふ。やがて九時も過ぎたので、自分等も茶店を出た。出ると直ぐニコリスキー君が、あの百姓の今言つたことをどうか氣にかけてくれるな、そしてあんな事を日本へ知らしてやつてくれるなと心配さうに言ふ。今こんな事を書いたことを彼が知つたら、折角あれ程頼んで置いたのにと言ふかも知れないが、日本人がこれを讀んだとて、大してニコリスキー君に心配をかける程のことにもなるまい。

外へ出るともう眞暗になつてゐる。微かな空の明りで黒く蹲つてゐる百姓小屋の屋根が見える。この暗い中を、村の眞中を貫く廣い往來の向ふから賑やかな手風琴の音が聞こえ、それに合せて歌ふ女たちの合唱の聲が聞こえて來た。あれは村の若い衆と若い娘とが、歌ひつ彈きつしてこの往來を村の端から端へと何遍と

なく往き戻りして夜をふかすのだといふ。急がしげなしかし全體としては單調な、幾度も〳〵同じモティウを繰り返してゐるやうな手風琴の音につれて、若い村の娘たちの豐かな肉聲が、闇の中を何ものかを愬へつつ踊つてゐるやうな、段々に迫つて來るやうな心持ちに響いて來る。よくは分らぬが、いつか上野の博覽會で聞いた南洋の土人の踊りの調子、又その歌の調子とどこか似てゐるやうな氣がした。やがて歌は更つて、今度はゆるやかな哀しい低い調子に成り、單調な同じやうな抑揚がまた幾度も繰り返されて、その繰り返しの單調さが、繰り返す毎に段々人の心に迫らずには措かない原始的な力を有つてゐるやうな氣がした。手風琴や歌の聲は、廣い野原の小村の中を往きかへりして、時ならず所ならず、如何にも不釣合に賑やかに、しかしまたそれ故に寂しく響く。やがて自分等の方へ近づいて來て、今晩は今晩はと言つて通り過ぎようとする。ニコリスキー君が自分のために特に賴んでいろ〳〵變つた歌を歌つて貰つた。その中には日露戰爭の時に流行したといふ「ワリヤーグの沈沒」といふのもあつた。

自分等はその歌の群について村の往還を往き返りした。歌の群は二つあつて、互ひに競爭して歌ひながら幾度も往還を往き來する。一つの群には若い衆が三四人ゐて二人位手風琴を鳴らす、娘たちは一つの群に十人程もゐて、それが廣い往來を橫の一列に並んで足並を揃へて歌ひ歩くのである。今は若い男が少くて娘が多いのですとニコリスキー君が言ふ。その群について歩いてゐると、その群の周圍はいかにも若々しく賑やかである。歌も軍歌でなくば春や冬の戀を歌つたものが多いらしい。しかし今は工場の歌などが多くなつたさうである。文句は一々よくは分らぬが戀の歌が多いらしい。しかしその調子の何れにも、單調な繰返しがあつて、それが一種の寂しさを以て迫つて來る。それに歌の群を取りまく闇は暗く遠く限りなく廣がつて、兩側に黑く眠つてゐる村は全く無人の感じがある。その廣い遠い闇の中を繰り返し繰り返し歌ひ歩く歌の群は、戀を歌ふ群といふよりも、葬ひの歌の群でもあ

さかの如く、僅かにその限りなく廣がる闇の寂しさを破つて、更に一層の寂莫を感ぜしめる。

こんな小村にも茶店があつて、それが旅人のためといふではなく、全く村人の茶を飲みに集まる場所であるといふことも、人々は早く、燈火もつけずに寢るといふのに、若いものたちは闇の夜の往還を手を引き合つて夜ふけまで歌ひ歩くといふことも、この廣い野原の小村の生活を色づけるに無くてはならぬことである。殊に闇の中の歌の群は、眞にこの暗い沈默の村の唯一の光りであり聲である。廣野に匍ふものゝ歌である。野の歌である。しかしいかにも哀しい歌である。自分はこの闇の夜の印象を忘れることは出來まいと思ふ。

五

歌の群に禮を述べて、自分等は村から少し出外れて小學校へ戻つて來た。歌の群はまたも遠くなり近くなり響いて來る。學校の戸口には、もう自分のための馬車が來て待つてゐる。モスクワ行きの汽車は午前二時半頃に出るので、こちらを十二時頃に出なければならぬ。しかしまだ十時過ぎである。馬車屋には少し待つて貰ふことにして、遲い晩食の馳走を受ける。もし愈愈夏分をこゝで住むとしたら、家のことや食事のこともどうするといふ大凡の打合せもすませ、人々に一一紀念の自署もして貰ひ、明日は戰地へ向ふといふニコリスキー君には武運目出たからんことを祈つて、一日のもてなしを厚く謝し、再會を約して出立する。馬車とは言つてもこれは百姓の使ふ荷車即ちテレーガである。底の藥研形になつた荷車の中へ乾草を積んで、その上へ足を投げ出して乘るのである。夜は既に十一時を過ぎて下弦の月がわづかに野を斜めに照らし、寒さの稍身にしみるを覺える。老人の好意で厚い手織地のやうな絨の大外套を借り、外套の上へ更に羽折つて頭までも包まつて車に乘り、兩足を投げ出して大外套の裾で包む。歌の聲はもう聞こえなくなつて、犬一つ吠えもしない。夜はもう森としてゐる。人々と握手して、別れを告げる。隣り村からわざ〳〵頼まれて來た

百姓のワシリイは、寝ぼけたやうな間伸びのした聲でヌウ、トウイ、クーダー？　などとゆつくりした調子で馬を追ひ初めた。村の外れを曲ると、今まで歌ひ歩いてゐた人たちも寢靜まつて村は全く死んだやうに暗く沈默してゐる。片鎌の月がでこぼこの道を斜めに照らして、夜氣が大外套の上から身に沁みるやうな心地がする。ガリーツィン公の莊園の前を過ぎ、白樺の森を過ぎて行くと、白樺や樫の若木の林の間の開いた道に出る。月はやゝ上つて林間の道はほの白く明るく、枝から枝を渡る夜啼鶯の人を誘ふやうな軟らかみのある滑らかな聲が、そのほの白い夜の靜寂の中に夢のやうに、まどはしのやうに響く。白樺の若木の林の奧は、どこまでもほの明るいやうに見えて、人を奧深く奧深くと誘ふ白く輕きものの、枝から枝へと飛びかはし歌ひ舞うてでもゐるやうな感じがする。うす明るい林、その林の間の廣い道、夜氣に濕つてしつとりと匂ふ空氣、その間をテレーガはゴトリ〳〵としづかに行く。馬もワシリイも自分も默つて、この夢のやうな林の中を行く。またしてもソロエイが啼く。ソロエイが啼く。「ソロエイが啼く」とワシリイが言ふ。自分は默つて答へない。「春になつた、ソロエイが啼く」とワシリイは繰り返して言ふ。

やがて林を出て畑の中を行く。旦那はどこのお人か、日本にもソロエイはゐますかなどとワシリイが話しかける。自分もワシリイの年をきいたり小供の數を聞いたりする。ワシリイは夫婦と小供と五人暮しで、今年のやうに物が高くては年七百ルーブルはどうしても入りますと言ふ。戰爭の話、村の出征軍人の消息、いろいろの話のうちにシャホフスカーヤの停車場はやがて近くなつた。もう午前二時過ぎである。月は落ちてあたりはやゝ明るくなりかけた。

自分はその後仕事の都合で少くとも夏の初めの半分はモスクワを遠く離れては具合の惡いことがあつて、再びヤドローチの村へは行けなかつた。ニコリスキー君の父君へは二度程手紙を上げたが、ニコリスキー君は其後戰地で無事かどうか、まだ消息を聞かぬ。夏はプロトポポフのボリスの友人の方へも行かずに、露曆六月をモスクワ近くで過し、七月の初めに思ひも寄らぬこのカルージユスカヤ縣の田舍へ來た。丁度こゝの街道はワルシャワ街道で、去年は避難民が大勢こゝを逃げて來たといふ話である。（カルージユスカヤ縣、マロヤロスラウエッツ町、アリローシノの莊園にて、露曆七月十六日夜）

俳趣味の官人・政客・實業家

鐵拳禪

一

▼朝起、筆を執らんとす。東北の風、秋雨を送り來る。風冷かに、雨冷かなり。風雨横さまに玻璃窓を叩けば、玻璃面上滴々として感傷の涙長く垂るゝを見る。冷殺の氣、書齋に滿つ。手指爲めにかじかまんとす。

▼急に火鉢を入れ、櫻炭を起し、鐵瓶を掛く。暫くして火氣花の如く薫り、火色紅葉の如く燃え、眞紅の舌將にダリヤを吐かんとす。鐵瓶の湯、聽てしやん〳〵と沸り來る。靜かに茗を煮て、俳味を掬す。宛然爐開の感あり。

▼爐開は、俳想の天地なり。枯淡の域、幽寂の境なり。長詩、短詩、共に其の情趣を謳す能はず。俳句に入りて、始めて其の眞面目を發揮す。一幅の古書畫、能く其の境地を色彩するに適す。若し一點の紅を彩せんとせば、一輪の紅山茶花にて可なり。妖艶の洋花は相應しからず。

▼爐開は洋館に無し、和風の家屋に限る。洋館の初冬は、爐を開かず、ストーブを開く。椅子に凭り、卓を圍み、ストーブを背にして煖を取り、茴香酒を呷りつつ長詩を想ふに適す。俳想、或は成らざるに非ざるも、未だ俳味の醇を掬する能はざるを如何せん。

▼俳人の腸、敢て詩人と異なるに非ず。詩人にして俳句を試みるあり、俳人にして長詩を試みるあり。其の錦心繡腸は異ならざるも、其の境地に依り、其の氣分に由りて、其の作を異にす。洋食を喫して俳句を想ふも、其の俳味の醇に徹せず。其の氣分の、自ら之を許さざる者あればなり。

▼蒲團に仰臥して、俳想を天井に描けば、俳趣油然と

して沁く。風呂吹を食ひ、柚味噌をつゝき、納豆汁を味へば、舌鼓自ら俳句の旋律を成す。其の境地、其の情調、其の氣分、既に俳句を生むに適するに由る。

▼今朝爐開の感を抱いて、偶ま俳句を想ふ。俳句に接するは、故人に逢ふに似たるものあり。書架を亂抽して、「新俳句」を得たり。就て爐開の條を見るに、紫影の句あり。曰く、

爐開いて只端然と座りけり

と。蓋し、此の句の生命は端座にあり。何故に端然と座れるかを問ふ勿れ、そは爐開の氣分なり。平凡多奇なく、幼稚なりと雖も、爐開の情趣はあり。

▼紫影の雅號、恐らく其の姓藤井に因めるものならん。彼れ、名は乙男、明治二十七年東大國文學科の出身にして、文博の學位を有す。現に京大文科教授、句作を公にすること漸く少きも、斯界の玄人なり。俳趣味の素人を以て目すべからざるも、夫の宗匠の俳句に衣食するとは、自ら其の選を異にす。

▼新俳句の人々、俳人として名あるも、舊時の所謂俳諧師に非ず。選者、點者以外、他の職業に衣食す。されば句作は其の餘技の觀ありて、彼等が生活の全部に非ず。今日俳句界の玄人と雖も、夫の畫家の如く、音樂家の如く、全然俳家の生活をなす者は稀なり。

▼紫影の句作に耽れるは、其の學生時代にあり。今は研究の餘暇、職務の餘裕を以て俳趣味に遊ぶに過ぎず。唯他の官人の如く俳句界と疎隔せず、時に觸れ折にふれて吟詠を絕たざるは、其の專攻の學科の之と因緣淺からざるが爲めなり。

▼今日俳趣味を解するの徒、多く學生時代の修養に係れり。子規全盛の時代、各地の新俳句會は、殆んど學生の手に由りて起れり。現に官界、政界、財界、其他各方面に分布する新俳人の大半は、此の學生等の發達せる者なり。紫影、後年醒雪等と筑波會の俳陣を張れるも、日本派の搖籃に育まれたる一人なり。

▼醒雪の赤門を出づる、紫影に遲るゝこと二年、「連俳小史」の著を以て名あり。句作或は紫影に一籌を輸するも、俳諧の研究と俳句革新の運動とに就て或は其上

に出づ。曾て二高の講師たるや、奥羽百文會を創立せるが如き、東北の俳運に影響する所尠からず。

▼醒雪は、文博佐々政一の雅號。彼れ今、東京高師教授たり。句作を廢して、江戸時代の歌謠を研究しつゝあり。人と爲り茫漠たるも、俳人的の洒脱と江戸ッ子的の意氣とを有す。

　生海鼠々々汝成佛して何の佛

の一句、彼れが性格の聲を聞くの心地す。

▼京大法科教授、法博佐々木惣一は、滿月會の才人笹舟の後身なり。當時彼れ句作に耽りて、燒芋の皮にすら俳趣の横溢せるを觀ぜしが、法理の人となりて以來、其の熱漸く減却せりと雖も、風骨尚多少の俳趣を帶ぶ。其の作に曰く、

　船に寢て寢つかれぬ夜の長さかな

洋行の船中、此の感を繰返せしや如何。歸來數年、未だ彼れが新作に接せず。

二

▼官界の俳人中、近時視目の焦點となれるは、警保局長永田秀次郎なり。東青嵐の號、俳人間に知られざるに非ざりしも、彼れの如何なる人物なるやに至りては、彼れが知己以外、多く之を知らざりき。然るに彼れが寺内内閣の下に警保局長たるに及んで、其の俳名普く文界に籍くに至れり。

▼最近數年に於て警保局長たりし者、有松英義あり、太田政弘あり、湯淺倉平あり。何れも赤門出身の法學士なるも、文藝に對して理解を有する人には非ず。或者は官僚の策士たり、或者は警察事務の精通者たり、或者は辛辣なる手腕を有するが故に、其の地位を占めたるのみ。文藝に一隻眼を有すると否とは、警保局長たるの要件に非ざりしなり。

▼警保局の事務、警察界に關すること、其の主たる事項なり。出版物取締の如きは、僅かに其の一部たり。然れども、出版物取締が苟も一國の文藝の消長、風教の興廢に關する以上、極めて重要視すべきものたり。唯漫然たる取締の下に放任して、能事終れりとなすべき性質のものに非ず。其の局長の選任に際し、警察事

務の練達以外、更に文藝の理解を一條件とせざるべからず。

▼然るに、今次偶然にも、警保局長に俳人、吏青嵐を得たり。彼れは三重縣知事より轉じて、此の椅子に凭れるも、曾て警保局書記官となり、次で警察部長となり、警察事務に精通せること、尋常地方長官の比に非ず。加ふるに俳趣味を有し、有松以下の文藝無理解者と同一視すべからざるものあり。

▼俳趣味の人、必ずしも純文藝の鑑賞者、乃至愛好者に非ず。俳人にして、小説を排する者あり。脚本を好まざる者あり。從つて其の作物に對する批判の如き、夫の淺薄なる教育者流、若くは風教一點張の徒と、幾許の徑庭ありやの怪しき者あり。彼れ青嵐の鑑賞眼、乃至批判力の、此の程度の者たるに於ては、文藝界の爲め毫も意を强うすべき所以を見ずと雖も、彼れの眼力、恐らくは之に止まらざらん。

▼青嵐太守の、三重の縣治未だ見るべきものあるに至らざるに、本省に拔擢されたるは、御大典當時京都の警察部長として手腕を揮ひ、其の鋭才を認められたるに由れり。彼れが俳趣味を有すると否とは、警保局長を贏ち得たるの要件に非ず。彼れの推薦者中、彼れの俳才を認めたる者、果して幾人ありや。

▼彼れは淡路の人、身に藩閥を負はず。而も今日の陞進を得たるは、地方局長たり、內務次官たりし、法博水野錬太郎の庇蔭に待つ所尠からず。水野は淸濁併吞の大器に非ざるも、人材を識るの明あり。永田も亦其の明識に値ひて、登用されたるの人物なり。

▼吏青嵐の御大典雜詠、載せて本月の『ホトヽギス』卷頭にあり。是れ同誌が發賣禁止除の護符となさんが爲めに非ず、宗匠虛子が優待せんが爲めの優待なり。中には隨分陳套にして、月並に墮せんとする句なきに非ざるも、淸新、崇重を以て許すべきの句も亦有り。著眼奇警ならざるも、句法老熟せり。風流部長の稱ある、又宜なるかな。

▼彼れが特に吏青嵐と號するは、他に一人の青嵐あるが爲めなり。其の號の先後容易に知るべからざるも、

他の青嵐は可なりの古顔にして、句作も亦熱心なり。「春夏秋冬」に載る所の句、多くは他の青嵐なるを思はずんば非ず。

▼他の青嵐は、大分師範學校長峰是三郎其人なり。彼れは高師の出、學習院教授となり「俳句資料解釋」「應用心理學」等、教育上の著書十數種あり。其の句作の如き、

　洒々として詩意に及ばず走り蕎麥

等、奇を弄せずして自ら奇を得るの特色あり。官界の青嵐、教育界の青嵐、又斯界の珍たるを失はず。

▼吏青嵐と共に、貧乏徳利を提げて、猿樂町時代の虚子を驚かせるは、燕洋及び森堂の二人者なり。燕洋は工博直木倫太郎、今、内務省技師たり。森堂は坂出鳴海、現に朝鮮總督府勅任技師なるも、目下洋行中なり。今若し三人を一堂に會して句を闘はしめば、軍配の孰れにあがるや未だ知るべからず。

▼青嵐は外貌老然たるも、又細心の用意あり。燕洋は敏才、剛腹他に屈せざるも、人をそらさぬ程の愛想はあり。森堂は謹嚴の中士佐人の機智を有す。其の俳名に至りては、燕洋或は青嵐及び森堂を駕せるも、今日は全く廢業の姿なり。

▼青嵐獨り警保局長となりて俳壇に芽を吹き、文界の視聽を動かせり。然れども、吾人の彼れに期待する所は其の俳句に非ず、文藝取締の改善にあり。從來の盲目的取締を廢して、理解的取締をなすにあり。撲滅的取締を改めて、保護的取締をなすにあり。彈壓的取締を止めて、寛容的取締をなすにあり。要は風教眼の深酸なる取締を敢てせず、藝術眼の寛大なる取締をなすにあり。斯の如きは俳趣味を解せる、彼れ以外に望む能はざる所なり。

▼彼れが就任の當初、文展の裸體畫陳列禁止問題起り、次で「三田文學」の發賣禁止となりたるも、殘忍嫌ひの湯淺に比し、何程か其の取締に手心を加へつゝあるに似たり。彼れ自身も亦、何程か藝術的作品を尊重して、之が取締をなさんとするの意ありと。是れ、彼れが取締の、今後刮目を値する所以。

▼大藏次官勝田主計は、官界の新俳人中、第一の先輩なり。「新俳句」時代、明庵の雅號を以て知られたるも、今日彼れの俳人たるを知る者稀なり。宴會の席上、彼れをして俳句を吟ぜしめば、好個の隱藝として、席上の喝采を博するや必せり。

▼明庵は如才なき男なり。明治二十八年の帝大出身にして、理財局長、大藏次官を經て、鮮銀總裁となり、再び大藏次官の椅子に据ゑられたり。近く藏相たるべしとの風評あるも、其の眞僞は保證の限に非ず。

餅搗に來るや長屋の若角力

とは、彼れが舊作なるも、彼れは豫算の餅を搗いて、若角力の力量を顯はし得るや、興味は一に今期議會にあり。

三

▼俳句と法律科、政治科とは緣遠きが如くなるも、法科大學の出身者に、俳人の多きは一奇なり。而も其の俳人の修養が高等學校時代に始まり、大學時代の中途に終れる、皆其の軌を一にせり。卒業後、尙之を繼續するは、俳に淫する者ならずんば、玄人の域に達せる者なり。

▼玄人の域に達せるは、東青嵐の如く忙中閑日月を樂しむの餘裕あり。然らざる者は、明庵の如く宴會の隱藝たらんとす。隱藝たりと雖も、笹舟の程度にあれば、新進の俳人に伍し、運座に輸贏を爭ふに足れり。老來俳に淫して、進境遲々たる者に比すれば、年少の修養だけに、一たび其の席に臨めば、昔取りたる杵づかだけの事はあり。

▼帝大法科出身中、俳壇に覇を稱するもの、東洋城及び淺茅あり、一は式部官松根豐次郎の雅號にして、其の名の伊豫訛の發音を其儘漢字に當て嵌めたるなり。一は判事柴碩文の俳號にして、其の起因を詳にせず。

▼其の名の伊豫訛を以て號とせるもの、夙に碧梧桐あり。彼は姓は河東、名は秉五郎。碧梧桐は、即ち秉五郎の伊豫訛を漢字に表はせるなり。松根の初め一聲と云ひ、後に東洋城と改めたるは、恐らく碧梧桐の號より思ひ付きしなるべし。碧は今日俳壇に異を樹て、新

傾向を鼓吹するも、東は依然舊套を守りて、虛子派に屬せり。

▼東洋城の新作、數月前までの國民新聞紙上に續出せり。式部官は素より閑職なりと雖も、官界にありて尙斯の努力をなす。其の精力凡ならざるものあり。彼れは俳に淫するに非ずして、句に生きんとする者なり。蓋し俸祿は彼れの食糧にして、俳句は彼れの生命なり。

▼淺茅と雁行せるもの、紫人あり。近時甚だ聞えずと雖も、一時大に振ひたる事あり。其の句、載せて『春夏秋冬』にあり。

蜩や湯殿の外は杉木立

才氣見るべき者ありて、時に器用なる句を詠めり。現に第一師團法官部に勤務する、理事松下英男は其人。

▼明治三十九年の政治科出身に、若尾庄吾あり。今其の存在を詳にせずと雖も、彼れ瀾水と號し、二高時代盛んに俳句に耽り、學業甚だ進まざるも、俳名却て高きものあり。二高の學生を驅つて、俳に淫せしめずんば止まざらんとせり。

▼當時、五城樓下に瀾水の再興せる奥羽百文會あり。新に崛起せる淸秋會あり。兩々相對して、一時の盛觀を極めたり。東京地方裁判所判事三淵忠彥の如きは、即ち瀾水と轡を並べたるの士にして、大魚と號し、奥羽百文會の駿足たり。

▼淸秋會は牛南の創立に係り、其の搖籃に育まれたるもの、現に巢鴨病院に勤務する醫學士麻琴氏家信、大藏省技師たる農學士香琴鹿又親、林學士芳翠中野芳、獨逸文科出身文學士峽月川戶豐彥、東京音樂學校敎授たる文學士乙字大須賀績等あり。就中乙字は熱心に研究を持續し、遂に巨然たる大家となれり。

▼流行は、一種の熱なり。其の熱の觸るゝ所、才華一時に煥發す。俳句の流行する時、年少悉く其の熱に浮かされ、俳趣味に遊ばんと欲するに至る。上山草人の如きも亦、往年五城樓下の俳熱に浮かされたる人、半月と號し、盛んに句作を試みたり。俳人一轉して俳優となる、又一種の熱の發作ならずんば非ず。

▼法博岡田朝太郎は川柳通を以て聞ゆるも、兼て俳句

を善くす。人物洒脫にして、虛心は其の俳號なり。竹て東大法科教授たり、又支那政府の法律顧問たりし事あり。

胡に通ふ駱駝しと〳〵石の露

刑法學者として這般の趣味を解す。多能多才の人なるかな。

▼愚佛瀧川長敎は、京都地方裁判所檢事正たり。五丈原宮島次郎は、辯護士法學士たり。默笑渡邊千冬は、前代議士法學士たり。愚佛は專修學校法律科の出身、他の二人者は帝大の出身なり。而して、愚は秋聲會、五は筑波會、默は日本派に屬す。

▼五丈原は俳論、俳句に長ずるも、より以上に其の人物面白く、覇氣俠氣併せ有せるを以て稱せらる。默笑は伯渡邊千秋の弟、財界の才人たり。中日實業副総裁倉知鐵吉、侯德川慶久、共に東大法科出身にして、指を新俳句に染めたるも、素より一個の隱藝に過ぎず。

四

▼政界及び財界の人々の作、多くは隱藝程度のものなるも、竹冷角田眞平、知十岡野敬胤の如きは、既に宗匠格なり。竹冷は往年代議士辯護士として可なり幅を利かしたるが、一たび失脚して又振はず。後漸く東京市區改正局長となりて、其の信用を恢復せるも、再び政界に覇を唱ふる能はず。聽雨莊裡、十德を著けて、俳趣味に沒頭す。其の作の文學的價値の如何の如き、問ふ所に非ざるなり。

▼知十は株式仲買店の番頭、舊號を正味と云へり。其の知十と云ひ、正味と云ふ、算盤と何等かの因緣あり、其の面目を髣髴するが如きを覺えずんば非ず。彼れ長面、痘痕斑々、俳趣能面よりも濃かなり。竹冷の宗匠を以て甘んずるに比すれば、知十は尙覇氣欝勃たるものあり。進んで新味を出さんと努むるも、俗調に墮するは惜むに堪へたり。

▼前代議士野田卯太郎、板倉中、伊藤大八の徒、又俳句を翫弄す。大塊、醉月、虛無庵は彼等の俳號なり。醉月の句作、或は俳人の列に入るも、他は俳趣味に捌するに非ず、俳句を捻出し來りて、坐興を添へ、徒然

を慰むるのみ。所謂俳趣味を掬せず、徒に俳句を翫弄するなり。

▼近時、政界及び財界の人士、席上一首の和歌、一聯の漢詩、又は一句の吟を成さゞれば、更に持てざるの傾向あり。故に交際界に持てんとする者、紳士の體面を保たんとする者、多くは趣味を說き、風流を喋々す。其の趣味熱に浮かされて、歌俳を試みるの徒、漸く增加せんとす。

▼大塊、虛無庵の徒、斯の傾向に刺戟されて、俳句の捻出に腐心せるなり。虛無庵は佛學塾の出身、明治二十年頃陸軍幼年學校の譯官たる事あれば、多少の敎養あり。大塊は身を豆腐屋より起し、代議士となり、東柘副總裁となれり。今次副總裁を辭したるも、彼れが胸裡の算盤玉は、未だ俳諧師の境地に置くを許さず。

▼豆腐に、俳趣味あり。木の芽でんがくは春の季に入るべく、冷やつこは夏の季に入るべく、湯豆腐、氷豆腐は勿論冬の季なり。寒風紙障を鳴らすの候、湯豆腐に熱燗を命じ、以て俳想の天地に逍遙する、興趣盡きざるものあり。知らず大塊往事を追想して、此の境地に遊ぶの吟懷ありや。

▼銀行家安田の一族に、俳人平安居あり。名は善兵衞、時に出でて運座に列る。仙麥小林一三は箕面有馬電軌の專務、慶應義塾出身にして、俳才あり。

　上﨟や手函の中の煤拂

など唸りて、頻りに風流を談ずと聞けり。

▼露月村上半太郎は伊豫農業銀行頭取、一高の出身なり。香墨渡邊助治郎は檢事、忍月石橋友吉は辯護士法學士なり。前二者は日本派の俳人、後者は秋聲會の遊戯派なり。彼れ曾て小說『露子姫』を作りて文名を馳せ、後長崎の法曹界に氣焔を吐けり。

　太極は畢に無極の海鼠かな

▼工學士梅野實は米城と號し、文學士松本彦次郎は金鷄城と云ひ、安成貞雄は路臺の雅號に匿れて俳句を試みたり。遊蕩文學を以て名ある久保田萬太郎も亦暮雨と號し、年少の俳趣味に遊べり。

　廢驛に遊里存すや春の川

は、當時の吟なり。夙に遊里に著眼せる、淺草氣分の然らしむる所ならずんば非ず。

五

▼漱石夏目金之助は小說界の大家にして近來また書と畫とを以て少數の具眼者の驚嘆を博しつゝあるが、彼は又他面に於て俳句界の巨匠なり。彼れが句は、著眼奇警にして、滑稽味あり。

藍色の海の上なり須磨の月
名月や拙者も無事で此の通り

の如きは、蓋し彼れが得意の壇場なり。俳人紅綠の滑稽句には態とらしき所あるも、彼れのは穩健にして自然なり。表面的の滑稽に非ずして、內面抑ふべからざるものありて、自然に表面に煮染み出でたる所の滑稽なり。

▼漱石は子規に私淑せり。俳句を試みるの動機、又其の私淑の結果に非ざるか。彼れの友情に厚き、病子規を慰めんが爲めに、『倫敦通信』を書けり。書れが才筆を認められたるの最初は、是れなり。次で『吾輩は猫である』『倫敦塔』を公にするに及んで、世人の視目を惹くに至れり。

▼漱石の文博を辭せるは、皮肉なり。多少の俳趣味あり。露伴の文博を頂戴せるは平凡なり。月並の臭味を脫せず。漱石の小說家に雄飛する時、文博幸田成行は『努力論』の著者となれり。露伴の禪味、漱石の俳味、自ら其の作物の上に現はるゝを見る。

▼滿鐵に陸軍步兵少佐佐藤安之助あり、彼れ肋骨と號し、新俳句を鼓吹す。日淸戰役に從ひて負傷し、別に隻脚庵主人の雅號あり。

こりずまに裾焦したる炬燵かな

彼れの自ら肋骨と號せるは、軍人なるが故にして、屍を戰場に曝せば、朽ちて肋骨となるの意なりと。髑髏と稱せずして、肋骨と云ふ、既に俳人の著眼なり。

▼官學に衣食するもの、五高校長に向陽吉岡郷甫あり。二高敎授に光夢小池堅治、竹風登張信一郎あり。四高敎授に繞石大谷正信あり。六高敎授に素琴志田義秀あり。學習院敎授に古雪藤澤周次あり。東大司書官に文

泉子坂本四方太あり。就中俳名高く、今日も尚句作を廢せざるは繞石及び四方太なり。

▼繞石、四方太は學生時代、俳句界に頭角を現はせり。一は明治三十二年の東大英文學科出身にして、一は同年の國文學科出身なり。繞石は先年海外に留學し、淵達の紳士となれるも、四方太は十年一日の如く圖書推裡に沒頭せり。一は快活、一は陰欝、面貌は其の氣象を表徴するに似たり。

▼向陽は二高教授より進んで文部省視學官、圖書審査官となり、三十臺の若さを以て五高の校長となれり。風丰瀟洒、貴公子の風あり。溫厚且怜悧なるも、時に無邪氣なる諧謔を弄す。

　春の夜や惟光仰せかしまる

一體は陽氣なる性質にて、枯淡の趣致よりも、寧ろ濃艶の情味を愛せり。然れども、文部省奉職以來、多少の變化を來せり。

▼滿を引いて俳趣を說くは、竹風なり。彼れ醉態淋漓たるに至れば、筆に從つて俳句を大書す。其の許するや、藝妓の長襦袢たると、金屏たるとを問はず。必ず竹風の下に醉人と附記す。現に上田美代なるもの、藝者時代に彼れが揮毫を辱うせる長襦袢を珍藏せり。

▼臨風笹川種郎、天隨久保得二、瑯音沼波武夫等も亦、筑波會にありて、竹風、五丈原、醒雪の諸豪と、俳技を鬪はしたり。同會滅後、彼等は各其の志す所に走りて、又俳句を顧みざるに似たり。唯瑯音の『俳味』を刊行して、舊壘を死守するあるのみ。而して其の瑯音すら至誠殿に日參して、俳句は稍怠り勝の有樣なり。

▼新聞記者には、東京朝日の銅牛樋口秀夫、萬報の蝶二中內義一、紫蘭若川保治あり。銅牛は舊號を得川と云ひ、日本派の古顏なり。其他、樂天中村修一、玄耳澁川柳次郞、格堂赤木格一、小川煙村等あり。蝶二、紫蘭は筑波會の人、他は皆日本派の雄なり。

▼格堂は早稻田の出身、海外に遊んで殖民史を專攻せり。先年代議士候補となり、郷里岡山縣より打つて出でしも、落選の不幸を見たり。彼れは最も能く子規の

衣鉢を傳ふる者と稱され、俳句界の囑望する所となりしが、洋行前後漸く俳壇より遠ざかれり。

▼虚吼相島勘次郎は、代議士中唯一の新俳人なり。彼れ曾て米國にあり、俳句會を起して、日本派の鼓吹に努めたり。

　秋立つをしやぼてん獨り知らざりき

歸來、毎日電報記者となり、東京日々の主腦となり、衆議院議員に當選すること二回に及べり。彼れの俳人たるを知る者、三百頭臚中幾人かある。

▼鉢中にありて、しやぼてんは能く聳立す。其のしやぼてんの如く起立する代議士は、甚だ多かれども、天下の秋を知る者は稀なり。文藝を理解し、趣味を知る者、更に稀なり。虚吼未だ天下を負うて立つの概なしと雖も、趣味を解するの人なり。豫算以外、文藝風致の問題に關し、大に氣を吐く所無かるべからず。

（大正五、一一、一五）

吾人が見たる南洋の眞相

ヤップ島守備隊海軍中尉　白瀬知

我が帝國の南遣艦隊が艨艟大擧して、獨領南洋、即ちマリヤナ、カロリン、マーシャルの三群島を攻略して以來、我國民の裏南洋に對する視聽は漸次高まり、新聞に雜誌に屢々其の記事を見る許りでなく、觀光視察團の紀行通信なども所々に散見するやうになつたのは、帝國今日の立場から見て、洵に慶賀に堪へない次第である。

　然しながら、吾人の親しく視たる裏南洋の實相と、それ等の紀行通信に現はれたる所謂裏南洋なるものとを、比較して忌憚なく言ふ時には、夫等の記事の殆んど全部が南洋の眞相を語るものでなく、徒らに針小棒大の筆を弄して、世人の好奇心を刺戟し、其の投機心を挑發する以外、何等の效果を齎らさぬ空文なる事を憾むのである。麗々しく新聞紙上に記載されたる某名士の視察談とか、或は某博士の紀行文に於てすら、猶其の觀察は皮相に流れ、其の記事は粉飾を以て滿されて居るが爲め、却つて幾多の害毒を流すことに終るのを認めざるを得ない、實に慨嘆の至りである。凡そ一地方の土情風習を索り、其の眞相を世に傳へんとするには

少くとも一ヶ年の歲月を費して、觀察したものでなければ、恐らく正鵠を得たものではない。況んや、東西二千五百浬、南北千五百浬、其の廣袤、吾が樺太から臺灣に及び、朝鮮から小笠原島に亘る、即ち帝國の全土と匹敵すべき廣大なる海面に、散布せる占領南洋諸島、而かも此等の新占領島が千餘の島嶼より成り、其の風俗、習慣、言語を各島夫々異にせる現況なるに、纔か數旬の短日月の觀察に基く知識を以て、數頁の僅少なる紙上に描き出さんとするに於てをや。彼等の觀察が皮相に流れ、其記事が偶然的出來事の粉飾に陷るのは、蓋し當然の事と思ふ。

茲に、吾人の傳へんとするのは、將來我が帝國が裏南洋に發展雄飛し之を經營開發するに當り、最も重要視すべき鍵鑰の地であり、且つ吾人が、昨年の八月四日に上陸して以來、軍政を敷き、守備經營に努めて、親しく島情を覗ふことを得たる西カロリン群島中の一島、ヤツプ島一箇所に就ての事柄のみである。

△ヤツプ島の位置と交通機關

南洋に於ける占領三群島、マリヤナ、カロリン、マーシャルは、米領布哇、比律賓との中間、吾が小笠原群島の南方に散在する島嶼で、新嘉坡の對岸に當るスマトラ、ボルネオ、ジヤバ、セレベス等の南洋諸島を表南洋と稱するに對して、之を裏南洋と呼ぶ。此の裏南洋の占領三群島の一なるカロリン群島は、マリヤナ群島の南方に位置し、赤道を距てニユーギニアと相對し、北緯十度迄の間に於て、東經百六十三度一分のクサトエ島より、東經百三十一度のパペルツアプ島に至る、東西の長さ二千浬の間に散布する占領群島中の最大群島である。之を區分して中央、東、西の三部となし、ヤツプ島は、此の内の西部カロリン群島に、パラウ、アンガウル等の島嶼と共に所屬して居る。以上はヤツプ島を說く必要上、其の周圍に就て述べたのである。

天涯はてし無く淼漫たる北太平洋上、赤道直下の赤熱した太陽の光りを浴びて、北緯九度五十五分、東經百三十五度二十分五秒の海面にクッキリと美しく浮ぶ綠島、全島悉く椰子樹、マングロープ樹、麵麭果樹、煙草などで鬱蒼と茂り、熱帶特有の鮮かな色彩を放つて一幅の油繪を描くヤツプ島は、島の周圍約廿一浬半、面積二百七平方粁、中央に稍高き丘陵を負ひ、海岸から小山の頂へかけて、濃密なる綠林の間に、白赤青などの色彩をした洋風の建物が隱見し、海岸には數十羽の信天翁、軍艦鳥梭鳥が純白の翼を擴げて波頭を低く飛んでゐる。東北東の貿易風が、激浪蓼々と押し寄せて、東北岸を洗ひ飾り、岸壁は屛風の如く聳立して居るが、東南岸のトミール灣に入り、西カロリン會社の小島を廻つて、軍政廳の無線電信柱の聳えてゐるコロニ半島（長さ約八丁幅不定）の棧橋に立つて眺むれば、綠滴るマングロープ樹の森を背景として、珊瑚礁砂が白礎を作つて緩かな斜傾に打つては返す、北赤道潮流の碧濤か狂ひ踊つてゐる。其の風光は、宛然恰好の避暑地の觀があるが、一步島内に踏み入れると、椰子の葉蔭に惰眠を食つて居る發展社會の生活狀態や、南洋固有の濃厚なる色彩と、それに伴ふ靜止と滿足と頽廢の氣か、至る

所にさらけ出されてゐる。これ等の外觀上には、他の南洋諸島と何等の大差を認めないが、吾人が特に世人の注意を索きたい事は、本島の地質である。南洋群島の多くの島嶼が、大抵中央に鹹湖を抱いてゐる卑低なる珊瑚礁か、或は火山島より成れるのに反して、本島のみは、其の地層が明かに舊大陸の遺跡なる事を語つてゐる。詳しき年代や珍らしき發見等に、專門學者の研究を待つべき興味ある問題である。

本島は東京より直徑千八百浬、丁度沼津の眞下に當る地點に在る。二百噸位のスクーナ形の船で、一時間十浬の速度で進む時には、假令途中に於ける風浪の障碍を豫側しても、父島、サイパン、トラックを經て、ヤップ島に至るに、八日乃至十一日間にして達し得られる。此等の航程は凡そ二千二百浬である。北東貿易風の吹く頃になると、僅か四五日間で來ることが出來る。我が國民の出稼地としては、決して遠くない處である。目下の交通機關と云ふべきものは、我が海軍が、占領各島守備隊並びに警備艦に對する軍需品配給の爲めに、加賀丸（六三〇一噸）、鹿兒島丸（四、四〇四）、南海丸（四、九七二）の三隻、約一萬六千噸の運送船を借上げ就航せしめて居るけれども、他は南洋貿易會社が借船紅陽丸、御吉野丸、平順丸の三隻を四十日に一回の割合にて、及び長命、大進、東瀛、福音、順豐の五帆船を動かし、淸水商會が虎丸及びマリアナ丸の兩帆汽船を往復せしめて居る。此の外に、目下は廢止してゐるが、南洋經營組合が燐礦を輸送する爲めに、雲河（二〇六九）、第十一乾坤（三五二一）の二船を交互に運轉したことがあつた。然し獨領時代は其の航行を禁止されたるを以てロイド會社、ヤルート會社、ナウル會社等の汽船は、今は全く其の影を沒して、一隻も見受けない。郵便物に對する定期航路としては、前記海軍の借船を以て、不便ながら本邦と脈絡を保つてゐる。此の方面に於ける航運は、最も囑目すべきものにして、將來物質の集散地たるべきヤップ島の盛衰は、本島に寄合する船舶の噸數の多少によりて左右せらると云ひ得る。かく本島を交通及び物貨の集散する中心地と見做すべき所以は、本島を發しメナドを經て濠洲に至る線とガムを經て米國に、及び上海を經由して本邦に至る此等の三海底電信線の集合地たること、其の最も大なる理由にして、次ぎに本島の周圍には總月額一萬噸の燐礦石を産出する南洋富源の代表地たるアンガウル、ピリリユー、及びフアキスの三寶庫島を有し、加之、群島の至る所無盡藏に成果する椰子の實が、ヤップ島の交通機關を俟つて、其の販路に輸送せらるゝが故に、本島を目して將來與南洋に於ける中央市場たり、はた交通の焦點たるべしと思はるのである。吾人が本島を擧げて執筆するの意亦玆に存するのである。

△司法と行政

ヤップ島は、西暦千五百二十六年、カロリン群島と共に葡萄人により て發見され、千六百八十六年西班牙領となり、時の皇帝カロロ二世の名に因み、カロリン群島と命名されて以來、爾後二百十三年間西班牙の支配權の下に在りしが、千八百九十九年に獨逸と西班牙間とに交渉あり、

其結果カロリン、パラウの二群島及び、マリヤナ群島中のグアム島を除く外、爾餘の諸島を西貨二千五百萬ペセタの代價で獨逸が譲り受けたるを、千九百十年即ち大正三年の八月海軍少將松村龍雄閣下の率ゐたる我が第二南遣支隊の占領する處となり、以て今日に至つたのである。ヤップ島を始め他の南洋諸島は猶軍事占領中であるから、其の島治は寧ろ軍政上の便宜が主であることは云ふ迄もない。治安、拓殖の方針としては土人を服從せしめ、併せて日本人の増殖と發展を主眼として居るのである。本島は元來土語にてウアプ島と呼んでゐたが、發音の困難なる爲め葡萄人によりて、ヤップ島と今の名に假名されたのである。海圖に二個の名稱が記されてあるのは、斯る理由に基くのである。本島の周圍に點在するモクモク、フアキス等の諸島は、以前本島に所屬してゐたのであるが、行政地理上それ等の島嶼をパラウに屬せしめて、本島は單獨なる一島となつてゐる。我が軍政廳は、行政及び司法等の民政事務の施行上本島の管轄區域を十管區、百五ケ村に分ち、上、ニューギニアのラバオルに在る南洋守備隊本部の命を受け、下、大酋長、酋長を置き、之を行政上の仲繼機關として指揮し經營統治してゐる。其の任務は恰も我が父島の島司の如きものである。其の行政の一斑を云へば、民事に關するものは、土人に對しては土人間の不文律たる習慣に則り、法人、外國人、日本人に對しては帝國の法令に據つて居る。司法に關しては土人以外の者に對し、軍律に據るのであるが、土人に對しては矢張り土人の習慣法に據つて處理し、些細なる事も行政、司法と同樣に大酋長や酋長に任じて出來得る限り酋長に權力を持たせる事に努めて居る。此習慣法も各島それぞれ異つてゐて、本島の習慣と云ふのは、土人間の刑罰其他一切の關係は總て復讐の觀念に基いて成立して居る。即ち窃盗者は其の贓品を二倍にして返濟し亦殺人罪を犯したものは、死を以て罰せられ、父が殺されたる場合は、其の子が殺害者に向つて復讐し得るに勿論、我が國の二等親に相當する者も亦復讐の權利がある。而して若し復讐し得る權利者が無かつた場合に於て、始めて大酋長が死刑に處するのである。一般に土人の犯罪は、放埒なる熱帶種族のこととて、婦女の誘拐、掠奪、又は姦通等の生慾上の痴情事件が最多數であるが、其の他の事件は極めて尠ない。之は社會組織が單純なると、衣食住が簡易なる爲めである。殊に我が國に於けるが如き租税に對する滯納、或は脱税等の犯行者は皆無である。

目下我が軍政費の一端として、併ねては土人の懶惰を矯正する目的にて全群島の土人に租税上納の義務を課して居る。而して之等の税則は、在來獨逸殖民政廳が賦課した税則を標準として編れたるもので、其税目の主なるものは人頭税である。人頭税以外にも營業税、特別營業税、銃猟税港税、關税、手數料等の税目はあるが、是等は土人の直接税でなく三群島内にて事業に從事する邦人、外人の課税である。人頭税上納者は勿論特別除外例も設けられてあるが、十六歳以上の男子は悉く納税の義務があり、其の年額普通一人に就き十圓と定めてある。會計年度を四月より九月迄、十月より三月迄の二期に分ちて納税する規定になつて居る。徴税の方法としては、各島共に各部落の酋長に責任を負はせ、其の手數料と

して價税額の幾割かを與へてゐるが、全島を通じて一人の脫税者もなき良税である。其他の諸税で注目すべきは燐礦一噸に對して一馬克、眞珠海鼠、高瀬貝、瑇瑁等を採收する特別營業税は、採收權免許の際定められる港税としては、二百噸未滿四十馬克、四百噸未滿八十馬克、四百噸より六百噸迄百廿馬克、六百噸以上二百馬克と定められてある。之等全般の税則の多くは獨逸殖民政廳のものを踏襲したのである。而して夫等の島治管轄の制度、及び一切の社會組織は、今日軍政廳の前に銅像となつて立てる獨領時代の獨逸民政長官センフト氏が、十數年間の苦楚辛酸を以て、經營施設せし殖民政策の遺蹟である。昨年の六月、觀光視察の新聞記者團の一行が、本島に寄港した際、島情に關する種々の調査、報告書類を筆錄せしたる内に、獨領時代のヤップ政廳が設けたる本島特有の所謂行政法規をも、復寫せしめたれば、既に世に紹介されたるものと思考して省略するが、現今に於ても此等殖民政策上の法規、並びに土人間の慣習法は、各島不齊一である、即ち既に幾度も述べたるが如く各島毎に風俗習慣、殊に言語を異にして居るから、保護地全般に通ずべき法規の定めやうなく、隨つて行政の運用に關して何等の法規の存するものがない。唯守備隊本部の示した大體の方針を基礎とし、之に各島の風俗習慣即ち慣習法を加味して、各島の守備隊が、適宜に常識處理を行ふのが目下の狀況である。而して各島共に司法、警察上の違犯者に對しては、軍政廳に於ける裁判によりて之を敢決する。其の形式は軍法會議と同然にして、唯土人に關してのみは、辯護人は許可せざるも參考人を徴するを許し、若し各島の軍政廳に於ける第一審に服しない時は、トラック島の司令部に控訴して、第二審の裁判を求むる事を得せしめる等の特遇を與へてゐる。猶行政上の施設に就ては、各島に無線電信を設置して、司令部の指揮、命令を俟て執行してゐるのである。

△教育と言語

本島は他の占領諸島に比較して稍々文化の域に接近してゐる。隨つて土人の教育にも多少見るべきものがある。元來本島に於ける教育制度は西班牙領時代に開始されたるものなれど、其の進歩發達は固より獨領時代に入りての後である。本島の土人中にはアンガウル島に燐礦採掘の爲め出稼する者が多く、通信の必要上學問の必要を自覺したかの如き傾向もある。從前本島には舊教に屬する四個の宗教學校があり、之等は教育を以て土人行政上、其の發達進歩を期する唯一の手段とし、生徒の出席に就きては多大の注意を拂ひ、且つ獨逸語の普及に努めた。而して酋長の子弟は必ず入學せしむると共に、將來酋長たるに必要なる事項を網羅し以て一擧兩得の策を講じたのである。唯其の經濟の十分でない爲めに、其の宗教家の手に一任して保護監督の權を政廳に收めたるに過ぎないが、其の制度設備に至つては、有繋獨逸一流に整然完備したものであつた。然し本島が我が帝國の占領に歸して以來、獨領時代の教育は一變されて、我が新教育が着手されたのである。我が新教育とて固より教育專門家の從事して居るのではない、吾々守備隊中の將校或は水兵等が、獻身的に

我が新敎育を施して居るのである。其の方針として、先づ宗敎より敎育を分離するを以て主眼としてゐる。本島に於て吾々が施設したる制度は本島內及び附近の諸島より土人を集めて、新たに我が軍政廳にて建設したる學校に就學せしめ、少年は滿十歲から十二歲迄を義務年限として五學年に分ち、授業時間は各學年共一日二時間で學科は日本語の會話、同讀方、算術、地理、體操の五科目とし、會話と算術に重きを置き、次いで讀方を敎へるのである。大人は就學期間三ヶ月とし、專ら邦語の會話を修得せしめ、修了後に軍政廳の配下に雇入れて、警吏、邏卒、小使等の雜役に勤務せしめ、以て其の間に邦語を會得熟達なさしめたる後、其の鄉土に歸島を許すのである。而して土人が學校に於て使用する書籍並びに日用品は官給とし、無屆缺席者には一日五ペンニツヒの罰金に處する事に定めてゐる。されば今日に於ては最早各島至る處に日本語が普及し、日常の諸要件には邦語を以てしても、何等の不便を感じない程度に達してゐる。要するに南洋各島に於ける我が新敎育は、土人の社會狀態を改善し、其の實際生活を向上せしむるを旨として經營すべきものなれば、蠻風を打破して善良なる習慣を養成する爲めには、少くも數個の調査し研究すべき問題がある。即ち土人間に行はるゝ傳說、風俗、習慣等を、或は迫害し或は助長する等、先づ顯著なる社會現象に就いての調査及び彼我人種の異同を研究し、心理狀態を考察すると共に、同化政策の程度方法に就いて一般方針の樹立、並びに各島に於ける經濟的基礎を研究して、其の要求を明白にすることである。輸出品の狀況を明かにするは勿論、更に海陸に於ける產物を精査し、經濟的狀態の改善法を確定して、之に必要なる敎育を施さねばならぬ等である。實に新領土に於ける我が新敎育の將來や洵に多事多望なり、宜敷敎育當局者の銳意獻身的の活動と施設に俟たねばならぬ。

コロニー半島に樹立されたる日章旗の下、醜の民草が無疆の聖恩と、八紘に輝く我が武威に浴して以來、蕉烟蠻雨蕭條たる南洋孤島の彼等住民が、斯くの如く撫育敎養され來りたるも、其の一面には未だ曚昧なる土人社會の奇習に囚はれて脫せず、野蠻より文明への混沌たる過渡の時代に彷徨ふ亦宜なり。然り彼等の耳目に觸れる開明の文物に於てしても、亦莽の如く昨日はラインの守を唱へ、今日は君が代を高誦するの境遇ではないか。されば彼等土人を改善指導して克く日本化せしむる唯一の手段として、我が行政及び敎育と離る可からざる密接なる關係を有するものは、即ち言語である。目下本島には土語、獨乙語、邦語の三口語が併用されてゐる。嘗て獨領時代に於ける獨乙宣敎師の獻身的布敎の結果は大いに土人の性情を柔順ならしむると共に、著しく獨乙語を普及し其の勢力頗る優秀なれど、爾後我が敎育當局者の施設を俟つて、之れを凌駕するは敢て難事にあらざるべしと惟ふ。玆に亦吾人が特に紹介せんとするのは、ヤツプ語とも云ふべき本島固有の土語である、音樂は各島皆異つて居るが、ヤツプ語は其の標準語とも見做すべきもので、音樂としては最も完全なものにして、ムードやテンスの表現の樣式には、恐らく如何なる國語も之に勝つたものはないと思ふ。其の內容は極めて複雜多岐

にして、到底外國語を以て詳細に說明が出來ない、實に驚く許り精巧なものである。語源は我國と同一のものゝ如く思はるが、發語通有性の發音のみにして文字を存在しない爲め、本島のノミキリ村に居住せし獨乙カトリック敎の長者が、二十七八年の歲月を費して、從來區々であつたものを纏めたるヤップ語字典とも云ふべき約六百頁の大册は、アルファベットを以て其の發音によりて綴られたものである。此のヤップ語は本島に於ける裁判上の用語として、今日も猶判決其他の際に使用されてゐる。僅かに言語學者の穿鑿すべき價値あるものと確信するのである。

　言語に序いで、本島々情を觀ふに足る二三の奇譚を以下に擧げて、一般の參考の資に供したい。

△サラペとアバイ

　本島に於ける貨幣問題には、隨分面白い話がある。單に面白いと笑つて濟されぬものもある。目下本島にて通貨の首班に居るものは、獨乙の補助貨幣なる馬克(マーク)銀貨及び布(フエンニー)、白銅(ニッケル)である。邦貨も多少流通せぬでも無いが、其の量は極めて徵々たるものである。我が守備隊司令部の推測によれば、獨貨流通額は内外貿易商の手許在金を合算して、約五、六十萬馬克に過ぎまいと思ふ。之等の在外補助貨たる獨貨は、歐洲戰爭の勃發以來、爲替相場に變動を惹起したる爲め、其の交換價値に至大の逕庭を生ずるに至つた。仍て我が軍政廳にては從來一馬克五十錢を以て換算して居た慣例を參酌して、昨年三月より三馬克を以て邦貨一圓に替ゆる旨の布告を發した。然るに、爲替相場の變動を理解しない土人は、人頭稅の徵收や食糧品雜貨類の交易に際して三馬克一圓の換算を强ひられるのだから、之等事實上の負擔加重を見て、獨領時代よりも我が新施設を怨むに至つて居る。實に土人政策上由々しき問題と關聯するが故に過りに看過するを容されない。須らく當面の障碍を緩解する何等かの方便を執らねばならぬ問題である。

　本島には右に擧げたる獨貨、邦貨の外に、貨幣代用として今尙ほ土人間に流用されて居る本島特有の通貨石(ゲルスタイン)がある。之を土語でサラペ或はパラオ貨とつて、丸い孔の穿ち拔いた白い扁平な圓石である。其の價格の測定には普通拇指と中指とを充分開いて計つた長さを以て、直徑としたサラペを十馬克の價格を有するものとし、此の直徑に中指一本の幅を附加する每に十馬克宛増加するのである。石貨の大なるものに至ると直徑一丈餘に及ぶから驚かざるを得ない。從つて其の價格にも一個の石貨が百馬克二百馬克の價値を有するものがある。此等の石貨に使用する石材は本島に存在しないので、小さなカノーに乘り幾多の危險を冒して遙々パラオから掘り出して來たと云ふ所に、石の價値が存するのである。且つパラオ貨の名稱のある所以である。石貨には一個一個に系圖があつて丁度今日では骨董品的價値を有してゐる。土人は之を非常に尊重してゐるが、島内至る處土人の小屋や路傍に大きな石貨が雨曝になり、甚しいのは道路の敷石に使用してゐるなど可笑な矛盾がある。此の石貨に就ては本島の名物だけに色々不可思議な傳說や、神話が傳へられてゐるのは

既に幾度も世に紹介された處である。

次ぎに本島は建物の島と云はれるだけに、小は犬小舎の如きダバールより大は官殿の如きアバイに至るまで、大小種々雑多の建築物がある。獨領時代の遺物や我が軍政廳で新たに建てたる洋館なども多少存在してゐる。普通土人の住宅としては地上に棕梠族の葉を敷き屋根も同じく椰子等の植物の葉で葺き、庇の高さは地上三四尺、床もなく、入口は僅かに二尺四方位で、土人は獣類の如く匍匐して出入するのであるが、中には床の高い板作りの家や棕梠の葉で圍んだ家などもある。部屋は多く只一室のみで祖父母、兩親、孫子等悉く雑居生活をして居るが、此他に本島獨特の慣例上、母屋の側に新婚者が一時別居する家と料理小舎が建て附されてある。而して之等の家屋の屋根が孰れも急勾配に造られてゐるのは五分或は十分間毎に素晴らしい音を立てて來襲する熱帶特有の驟雨（スコール）を屋根に受けて、備へのタンクに飲料水を收穫る爲めである。土人は天水の外は決して飲料に使用しないのである。土人建築物中に最大なるものは、土語でアバイ一名オール、メン、ハウスと云ふ共同娯樂場的の建物である。之れは南洋諸島到る處の部落に必ず設けられてゐて、部落の土人が踊りをやつたり集合したりする時に用ゆる大集合所の如きものである。此アバイの構造は普通の土人の家と餘り相違はないが、多數の土人が集る處だけに頗る壯大なる事と、中には幾間にも仕切られて數家族の住める樣になつてるのもある。殊に建築術を誇つてゐる本島のアバイは其の規模の莊麗雄大なる、恰も印度や埃及に於ける建築物を見る感がある。

家の柱は廻り七八尺高さ十七間もある麵麭樹三十有本を以て造り、梁や柱の組み立ては總て椰子の纖維で綯つた太い麻の如き繩で堅固に結び、家の構造に一本の釘も使つて居らぬが、其の嚴丈なること驚く許りである。欄間には種々莊麗な彫刻を施したり、大きな獨木舟（カヌー）の模型を吊したりしてゐる。其の柱や切妻に汽車や汽船、魚、日章旗、鳥などの出來ない繪が描かれてあつて、是れは其の年に起つた大事件、例へば始めて汽車汽船を見たとか、大漁があつたとか、或は本島が帝國の占領に歸した事などを表象したのである。彼等土人が一個のアバイを建築するのに約二十年の星霜を費してゐる。本島内に於て最も美麗なるものはトミール村のアバイにして、最も雄大なるはゴロル村のアバイである。之等は其の規模の雄大と云ひ、用材の立派さと云ひ、裝飾に手の込んで居る點と云ひ、實に東西カロリンは勿論、南洋隨一と評される程結構頗る雄大なものである。是等のアバイは文明人の所謂倶樂部にして、部落の土人は此處に集つて世間話をしたり、旅人を宿泊せしめたりする。時には我が軍政廳の許可を得て、赤銅色の逞ましい軀幹に一條の犢鼻褌をメめたる黑奴と、植物の葉で造つた腰簑を纒つた樓女とが、花輪や羽毛で各々盛裝を凝らして此アバイで終日終夜亂舞狂踊するのである。又我が海軍の占領當時迄、此アバイで一種の娼妓の制度が行はれてゐたのである。即ち其の部落より最遠距離なる他島より一定の期間若い娘を蝶貝の貨幣で買取り、その買取つた一定の期日の間は娘の兩親に種々な贈物を與へて自由に暮さしめる、買取られた娘はアバイの内に居つて、部落の土人に安

色を異つたものである。

島情に就いては、此外土人の人種、階級別、風俗、習慣等書く可き事種々あるが、紙面に限りがあるから、他日に讓つて省略する。

△氣候と産物

本島の氣候は熱帶圏に在るとは云へ、海洋的氣候で最も高氣温華氏九十度内外、普通八十四、五度、決して邦人の健康に適さぬ氣候ではない。殊に一ケ年三千二百五十耗の雨量を齎らす驟雨の涼味と、島内の蚊蠅の類を悉く一掃し去る北東貿易風が、毎年十月中頃より翌年の六月頃迄吹いて、恰も我が新緑の季節の如き清爽な快感を與へるが故に、氣候は比較的に調和を得て頗る凌ぎよい。而して本島の日出及び日沒は共に六時にして、中央標準時間を用ひて差支なければ、生活、勤勞其他の點に於て邦人には母國の慣習上甚大の天惠があるのみならず、本島には猛獸毒蛇の類は一頭も棲息せず、野生動物としては僅かに蝙蝠、鼠、猫、山猫山豚、蜥蜴の類のみ、而かも陸には天然の儘に繁茂する豐醇なる熱帶果實あり、海には珊瑚礁畔に群棲する無盡藏の魚貝あり、故に生活の簡易安全は之等の天與の美祿に鼓腹して確證を得べくある。されば邦人企業家にして此の方面に資本と勞力を輸し、南島の富源の開拓に企圖せんか、農業、漁業、商業孰れも有望ならざるはなく、其の利得の決して少なからぬものがあると思ふ。今産業的價値ある本島の主要産物を擧ぐれば、陸上に於ては椰子樹、象牙椰子（アイボリーナット）、露兜樹、麺麭果樹、檳榔樹及び棕櫚等の喬木と、夫等より生ずる果實就中コプラは油及び石鹸の原料として需要最も多きものである。其他砂糖黍、白檀樹、イランイラン樹、及び香水原料たるレモン草、皮膚病の藥品となる玉リンドウ樹、藥品コカインを採收するコカ樹等の藥草藥樹が茂つてゐる。水産物に就ては汪洋たる南洋水域の調査全く不明なれど、其最も顯著なるものはボタンの原料なる高瀬貝を始め、海綿、眞珠、珊瑚、鼈甲、海鼠、玳瑁及び鰹、大鯛、鰡の類である。之等の豐富なる天産を有するに拘はらず、彼等土民は僅かに原始的なる漁撈、耕作を營む外、全く無爲にして其の生を安じてゐる。要するに彼等土人の生活は極めて簡易、萬事原始的であるから、思想の幼稚單純なる事云ふまでもなく、向上の精神もなければ、勤勉自ら勵むの思慮もない。日常に於ける彼等の道樂とし云へば、食ふこと踊る事及び淫樂に耽る事の三つである。斯くの如く其の風習の淫靡、野蠻、其の性格の懶惰、放縱、之れ熱帶土人には免がれぬ通有性である。併し今は已に武器も沒收せられ、獨逸時代に於ける宗教力の感化に依りて、比較的に正直温順になつて居るから、頗る取扱ひ易い。故に之等南洋諸島が將來帝國の版圖に歸する事となつて、日本治下の臣民として我が皇化に浴せしめんとするには、土人の思想が極めて單純であるから、之を統治するにも簡單を尙ばねばならぬ。遽かに土人古來の習俗を打破し、其の思想上に變動を與へ、複雜な施政の下に就かしむると云ふことは深く考へねばならぬ問題である。

妬婦傳

笹川臨風

上、兒女の情

戀に上下の區別がなければ、嫉妬にも上下の差別はあるまい。九尺二間の裏店に犬も食はない夫婦喧嘩の大立廻りがあれば、やんごとない將軍家の大奥にも、とんだ痴話場が演ぜられたりする。嗜むべきは悋氣嫉妬と敎へられてはゐるが、根が神經質勝ちで、おまけに家庭と云ふ狹い範圍の裡に生活する婦人に取つては、之も據ない藝當か。「御様のをかしきにも、猶振り離れなんことはおぼしかへさる、やむごとなきかなに、いとゞ心ざし添ひ給ふべきことも出できにたれば、一つかたにおぼし靜まり給なんを、かやうに待ち聞えつゝあらんも、心のみつきぬべきこと、中々物思ひの驚かさるる心地し給ひ」(源氏物語)て、六條御息所の靈は物の怪となつたのである。「殿様我をありなしに遊ばし、御國元より美女取寄せ給ひ、明暮是を惱ませ給へども、女の身の悲さは、申して甲斐なき恨み、せめてはそれめが形を作らせて、此如くさいなむ」(好色一代女)とのことから、悋氣講の人形責めが、噓やら實やら好色本の種とはなつたのである。

何も悋氣嫉妬は必ずしも女の專賣ではあるまい。男だとて、法界悋氣に、あらぬちん〱を起すものも少くはないが、それ、そこは男の世界は自由だけに、いい加減に見切りがつけられる。大丈夫の心事は兒女の情とは違ふ。若し男に悋氣深いものがありとすれば、やつぱり女性的と云ふ形容詞をつけねばならぬ。まあ女を見たらば嫉妬の動物と思へだが、悋氣嫉妬の多少は人々に依つて異る。狐色は固より上乘の部、多くは黑焦黑燒の部に屬するから、世間の男性は之にうんざ

りとして恐縮せねばならぬ。

悋氣嫉妬の罪が一に男子にありとするのは、固より一知半解たるを免れぬ。女の男を理解するの力が足らぬと云ふことも、確に其一原因たるを否み難い。男も其罪の一部分を甘受せねばならぬと同時に、女も其罪の多分を負はねばならぬ。愚なる女の悋氣嫉妬に依りて、男子が其驥足を展ばし損ふことは、世間に其例が幾多もある。斯うなると、女は男の足手纒ひである。多くの家庭に、細君難を口にするもの、若くは口にこそ出さぬが、腹に嗟嘆するものが、どれほどあるか、知れないではないか。錦の表だけ見て、裏の襤褸に氣をつけぬやうで、何で世間相が分らうか。

下流社會の燒餅沙汰は三面記事や鼻鹿氏の説明や、貧地見聞やらで珍らしくもない。が、さりとて上流社會の嫉妬は上品で、優美で、こそ侍るであらうとは云へぬ。情の激するところは、殆ど見堺がないと云つてよからう。

平政子は我が婦人史の大立物で、其手腕其技倆は殆ど天下一品である。我が婦人史に平政子のあるは寧ろ誇とすべきである。確に巾幗者流の英雄で、政治家の力量を十分に備へてゐる。此點から云ふと、今古に絶して、空前絶後の女丈夫である。源頼朝を助けて覇府を開いた内助の功は固より、良人の死後に垂簾政を聽いて、覇府の基を堅くし、情を離れて理性を以つて、着々事を行つたと云ふ點は、まことに以つて驚嘆すべきことである。他に例すると、漢の呂后にも比すべきであらうが、呂后よりは一層頭が明晰で、理性が勝れてゐる。則天武后と相比敵する手腕があつたが、武后のやうな多情ではない。淀君の如き手腕のない妖婦とは事かはり、マリア、テレサのやうな情的行動はなくて、凛として秋霜の如くであつた。頼朝とは、もとが乳繰合ひのどれ合ひではあるが、固より此婦人に對しては頭が上らぬ。

一體頼朝は無双とも往くまいが、好色家列傳中の一人である。流人の身でありながら伊東祐親の女に慇懃を通じたり、北條時政の娘なる政子と戀愛に陷つた

り、源家の公達甚だ以つて油斷がならなかつた。一寸見ると、これらは旗擧げの政略のやうに見えるが、後年の多情を見ると、政略よりか、寧ろ好色心から出たと云ふ方が確かである。此連れ合ひであるから政子も全く氣が氣ではなからう。いくら女丈夫でも、そこは女、此大頭が昔を忘れての浮氣三昧、懲らしてくれようとの癪もあつたらうが、政子の悋氣は隨分激しかつた。其激しいのを承知で、賴朝のこそ〳〵浮氣が又人一倍と來てゐるから、此兩者の葛藤は鎌倉史に於て見苦しい一であつた。源平の喧嘩が濟むと、兄弟喧嘩、夫婦喧嘩、主從喧嘩、朋輩喧嘩で、源氏三代は亡んだのである。

　良橋太郎入道の娘に龜前と云ふのは、養和元年の春頃から慇懃を通じたのであつた。養和元年の春と云ふと、旗擧からは間もない時で、まだ海の物とも山の物とも運命の定まらぬ時節である。治承五年七月十四日に養和と改元のあつたので、其年閏二月四日に平相國淸盛入道は死だのである。云はゞ兵馬倥偬で、賴朝は伊豆に旅寢してゐたのであるが、英雄の心中閑日月ありで、此頃から既に發展したものだ。此女はさして美しい方ではなかつたが、心ばへが柔和とある。才氣煥發した、きび〳〵した、ともすれば、亭主を眼下に見る政子が身についてゐる賴朝の隱し食ひには此やうな唯々諾々の女が恰好であつたのであらう。けれども外聞の憚もあり、逢ひ引きに便利と云ふ點から、小窪にある小中太光家の家に隱まつて置いた。

　けれどもいか物食ひの賴朝は猶之を以つて足れりとせずに、現在兄なる惡源太の未亡人に懸想して、伏見冠者廣綱を使として潛に艶書を通じたが、未亡人は以つての外と、受けつけぬ、ばかりか此旨を父なる新田冠者義重に訴へた。御臺所政子の悋氣は義重よつく存じてゐる、こりや困つたことになつたわいと、急に思案を廻らして、未亡人殿を帥六郎に緣づかせた。失戀の賴朝は腹立ちまぎれに義重に當り散らして、義重は御氣色を蒙むることゝ相成つた。

　艶書の使者の役目を致した伏見冠者廣綱と云ふ男

は、先づは野幇間と云ふやうな柄であらう。例の龜の前を主命に依つて我家へと隱まつて置いたが、御臺所の繼母牧の方の密告から、此事露顯となつて、御臺所の逆鱗は一方でない。己れやれ性惡な助倍野郎と、直に牧の方の一族に當る牧三郎宗親に仰せあつて、廣綱の家を破壞に及ぶ。面喰つた廣綱は龜の前を伴ひて、這這の體で、鐙摺なる大多和五郎義久の家へと遁れた。翌々日此事を知つた賴朝は遊興に托して宗親を供に、義久の宅に赴き、廣綱を召出して、一部始終のことを聞き終り、宗親と對決させる。驚いたのは宗親、平あやまりに謝まつたが、賴朝の鬱憤は何でう散ずべき、其頭此方へと、御意あつて、宗親の髻を切り放つ。御臺所の仰を重んずるは、神妙なれども、なぜ一應内々告げ申さゞるや、奇ッ怪至極な奴との仰せであつた。御臺所の仰を重ずるは神妙との諚宣に依つても、賴朝は二目も三目も、乃至正目、風鈴付き位まで御臺所に讓つてゐたことが分る。宗親は逐電したが、之が一大事件となり、北條時政は氣色を換へて、本國の伊豆を指して進發に及んだ。

計らずも舅の北條氏と賴朝との確執を開いたのは、要するに賴朝の性惡が本ではあるが、御臺所の燒き樣が猛烈なる結果である。北條時政の豆州下向と聞いて、賴朝も氣色を損じ、梶原源太を召して、父なる相模は下國致したる由なれど、其子江間(義時)は從ひ參りしか、但しは又鎌倉に罷在るや、汝參りてどつと糺して參れと命ずる。梶原源太景季は、命を畏り、片時の間に歸參して、江間は、下國せざる由を復命する。さらば江間を召せとの仰せで、判官代邦通を以つて、御感の由を義時に傳へた。義時の下國しなかつたのは、賴朝と北條との確執を解くに與かつて力があつた。

しかし此紛紜があつても、賴朝の龜の前に對する愛情は依然渝らなかつた。のみならず寵愛は日を追うて盛となる。此間につまらない籤を引いたのは、伏見冠者廣綱で、御臺所の憤怒は家屋破壞ぐらゐでは治らず、此野幇間は、遠江の國へと配流せられた。

御臺所が賴朝に對する權力は凄じいもので、鎌倉將

軍の内幕は、關東名物の嬶天下に空つ風であつた。志水冠者義高は木曾義仲の子で頼朝の婿であつた。義仲が誅せらるゝともに義高をも誅せとの沙汰が鎌倉から下る。其沙汰下りしと聞いて女房どもから姫君に申す姫君は胸躍らせて、我が夫に斯くと告げる。義高打案じて、さらば斯く致して遁れ出でうと、女房の姿に變裝し、姫君及女房達に紛れて逐電する。其身代りには日頃冠者の側に在りたる同じ年配の海野小太郎幸氏を替玉としたが、其夕事露顯して、頼朝は非常の忿怒、それ路次にて討ち止めよとのはげしい下知。堀藤次親家の家人之を入間河原に追つて、志水冠者は敢ない最期を遂げる。姫君の悲嘆は云ふばかりもない。御臺所も其心中を察して哀傷に沈む。やがて姫君はどつと床に就いて明日をも知れぬ露の命となつたから、御臺所は憤怒やる方なく、頼朝も山の神の荒び給ふには手もつけられずに、さしも勳功あつたる堀の家人は賞せられずに、却つて打首となつた。

常陸介藤時の長女も亦頼朝の手のついた一人である。此女には男子が出來したが、隱すより顯るゝはなしで、御臺所は柳眉を逆立てゝの御怒り、後に伊勢の國を宛てがはれて、頼朝上洛の折の途中の便りとした大進局と云ふのは、多分此女であらう。

御臺所が燒けば燒くほど、其眼を偸では、頼朝のぼろつ買ひは盛であつた。悋氣に對する反抗もなつたらう。恐いもの見たさの好奇心もあつたらう、燒いて燒いて角を出す御臺所の憤怒の相を見るよりか、艶めかしい隱し妻との差向ひの方が如何ばかりか興があつたらう。斯うなると悋氣の爲栞がないやうなものだ。浮流水雷だの、鐵條網だの、おさ／＼警戒を嚴にしても、鎌倉殿はツエッペリン飛行船でどし／＼浮氣の爆彈を投ずる。これでは、御臺所も奔命に疲れると云ふ有樣であつた。

下、河東の獅子吼

詩に樛木の篇がある。小序に依ると、樛木は后妃の下に逮ぼすなり、能く下に逮して嫉妬の心なきを云へるなりとある。元來情の奔馳を抑へる北方支那人のう

ちに起つた儒敎のことであるから、つとめて情を抑へよと敎へてあるが、事實はさうは往かぬ。死で蛇になるやうな連中が到るところに轉がつてゐる。梁の張纘に妬婦賦があつて、「忽ち其妬鱗に逆ひ、其忌制を犯すあらば、湯に赴き火を蹈み、目を瞋らし、袂を攘ふ」と云つてゐる。其猛烈さ加減には堂々たる丈夫兒がへこたれるから可笑しい。王文穆が堂を作つて、之を三畏と名けたところが、揚文公、之に戯れて云ふ、どうだ四畏と改名してはと。そりやどうしてと、文穆が反問すると、文公おほんと咳き拂ひ、「兼ねて夫人を畏るかね」と。文穆頭を掻いて苦笑ひ、「之は手嚴しい」と。天下四畏の連中少からぬは、全く以つて男子の面汚しである。

房玄齡は杜如晦と相並で有唐建國佐命の功臣、名は麒麟閣に列して、古今の名相と云はれてゐるが、家庭は寧ろ不幸であつた。玄齡の夫人は大の燒手として、中外に其名が高い。太宗之を聞き、皇后をして夫人を召さしめ、之に語りて云ふ、悋氣しないで生きてるのと、悋氣して死ぬのと、どちらが善いか。夫人言下に答へて、陛下、それは悋氣して死ぬ方が餘つぽどましでござんす。さらば金絣酒を飲ませい、飲めば直樣死するが此酒の靈驗、悋氣致さぬとならば飲までも善いと、一杯の酒を下さるゝと、其杯取るより早く、ぐいと飲み乾した。固より死ぬのでも何でもない酒なれば、命は無事であつたが、驚いたのは太宗皇帝、いや途方もない女がある者だ、朕すらあの樣な女を見るは畏ろしい、まして彼を妻とする玄齡、定めし畏ろしいことであらうのうと仰せられた。之と同工異曲の話は、同じ太宗皇帝と、任環との妻とのことゝして傳へられてゐる。唐の兵部尚書任環に、皇帝から二宮女を賜はつたが、いづれも皆國色の美女。妻の柳氏は之を見て、憎くてたまらず、熱湯を浴びせかけて、惜や其黑髮を爛れさせて生れもつかぬ禿瀞坊主にした。太宗之を聞いて、召して金絣酒を賜ひ之を飲まば立ろに死するが、悋氣を起さねば飲むに及ばぬとの仰。柳氏勅を畏みて、妾は夫環と手鍋下げて、夫婦倶稼ぎを致し、遂に今日

の策達をば仕りました、然るに外に増す花が出來るやうに相なりましては、寧ろ死だ方がましでござります申上げると、金餅酒を執りて一飮して盡くした。けれども固より毒酒にてもあらねば一睡して目覺めたのである。帝環に謂つて曰く、いやどうも驚いたよ、朕もあの決心を見ては身の毛もよだつ、定めて汝はつらからうと。帝王の尊きも嫉妬の前には恐縮せざるを得なかつたのである。

唐の御史大夫裴談は流石に佛教信者だけあつて、巧妙に妻の恐るべきを佛教的に述べた。人の妻に畏るべきもの三あり、少妙の時は之を視るに生菩薩の如し、兒女前に滿つるに及び、之を視ること九子魔母の如し、五十六十に至り、薄く粧粉を施し或は靑く或は黒く、之を視るに鳩盤荼の如しと。餘つぽど此男も細君を恐れたと見える。

酉陽雜俎に依ると、臨濟に妬婦津あり、相傳へ言ふ、晉の太始年中に劉伯玉の妻段氏字は明玉なるもの、頗る嫉妬が深くあつた。伯玉常に妻の前にて曹子建の洛神賦を誦し、其妻に語つて云ふ、女房を持つなら、此やうな女が欲しい、さすればさら／＼憾もないと。妻曰く、水神が美しいとて何で妾を輕蔑することが出來ませうか、死んだら水神に負けますものかと。其夜家出して、身を水に投じて死だ。其後七日にして、夢に伯玉に語つて、貴郎は水神にお惚れなすつたが、今は妾も水神になりましたよ、と云ふかと思へば之なん南柯の一夢で目が覺める。伯玉之から終身復水を渡らなかつた。此後婦人が此渡を渡るには、衣裳を壞り、お化粧をはがさねば、風波暴に起る。但し醜婦は如何に粧飾するとも其愛はなかつたが、醜婦と思はれないために、人三化七の連中までが、化粧をやめて、やれ危いと渡つたとは、うそやらまことやら、とにかく眉毛に唾の話である。

桃花一枝を美なりと夫が賞めたと云つて、其樹を斫り倒し花を措いたと云ふ阮宜の妻はヒステリーの骨頂である。五代の王鍔は賊黄巢來襲すと聞いて、左右のものに、黄巢は南より來らんとし、夫人は北より至ら

んとするが、さてどう致さうかと、尋ねると、得たり賢しと、左右のものは、黄巣に御降參あること然るべく存ずると申上げたと云ふ。夫人は賊より恐しかつたことゝ見える。陸愼の妻のことを世間で臙脂虎と名けたと云ふことだが、どうやら臙脂虎は到る處に虎視耽耽としてゐるらしい。

　劉孝標は自ら王敬通と三同四異の辨を作つて、其三同の一に、敬通には忌妻あり、余にも悍室ありて家道坎坷すと述べてゐる。男も斯うなると憫然なものであるが、古今此嘆をなすものは少くないやうだ。蘇東坡が黄岡に謫居された時に陳慥と友とし善かつた。慥は禪に參して、頗る之を得意としてゐたが、其妻の柳氏と云ふのが、一筋繩ではゆかぬ悋氣もの、慥が客を招待して、妓を聘すると、此法界悋氣屋は杖で壁を擲ぐり散らして大聲揚げるに、客は興醒めて、いづれも匆々に退散する。東坡之を嘲りて一詩を作りて云ふ、龍邱居士亦可ㇾ憐、談ㇾ空說ㇾ有夜不ㇾ眠、忽聞河東獅子吼、拄杖落ㇾ手心茫然と。河東は柳郡で、杜詩に河東女兒身姓柳の句あれば、之を引いたのである。傳燈錄に河東の獅子吼の語あり、東坡は之を巧に借用してゐる。

　河東の獅子吼は、何の爲に空しく叫ぶのであるか。家庭の平和は常に之に依つて攪亂される。畢竟するところ女の淺はかなる了簡から起るので、情を抑制するだけの力が乏しいからだ。しかし男が悋氣をすると、相手の女を斬つたり叩いたりするのが例であるが、女の嫉妬は男に向はないで、競爭者の女を目の敵とするを普通とする。三國時代の袁紹の妻は紹が死ぬと、其寵婢五人を殺したが、地下に紹と逢ふのを恐れて、死屍の頭を髡にし、其面を黒うしたと云ふことだ。晉の賈充の婦郭槐は名うての嫉妬家であつたが、其子の乳母に抱かれたるを充があやなすのを見、さしづめ之は乳母と出來合つてゐるのであらうと早合點して、乳母を打殺したがために、其幼兒までが、あとを慕つて死だと傳へられる。何と馬鹿氣たことではないか。其夫が憎いよりか、先づ相手の女が面憎くて堪らず、必ず之に報讎せねば已まぬのである。男を刄物三昧にする

などは餘程の除外例で、男を殺さんとするよりか、寧ろ女を害せんとするのが先に立つ筈である。若し男に刄物を向ける場合は、男を殺して己れも死なんとする無理心中の形式を取つたのであらう。可愛い男を他の女に寢取られるよりは、死出の旅路に伴れ立ちて、我が情に殉せさせようとするのではあるまいか。古今の妬婦傳には稀有の例に屬する。

嫉妬の情のない女はあるまい。くよ〳〵と泣いてゐる内攻的嫉妬か、但しは河東の獅子吼と云ふやうな外向的嫉妬かが、いづれにしてもうるさいものだ。古今上下三千載、いづれの世にか妬婦のあらぬ時代があらう。女のあるところ隨時隨處に妬婦がある。たゞ妬婦と名のつく連中は特に此者流の間に異彩を放つてゐるものであるが、なべての女も實は此妬婦の小規模たるものに過ぎぬ。妬婦の行動に駭目驚瞻するものは、自ら反省したらばよからう。發作の强と弱と、連續的と、斷片的との區別はあるが、いづれも同じ形式を備へるやうである。情を抑へるのは、虚僞ではない、人間としての約束である。やはり女は悋氣せまいぞと嗜むべきものである。悋氣は決して見つとも善いものではない。之とともに男性もなるべく嫉妬を受けるやうなへまをやらぬ覺悟が必要である。河東の獅子吼があるやうでは何の參禪が役に立たう。女子も反省すべし、男子も自ら警むるが當然であらう。女を責めると同時に、男をも戒めねばならぬ、などと、道學先生を氣取るのが何も必ずしも此妬婦傳の目的ではあるまい。樗陰君おだてゝ妬婦傳を作らしむ。未だ十分に博引旁證するの遑なかりしを謝するばかりである。

人物評論（七十九）

東宮殿下御教育の大任を擔へる人々

▽東宮御學問所の人々

鵜崎鷺城

乃木大將が帝王學の經典として、自盡前皇太子殿下に獻上したと言はるゝ山鹿素行の中朝事實に、夫れ皇太子は天下の重職を受けて億兆の君師と爲り、安危治亂一に之れに歸す。是に於て左右を選び師傅を置き、言行之れと化し風俗月に之れと移る。其入る所既に深く、其習ふ處既に積まば即ち其知其德大に成る云々とあり、從つて師を立て傅保を置くの愼まざるべからざる所以が說かれてある。さすれば東宮に陪侍して御教育の任にあたる人々は、光榮であると同時に、其責實に重しと言はねばならぬ。

高輪御殿内の東宮御學問所は、大正三年皇太子殿下が學習院初等科御卒業後直ちに設けられたもので、未來の皇帝、大元帥としての智德御學習の場所である。東宮輔導の任を擔へる人々は、文武兩道に亘つて各々其人を得て居るが、其中最も主もなるものは御學問所總裁東鄉元帥、東宮大夫濱尾新男、東宮侍從長入江爲守子、御學問所幹事海軍少將小笠原長生子、御用係杉浦重剛、文學博士白鳥庫吉、理學博士

川崎直方、騎兵中佐伯爵壬生基義氏等で、此外に學習院長大迫尚敏子、東京大學總長山川健二郎、陸軍大學校長陸軍中將河合操、海軍少將竹下勇氏等が御學問所の評議に與つて居る。乃ち是れを概括していへば、東鄕元帥は武の方面を代表し、濱尾男は文を代表し、共に齊德功業上に時に顯はれ、聲望既に世に周く、其風采は高山巨海の如くにして一世の具瞻する處、總裁及び副總裁として東宮依賴の大責任を附するに足るべき人格である。

陸の乃木將軍に對して、東鄕元帥は海の典型的人物である。前者は死後神格化し、後者は神人兩格を具へた人の如く嘆美者の眼に映じて居る凡そ人間に完全を期するの難く、完全に近しと言はれるものでも多少は敵あるを免れぬが、元帥には表面にも裏面にも此敵といふものが一人もない。素より元帥とても一箇の人間であるから缺點をホジクル日になれば、無瑕といふことは出來ぬけれども、薩摩の宿將中此人の如く渾然として圓熟した人格を具へたものは無い。彼は軍人として奇謀妙籌の智者でもなければ、古今の軍事に通ずる學者でもない。而も聯合艦隊司令長官として日露戰爭にアレ丈けの手柄を爲し、鎭守府を宰して名司令長官と言はれ、軍令部長として三年間其職を全うしたのは、其宏量、感化、統御の力――是等を約していへば人に長たるの器識――に由來して居る山本權兵衞なり、柴山矢八なり、日高壯之丞なり、將た上村彥之丞なりは、手腕に不足はないけれども、自分で功名手柄をしようとか勢力を造らうとか、大なり小なり自我の念があるから、縱令ひ一部分に喜ばれても、全體の人を降服させる力を缺いて居る。元帥にはパーソナル、アスピレーションといふような分子が殆んど無く、如何なる場合にも自我を超越して居るかに見える。寡默茫洋として一見何處が偉いのかと思はれる程であるが、其無言無爲の間に剛毅、決斷、雄辯、感化、大要領が潜んで居る。譬へて言へば元帥はラヂュームの如き人であるまいか。ラヂユームは化學的に分析して其力を究めることは出來ぬけれども、靈驗の大なるものとされて居る如く、元帥は表面平凡のようであるけれども、何處やらに非凡なる天分を具へて居る。此人格は即ち彼れ自身の勢力にして、又た同時に他に對しても一種の魅力を有し、恰も乃木の二字が精神的に一種の靈感を與へる如く、東鄕の名を聞けば直ちに純なる英雄崇拜心をそゝる。固より元帥の人格は何職に當るも無爲にして治まつて行くが、想ひ他の現實的權力の衝に立つよりも、東宮輔翼の職に己れを獻ぐる方が其人と處と兩つながら相得たるものでなからうか。

元帥が軍部の耆宿たる如く、濱尾男は學界の元老にして、而も類型の人物と稱せられて居る。男は但馬豐岡の人で、大學南校を出て米國に留學し、歸朝後開成學校監事に任ぜられた。男の監事時代は丁度小村壽太郞、齋藤修一郞、長谷川芳之助、古市公威、菊池武夫等が海外留學の蹶起運動を爲し、他にも隨分アバレ者が居た時で、隨分生徒の面倒を見た。爾來文部省大書記官、官立學務局長、專門學務局長、文部大臣になつた外は、或は開成學校校長、東京大學副總理、大學總長として其官生活の大部分を大學に送り、獨り帝國大學のみならず、日本の敎育の發達に少

からず功勞がある。歷代の大學總長中、二度總長に推されたのは男と山川氏丈けで、總長より文部大臣になつたのは男と外山正一、菊池大麓の三人である。文部大臣は三十一年第二松方内閣の時で、是れより先き薩派と進歩黨の提携破れて外相大隈は退き、次いで文相蜂須賀茂韶も退き、世に壇の浦内閣と稱せられた時であつたから、大臣たること纔に十箇月餘にして内閣は崩れた。當時男が名譽ある大學總長を棄てゝ、蠻勇内閣と呼ばれた内閣に入り、而も壇ノ浦に殉死したるの不明を惜むものが教育界にも教育以外の方面にも多かつた。大學總長は二十六年加藤弘之の後に任ぜられ、二度目は日露講和談判に際し、例の戸水博士休職のいいいイキサツから、法科の教授間に擦つた揉んだが起り、山川總長も匙を投げて辭職したので、其後を承りて善後の任に當つたのである。大正二年再び山川氏と入代つて樞密顧問官に任ぜられ、昨年今の東宮大夫に擧げられた。

男は山縣公と姻戚關係がある。公の愛甥にして外務省通商局長であつた萩原守一の夫人は男の二女である。それ故に男の樞密顧問官は固より公の推薦であるし、東宮大夫も公の聲が掛つた結果であるが、男と公の間に私の關係があると無いに拘らず、男が此職に就いたことは獨り宮中のみならず、世間一般に好い感情を以て迎へた。男は久しく學界に關係したけれども、決して學者でない。文部大臣に擧げられたけれども、學者たらざる以上に政治家でない。男は何所までも教育家で、若し政治家と言ひ得べくんば、教育的政治家。若くは學校行政家とでも稱すべく、教育家としては理想的に近い。男は機敏とか果斷とかいふ分子に乏しいけれども、熱心にして綿密で、其信ずる所を執つて動かない處は何程か頑固性を帶びて居る。男の人と語るや諄々として盡きないけれども、徹頭徹尾要領を得ない。電話口の話も面談の時と同じで、長きは一時間短きも三四十分を普通とし、大學時代でも濱尾の電話といへば悩みの一つになつて居た。併し一たび男に接すれば忽ち其溫容と溫言にチャームされて了う。蓋し男は力の人にあらずして德の人で、男の在る處は賑々として春風が吹て居るようである。

其不得要領、其寛厚、其德望、人を薫化する力、約言すれば能く人に首長たるの人格は東郷元帥に似て居る。男は初め軍人になる目的で、武術や佛蘭西語を學び、鄕藩で西洋式練兵に從事したさうであるが、若し軍人になつて居れば東郷型の軍人であらう。而して若し政界に入つて居れば故片岡健吉又は松田正久の如き政治家になつたであらう。

貴族院議員にして昨年同時に宮内省に入つたのは、公卿系に於て東宮侍從長の入江子、大名系に於て侍從次長の徳川達孝伯である。入江氏は公卿の名門冷泉家より入江家へ養子に行き、柳原伯の妹を室として居る。貴族院では一時研究會の常務員に擧げられ、選擧の場合とか若くは或る問題の爲めに研究會を纏める場合には、遊説の才に長じて居るといふので、必ず此人が公卿說得の役目を勤めた。子は政治の頭は少しもないけれども、極めて趣味の廣い人で、書畫、詩歌、謠曲、大弓、圍碁、狂言、自轉車などに亘り、特に碁は貴族仲間での巧者で、公卿氣質の保主主義

の人である。侍従長としては皇室との關係よりいふも、其門地風格よりいふも、前任者の一條實輝公の方が相應しいように思ふ。小笠原子は肥前唐津の殿様で、貴族としても海軍軍人としても立派な人である。日清戰爭の時、高千穗分隊長(大尉)を以て黄海、威海衛、旅順の海戰に從ひ、特に黄海の役には小笠原家傳來の寶刀堀川國路二尺三寸毘沙門丸を腰にして、高千穗艦上に雄々しい働をした。少佐に進んでから陸上勤務に轉じ、日露戰爭の時は軍令部參謀として功を立て、其後學習院にも關係して居た。子は海軍部内唯一の文學者で、日清役の最中、戰務のひま〳〵に海戰日録を著はし、日露戰爭の時は海戰の公報に筆を執り、軍令部に在つて日清海戰史の編纂に從事して居た。獨り文章のみならず、和歌新體詩の才に長じ、嘗て金波樓主人のペンネームで一篇の淨瑠璃を公けにしたこともある。門地の外に此文と武を兼ねた子が御學問所の幹事であるのは最も似つかはしい。

昨年杉浦重剛氏が東宮侍講を拜し、所謂帝王の學をお授けすることになると、氏は各知友を歴訪して、自分は其任にあらざるをお斷りしようと思つたが、終にお受をするの已むなきに至つた。就ては如何にすれば不肖此重任を全うすることが出來るかと心配して居る次第であるに依て、御氣附きの點あらば遠慮なく申聞けて貰ひたいと意見を求めた。此一事に依るも氏の人物如何を知ることが出來る。

氏は一世の高士廉士として、社會の各方面に名望が及んで居る。明治三年江州膳所藩より貢進生に選ばれて大學南校に入り、南校時代も開成學校になつてからも專ら化學を修め、學問の成績に常に優等であつた。氏は明治九年文部省が開成學校生徒中より第二回留學生を出すに當り。氏は今の理學博士櫻井錠二氏と共に英國に留學して、オウエン大學にサイエンスを研究して居たが、十三年病氣の爲め半途に退學して歸つた。歸朝後東京大學附屬博物館長、東京大學豫備門長、専門學務局次長として學界に鳴らしたが、役人生活は嫌ひだと言つて意を官途に絶ち、明治十六年自ら稱好塾を起して書生を世話した。此稱好塾は俗に杉浦塾といひ、今日社會の各方面に活動して居る人々の中、嘗て此塾に居たものは少くない。今の日本中學はそれより二年後に起したもので、初め東京英語學校と言つたと記憶する。開成學校の舊學友にして其後或は大臣になつたのもあり、或は富豪、博士、華族となつて世に時めいて居るのもあるが、氏の閲歴、識見、學德を以てすれば、文部大臣となり大學總長と爲つて好く、又た從來其機會のあつたに拘らず、彼に一箇の私立中學校長として無學位無資産のまゝ通した處に却て氏のパーソナール、ヴアリユーがありはせぬか。

蓋し氏は物質の力よりも精神の力の上に活きて居る人である。藩の儒者の家に生れ、幼少より儒家の門に贄を執つて漢學が根柢となつて居るから、大學や外國で文明の新學問を修めたれども、ハイカラ流の物質主義功利主義に化せられない頭を有つて居る。それ故に大學の南校、開成學校、舊東京大學時代を通じて氣節の人として知られ、書生時代の自作の詩にある『日本國風果何在、禮義偕節是我流』といふ句に氏の精神が

言ひ通して居る。氏が赤穗義士を輕侮して居るのも、高橋健三、陸羯南、千頭清臣氏等と國粹保存を鼓吹したのも、井上大臣の條約改正に反對したのも、又た天台道士、破居子の說を以て新聞雜誌に書いた議論も、所謂る日本主義から來て居る。氏は初期議會に代議士に選ばれたけれども、政界の汚風見るに堪へずと一箇月にして辭職した。固より嚴肅な人であるけれども、さりとて徒に道學者流の窮屈な頭で後進を律しない。嘗て稱好學に居た某辯護士が相思の藝妓を女房にした時、氏はわざ〳〵婚禮の祝物をやつたといふ話さへある。氏の如く精神主義に根柢し、忠君愛國の道義に立脚する眞面目なる教育家が、帝王學の指南役を仰付つたのは、人物の選擇宜しきを得て居る。多分大學時代から氏の人物を知つて居る濱尾男が推薦したのだらうと思ふ。

白鳥博士は學習院教授にして歷史の大家、山崎博士は東京大學の地理學のオーソリテー、共に立派なる者で、前者の歷史と後者の地理と相俟て、世界の大勢に關する御知識の元となるのである。壬生中佐は長州七卿落の一人故壬生基修伯の長子で、實戰の經驗はないけれども、陸軍大學を卒業し、近衛隊附生活をも經驗し、騎兵將校として相當の知識がある。特に家庭上皇室と深い關係のある人であるから、東宮武官を以て御學問所御用係を兼ねるは其當を得たもので、陸軍步兵大尉加藤信一氏と共に、體育に關する御課目を擔任して居る。

▽帝王學の御進講者杉浦氏の人格

河上謹一

○私は目下病牀にあつて專ら靜養に力めてゐる身ではあるが、外ならぬ杉浦の人物評とあつては、他人に讓るも遺憾千萬なので、多少無理をしても是非やつて見たい。然し何分にも疲勞が烈しいので迚も秩序立つた長談義は出來兼ねる。で唯思ひ浮ぶ事どもを斷片的に述べる事とする。

元來杉浦と私とは明治三年以來の交際であるから、彼の事は他の誰よりも能く知つて居る。彼と私とは性質も違へば行動も同じではないが、何にしろ四十餘年の永い交際だから一夜漬けのもとは聊か味が違ふ。尤も杉浦を能く知り過ぎてゐるだけ私の批評は、或は彼の善い方面ばかりを觀て、世間から所謂樂屋で囃すと云ふ譏を招くかも知れないが、然し決して私は間違つた觀測や正鵠を得ない批評はしないと確信する。

○我々も最う老境に入つて、そろ〳〵今日まで經來つた所を決算してバランス、シートを作るべき時代になつて來た。互に顧みると期する所は遠大なことであつたが、其効果を收め得たものは少ない。六十年は唯徒らに失敗の歷史を繰返してゐる中に過ぎて了つたのである。殊に杉浦のバランス、シートに至つては、一時バランスが取れるかと懸念して、お互の歷史は失敗の歷史ではないかと彼に向て云つたこともある位である。

然るに杉浦は決算期に近くなつてバランスの上に變狀を現し來りて、從來の失敗の歷史と思つたのが却て成功の歷史となりつゝあるのは欣躍に堪へぬ。と云ふのは　皇太子殿下に進講し奉るやうな要職に就いたからで、晩年の此光榮極りなき要職が杉浦を生かし、失敗ともなるべき懸念のあつた彼の歷史を成功の歷史とならしめる道行きなのである。

○杉浦は一生人格の上に立つ人である。我々の如き不德の瀆りとは違つて、極めて純粹な德操の高い人間である。彼の一生を貫徹して居るものは貧乏と精神とで、學生時代は貧乏三幅對の一人に數へられ、今も相變らず貧乏してゐる。それと同じく十代の昔も負けぬ氣の、意氣で通つた男であつたが、六十代の今日でも其精神は些とも減銷してゐない。此精神あればこそ貧乏はしてゐても、曾て貧乏の爲めに志操を汚した事がない。寧ろ貧乏すればする程彼の人格は高上してゆくやうに見える。

○昨年同人は杉浦のため還暦の祝賀を擧げて、其紀念として彼の文稿詩歌等を編纂して之を同志に分配したが、其時私は題辭を書いて與れと所望された。其處で私は最も詩人の面目を表はすものとして「待人寛持身嚴」と書いたが、之が彼の特色で、實際今日まで決行して來た處である。尤も自ら持するに嚴なるは可いが、人を待つに寛なるの結果、他人の爲めに損をしたことも度々ある。然し之は其弊と云ふよりも、寧ろ杉浦の美はしい處で、教育家として偉い所以かも知れない。實際病人だからこそ醫者が必要なので、惡い屑のやうな人間をも、等しく寛を以て待つて初めて之を改善して行けるのである。

○矢張り昨年還暦の時に、私は詩を作つて祝賀の意を表した。其起句「一意奉公唯畏天」といふのは、彼を言ひ竭くして餘蘊がないと自ら信じてゐる。彼の今日の考は唯一意奉公であつて、畏れるのは天のみである。孔子も「君子三畏」と云つてゐるが、彼は天を畏れて一意公に奉ずるのを主眼としてゐる。此點は今日彼の大任に對する態度でも明瞭に分る。彼は一週二回進講を爲すのだが閑靜なる寺に籠つて人を避けて其準備を爲し、進講前には必ず齋戒沐浴して取り掛ると云ふ有樣で、即ち自分を潔くし、馬車馬的に傍目も振らず一意奉公、唯其君を堯舜にせん事を力めてゐる。近頃の學者には杉浦の學問に對して批難するものもあると聞くが、彼の此其君を堯舜にすると云ふ理想信念に至つては何人と雖も斷じて批評し得るものではない。性來羸弱な杉浦は、廿年前死すべかりし命を存へて、今日計らず此大任に當り、身體も自ら緊張して却て從來になき程健全になつた。實際彼は此大任を天の使命であると思つて、之れに一生を果たす覺悟で從事してゐるのである。

○杉浦が此光榮ある要職に就いた時、自分を虛うして舊交ある人々に「若し自分に對して參考になる事は腹臟なく云つて與れ」と云つた。私なども永年の馴染であるから露骨に彼の長處短處を擧げて、氣付いた所を打明けた。彼は喜んで自分等の無遠慮な忠告を容れて、一意職責を完うすると誓つたことがある。

○杉浦の土臺は漢學であるが、それも年を取つてから學んだものではない。皆十五六までに修めたものである。大學南校に入つた時が十六であ

つた。其時は貢進生と云つて三百諸侯の藩中から秀才を撰んで入校させたのであるが、當時漢學に於ては彼の右に出づる者は少なかつたのである。杉浦は膳所の藩士で、京都の岩垣月洲翁の門に入つた。先輩が澤山居るに拘はらず、翁は十四五にしかならぬ杉浦に囑目して、我が衣鉢を傳へるものは此人だと決心したのである。數多の年長先輩に拔んでゝ翁に見込まれたのは、杉浦に餘程異つた所があつたからであらう。實に月洲翁は一時杉浦を愛して、自分の養子となさんとする考であつたと聞て居る。昨年六十一の還暦祝に翁の子雨森菊次郎氏が、翁の衣鉢を承けた表徴であると云つて、翁の遺愛の品なる文鎭や水入れ等都合四個を杉浦に贈つた。一體が負けぬ氣であるから、器用ではないが、コツ〱勉強して、他人に讓らぬ程のことはやつて退けた。それに數學の頭があつて、書生の時代に、普通の人には解決されない難問を夢の中で解決した事があつた位で、其着眼の點は已に普通の漢學者と違つてゐた。

○明治九年英吉利に行つてマンチエスクーのオーウインスコレッヂ（今のヴイクトリア、ユニパルシテイ）で、サア、ヘンリイ、ロスコウの下にケミカル、フイロソフイーを學んだ。ロスコウは一片の科學者ではなく、立派な政治家でもあつた。杉浦は其門下に在つたが、例の負けぬ氣は此處でも表はれて、英人に一歩でも讓るは日本男兒の耻辱であると云ふ意氣組で、孜々と勉強した結果、數多の賞品を得た。ロスコウの傳記を見ると杉浦の事が出てゐる。杉浦は元來マンチエスターに三年滯在する計畫であつたのを、一年餘りでオーウインス、コレッヂを去つて了つたのである。何故期限より早くマンチエスタアーを去つたかと云ふに、ロスコウ傳に據ると、不幸にして自分は級の首席を占め得ずに第二席に居るのが殘念で堪らない、日本男兒の面目にも關はるから去るといふのである。

○まだ恁んな事がある。杉浦がマンチエスターに居つてロンドンに行かうとした時であるが、ロンドンを人に訊くのが殘念といふので、地圖を買入れて研究した結果、十年もロンドンに居た人よりも詳しくロンドンの地理に通曉して了つた。ロンドンに長くゐた人々も、却てロンドンに來た計りの杉浦に道案内を賴むといふ奇觀を呈した事がある。

○杉浦には負けぬ氣と數學的な頭腦の外に、驚くべきは記憶力の强い事である。彼が英國に留學中、日本の本草に就て取調べたいことがあつて、不審の點を日本に居る私の所へ本草綱目を調べて吳れと云つて來た。而かもそれが本草綱目第何卷目の第何頁の邊にあるから調べて吳れと云ふのである。十四五までの間に修めた浩瀚な本草綱目を、何卷目の何頁とロンドンから指定して來る記憶力の强いのは驚嘆の外はない。

○ロンドンでは神經衰弱に罹つて、歸朝する事になつた。本來數學者にならんとすれば有數の數學大家になる資格を備へて居つた。ケミカル、フイロソフイーの方面でも繼續して研究すれば日本に於ける一二の大家たるを得たに相違はないが、素養が素養だから一片の科學專門家たるに甘んずる事が出來ないで、教育家になつて全般に及ぼうとした。若し彼が數學家、化學者となつたら必ず大著述又は大發明をして名を成したかも知

れないが、教育家になつた爲め、門下生は澤山出したけれど別に顯著なる事功は見へなかつた。で我々は或は失敗の歷史を作るではないかと、彼の爲めに聊か危ふむだのであつた。所が却てそれが今日の要職に就く地歩だつたのである。教育家となつたが爲め、杉浦は自分を生かして來、其一生を成功の歷史としたのである。飽くまで彼は人格の人である。

○英吉利の碩學ベーコンは當時の人から英國中の「一番賢明な一番吝な人」(ワイゼスト、エント、ミーネスト、オブ、マンカインド)と評された。法律、哲學、理學等に於て當代に比肩するものない程であつたベーコンは、大法官(ロード、チャンセラア)の地位を賂賄の爲めに退かなければならなかつた人である。此卑劣なベーコンを高潔な杉浦と比較するのではないが、唯此の表現法を藉りて私は、杉浦を「一番臆病な一番大膽な人」(チミッデスト、エンド、ボールデスト、オブ、マンカインド)と云つた事がある。實際杉浦には半面極めて小心な臆病な處もあるが、一度意を決すると大膽になる。病氣にでもなれば、つまらぬ事を心配したり、取越苦勞をしたりして臆病の頂點に達するが、一度意を決すると人の夢想だもしない大膽な人になる。それに如何なる場合でも負けぬ氣と學問とを忘れない。曾て彼が大病に罹つて脉も絕たぬと云ふ時、我々がカラシを首の邊りに張つてやつた。所が脉も絕たぬ病人が突然醫者に向つて、カラシのモルキユル即ち微分子は三角だらうと質問した。カラシが辛辣に首の邊を刺すのを感じて、其微分子が圓いものではなくつて三角だと思つたのである。生命危急の場合に於ても學問の事を忘れぬのは其篤學の一端である。

○杉浦の家に永年忠實に仕へてゐた下僕が、煙草店を開いて一家の生計を立てやうとした時である。赤貧洗ふが如き杉浦は、此下僕に餞けする事が出來ない。其處で彼は英國留學中、學術優良の爲めに賞品として得た山を爲す書籍を惜氣もなく投出し、之を賣拂つて、其代金で費用を辨ぜよと云つたのである。普通なら儒家の寶にもすべき品を惜氣もなく、忠實なる下僕に餞けしたなどは他人に出來ぬ藝當で、眞に杉浦の美はしい性格を表はしたものであつて、また彼の思切ると普通人の出來ない所で其大膽な事をする證明である。

○一體我々同人は種々浮き世の甘いも辛いも嘗めて來た人許りであるが、杉浦だけは類を異にした、純良な缺點のない人間である。缺點と云へば貧乏であるが、然し之は却て彼の人格の廉潔の證左にこそなれ、少しも批難さるべきではない。他人を敎ゆるには自ら治め自ら正しくしなければ駄目であると云つて、杉浦は品行を方正にして曾て狹斜の巷に出入した事などはない。此點では我々同人は恥入る次第である。從て或は世間の一方を見て他方を見ないから融通が利かないと云ふものもあるが、自ら束縛し自ら謹嚴に身を持する人は、浮いた今の世には餘りないから、杉浦の如きは寧ろ珍重すべきである。

○杉浦の學風に就て最う世に添はぬとか批評するものがあるといふ。夫れも或る點までは事實であるかも知れない。があゝ云ふ人は此の濁つた世の中には最も必要である。陸軍の師團が出師したる時、其中に風紀隊と云ふのがある。夫れは師團の全人員に比すれば少數のものなれども軍隊の風紀を維持する爲めには必要のものと思はる。實際此風紀隊は政治界

にも實業界にも必要なのであるが、教育界に於ては更に一層必要である。此風紀隊は又藥で云へば所謂清涼劑である。教育社會、少年社會の風紀隊となつて清涼劑を投ずるには、如何しても杉浦の如き當世に阿らぬ人格の人でなければならない。彼に就て云ひたい事はまだ澤山あるが今は臥床の折柄とて其十分の一をも云ふことの出來ぬは殘念至極である。

▽東宮御教育の任に膺れる重なる人達

吉野臥城

一

東宮御學問所には、總裁、副總裁、幹事、御用掛、評議員の諸員が置かれてある。其の顏觸を見るに、何れも甚深なる考慮と、周到なる注意との下に選任された、比較的修養ある、人格の高い人達のやうに思はれる。

總裁は、元帥海軍大將、伯東郷平八郎である。伯は人も知る世界的名將で、故大將乃木と共に、陸海軍人の双璧と讃へられた。教育界には何等の經驗あり、功勞のある人では無いが、海軍の士卒を訓練し、統率した經驗を持つて居る。斯の經驗は、決して教育家の經驗に劣る者でない。夫れに伯の人格的感化は、教育家の千萬言を費すとも、及ぶ事の出來ない程の社會的勢力を持つて居る。伯の如き世界的名將を總裁に選任したと云ふ事は、東宮教育の爲めに賀すべき事である。

伯は薩摩の出身で、西郷南洲に愛された。南洲は豪傑風の人物で、質素簡朴を好み、茫漠として捕捉する事の出來ないやうな、大きな、深い所があつた。其の茫漠たる南洲が何故に伯を愛したかと云ふに、矢張其の質素簡朴で、茫漠たる所が好きであつたのである。其の證據には、南洲が伯を他に紹介する時は、何時も『これは平八郎と申す馬鹿者ぢやが』と云つて居た。茲に云ふ馬鹿者とは、怜悧で無いとの意味では無い。利口ぶらず、才子ぶらず、何となく間が拔けて、茫とした大きい所を指したのであらう。此の南洲の馬鹿者と云つた一語に、親愛の情が十分に表はされて居る。

『先生と言はるゝ程の馬鹿でなし』との川柳があるが、伯は馬鹿者と云はれる程の茫々然、漠々然たる人物であつたのである。其の馬鹿者の平八郎が海軍士官となつたが、別に功名にあせるでも無く、同僚を凌がうとするでも無く、相變らずの茫漠振を發揮して、大器か凡器かの評價は暫く不問に附されて居た。處が、日清戰役の劈頭、敵の運送船高陞號を擊沈したので、東郷平八郎の雷名が始めて海軍部名に轟き渡つた。當時政府は平八郎が無謀な事を行つたやうに驚きの目を見張つたが、彼れの斷乎たる處置が些の手落が無かつた事を知るに至つて、非難の聲が忽ち其の果斷と沈勇とを稱するの聲と變つたのである。

爾來、伯は海軍部內の畏敬する所となつたが、日露戰役に至つて、其の眞價が定つたのである。日露の危機が迫つて、彼れが征途に上らうとする日、生憎風邪に冒されて居た。夫人は彼れが征途に上るのだとは夢にも知らず、暫、靜養の後出發されたら何うかと諫めたが、乾坤一擲の大事を堅く胸に秘めて居た彼れは、何ッと云ふや平手で夫人を打つて、さつさと出掛けて了つた。溫情の人ではあるが、愛に引かされて天下の大事を誤るやうな柔弱な氣風は少しも無い。居常茫漠として不得要領のやうでも、一たび大事に臨めば、腹がちやんと出來てるだけに度胸が据つて、極めて能く要領を得るのである。

さて日本海の大海戰となると、彼れは旗艦三笠の司令塔上に立つて、巨彈が身邊に爆裂するも知らぬかの如く、從容として望遠鏡を手にして居た。『皇國の興廢此の一戰に在り』の信號で將士を鼓舞し、敵の艦隊を擊滅したのは世人の知る所である。斯樣な勇氣は何處から出るかと云ふに、其の茫漠たる、馬鹿な腹の底から湧いて來るのである。

世の中には沈默寡言な人も少くないが、伯ぐらゐ沈默寡言な人も無からう。伯が怒つて見た處で、何ッと一聲を發するだけである。其の怒ると云ふ事も、何年に一度あるのか知らぬ程少いのである。伯は無言で、無邪氣に微笑する。其の微笑が、如何にも春風堂に滿つるの概がある。其の滿面に浮ぶ平和な笑には、兒女も倚なつくのである。

二

副總裁の男濱尾新も亦、其の茫漠と、沈默寡言の點は、善く伯東鄕に似て居る。唯顏面の嚴めしく、微笑の浮ぶことの少いだけが、物足らぬやうな感じがする。が併し、此の微笑の乏しい所が、男の理窟ッぽいのを語るものでは有るまいか。

男は東宮太夫で、東宮御學問所副總裁を兼ねて居るのであるから、御教育上重要な地位にある。其の任、或は伯東鄕よりも重いのである。伯は軍人であるが、男は敎育家である。十數年も帝大總長の職に在り、一たびは文部大臣にもなつた人である。伯の世界的名將として敬畏さるゝ如く、男は學界のオーソテリーとして推重されて居る。夫れで居て、男は帝大出身の學士でもなく、又博士でも無いのである。然らば何かに精通した學者かと云ふに、必ずしも然うでは無い。唯帝大總長となつて、旨く口八釜しい敎授連を御し來つて、他方大學の權威を高めたと云ふ閲歷に過ぎないのである。要するに片々たる學才に非ず、辛辣なる手腕に非ず、茫漠たる大器、高潔なる人格其物であらう。

男は沈默寡言の人物ではあるが、言ふ事は遠慮せずに云つて了ふ質で、言ふべき事も云はないで引ッ込んで了ふ人では無い。苟も正理の主張すべき事があれば、飽まで之を主張する。而して一旦之を主張すれば、先方を屈伏し、征服せずんば止まないのである。先年徵兵猶豫の事に關し、陸軍當局者が文部省を經て移牒しに來たが、彼れは神聖なる大學に向つて陸軍省が何を云ふかとばかり多寡を括つて、其儘にうつちやつて置いた。陸軍省は再三再四文部省の手を煩はしたが、一向要領を得ない。時の陸相寺內は大に怒つて、徵兵猶豫の特典を剝奪し兼ねまじき最後通牒

を殺つて來た。彼れは早速専門學務局長の福原鐐二郎を伴うて陸軍省に押掛け、次官石本に面會して、貴方で然う云ふ亂暴な事を敢てするなら當方にも覺悟があると云ふ樣な事を述べ、陸軍大學卒業生の理工科大學に入學なす事を斷る底の決心を示した。石本は早くも夫れと覺つて、今日は大臣は不在で責任ある確答が出來ないから、後日に讓つて頂きたいと折れて出たので、彼れは一先づ引き下つたが、後相互の意思を表明して、圓滿な解決を付けたさうである。

男は自個の主張を徹すに、斯う高飛車に出る事もあるが、先方を說き伏せる場合には、諄々と說き立て、理を盡し情を盡し、何遍も繰返し繰返し根氣よく攻め立てるのである。往年工科學長の古市公威と大學の豫算に關して、意見の衝突を來したことがある。彼れは古市を說き伏せて贊成させようとするが、古市は何うしても肯かない。彼れは飽くまで圓滿に古市を承知させようと云ふので、態々其の私宅を訪ねた。古市は長ッ尻の總長が來たら、早く追ひ返さうと云ふので、家人に命じて夕飯を出さない事にした。處が彼れは夕飯の有無などに頓着する人では無い、日の高い時分から來て、夜中になつても更に歸らうとする氣色も見せず盛んに諄々と說き立て、事理を精密に開陳して、巧みに自家の意見に贊成させようとする。古市も最初は手強く刎ね付けたが、腹は減る、眠くはなる、到頭根氣負けして、彼れの意見に屈從するの止むなきに至つたさうである。男の口說き上手と、長ッ尻とは有名なものだが、之が他を屈服する唯一の武器なのである。

三

幹事は、海軍少將、子小笠原長生である。子は軍人には珍しく文學の趣味を解し、器用に文章も書けば、巧みにペン畫なども作る。海洋趣味は彼れが年來研究する所で、海洋の色彩、海洋の詩歌に至るまで說いて洩さず、且夫れを補ふにペン畫を以てする。海洋思想の鼓吹者としては今日獨歩の地歩を占めて居る。『海軍圖說』其他二三の著書もある筈である。茫漠の伯東鄕、諄々の男濱尾を去つて、斯の人に接すれば、多能多才の貴公子なりとの感を深からしめる。

御用掛中の人物は、何と云つても杉浦重剛である。漢學者で、多年中學校の校長をして居るが、夙に德操の高い、氣骨のある人物として許されて居る。學者とは云へ、經世的の識見も持つて居る。帝王學の進講には、適當な人物かと思ふ。子土屋正直は東宮侍從で、御用掛を兼ねて居る。明治十四年生れで、二十八年東宮出仕を仰付かり、式部官、皇孫御用掛を經て今日に至つて居る。文博白鳥庫吉、理學吉江琢兒等は、篤學の士で、比較的非難の少い人物である。

評議院には、陸軍大將で學習院長たる子大迫尚敏、東大總長理博の男山川健二郎、陸軍中將川合操、海軍中將竹下勇が居る。子大迫は維新の際身を軍籍に列して以來、四十年十一月豫備役に編入されるまで、或は聯隊長となり、或は師團參謀長となり、或は參謀次長となり、或は師團長となつたが、其の間二回まで實戰に功を樹てゝ居る。故大將乃木のやうな詩人肌の典型的人物では無いが、重厚な、確かりした人物である。

てきぱきと事を運ぶやうな事は望まれないが、一たび決斷すれば難關を突破するだけの勇氣はある。其の老成な所は、彼れが重きを成す所以であらう。

男山川は會津の人て、質素簡朴を尊んで、驕奢を蛇蝎の如く厭うて居る。夫れだけ人物に對しても、好き嫌ひの烈しい人で、嫌ひな者は天で受け付けないのである。氣骨稜々とでも云はうか、他の反對があらうが無からうが、己れの是と信じた所は、何處までも斷々乎として貫からうとする。實際家と云ふよりは、寧ろ理想家で、常に其の理想を實現しようと努力する。彼れが始めて東大總長となつて、改革の鋒を揮つた時、隨分非難もあつたが、群議を排して到頭夫れをやり了せた。往年七博士が開戰論を唱へた際、時の首相桂及び文相久保田は其の不都合を責めて、其の革職を迫つたが、彼れは之に耳を傾けずして、己れの意見を主張し、其の容れられざるを見て斷然辭表を提出して去つた。彼れは如何なる場合にも妥協を欲せず、己れの主張に殉ずる人である。男濱尾の公平無私に比すれば、偏狹の嫌ひはあるが、議論風發の概あるは、却々に痛快である。夫の教科書起草委員總會の席上に於て、南北朝問題に關し、南朝を正統とするも北朝の事實を抹殺するは非なりと論じて、議論の火花を散し、一歩も退かなかつたと云ふが如きは、彼れの性格の然らしむる所である。

是等諸員の外、東宮の御左右には、侍從長に子入江爲守、侍從武官長に山根一貫等が侍つて居る。子入江は、曾て子爵議員中の尤物で、可なり幅が利いたものである。元來趣味の人で、給の鑑識力もあり、和歌の才もあり、漢籍の素養もある。夫れに譯の分つた貴公子であるから、其の適任者である事は云ふ迄も無からう。

▽東宮殿下御教導の任に膺れる人々に對する希望

古川學人

東宮殿下御教導の任に膺つて居る人々について、予は餘り多くを知らない。從つて此等の人々が如何なる心懸を以て此の尊き大命を全うせんとして居るやを茲に研究する手蔓もない。が、若し之に關してお前自身に意見があるかと問はるれば、必ずしもないのではない。畏れ多い事ではあるけれども、假りに此等の大任を受けたる人々より、考の一端を尋ねられた積りになつて、一二ケ條の希望を述べて見る。

雲の上に奉仕して居る一部の人の間には、皇室の尊嚴は妄りに之に臣民を近づけしめぬことによつて保たれると考へて居る人が少くないと聞いて居る。元の和田倉門から二重橋まで、一直線に大道路を作つた時、宮内省の一部には之を　皇室の尊嚴を瀆すものと爲して、反對の聲が高かつたと承つて居る。そこで若しも東宮殿下の御教育の方針について も、

同じ樣な考が行はれて、一般臣民から遠く隔つておはす御方として、即ち遠方から其尊嚴を拜し參らすべき御方として、御敎養申上げるといふならば、如何なものであらうかと私かに考へて居る。斯く云へばとて必ずしも絕えず下民に近接し給うて、所謂下情にも通じさせ給ふ樣にといふ譯ではない。たゞ遠くから拜し參らしては勿論の事、近く接し奉れば尙更其尊さが發揮し給ふやうに、御敎育申上ぐるを方針とすべしといふ意味である。即ち何處から拜し奉りても、眞に現實に萬人に勝れさせ給ふた御方に在すやうに、お育て申すべきものであると考ふるのである。此點に於て、最近英吉利や獨逸などの皇太子殿下の敎育方法は、固より其儘に之を我國に移し難きは云ふまでもないが、採て以て大に參考に供すべきものがある樣に考へて居る。

斯くの如き方針を以て御養育申上ぐるといふ事は、獨り皇室御一家の御爲めのみではない、實にまた日本國家全體の爲めである。凡そ國家の鞏固なる統一は、上下の秩序の確立に俟つ。而して上下の秩序の確立は、社會の上流に立たるゝ方々が同時に實質上萬人に勝れたる方々であるといふ事實によつて完うせらるゝ。皇室の御事はいふも畏し。今姑く例へば貴族といふ者を取つて之を說かんに、彼等は國家の特別なる恩遇を蒙る特別の階級であるが、若し彼等が同時に眞に實力に於て亦貴族たるの名に背かない時に、彼等は名實共に一個の社會的權威たるを得て、上下の秩序も之に依つて立派に立つ。之に反して若し彼等が其實價に於て、貴族たるの資格を缺くが如きことあれば、彼等自身の重みが減ずる許りではない、一般に社會に於て權威を尊重するといふの念慮が薄くなる。かくては所謂上下の秩序が紊れざるを得ない。上流の社會が何か誤りを重ねれば、之れが上流といふ名と較べて著しく醜く見えるものであるが、其半面に於て、上流者が少しでもよい事をすれば、その影響は又著しく下々のものに響くものである。故に貴族其他高位高官にある人々は、其自身の爲めにも、又國家の爲めにも、大に自重せられんことを望まざるを得ない。彼等が眞に傑出したる人格を以て社會の上流に立つ時は、其國は秩序最もよく行はれ、國家の統一も亦頗る鞏固になるのである。貴族にして尙且つ然り。況んや國君に於てをや。我國の　皇室は歷代賢明の御方に在まし、古往今來國民常に仰いで其德に感激せざるはない。上に英明の君を仰ぐことは、實に日本國民の誇りであつて、我が帝國が秩序正しく古來堅き結束の上に發達して來たのも、主として之の點に重大な關係を有すると思ふのである。上に英明の君を戴いて國運の隆興を來せるの例は、西洋にも其例に乏しくない。例へば今日の獨逸帝國が之である。獨逸皇帝は、元來プロシア以外に於ては實は餘り敬重せられて居ない。況んや南方のバヴアリア其他の國民からは却て寧ろ忌み嫌はれて居るといふ點もある。又社會黨員などの中には議會に於て公然不敬に涉るが如き言辭を弄するものすらある。それにも拘らず、カイゼルが常に國民の精神的中心となり、國家統一の根據となつて居るのは、畢竟其人物の偉大なるが爲めである。もう一つの例は之を西班牙に見る事が出來る。第十九世紀の初め以來、前數代に亘る秕政の結果、王室の尊嚴が年

と共に衰へ、共和思想が國中に瀰蔓し、現に中央、地方の議會に於ても一時共和黨の議員が多數を占め、當時世人は葡萄牙が先に共和國になるか、西班牙が先に共和國になるかと云ひ合つた程であるのに、近頃になつて西班牙には急に忠君愛國の思想が强烈になり、隣りの葡萄牙が已に一九一〇年を以て立派な共和國となつて了つたのに、西班牙では現王に對する愛敬の念が大に旺盛になり、今日では最早西班牙には到底共和政府の樹立などを見るべき形勢は絶無といふことになつた。何に由つて斯く變つたかと云ふに、之は一に國王陛下の德望の致す所である。現陛下が人情に篤い、思ひ遣りの好い、溫厚の君であること、又英吉利から來た皇后陛下の淑德の譽高き評判とは、從來反王朝熱に醉うて居つた國民の思想を一變し、今や競うて王室を尊美して已まざるものとならしめたのである。之と反對の現象もまた之を西洋に求むれば其例に乏しくない。之等の例を以て固より萬國無比の尊嚴なる我が　皇室に對照するのでは無いけれども、人心の機微を洞察して之を善導するは亦經世家の事なるが故に、何事につけ用心に用心を重ぬるに若くはないのである。要するに上御一人の一顰一笑といふものは、良い方にしろ、惡い方にしろ、非常に大なる影響を社會一般に及ぼすものである。我々が日に一善を爲すといふ事は、それ自身直ちに大した効果を來すものではないけれども、上御一人の爲し給ふ所の一善は、忽ちにして天下萬民の忠君の念を非常に刺戟するものである。故に此意味に於て、東宮殿下を眞に萬民の父たるに適し給ふやう御養育申上ぐるといふ事は、實に日本國家の鞏固を涵養する上にも重大の關係ありといふのである。

日本臣民が古來忠君の念に强いと云ふ事も、私かに想ふに其主たる一つの原因は恐らく玆に存するのであるまいか。從來此點を說明するもの、動もすれば、いろ〳〵我々の理性の容易に了解し難き點に其根據を求めんとするやうであるが、然し、此忠君の念といふが如き心理作用は、如何しても其淵源の說明を君臣間の人格的關係に求めなければ解らない。即ち歷代の國君が眞に臣民の尊崇愛敬を博して餘りあるの御方であつた、即ち代々名君賢主相繼いだといふ事が、實に我國臣民をして忠君の念を深からしめた根本の理由であらう。假りに此說明が過去に於ける忠君思想の起源を說いて精確ならざるものありとするも、少くとも此忠君の念を益々將來に繼續深厚ならしめんとせば、是非共君臣間の人格的關係の方面を今後大に注意しなければならないと思ふ。少くとも既に　東宮殿下の御養育といふ事を問題とする以上、此點に最も重きを置くべきは言ふを俟たない。我が　皇室に於かせられて此問題を重要視し給ふ御精神も亦玆處に存するものと拜察し奉るのである。

新刊批評と紹介

近來本文の記事頻りに輻輳して毎號紙數の超過を來たさゞるはなく爲めに御寄贈にあづかりし新刊書もこれを批評御紹介申上ぐ可き餘白なき有樣に御座候さりながら何時までも空しく書架に堆積し置くことの餘り

に體を失するを恐ひ已むなく約半數の書名のみを並記して其責の一半を果たす事と相成候追て來年二月號よりは頁の繰合せをつけ舊の如く詳しく批評御紹介の勞を惜まざるべく候へば何卒不惡御宥恕下さるやう御寄贈下されし著者出版者諸彥に御願申上候。

△ドンキホーテ（上下二冊定價各巻參圓貳拾錢）島村抱月 片上伸共譯 植竹書院發行

△最近新聞學（定價壹圓八拾錢）杉村廣太郎著 慶應義塾出版部發行

△プラグマチズム（定價貳圓貳拾錢）田制佐重次譯 早大出版部發行

△天才と遺傳（定價壹圓八拾五錢）原口鶴子譯 早大出版部發行

△西洋通史（中巻壹圓五拾錢 下巻壹圓六拾錢）瀨川秀雄著 冨山房發行

△きのふけふ（定價壹圓四拾錢）内田魯庵著 博文館發行

△東西六千年（定價壹圓六拾錢）山路愛山著 春陽堂發行

△トルストイ藝術論・沙翁論（定價壹圓參拾錢）相馬御風譯 早大出版部發行

△マクベス（定價壹圓參拾錢）坪内逍遙譯 早大出版部發行

△眞夏の夜の夢（定價壹圓參拾錢）坪内逍遙譯 早大出版部發行

△銀笛（上下二巻 定價各壹円參拾錢）小杉天外著 實業之日本社發行

△耶蘇傳（定價壹圓五拾錢）上澤謙二著 洛陽堂發行

△民主主義の方へ（定價壹圓貳拾錢）富田砕花譯 天弦堂發行

△シャロックホルム（第二巻 第三巻 定價各七拾錢）加藤朝鳥譯 天弦堂發行

△哲學概論（定價壹圓貳拾錢）宮本和吉著 岩波書店

△ハウプトマン傑作集（定價壹圓）村上靜人譯 佐藤出版部發行

△獨歩手記（定價六拾五錢）國木田治子編 早稻田文學社發行

△一喝錄（定價八拾五錢）大町桂月著 中外社發行

△傑人傳人（定價壹圓拾錢）大町桂月著 春陽堂發行

△十人十色名物男（定價壹圓）大町桂月著 實業之日本社發行

△お札博士の觀た東海道（定價壹圓）スタール著 圖書株式會社發行

△清貧論（定價壹圓貳拾錢）奥田義人著 實業之日本社發行

△四季家庭園藝（定價壹圓貳拾錢）富田直方著 平和出版社發行

△不言不語（定價五拾錢）尾崎紅葉著 春陽堂發行

△其面影（定價五拾錢）二葉亭四迷著 春陽堂發行

△小筥（定價五拾五錢）阿部霞月著 岡村書店發行

△雁來紅（定價八拾五錢）末廣一峰著 警醒社發行

△迷信と宗教（定價壹圓參拾錢）井上圓了著 至誠堂發行

△うき世（定價壹圓參拾錢）柳川春葉著 至誠堂發行

△大悟一番（定價壹圓）中原鄧州述 實業之日本社發行

△大尉の娘（定價八拾錢）瀨戸義直譯 東京社發行

△不文律（定價八拾錢）坪内士行著 南北社發行

△我が懺悔（定價六拾錢）相馬御風譯 新潮社發行

△愛と藝術（定價五拾五錢）吉江孤雁譯 玄川書店發行

△舊き文明より新しき文明へ（定價八拾五錢）中澤臨川著 實業之日本社發行

△エレンケイ思想の眞髓（定價九十錢）本間久雄著 大同館發行

△童貞（定價壹圓）山崎俊夫著 四方堂發行

△心の叫（定價九拾五錢）稻毛詛風著 大同館發行

△銀と藍（定價八拾五錢）日向きむ著 丁未出版社發行

△印度文學講話（定價壹圓貳拾錢）杉村武雄著 阿蘭陀書店發行

△たくみと戀（定價七拾錢）林久男譯 南北社發行

△鴉と雨（定價壹圓）よさのひろし著 東京堂發行

△正義の兜（定價六拾錢）佐藤惣之助著 天弦堂發行

△疑問の野依秀一（定價五拾錢）山田梧郎著 製英舍發行

△春光の下にて（定價壹圓）三上於菟吉著 文好堂發行

△ねむの木（定價七拾錢）竹久夢二著 實業之日本社發行

△新時代の問題（定價八拾錢）西宮藤朝編 新時代學會發行

△日本富豪の解剖（定價壹圓拾錢）吉野鐵拳禪著 東華堂發行

△露國及露國民（定價九拾錢）昇曙夢著 銀座書店發行

△目白生活（定價九拾錢）瀧本種子著 彩虹社發行

△テーブルスピーチ（定價六拾錢）大日本雄辯會編 同發行

△懺悔（定價壹圓參拾錢）鈴木三重吉譯 博文館發行

△佛蘭西文法自修（定價八拾錢）杉本伊作編 醫醒社發行

△佛蘭西語詳解（定價七拾錢）前田長太雪子編 博文館發行

△變裝紳士（定價八拾五錢）後藤末雄等著 朝野書店發行

△作法作例議論文（定價五拾五錢）桂月、羽衣、天隨著 博文館發行

△ブラジル移民の眞相（定價九拾五錢）伊東仙三郎譯 高踏書房發行

△ウパニシャット（定價不明）赤沼智善譯 無我書房發行

△平和か鐵血か（定價貳圓參拾錢）米澤玉城編 大日本新同學會發行

△死のよろこび（定價六拾錢）横瀨夜雨著 天弦堂發行

△樂しき思ひ出（定價壹圓貳拾錢）原口鶴子著 春秋社發行

二大名著の縮刷

縮刷 みれん

森鷗外譯

現代西歐の作歌中、シユニツツラアほどわが邦人の讀みて容易に理解するに適したる作品を成したる人あらざるべし。殊に此の「みれん」の一篇の如きは、全然外國のものとは思はれざる作品にして、明かに東西人情の致一を證したり。されば鷗外先生の譯、一度新聞に連載さるゝや、滿都の讀者を狂熱せしめたると今尙ほ吾人の記憶に新たなる所なり。

三五判總布裝美本
假名付ポイント三百頁
定價金六拾錢

縮刷 荷風傑作鈔

荷風撰集

豐麗なる文字。絢爛なる文章。幽艶なる構想。鋭利なる觀察。微妙なる描寫。熱烈なる主張。是れ著者が藝術の特色なり。就中その社會觀察と之を巧みに詩化し行く文才とは眞に古今獨歩たり。本書は此の才人の全作品より小說戲曲小品紀行評論隨筆等凡そ四拾餘編を選みこれを著作年代順に編めるもの、蓋し文壇第一流の著作也。

三六判總布裝美本
假名付ポイント七百頁
定價壹圓廿錢

東京市丸の內三菱廿一號館
籾山書店
振替東京二一四七

(中付三の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

＝十二月號＝

早稻田文學

■小說 **村端れの事件** 福永挽歌

■小說 **ザバの女王** ハムズン作 柴田勝衞譯

■小說 **二個の柩** 關莊一郎

■小說 **髯** 中村星湖

■**最近思潮**

▼ピエルロチイの新著▼露國女流作家の女性觀▼逝けるジョサイアロイス▼ブランデスの先見▼俳優を戰爭に出す事の可否▼文藝取締問題▼詩境の近狀▼ライプニッツの二百年忌に▼十一月の美術界……………等

■文藝上の**ヒューマニズム**…稻毛詛風

■トラピスト修院より…富田碎花

■カアペンターの**近代科學觀**…宮島新三郎

■ライプニッツの**哲學批判**…齋木仙醉

■群集劇としての「ギョッツ」…秦豐吉

■コレクションスチューキン…在モスクワ 山本鼎

■**悲劇の一觀察**…本間久雄

附錄 **トルストイ傳** (◎承前◎) パウル・ビルコフ著 相馬御風譯

—詩歌—

▼こゝろ 三石勝五郎

▼我等の時 村山至大

▼俳句 零餘子・井泉水

定價二十八錢 郵稅一錢五厘

發行所 東京神田表神保町 合資會社 東京堂 振替東京二七〇番

(中付三〇四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

パウル・ビルコフ著

蛇

田村俊子

一

隣室で大きな母親の聲がしたので愛子は目が覺めた。顏を埋めてゐた夜着の襟から、身體を摺り上らせて、枕の上に仰向いた機にピンが疊の上に落ちて音を立てた。それと一所に、澤山な髮の毛がずるりと解けて垂れた重さが彼女の頭に感じられた。

　何時だらうと思つたが彼女は起きやうともしなかつた。室の中には日光が仄かに何所からか射してゐる。その薄い靜な光りがこの室の中を支配してゐるやうに、彼女の寢床の周圍が大層森と落着いてゐる。寢耳に聞いたと思つた物の音も、ぴつたりと止んでゐて、隣室まで靜であつた。彼女は夜着の中から手を延ばして解けた髮の毛にさわつて見た。紫と青と朱を手綱に絞つた縮緬の長襦袢の平袖から彼女の眞つ白な二の腕が現はれ、緋の裏が恥かし氣にその肉に絡んだり離れたりした。彼女は暫らくその手で心地快く滑こい髮を撫でゝゐたが、その手を引つ込

めやうとした時に、何か枕許で觸つたものがあつた。急いで仰向いて見ると、橫手のところに眞つ赤なダリヤを二三十本も伊萬里の壺に入れたのが置いてあつた。その一本の莖に紙片が結び付けてあるのを愛子は見付けた。

「誰れがよこしたんだらう。」

斯う獨り言を云ひながら、起き返りもしずにその姿の儘で紙片の結び目を解かうとしたが、緊く結んであるので片手の指先だけでは僅な力が益に立たなかつた。長い間、指と指を滑らしたり縺れさせたりしながら骨を折つてゐたが、頭の大な花の輪が打つ衝き合つたり搖れ合つたりして動くばかりで、肝腎の紙片は何うしても解くことが出來ないと諦めをつけると彼女は止してしまつた。そうして深々と、冷めたくなつた片手を蒲團の中に入れて、寒くなつた肩先を襟の中に埋めてしまつた。花を寄越した男も大概は彼女に見當が付いてゐる。珍らしくもない彼男だとすると、その文句を讀んで見る氣もしなくなつた。

「私の好きな愛子さまへ。今朝ほどの御機嫌はいかゞ、昨夜のあなたの輝かしい美しい眼を、觀客席の一隅から見守つてゐたある男より。」

きつとこんな氣取つた事でも書いてあるのだらうと彼女は思つた。この頃每朝のやうにその人から花を贈つてくるのであつた。それは何と云ふ男で何所のものだか彼女は名も顏も知らなかつた。初めは好奇心を持つたが、この頃ではそれも慣れてしまつて格別心を惹かれもしなかつた。そうしていろ〳〵な花を贈つてくるのが室の中に置場に差支へて却つて邪魔になつた。

「こんな花なんか呉れるよりも、十圓でもいゝから一どきにお金で贈つてくれる方が餘つ程助かるわ。」
と愛子は思つてゐるのだ。

彼女は煙草を喫ひたいのだが、今、紙片れを取らうとして骨を折つた後なので、すつかり物臭になつてもう手を延ばすのが臆劫になつてゐる。お時を呼ばうかとも思つたが、母親が來てゐると思ふと、彼女はそれに顏を合はせるのも氣色が惡いので、成る丈此室に眠つた振をして引籠つてゐたかつた。そんな事をしてゐると、又うつら／＼と夢の中へ引き戻されるやうな氣がした。

手も足も溫味の中に倦るく皮膚が延びて痛んでる肉體の上を熱つた絹の地と膨らんだ綿とで柔らかく心地快く撫で解されて行くやうな懷かしい休息の感覺が、再び彼女の身體の上に返つて來た。もう一日でも一年でも、斯うして溫かな夜着の中に横臥つてゐたかつた。自分を働かせやうとする小屋の雇ひ主や、女親や、父親や、それから債務者などが何所かへ消えて失くなつて了つて、神樣が一生涯でも斯うして自分を寢かした儘にしてくれたら、自分はどんなに幸福であらうと彼女は考へながら、室の中の薄い日光を瞼に映した儘の意識した眠りの中に痲痺れるやうに沈んで行つた。

「何ですね。お起きなすつたのかと思ひましたよ。」

枕許でお時が斯う云つたのは、その時から五分も間がなかつた。愛子はその聲で我れに返りながら、兩手で額から髮の方までずつと撫で上げてから、元氣を付けるやうに夜着の襟を胸まで引き下した。

「お母さんが來てゐらつしやるんですよ。あなたがもう目が覺めさうなもんだつて、ぶつ／＼云つてゐらつしたが、摩利支天樣へ行つて來るつて出掛けました。それから淺田さんから電話がかゝつてゐます

よ。この次ぎの興行の事で話があるから、館の方へ行く前に今日は家の方へ廻つて行つてくれつて云ふんです。それから又、何時も花を呉れる人が今朝も花を持たしてよこしましたよ。今朝もやつぱりあの男の子が持つて來たんですよ。無駄だと思つたけれ共名前を聞いたんですけれ共、笑つてゝ云いませんでしたつけ。それからまだあるんです。」

愛子は默つて聞いてゐるのが面倒臭くなつたので起き返つて、

「ちよいと。煙草を點けておくれ。」

と云つた。お時は卷煙草を一本引き拔いて、それを寢てゐる愛子に渡してから、マッチを摺つて、そつと火を持つて行つた。

「それからね。大家さんから嚴しい催促が來たんですよ。今日こそ何うかして貰はなくつてはならないと云ふんですよ。」

「そんなこと云つたつてお金なんかありやしやい。又、ずいぶん朝つぱらから催促に來るんだわね。」

「朝なもんですか。もう十二時になりますよ。御らんなさいまし。日がこんなに射してゐるぢやありませんか。」

お時は立つて行つて、椽側の方の戸をすつかり開け放つたので、寢床の中から庭が見えた。こまかい葉が黄色く萎みちゞんだ楓の木ばかりが軒の下に突き出てゐて、ひよろ長い檜葉の木の陰に、小さな山茶花の木が、薄桃色の花をちらほらと付けてゐた。眞晝の日はその庭一杯に輝いてゐた。

「ほんとに、今日は一囬のお金もありやしない。」

愛子は床の上に起き直つて、煙草の烟を長く吐いた。その金は明日になつても明後日になつても入つて來さうもなかつた。妾同様になつて、月々の手當てを極めて貰つてゐるMと云ふ男からも、もう可なり多額なものを始終强情つてゐるので、この間も「この上にも煩さく金々と云ふ様なら、お前には愛想を盡して手を切る。」と云つて威嚇された。それを此方では冗談にして、それからも度々無心を云つたがMは強硬にもう五圓の金も呉れやうとしなかつた。愛子の勤めてゐる館の方からも、もう借金に借金が嵩んで、それもこの上館主に頼んでも出して呉れさうもなかつた。一年縛りで雇はれてゐる愛子は、その前借を二年の倍額も、もう館主から借りてゐた。計算して見るとこの先き一年と半分は、無報酬で勤めなければならない様な負債になつてゐる。館主の方では一年先きの人氣を見越してゐるので、その上は滅多に好い顔をして少しの金でも貸しさうにも思はれなかつた。

「誰れか少し貸して呉れる人でもないかねえ。」

溜息を吐いて、愛子はお時の方を見ながら寒さうに肩を窄めた。お時の顔を見てから、急にこんな金の事が胸に痞へて來たやうな氣がしたので、何だかこの女が一人して自分にいろ／＼な負債の責務を强ひてゐるやうな小憎らしい思ひがした。

「借金なんか何うでもいゝぢやないか。何うにかならないかねえ。」

すると、お時がMの事を云ひ出して、それに借金を云ひ込んで見るやうに勸めた。

「智恵のない人だわ。あれは駄目だよ。出すもんか。」

お時がもう一人考へ出した。それはあんまり吝嗇なので此方から疎々しくして捨てゝ了つたRといふ

若い男であつた。

「月三十圓であんなものに、日も嫌はずの相手をさせられて堪るもんか。」

斯う云つて決して逢はないやうにして了つたRに手紙を出せと云つてお時は勸めた。

「そうしてね。三十圓取つて、後は抛り出してしまへば好いぢやありませんか。手紙を出してごらんなさい。きつと彼の人はやつて來ますよ。吝嗇でもなんでもあなたには惚れてゐるんだから。」

お時は吉原のある樓で新造をしてゐた女であつた。この女を館主の方の世話で雇つてから、愛子は、客と云ふものに對するいろ／＼な手管をこの女の智恵から習つた。女は無心を云ふ事が上手であつた。それから無心を云ふ機を知つてゐた。何でも男の氣を大きくさせるやうにして置いて無心を云ふのが好い。不景氣な雰圍氣を作つてから無心を云つてはいけない。景氣よく、男をわつと慢じさせながらその時に乘じて捲き上げろと云ふのだが、愛子にはそんな利口な術は出來なかつた。第一彼女は男に金を呉れと云ふ事さへも出來なかつた。

「だまつてゐても、呉れるやうな人はないものかねえ。」

愛子は始終斯う云つてゐる。そのお孃さん氣をお時は何時も冷笑つてゐた。

「そんな位なら男の世話になんぞならないがいゝ。」

とお時は云ふが、愛子は全く、男の世話になる氣などはなかつた。不思議に、自分に惚れてくれる男はあるけれ共、自分に對して思ふほどに金を出してくれる男はない。

「やつぱり私が貧乏性なんだらう。」

と愛子はあきらめてゐるが、お時の意見では然うではなかつた。どんな男だつて惚れたからきつと金を出すと云ふもんぢやない。殊に男と云ふものは狡猾で、自尊心が強くて、己惚れが強いから、他人が十圓出してちやほやされるものなら、自分は五圓でちやほやさせて見やうと云ふ了簡を持つてゐる。そうしてそれが男の好い器量で自慢の種になるのだ。それを出させるやうにするのが女の手腕で、好い男に持ち上げながら金も出させるところに手管がある。――然しそんな附焼刄は愛子には何の様にも立たなかつた。愛子は館の芝居の勤めの報酬だけで一切の生活が償はれて行くものなら、もう男の世話になんぞはなりたくなかつた。それに愛子には昔からの情人が一人ゐる。その水入らずの戀を時々樂しむ外に、金の爲に、自分の身體を任せなければならない男を持つてゐると云ふ事はもう大變な苦痛であつた。それに身體も疲れてゐた。晝と夜との二度の興行に、幾幕も通してある役を演じなければならない愛子はもうそれだけで彼女の虚弱な身體に一日の仕事が多過ぎてゐた。その上にも、彼女の色と肉とを貪らうとする貪慾な人間たちに疲らされる事は堪へられないほどであつた。

「ほんとに何所かに善い人がゐて、私の爲だけを思つてくれる人がゐて、そうしてだまつて千圓ばかりのお金を貸してくれたらねえ。」

愛子は今もそれを繰り返した。債權者はみんな無慈悲であつた。そうして彼女の美に媚びやうとするやうな都合の好いものも一人もゐなかつた。三百圓ばかり借りてゐる女の高利貸は、殊にやかましく彼女を責め立てた。ついこの間ゞ家財を差押へるやうな事を云つて騷ぎ立てた。

お時は頻りにRに手紙を出す事を勸めたが、「三十圓ばかり取つたところで何にもならない。」

と云ふ愛子の剛情な云ひ條で、お時のその思ひ付きは捨て去られた。
「三十圓だつて無いよりは增しぢやありませんか。大家さんの方へ一と月をやつてもお小遣が餘るぢやありませんか。」
お時は機嫌を惡るくしながら云つた。米屋の拂ひ、洋食屋の拂ひ、車屋の拂ひ、吳服屋の拂ひ、牛肉屋の拂ひ――もうこま〲としたものまでお時は云ひ立てた。每日のやうに責められるこの借金の云ひ譯はみんな自分が爲てゐるのだと云ふ事まで云ひ出した。
「でもRは私は嫌ひなんだからねえ。三十圓ぽつちで、そんな我慢は出來ないよ。」
「だからあなたは我が儘だと云ふんですよ。何所にか好きな人にばかり世話になつてゐる結構な身の上があるもんですか。借金には責められてゐるし、お金が欲しい〲と云ひながらそんな我が儘は通さうと思つてゐるんですからね。」
三十圓三十圓と云ふけれ共、この三十圓吳れる人が五人あつたら何うする。と云ふやうな事まで云ひ初めたので、愛子は癇癪聲を出して怒り付けた。
「人を何だと思つてゐるんだい。いくら困つたつて淫賣の眞似はしないんだよ。借金に責められたつてお前の世話にでもなりやしまいし、だまつてゐてお吳れ。」
「まあ、なんでせう。あなたの爲を思つて云つて上げるんぢやありませんか。」
「私の爲なんぞ思つて吳れなくてもいゝよ。大きにお世話だよ。」
「然うですか。ぢや默つてゐませう。」

お時は其の儘すつと出て行つた。こわれた銀杏返しと、荒い双子縞の筒袖の袢纏をきつちりと着たお時の後姿が愛子の眼に殘つた。何時ともなく滲染み出た涙で、愛子の睫毛が霞んでゐた。

「今日はきつと不愉快な厭な事が起るにきまつてゐる。朝つからあの女と云い合ひなんかしてしまつて。」

さすがにお時を怒らして了つた事が愛子には賴りなかつた。其れに今朝起きたら、直ぐにお時を信濃屋へ質物の使ひにやらなければならないのだつた。其の用事も忘れてゐる内に、お時を怒らしてしまつた。

愛子は寢床の中にもう一度橫になつたが、時刻を考へるともうそろ／＼と出勤の仕度にかゝらなくちやならないし、寢てもゐられないと思つて、思ひ切つて夜着の外に這ひ出て、脫ぎ捨てゝあつた褞袍を上から引つかけながら、お時を呼んだ。

「何か御用ですか。」

生靑い、むくんだやうなお時の顏が襖の外に現られたが、其所に突つ立つた儘で、中へ入つて來なかつた。愛子は自分の羽織を二枚信濃屋へ持つて行つて、小遣に代へてくるやうにお時に賴んだ。

「へえ。」

お時は厭な顏をしながら、まだ其所に立つてゐた。

「機嫌をわるくさして濟まなかつたわね。Rの事も考へておくわ。」

「何もあなたに楯を突くわけぢやありませんけれどもね。私だつてあなたの爲には隨分苦勞をしてゐる

んですからね。」

お時は、全く愛子の爲には盡してゐた。この頃では慾得を離れて了つて、この女主人に逆上せてゐた。自分の貯めた金も使はれて了ふし、着物まで借りられてゐた。

「きつと今に何うにかするから、辛棒してお呉れ。お前の恩は忘れないよ。」

斯う云つて、美しい窶れた顔に本氣なものを浮べながら心を籠めて云はれて見ると、お時はこの若い滲ましい人に同情して、親もなし兄弟もない自分は一生涯でもこの人に附添つて面倒を見たいやうな氣にもなつた。

「この人の爲に、こんなに心から考へ込むと云ふのも、宿世の何かの因縁だらう。」

と彼女は始終思つてゐる。男に對して手管がないとか、あんまり露骨だとか云つて其れを責めるやうなものゝ、お人好しで、他人に苦しめられるとも他人を欺く事などはまるで考へた事もない愛子を、彼女は嬰兒扱ひにして愛してゐた。

「ほんとに困つてしまひますね。」

お時は、わざと自分を折つて見せないで、一層眉を顰めて不快な表情をした。

「ちつともないんですか。」

愛子の紙入れの中に、昨日の朝七八圓入つてゐた事をお時は聞き立てした。だが愛子は其れに就いて默つてゐた。あれは昨夜情人の波之助と二人で飲食に使ひ盡してしまつたので、其れを云ふと、又お時の機嫌を惡るくすると思つたからであつた。

「知つてますよ。ほんとにあなたは、だらしがなさ過ぎますよ。」

信濃屋へ持つて行く羽織と云ふのは、愛子の平生の袷羽織と大島の袷羽織と二枚であつた。

「この羽織を持つて行つちまつたら、あなたは着るものが無くなるぢやありませんか。」

「仕方がないわ。お母さんにも今日は何うしたつて遣らなけりやならないし、コートを着てゐるから羽織は一日や二日なくつても濟むわ。」

紅色に日光の影が上窓の障子に當つてゐた。お時は其の下の簞笥の前に立つて抽斗を拔いた。羽織を持つて行くよりは、まだ長襦袢を一枚持つて行く方がいゝと彼女は呟きながら、愛子の寢衣にしてゐた長襦袢を見返つた。

「私はまだ考へてる事があるんですよ。」

自分の見計ひで三品ばかり、引き解き物などを交ぜながら風呂敷包みにしてお時は、毎朝のやうに花を寄越すあの男を、何うかして客にしやうと云ふ樣な事を漏らした。愛子はお時のその言葉でふつと思ひ出して、花に結んであつた紙片れを取つて見た。

あなたのやうな天才が、あゝした小屋に其の容色と一所に藝までも荒ましてゐる事を私はほんとに悲しんでゐます。あなたの聲は嗄かれてしまひ、あなたの踊る足許はよろ／＼してゐるぢやありませんか。何と云ふ哀れな疲勞でせう。この悲しいあなの生活を、私は夜も晝も考へ續けてゐます。

と紙片れにはペンで書いてあつた。

「この人はきつと詩人だよ。」

と愛子は云つた。何とも知れず氣恥かしい思ひがしたので、彼女はその紙片れを丸めて傍へ投げた。
「世間には、私の爲にこんな餘計な事を考へてゐて吳れる人もあるんだわ。」
お時には其の紙片れの文句の意味が分らなかつた。

二

母親が入用の金高は、この間約束してをいた十圓では足りないと云ふので、愛子は母親と言ひ合つた。
「お父さんは中氣が起りさうなんだよ。右の拇指が利かないと云ふし、變な事を云ふから早速お灸を据えさせにやつたところが、もう一週間打つ捨つて置けば中氣が出ると云つたとさ。あの人はまだ袷々着てゐるよ。綿入れも出して來てやらなけりやならないし、大方お小遣も使つたし、いろ〳〵拂ひも溜まつてゐるし、中々十圓ばかり貰つて行つたんぢや足りないよ。」
「あゝもう、分つたよ。」
愛子は落膽しながら、今しがたお時が信濃屋から持つて來た二枚の紙幣を其の儘母親に渡してしまつた。お時が沸かして持つて來てくれた牛乳も今朝は飮みたくない。何だか胸が一抔に支へてゐる。其れに頭が重く、身體中が痛んで、うつかりすると昏倒しさうな不快な氣分になつてゐる。
「お酒がここいらに溜まつてゐる樣な氣がするんだわ。」
愛子はお時の方を見ながら、自分の額を指した。
「この頃すつかり私の身體は惡るくなつてゐるんだよ。其れを考へると自分ながら心細い。お母さんな

んか後生樂なもんだわね。」

「あんまり然うでもないよ。」

愛子は母親の皺んだ赤い指に、眞珠の指環が篏まつてゐるのを見た。

「お母さん。いゝものを篏めてるのね。何うしたの。」

それは母親の方へ始終出入りする古道具屋が持つて來たもので、母親は其れを一圓五十錢で買つたと話した。

「そんな年してゐながら、指環なんか篏めたいのかね。だから私が樂が出來やしない。」お父さんの綿入れだつてお母さんの飲み料に質入れをしたんぢやないか。然うしておいて「まだ袷を着てゐる」もないもんだ。一圓だつて二圓だつて、私の稼ぎのお金の中から取られるのはほんとに辛い。

と愛子が云ふと、

「其れは私だつて察してゐますよ。」

と母親は柔順に笑ひながら云つた。これが自分の眞實の母親かと思ふ程若々しい血色をして、廻りを出した櫛卷の毛が、娘よりはずつと豊滿してゐた。お洒落で、見得坊で、直きに

「私だつてお召のコートぐらゐ着なくちや一寸外へも出られないからね。」

と云ふ風であつた。他人の洗ぎ洗濯や、お針などをやつて五十錢一圓の稼ぎをするなら、この世間には生きてゐないと云つてゐる。其れで始終花札をひいたり、詰らない賭け事などをやつて無性に暮らしてゐる。取つたものはみんな贅澤に飲食して了ふので、結局は二人の生活費はみんな愛子の手から出さな

くちやならない。

「そんな事を云つたつて、好い腕を持つてゐるお前ぢやないか。」

「ところが其れも、もう、當てにはならないんだよ。館主の方ぢや始終私の人氣も昔のやうぢやないつて云つてるんだからね。代りを探してるつて噂だわ。お母さんだつて然う年を老つたと云ふ譯でもなし今の内に自分だけも食べて行かれる方覺を仕てお置きよ。ほんとに私たちは乞食にでもなつちまふかも知れないよ。」

「お前に云はれなくつたつて、賴りにしやしないよ。私は私でやるから宜いよ。構つて呉れなきや構つて貰はないまでさ。」

「構はないとは云やあしないけれど、少しは私の事も可哀想だと思つてくれゝばいゝんだわ。」

「大層弱い事を云ふぢやないか。しつかりおしな。これから花を咲かせるんぢやないか。世の中にはもつと大きな事をしてゐる女もあるぢやないか。」

「そんな人はそんな人さ。」

愛子の眼から涙がほろ〳〵と落ちた。

「私は今朝なんだか悲しくつて仕方がないんだから、お母さんももう歸つてお呉れ。お母さんと喧嘩したつて仕方がないんだからね。」

「然うさ。」

母親は愛子の巻煙草入れを取り上げて、其の中から煙草を拔き出した。何うしたのかその手先きが震

えてゐるのを見付けると、愛子は母親が一途に可哀想になつた。

「お金が出來たから、今日はお父さんにも何か御馳走をしてやる方が好いわ。」

愛子は然う云つて椽側の方へ出て行つた。悲しさが一杯で、彼女は何うする事も出來なかつた。何所か暗い隅へ行つて大きな聲を出して泣いて見たいやうな氣がする。彼女は顔を上げて晴れた青い小春の空を仰ぎながら椽側の柱に凭れて、白粉の塗いてゐない彼女の頰は黄色さを帶びた青白い色に、柔らかに艶をもつてゐた。黛で濃くひいた眉毛の上に、括つて下げた髮がいた〱しく振りかゝり、細い、摘んだやうな高い鼻の傍に侘びしい陰翳が作られてゐる。上を見上げた時、彼女の長い瞼毛が、瞼に薄く影を落した。

こんなに悲しい譯が彼女にも解つてゐた。其れは先つきの紙片れに書いてあつた言葉が彼女にいろいろと昔の事を思ひ出させたからであつた。天才だと云ふやうな、立派な高尚な言葉を久し振りで耳にした彼女は、三年前に、自分がある新らしい劇の團體へ入つて、初めて出演した時に、自分を取卷いて、「女優の天才」だと云つて賞揚してくれた有名な文學者の二三人を思ひ出さずにはゐられなかつた。そうして、其の頃の自分の生活に伴れてゐた懷かしい一人の男を彼女は悲しい心で思ひ忍んだ。髮の長い貴公子のやうな華奢な美しい容貌を持つた青年が、匂やかな薄い光りの幻に包まれながら、彼女の眼の前に浮んできた。

妙齡になつてから叔母の手許で養はれてゐた愛子は、そこで娶はされる約束だつた從兄が厭で、十八の時に他の男と北海道まで駈落した。その男に捨てられてから、彼女は自分の容貌を餌にいろ〱な人

の手に落ちて、何うにか生計を凌いで行かなくてはならない境遇に沈んで、方々を流浪して歩いた。さうして東京へ呼び戻されて、刑罰の爲に叔母の手で何所かへ賣られやうとしてゐた頃に、偶然に近所の洋食店で彼女の浮氣な視線に落ちた男があつた。其れがある新らしい劇團の群れに交ぢつてゐた進藤であつた。

叔母の家を逃げた愛子は、進藤と二人して暫らく世帶を持つて隱れてゐた。藝術の尊い事を頻りに男から聞かされたのもこの時であつた。西洋の戯曲の研究や、日本の演劇の批評を、彼女は絶えず男の口から耳にした。斯うして男の智識が女の理解を育てゝ、愛子はだん／＼に舞臺の藝術がわかつて來た。唯、舞臺へ出るのが面白さうだと云ふばかりでなく、もう少し地道な考へを芝居の上に持つやうになつて、彼女は三味線を彈いて無駄な言を饒舌つてゐる暇に、進藤の友達などを相手に、一生懸命に芝居の稽古を初めた。さうして、人間の理智、感情――その自然な理解から特殊な技藝が、形や臺詞の上に造られて行く事を、彼女は初めて知つた。

彼女の最初の出演は成功して、みんなから賞賛された。彼女の作る舞臺の氣分が、新らしかつた。それから彼女の演技の上に、流れる感情が豊潤であつた。みんなは彼女の顔の美いのも云ひ立てた。彼女は脊が高く容貌が勝れてゐた。

さうして二人はまじめに可憐らしい生活を續けてゐた。食べるものが無くなつて襦袢を賣つたり、前垂れを賣つたりしたこともあつた。この劇團は潰れてしまひ、二人は貧乏に貧乏をかさねて、下宿をしたり間借りをしたりしてゐたが、彼女はとう／＼、自分の容貌を見込んで買ひ入れやうとした公園の

淺草館へ半年の前借で自分の身體を賣つてしまつた。

その當時、半年で五百圓と云ふ金が、何にもない自分のある價を表示してゐるのかと思つた時には、彼女は不思議でもあつたけれ共、其れが又誇りでもあつた。その五百圓は、彼女の肉を買ふ料ではないといふ事が、今迄の彼女の肉を賣つて報酬を得てゐた生活の習慣から、其れがどんなに立派な事であつたか知れなかつた。然う云ふ高價な買値が付くまでに彼女は舞臺を踏んだ覺えもなかつた。一寸した自分の嘗ての經驗が、これだけの相場を作れば其れは大したものだと思つた。けれども其れも追々に粗漫な新派劇が上手に演れるやうになり、自分の小供の時に習つた踊りが舞臺で役に立つやうになつてからは其の報酬も彼女に取つては安いものになつて來た。五百圓ばかりは、彼女の見得つ張りな贅澤な手から直ぐに失くなつていつた。其の上にも必要な金は彼女を必迫させて、そろ〳〵又、彼女は別途に、月々の手當てを呉れそうな男を探さなくてはならなくなつた――

「悲しい生活。哀れな疲勞。」

彼女は胸の底から涙がせぐんでくるやうな氣がした。そうして、昔、初めて舞臺へ出やうとして、日本の戲曲家の書いた「春」と云ふ演劇の稽古に夢中になつてゐた頃の、自分の魂の中に宿つてゐた大層氣高い、純朴な、勝れたものが、今、彼女の精神のおもてに、物を引寫しにするやうに、ふと映つたと思つた。見も、知りもしない男が偶然に「天才」だと云つた言葉が、思はず彼女の忘れてゐた過去からこんな尊いものを引きだして來たのであつた。彼女はその頃の自分が慕はしかつた。その慕はしい過去の自分の側に、同じやうに慕はしい進藤の面影があつた。彼女から見れば、意氣地のない、世間のわからな

い、貧乏な、美しい青年に過ぎなかつたけれ共、その青年は彼女にいろ／＼な、知識の上の勝れたものを與へたり救へたりした。

その進藤とも、この生活に落ちてから何時となく別れてしまつた。進藤は始終、彼女の現在の生活を悲しんでゐた。丁度、先つきの紙片れに書いてあつたやうな事を云つて、其の人も彼女の上を悲しんでゐた。

「僅な金で人の妾をしてゐるよりは、思ひ切つて自分の負債を拂はせるやうな男を見付けて、そうして今の境涯から救つて貰ふやうに考へた方がいゝ。」

と進藤は愛子に云つたことがあつた。

母親が歸ると云つて、其所から聲をかけてゐたのを愛子は聞き流して、何時までもぼんやりと立つてゐた。今まで晴れてゐた空が何時の間にか曇つて、彼女の目の先きの日影が消えてゐた。顏を上げると黄色い葉の色ばかりが灰色の空間に目立つて、そこに淋しい微な風が吹いてゐた。それをぢつと眺めてゐると、隣で「電話ですよ」と云つて此方へ聲をかけてるのが愛子の耳に入つた。續いて庭口からお時がかた／＼と驅け出して行つた。間もなく愛子の傍へ戻つて來たお時は、館主の淺田が、もう自宅を出るので、館の方で話をするから自宅の方へは廻らないで宜しいと云つたと傳へた。

「あなたもう、其れにしてもお出掛けなさらなけりや。時間ですよ。」

「今ね。花を呉れた人の事を考へてゐたんだわ。」

愛子が云ひながら室内へ入つて來た。

「どんな人だか見當でも付きましたか。」
「どんな人だか知りやしないわ。お前がお客にすると云つたから、あんな人はお客にはならないと思つて考へてゐたのさ。あの人はきつと進藤見たいに貧乏な人なんだらう。然うでなければあんな詩人見たいな事は云はないわ。あんな事を云ふ人に限つて、お金なんてありやしないんだわ。」
新う云つた自分の言葉で愛子はくさ〳〵した心持が拂はれてしまつた。
「お金がなくつちや駄目だわ。いくら私に同情ばかりしてくれたつて。そんな同情は何にもなりやしない。」
お時が着せてくれたコートを着て、薄いびろうどの襟卷をくる〳〵と卷き付け、今日、非常に身分のいゝ人でも、あの小屋へ來て、そうして自分を見染めてでも呉れるやうな仕合せを空想しながら、鏡臺の上の香水の瓶を取つて、襟卷の端へ振りかけた。熟れた物の匂ひが、その香水の刺戟でぱつと散つた。
「子爵の息子さんか伯爵の息子さんでも見染めてくれないかねえ。其れで、其れが美い男で――。」
彼女はふつと進藤の面影を目に見ながら、
「そうして好き勝手な贅澤な生活でもして。」
「うんと手切れが取れますね。」
「然うね。そんなものは何うでもいゝわ。」
彼女は自分の顏を鏡に映しながら、中指の先きで紅を眼尻にちよいと射した。彼女の顏が恐しく艶麗かに引つ立つた。

「そんな夢見たいな事は後にして、Rをお呼びなさいよ。二十圓だつて三十圓だつて今のところ結構ぢやありませんか。」

愛子が格子を出やうとすると、お時が後から斯う云つたので愛子は、

「あゝ。」

と首肯いた。

「全く、困るんだから仕方がないわ。」

「おや宜うござんすね。會社の方へ電話をかけて見ますからね。あなたが逢ひたいつて。」

「あゝ。仕方がないわ。」

愛子は家を出た。

「それからあなた。今日は木曜日ですよ。」

とお時が、あわてゝ後から追ひかけて來て、愛子に念を押した。

三

木曜日はMに逢ふ約束の日であつた。愛子は公園の奥の、其の人を待合はせる家まで車を向けさせた。

空が曇つて町には木枯らしが吹いてゐた。愛子は行く途中も、自分に何か話したいと云ふ館主の用件を時々氣にしては思ひ出した。以前のやうな人氣もないので、館主は自分に飽きが來てゐることを彼女は知つてゐる。そうして新奇な女優を入れ代へやうとして、他を探してゐると云ふ事も聞いてゐた。今

日の話と云ふのはそんな事に違ひない。彼女は然う考へると、彼所を逐はれたら、もう何所へも自分を賣る的もない氣がして、心弱く思ひ萎れた。何うしたのか、先きから先きまでが考へられるやうな心細い日であつた。愛子は車の上から毎日通り馴れてゐる町の家並を眺めた。其邊は貧民窟で、家根裏に窓を開けたやうな所から、男が顔を出してゐる家などがあつた。今日はどの家も、破れた障子が閉て切つてあつたり、雨戸が閉ざされたりして、襤褸のやうな灰色の通りは森として小供の影もなかつた。一間ほどの狹い間口に、木綿の綿入れや、印半纏の古着を吊るした家の軒下に、顔色の青い、銀杏返しに結つた娘が佇んでゐるのが愛子の目に付いたりした。

何うして今日に限つて、こんなにくさ／＼した考へばかりが浮ぶのか、自分にもわからなかつた。今迄に別して全盛だつたと云ふ時代もなかつたけれ共、其れでも彼女はその日／＼に驕つて、斯くして生活してゐれば何うにかなつて行くものと高を括つてゐた。無理な借金から見得の限りを盡して、女案內人たちが目を見張つて驚くやうな金ものづくめの粧で、そうして出來るだけ自分の驕りをひけらかした。彼女の贅澤や美々しさは、土地の仲間での唯一人であつた。

その驕りがもういよ／＼お終ひのやうな氣がする。自分はもう然う云ふ世間からは離れて行くやうな氣がして心細かつた。そうして誰れからも見捨てられ放逐されて、行きどころのない哀れな自分が、こんな所でうろつく様な生涯の終りが眼に浮んだ。

「羽織まで脫いでしまつて、コートで胡麻化してるやうな自分の風が、こんなに自分をじめつかせるんだわ。」

愛子はきつと然うだと定めてしまつた。だがそんな事ぐらゐで氣が退けるやうでは堪らない。今夜にもどんな吉い事がないとも限らない。一と晩で百圓の纏頭もはづんでくれるやうな、そんな人がないとも限らない――彼女はふと、館主に一度百圓で買はれた事を思ひ出した。其れは口留めを兼ねた纏頭だつたけれ共、その時の嫌惡の感じは、百圓でも二百圓でも代へられない樣な氣がした。――

夕暮のやうに公園の景色が沈んで、人寄せの樂隊の音が、寂寥の中を響いてくるやうに鈍く張りのない音を出してゐた。旗の布れも疎らに群れてゐる人々の上に垂れて、それに鼠色の雲の光りが薄く反映してゐた。愛子の車はこの裏手を通り過ぎた。

時間が遲くなつて、Mはもう歸つてしまつた後であつた。今夜は泊まれる都合なので、身體が明いたら此家へもう一度來るやうにと云ふ言傳てを主婦に殘して行つたと愛子に告げた。

愛子は上にあがつて暫らく遊んだ。今起きたばかりと云ふ風で、島田に結つた女が椽側に鏡臺を持ち出して、鬢の癖直しをしてゐた。家の中は、こまかな仕切り〳〵が開いてゐるので、何時になく廣々とがらんとしてゐた。昨夜波之助と逢つた四疊半が見えた。茶の間に居た主婦は島田の女と二人で、石炭酸を呑んで自殺をしたおのぶと云ふ女の話をしてゐた。そうして、彼女が庭の方を見てゐる内に――垣根から椽側まで一尺ほどの空地のところに小さな稻荷の祠があつて、その傍に小菊が咲いてゐた――そこに、はら〳〵と雨が降つて來た。

雨は今一層こまかに降り出してゐる。車の幌に雫が流れてゐた。Mに逢つたお蔭で彼女は一枚の紙幣を持つて來ることが出來た。質入れした羽織の爲に男が其れを與れたのであつた。

それから館へ着くまで愛子はおのぶと云ふ女の身上を思ひ廻はしてゐた。其の女には、今の家で度々顔を合はした事があつて知つてゐた。おのぶは十九ぐらゐであつた。その女は病氣の爲に自分で食べられなくなつて死んだのだと話してゐた。病氣に罹つてから誰れも女を買はなくなつた。女は其れで、糊口が凌げなくなつた。

青く膨んだやうな顔に、ぶつ〳〵と何かできてゐたおのぶの顔が愛子には見えた。根の拔けた大きな島田。ふところ手。白粉垢の付いた半襟。さうしておのぶは何時でも寒がつてゐた。腫れぼつたい眼に笑ひを浮かせて默つて會釋する時の印象が愛子の眼に殘つてゐた。

館主の話は、愛子の考へてゐた事とは違つてゐたけれ共、其の代りもう一層厭な難題であつた。共れは次ぎの興行に本物の蛇を使つて芝居を演らうと云ふ趣向で、新奇に書き下す芝居の中に「蛇責め」の一と幕を拵へ、愛子の半裸體に蛇を卷き付かせて、女の苦惱を見物に見せ、それで人氣を取らうと云ふ館主の考へであつた。

「何うだらう。度胸があるかい。水島さんになら蛇は使へるだらう。」

と肥太つた館主は笑つてゐた。他の事務室の人たちは勝手放題に淫らな文句を口にしながら、其の思ひ付は必らず客を呼ぶに違ひないと云つて手を拍つて騷いでゐた。

「蛇は馴れてる奴なんだから恐くも何ともないんだと云ふことだ。尻尾をこんな風に。」

丸く太つた手で、物を摘み上げるやうな形をして見せながら、

「持ち上げると、をとなしく、ぐる〳〵と腕にでも頸にでも卷き付くんださうだ。其奴をちよいと逆にやつて、うまく鹽梅をすると、又、する〳〵と解けるんださうだ。極くをとなしい奴なんださうだね。だが卷き付かれるつて奴が、馴れないと氣味が惡るいからね。何うだね。度胸が出さうかね。」

蛇は六尺ぐらゐな大きさなもので、其の手の興行師から借りる工夫になつてゐる。

思ひ切つて演つて見る度胸があるか、後までに返事を聞かせること。若し厭なやうならば、誰れか度胸の好い女優を外から雇つて、この思ひ付を演らせる、愛子の人氣も、もう以前のやうぢやないんだから、そんな事でもすれば、又人氣が盛り返せるやうなものだ――そんな事を一とつ〳〵愛子は聞かされた。

愛子は部屋に戻つてから、其れを思ひ出すと慄然とした。鏡に映る自分の半裸體を眺める時も、それに卷き付く蛇の形を想像すると、全身が水を浴びたやうに粟立つた。部屋の連中は、作者の長谷部からもう其の話を聞いて評判をしてゐた。

「おゝ。いやな事だ。」

厭だ厭だと云ふ女たちの聲が、騷々しく方々で聞こえる。男から一寸脅かされたものが金切聲を上げて部屋の中を逃げ廻つたりしてゐた。

「その女主人公の役は水島さんでせう。たまらないわね。」

誰れか然う云つたのかと思つて愛子が振返ると、其れは眞つ白に白粉を塗けてゐる花子で、愛子と顏を見合せた時に、笑ひで白粉を龜裂破らしてゐた。

「ちつとも堪らなくないわ。平氣だわ。」

愛子は自分の大嫌ひな出過ぎもゝの花子を睨んで云つた。
「そこが水島さんだわ。」とか、「度胸のある人は違つたもんだわ。」とか、まだ女たちが云ひ合つてるのを聞きながら、
「あなたたちよりは度胸があるわ。」
と云はうと思つたが彼女はもう止めてしまつて默つた。
意地で花子に彼様は云つても、愛子は其れを一人で考へてゐると、何うにも氣味が惡るくつて堪らなかつた。自分の首の周圍に垂れ下がつてゐる髮の毛の觸覺にも震えながら、其れを我慢して自分の手で丸めたりした。蛇の幻影に襲はれると、兩袖を緊かりと抱き合はせて其の中に顏を埋めたり、行李の上に突つ伏したりした。
「ぐる〳〵と巻き付く。する〳〵と解ける。」
館主の云つたこの言葉を、何所に居ても彼女は繰り返した。まるで全身の惡寒を耐へてゐるやうな、息苦しい心地が續いて、冷めたくなつた身體が急に熱くなつたり、熱した身體が一時に冷えたりして、身體が變に疲勞した。舞臺に出ても身體が重く、硬張つた筋肉が自由にならなかつた。
斯うして愛子は一日その難題で屈托した。何う思ひ直しても其れだけは氣味がわるい。自分には兎ても我慢が出來そうもない。けれども館主の方では自分が厭だと云へば、他の女を雇つてもその芝居を演りさうな意氣込みでゐる。「愛子の人氣ももう以前のやうぢやないんだから、こんな事で人氣を盛り返したらいゝだらう。」と館主の云た事を思ひ出すと、愛子は口惜しくなつて胸が塞がつた。

「何方にしても、自分はもうそんなに要り用はないと思つてゐるのだ。その内に借金の半分も働かして自分を抛り出さうと云ふ館主の腹だ。其れでも、こんな事でも我慢しやうと云ふなら、又使つても宜いぐらゐに考へてるんだらう。」

そうして、館主の考へが癪にさわる傍から、今直ぐにこゝから見放されたくはないと云ふ意氣地のない弱い考へが浮いてくる。そうして若しそんな事で盛り返せる人氣なら、思ひ切つて見物を驚かせるやうな事も演つても見たくなつた。人氣者として大切に館主から取扱はれる思ひ上つた心地快さを彼女はもう一度繰り返しても見たくなつた。

幕の間に、見物の前に立つてゐる時、其れをふと考へ出すと彼女はもう自分が身惨めで可哀想で堪らなくなつて、胸が悲しさで亂れた。この世の中で自分のやうに虐げられてゐる女はないやうな氣がする。そうして、自分を見てゐる見物も、みんな自分の爲に悲しんでゐて呉れるやうで、ヒステリーになつた彼女は舞臺の上で無暗と涙を落した。芝居は沙翁の有名なある芝居を日本の時代物に直したもので、その中の狂亂の姫を愛子は演つてゐた。臺詞が現代の調子で、この着付とはまるで不調和な言葉を、彼女の癇高な上滑べりのした聲で云ひながら。相手の公達に扮してゐる男優の前へ行つて、持つてる花々渡そうとした時には、嗚咽してゐた。前に結んで下げた鴇色の抜帶がその涙で濡れたのを男優は見た。

「水島さんはヒステリー見たいに舞臺で泣いてゐる。」

その男優が部屋で愛子に云ふと、彼女はもう笑つてゐた。そうして他の女たちに自分の意氣地なさを見られるのは厭だと云ふ反抗で、蛇責めの話が出ると、愛子は、

「お互さまに蛇に巻き付かれるより、もつと厭な事もしてゐるんぢやないか。其れを思へば何でもありやしないわ。却つて蛇の方が可愛いゝくらゐだわ。」

と大きな聲で云つた。

芝居が濟んでからも、何う返事をしやうかと思ひ迷つて、彼女は長い間鏡臺の前で考へ込んでゐた。自宅から電話だと云つて、女の案内人が愛子のところへ知らせて來た時まで、彼女は部屋にぼんやりしてゐた。重い息をしながら顔を上げると、電燈が彼女の鼻先きに一刻も早く休息を求めるやうに疲勞を見せて光つてゐる。その光りを見ると、彼女は何も彼も一時に氣が付いたやうにあわたゞしく眼の色を動かして周圍を見廻した。自分の他にはもう誰れも居ないのかと思つたのに、隅の方で脊中を丸く蹲踞まりながら、一人殘つたのが足袋を穿きかけてゐた。彼女は其れを見ると、

「佐保子さん。まだ居たの。」

と聲をかけた。彼女の太い嗄れた聲が、空虛な部屋の中で佐保子の方まで靜に波動を打つて行つた。泣蟲と仇名のあるその小さい女優は、先つきまで一人してくすくすと泣いてゐたやうだつたが、もう泣くのもお終ひにしたと見えて、愛子の方を振向いた顔は奇麗になつてゐた。今歸るところだと云つて、青いマントを着た佐保子は部屋の外に待たしてあつた若い書生と一所に直ぐに歸つて行つた。

愛子はその人たちと一所に階下に降りて電話室へ入ると、自分を待たせたと云つてお時が電話口で怒つてゐた。お時の用は、

「あれがうまく行つて、今來てゐるから、外へ廻らずに歸つてくるやうに。」

と云ふ事だつた。

「何うです。一件はやる事になつたの。」

電話室から出やうとした時に、狹い廊下で打つ突かつたのは長谷部であつた。眼鏡をきら〳〵と闇の中に光らせながら、髮の油の匂ひをさせた長谷部は、其所に立止つて愛子に聞いた。

「やる事に決めておくわ。」

「やる？、其れはえらいね。思ひ切つてやるかね。」

愛子は序に事務室を覗いたが館主の姿が見えなかつたので、引つ返して來て長谷部に言傳てを賴んだ。

「蛇はもう館主の家に來てゐるとさ。今電話がかゝつて來たところだ。」

長谷部はこれから其の蛇を見に行くのだと云つた。

「蛇使ひのお爺さんが一所に來てゐるんだとさ。」

愛子は其れを聞くと、長谷部と一所に蛇を見に行かうと思つた。

「Rの顏を見るより、蛇でも見て來た方が餘つ程增しだ。」

そうして彼女の感情がひどく殘忍になつて來た。自分が蛇を使つたらRはきつと身震ひして逃げ出すだらう。其れからMも——厭な奴に對する脅喝。世間へ對する脅喝。それから弱い自分に乘じて自分を虐げやうとする館主への脅喝。——蛇は其れに味方をしてくれる。

「小氣味がいゝつたらない。」

彼女は長谷部を待たしておいて部屋へ戻つた。コートを着たり、手提げを持つたりして再び下りて來る

までには、いろ〳〵な計畫が出來てゐた。この仕事をやるからにはそれだけの報酬を館主から貰ふことを考へた。そうして館主などは恐くも何ともなかつた。

外へ出ると、雨がやんで、雲から漏れた月の光りが道の上に流れてゐた。長谷部は呑氣に煙草をふかしながら、何か着込みをしてやる方がいゝ、襦袢でも着れば餘つぽど感じが違ふ。と云ひながら歩いてゐた。

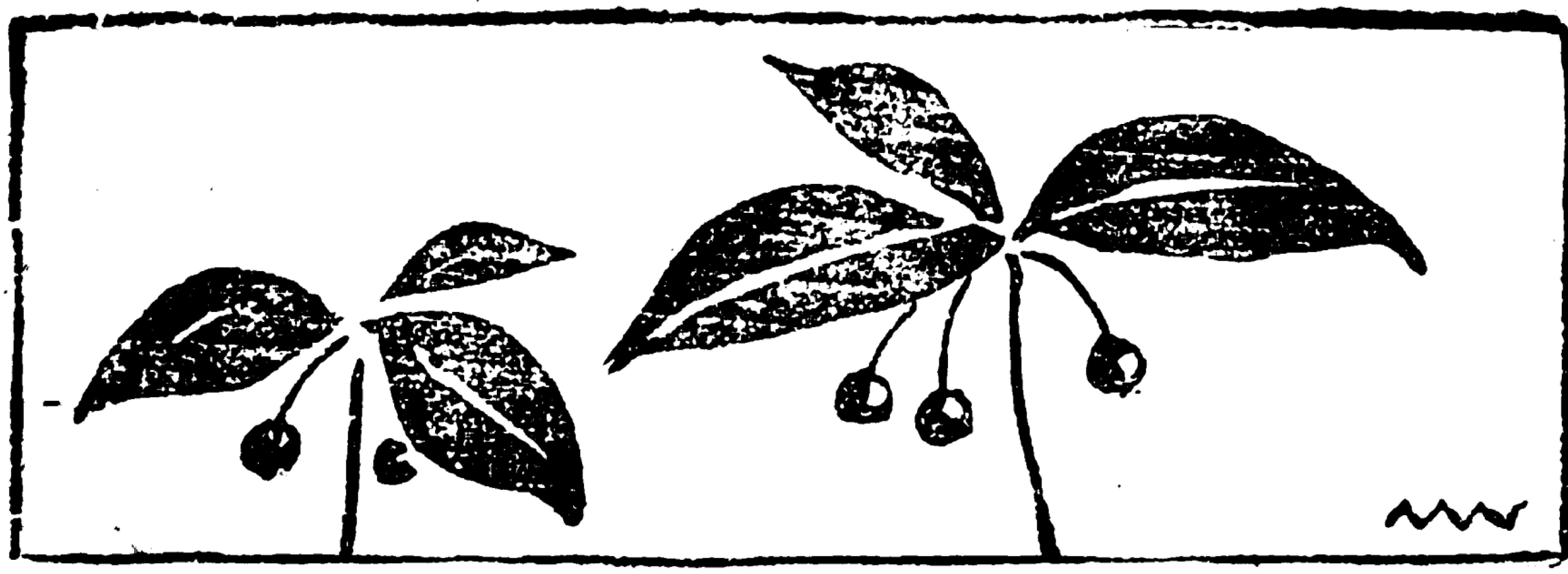
「そんな事をしちや面白くないわ。やつぱり直かにして見せなくちや。やるからには序にいろ〳〵やるんだわね。」

自分を「天才だ」と云つた男の事が、ふと彼女の胸に浮んだ。

「私の生活を悲しい生活だと云つたが、それを見たらあの人は何と云ふだらう。」

彼女はその男まで馬鹿にしてやるやうな快い心持がした。

（十一、十六）



厄年

らいてう

稔が折々咳をするやうになつたのは、ふたりが閑靜な山の手の或る町から人家の込合つた四谷のI町へ、氣のすゝまないながらも、或る必要から引越して來てから未だ一月とたつかたゝないお盆前後からのことであつた。最初は殆ど氣にもならないやうだつたのが、だん／＼間近にそして烈しく出るやうになり、時には外出の途中、殊に風の流通の盛んな電車の中などで、急に咳き入つて、容易に落付かないやうなこともあつた。越子は後から後から込み上げてくる咳に上半身を波立たせながら苦しさうに胸を押へたりしてゐる稔を見るのが苦痛でならなかつた。

「ねえ、稔さん、ほんとに一度診てお貰ひなさいよ。」

越子はその度毎に心配さうに、そして頼むやうに繰返して言つた。「診て貰つた上で何でもないのだつたら、なほいゝぢやありませんか。」

けれどもかう言ふ越子さへ稔の咳をきかない時は忘れてゐる方が多かつた。ま

して稔自身は容易に醫者の門など潜る氣にはなれなかつた。二十五の今日までまだ醫者といふものゝ手にかゝつたことのない健康の所有者であつた彼にとつては、總ての病氣といふ病氣が一週間もすれば自然と、しかも知らないうちに全治してゐるものゝやうに思はれてならなかつたし、また或種のことにかけては圖拔けて無性な彼にとつては、まだ一度も行つたことのない處へ行くといふことはどれ程、億劫なことだか知れなかつたから。彼は矢張り食鹽水か何かでそれも極く、稀に思ひ出したやうに含嗽する位なもので、お天氣さへよければ、いつものやうにスケッチ箱を肩にかけ、畫架や日除傘や畫布(カンヷス)など可成りの目方になるものをもつては、小石川の植物園へ出かけて行つた。丁度その頃、櫻の大樹――森を背(ベッ)景にして、午後の光線をうけたものと、溫室前――茶店の方から溫室を見たもので、茶店の大きな卓を前景にし、森を背景として、鉢植の花の列や、白い溫室の一部を現はした、ルノアルのあるものにでもありさうな構圖(コムポヂイション)のものと、今一枚楓の並木道――總ての緑が夏の強い光りに輝き、並木の影が明るい道の上に濃く落ちてゐるものとを描きかけてゐたのだが、描きたくて描きたくてたまらない彼は、お天氣に妨げられない限り一日として休んだこともなく、朝のフランス語のお稽古を濟ますと、すぐ家を出て夕方でなければ歸つて來なかつた。雨が降つて行かれない日の彼ほど慘めなものはない。何を見てもつまらなく、何をしても落付けないといふやうに只もうぽかんとした顏付をして、今日一日の空虛をどう埋めるかといふ大問題に苦しむのであつた。ところがさういふ彼が晝過ぎ頃ひよつくり戻つてきて、部屋のまん中に荷物をすつかり放り出したまゝ、自分もその側にほんとうに疲れ切つた人のやうに打つ倒れて眠入つてゐることがあつた。また或時など、肩が凝つてまるで背中に堅い板でも張りつけられて

ゐるやうな感じがするといふやうなことを越子に訴へたこともあつた。けれどその時それがあの恐ろしい肺病の初期の徴候だなどゝどうして想像することが出來よう。ふたりともそれは最近作らせたスケッチ箱がオークで造られてゐるので、今迄の桐のよりも重いためとばかり氣にもかけずに過してゐた。その上彼女は彼が只觀た上の感じばかりに夢中になつて、自分自身の身體に不適當なほど重いものをこらへたといふ非難めいた言葉さへ、かうした所持品に對する彼の寧ろ病的に近いほどの神經過敏をなかばからかふ心も手傳つて、附け加へたりしたので、彼はそれ以來たとへたまらなく肩の凝ることがあつても、彼女の前では口に出すことを避けてゐた。彼はこんなつまらないことにでも、どうかすると妙に意地つ張りな癖があつたから。また實際、自分が今ひどく氣に入つてゐるものを、しかも輕い財布の持主としての彼がやつとの思ひで作らせたものを、自分を一番知つてゐてくれる筈の人から理解もなく、同情もないらしい無雜作な言葉つきで難ぜられるのは決して氣持のいゝものではなかつたらうから。

彼はまた越子と一緒に毎朝お隣りのY先生のところへフランス語を習ひに行くことも怠りはしなかつた。けれども彼の記憶力はその頃から目に見えて衰へて來た。ふたりは夕食後、一つ机に並んで、同じ讀本を開いて、一緒に復習したり、明日のところをざつと見たりする習慣になつてゐたが、稔は今日習つて來たばかりのところを覺えてゐない。甚しい時は今日何處をやつたのかさへ覺えてゐなかつた。子供の時から記憶力に於て遙に他の子供に劣つてゐた、從つて語學の才能を最も缺いてゐた越子でもそれには呆れ返るほどであつた。そしてどうかするとあまりのもどかしさに腹を立てることもあつた。そんな時は皮肉な言葉で彼を責めずには置かなかつた。

「だつてほんとに覺えやう覺えやうとしてゐながら、なんだかちつともわからないんだもの。」

「矢張り、稔さんがまだ本氣にならないからよ。でもこれぢやあんまりつまらないぢやないの。ほんとにこんな騷々しいところへわざ〳〵越してまで來て。」

一體今迄郊外に近い家にばかり住んで、靜かな郊外の朝の散歩を好んでゐたふたりが、そのふたりにとつてどうしてもいやなところとしか思はれないこんな四谷の眞中などへ引越して來たのは全くY先生にフランス語を習ふ上の便宜ばかりであつた。つまり途中に多くの時間をとられたくないのと、その頃もう姙娠四五ヶ月になつてゐた越子の身體（からだ）が毎日の電車をいとつたのと、これから月の重なるに從つて一層近くが望ましいと考へたことなどであるが、今一つY氏夫婦のふたりの生活に對する理解ある同情と厚い親切とがふたりの心を引き付けたからでもあつた。Y先生といふのは越子が編輯してゐた「S」といふ新婦人達が創作や評論を發表する一つの機關となつてゐた雜誌に婦人問題に關する飜譯ものなどを載せてゐた關係から越子と知己の間柄であつた或る新進婦人の良人で、アメリカに於ける久しい奮鬪生活を終つて、歸朝してからは、餘り長く向ふにゐたゝめ、日本語に多少不便を感じてゐたせいでもあらうか、世間との交渉もあまりもたずに、只生活のため英、獨、佛其他の語學の自宅教授を夫人と一緒にしてゐた。越子が先生の專門である社會學の或る書物の講義を先生の好意によつて他の二三の婦人たちに交つて、毎週一回づゝ聽くやうになつたのは、この春からのことであつた。けれど先生にフランス語を學びたいと最初言ひ出したその當の志望者は全く稔であつて、越子ではなかつた。それだけ越子は稔のこの頃を責めたいやうな不滿を感じたのであつた。

けれども越子のこの不滿は稔のことは何によらず無頓着でゐられないといふ稔に對する愛の一面に過ぎなかつた。稔を責める越子の心はすぐ次の瞬間には、ふだんにも增した優しさをもつて滿されてゐた。
「いゝわ、稔さんがそんなに覺えられないのなら、その分だけ私が覺えてゐるから――さうすればおんなじことだわ」
そして膝を並べて座つてゐる稔の手をとつて自分の膝の上に置いたりした。こんな時稔は何となく涙ぐましい氣持になり、ぢつと眼を大きく明いて、書物を見詰めるやうにしてゐてもいつか頭がぼーつとして氣が遠くなり、何を見てゐるのだか、何を聞いてゐるのだかも分らなくなるこの頃の自分がぼんやり考へられるのであつたが、その中いつかまた抵抗することの出來ないやうな疲勞を感じて、そのまゝ他愛もなく越子の膝に俯伏して寢て了ふことなどもあつた。こんな風で讀本は大抵机の向ふの方に押しやられてゐた。
實際稔がその頃眠りを貪つたことは一通りではなかつた。あまりいつまでも稔の部屋の方が靜まり返つて、小さな物音一つしないのに、彼女は心配して、そつと襖の細目から覗いて見ると、仕事をしかけたまゝ、横になつて眠てゐるやうなことが幾度もあつた。
越子も稔を怠惰とばかり思つてゐられなくなつた。彼女はそれを神經衰弱だらうと思つた。咳の出るのはそのため咽喉神經が過敏になつてゐるのだらうなどゝ病氣に對する無知からいゝ加減な理屈までひとりでつけてゐた。
稔が含嗽の藥瓶と水藥の小さな瓶とを持つて見附内の知合の醫者から歸つて來たのは、こんな狀態が

十日あまりも續いて後のことであつた。

「なに氣管支加多兒だつて……あんまり外出なんかしない方がいゝつて。」

事もなげな稔の言葉を越子も輕く受け取つた。病氣に無經驗な稔はもとより越子さへ「氣管支加多兒」といふことにその時何の恐しいものをも聯想しえなかつたから。のみならず彼女はともかくもかうして强情な稔が醫者にかゝつてくれたといふこと、そして服藥するやうになつてくれたといふこと只それだけで幾分の安心が得られたから。

けれどももうその頃から稔の熱は七度から八度の間を上下してゐた。夕方そろ〳〵熱が出てくる頃になると、彼女は床をとつて、稔を强ひて靜に寢かすやうにし、自分はひとり臺所に出て、夕の仕度にとりかゝつた。

ふたりの家は全くふたりきりで、まだ他人といふものを交へたことがなかつた。ふたりは家の内のどんな些細なことでもふたりの意志によつて決せられ、ふたりの協力と分業とによつて營まれてゐるといふことに、總てが自分達の所有だといふのび〳〵とした、誰れに氣兼ねの必要もない自由の快さをいつも感じてゐた。ふだんならお炊事のことも稔が少しは手傳つてくれるので、ふたりは勝手もとで、その日に出逢つた大小さま〴〵の事件を洩れなく話し合つてゐるうち、いつかお飯がたけて居たり、スチウがおいしさうに出來上つて居たりするのであつた。

けれども越子はひとりでしなければならなくなつた此頃の臺所の仕事を別に厭はしくは思はなかつた。のみならず、彼女はひとりでしなければならないといふことに特殊の勵みさへ感じながら、珍らしく

まめやかに立ち働いた。食物の上に好惡の烈しい彼のために、彼女は幾度も彼の寢てゐる床のところまで相談に行くこともあつた。そして茹ものなど瓦斯の上にかけたまゝ、一二町の漬物屋へ稔の好な甘い煮豆を買ひに走ることもあつた。

「お使ひですか。」

と門前に立つて、葉卷をふかしながら、往來を見てゐるY先生によく聲をかけられたりした。もし近所の知らない人がこんな彼女を見たなら、彼女の上に何かしら新しい幸福が來たのだとさへ思ひ違へたかも知れない。それほど彼女は自分達が一緒に生活してから二年あまりの間、一日としてまだ床に就いたことのない彼が、今はじめて病むといふことに物珍らしさの氣分の隨ふ快いほどの興奮と、さうして自分はその枕もとに靜に座つて、彼の上にふだんよりも一層優しい、柔かい愛撫の手を自由に擴げることが出來るといふ意識に隨ふ母らしい感情の滿足とを感じて何となくいそ〳〵してゐたのであつた。

そしてそれが稔の病氣そのものに就いて心配することを暫く忘れさせてさへゐた。

けれども彼の病氣はそれから一週間を經過しても決してよい變化を見せてはくれなかつた。朝夕の咳も加はり、咳と共に痰の排泄さへ見るやうになつた。或時などは――尤も友達がきて多少興奮して話したせいでもあらうけれど發熱九度に達したことさへあつた。彼のところへ訪ねてくる友人達は、

「君、顏色がわるいよ。氣をつけ給へ」などと言つた。

全く彼の顏色はわるかつた。何處から何處まで同じやうに蒼い顏に、多過ぎるほど濃いたつぷりした長髮が、厚くかぶさつて、白い枕や敷布の上に重さうに落ち、大きな唇が熱に乾いて、どうかすると、ど

す赤く見えるのも一層彼の顔を蒼白く、そして物凄いものにさへ見せてゐた。

稔はまたよくその頃こんなことを誰れに向つてともなく言ひ言ひしてゐた。

「僕(ぼか)あやつぱり惡いのかしら。別にどこつて苦しいところはないけれど、かうして一日中寢てばかりゐて、それでそんなに苦痛でもないところを見ると。第一こんなに畫を描かずにゐられるのが不思議だ。」

そしてもう初め頃のやうに、すぐのこ〳〵起き出しては、越子にやかましく小言を言はれるやうなこともなくなつた。それでも描きかけのあの植物園の畫は絶えず氣になつてゐるものと見えて、床の中から一番見易い方の壁に立てかけては、だまつて眺めてゐることがよくあつた。

「もうすつかり綠の色が變つて了つたらうなあ。」

彼は嘆息するやうに言つた。

こんな風ではじめかけたフランス語の方もそれつきりになつてゐた。

越子も稔が行かなくなつてからは、折角一緒に始めたものを、自分ばかり先へ進んでは、稔のそれに對する興味や熱心をそぎ、果ては厭氣まで起させるやうなことがあつてはといふ氣遣ひからその方は中止した。けれども毎朝或る若い婦人のために婦人問題に關する或る書物――それは婦人問題の思想的方面を取扱つたもので、性的問題を中心として論ぜられてあつた――の讀まれるのを聽きに行くことは決して缺かさなかつた。

越子にとつて、稔ひとりを殘して行くといふことは可成りつらいことであつた。第一心配でもあり、その淋しさを思ふと可哀相でもあつた。それでも彼女の知識欲や自分自身の仕事のことを思ふ情熱は抑

へることが出來なかつた。こんな時、小女(こをんな)でもゐてくれたらなどひとり思ひながら、彼女はいろいろの用事を濟ませ、彼の枕もとに、藥瓶や體溫器や、痰壺は勿論、新聞だの、スケッチブックだの、彼が好む印象派畫家の畫本などその他何やかやと備へたりした。

「ね、また一寸行つてくるわ、靜かにして待つてゐて頂戴ね。出來る丈早くすませて歸るから。……それからね、玄關へ誰れか來てもだまつてゐればいゝのよ。安心してね。」

こんな言葉を殘して外に出ると、越子は手に持つてゐた一枚の紙を格子のすぐ側(わき)の破目に針で留めたりした。その紙には「御用の御方はYさんの方へ」などゝ書いてあつた。

Y先生のお家は一軒おいた、すぐお隣りであつた。彼女の顏を見るときつとたづねて下さるY夫婦の優しい言葉に、

「ありがたうございます。やつぱり何の熱かまだはつきりいたしませんの」

と越子の不安さうに答へる日が幾日か續いた。

醫者が來たのは、その日もいつもの通り、晝少し過ぎのことであつた。丁度その時稔は食後のしばらくをまだ蒲團の上に座つて、にぢみ出て來る汗をぬぐつてゐるところであつた。南の緣からさし込む眞夏の日盛りの强い光線が簾を洩れて、床のすぐ近くまで迫つてゐるのさへ、たまらなく暑いのを、一間たらずの、しかも庭木らしいものといつたら蟲がついて、枯れかゝつてゐるひよろ長い石榴の木一本しかない庭を隔てゝすぐ前の貸家——そこには小さな子供が三四人もある屬吏夫婦が住んでゐて、朝から

晩まで馬鹿々々と子供を叱り通してゐる細君のいらだたしい聲が絶えなかつた――のブリキ家根からの熱の反射が坐敷中をむうつとさせてゐた。石榴の根方に並べられた五鉢ばかりの朝顏は皆茹でられたやうにその葉まで力なく垂れさげてゐた。

稔の外出を絶對に禁じてから、醫者は隔日に診に來てくれるやうになつてゐたが、あまり熱が下らないので、數日前、腸チブスの試驗をするため、左の腕に發泡を貼つてからは、大分氣になつてきたと見えて毎日見舞つてくれるやうになつた。彼の腕から試驗管にとられた美しい透明の液が、早速試驗された結果、チブスの疑ひは全く晴れたけれど、矢張りいまだに何の熱かはつきりしない。結局「まあ、もう一日御樣子を御覧なさいまし。さう御心配なさらなくも……」などゝ曖昧に言ひ殘して歸つては行くのがお極りであつた。こんな風で藥ばかり徒らにとり代へられてゐたのである。

「今日こそきつと少しはお熱が下つたらうと思つて伺つたんですが――さうですかなあ。」

まづ第一に枕もとの溫度表をとりあげた醫者は、ぢつとそれに見入りながら、今は病人そのものよりも自分の醫者としての技量を疑はれてゐやしないかといふことの方を寧ろ氣遣つてゐるものゝやうに、故とらしく首を傾け、眉間に皺を集めたりした。

「もう下らなければならない筈ですがなあ、どうも……？」

薄手な、色白な貧しい顏に、絶えず人に取り入らうとするのが慣性となつてゐるやうな、卑賤な表情さへどこかに湛へながら、しかも考へ深さを裝つてゐるやうな、その醫者の横顏を、越子はだまつて眺めてゐたが、この人が以前侍醫局に出てゐた頃、多くの女官達にたいへんもてたとかいふ噂――それは

稔からであつたか、稔の母からであつたかきいたものであつた――をふと思ひ出すと彼女は一層厭な氣持がした。侍醫局に久しく勤めてゐたといふその只一つの事實が彼の頭腦と手腕のいかに時勢おくれであるかを十分證據立てゝゐるものゝやうにも考へられてきた。

彼女は不安を感じた。彼女の心は今はじめて稔の病氣そのものに對する不安の中にはつきりと目醒めて來たのだ。すると、この信用し難い人に自分の愛するものを委せて、今日までぢつとしてゐられた自分が寧ろ不思議な位でもあり、またその不都合が深く心を責めもした。早速誰れかいゝ醫者に診て貰はねばならない、かう思つた時、彼女の頭には彼女のよく知つてゐる院長のことがぼんやり浮んでゐた。もし惡い熱であつたら、そしてもう手おくれだとでも言はれたら！

この瞬間、彼女の意識の底に動いてゐたのはいふ迄もなく恐ろしい肺病といふことであつたに相違ない。けれどもゝ彼女がそれを意識の上にたしかに掴み上げやうとする前に、早くもそれは打消されてゐた。

「そんな筈はない。そんな筈はない。」

彼女は同時に眼を上げて稔の方を見た。

あらはにされた彼の蒼白い胸部には聽心器があてられてゐた。その或る部分などは、殊に叮嚀にあてられては、注意深く耳傾けられてゐた。深い大きな息をする毎に、殊にはつきりと氣味惡いまでに現はれ出る肋骨の一枚々々を、越子は痛ましく眺めながら、この一二日で、また瘠せが目立つたやうな氣がした。彼女はたまらなく不安になつてきた。

「けれど、そんな筈はない。」

彼女は反抗的に再び強く打消しながら、彼の體格が普通以上に强健であること、彼の力强い大きな咳はあの病氣のとは全く性質が違ふことなどを考へた。

けれどその時、彼は、右の胸の下あたりを抑へながら、そこに絶えず痛みといふ程でもない一種の異様な壓迫を感ずることを訴へてゐた。

そこへ稔の母が臺所の方からお濯ぎの水をもつて出て來た。二三日前息子の病氣をハガキで知つて、郷里から――といつても二時間と少しも汽車に乘ればすぐ來られる町だが――見舞に出てきた稔の母はそのまゝ泊つて、臺所のことや、走り使など何かと家事の手傳ひを女中がくるまでといつてしてゐたのであつた。稔の母は娘（稔の姉）の結婚の媒酌人であつたとかいふ關係から稔以上に醫者とは懇意な間柄であつた。ふたりが四谷へ越してきた時、これから病氣でもしたら川上さん（醫者の姓）が近いから診て頂くといゝと言つてよこしたのも無論この母であつた。

「……私もかうして參つたのでございますから、何の熱だかはつきりいたしました上で少しは安心して歸りたいと存じまして。それにあなた歸りましても、どこがわるいのか分らないといふのでは年寄に話してきかせることも出來ませんので……御承知の通り、家の方も年寄一人殘して參つたのでございますから、氣にはなつてゐるのでございますけれど。」

などゝ言つてゐた。

診察を終へてから、醫者はしばらく考へ込んでゐるやうだつたが、拜見したところ氣管支も確に惡いことは惡いが、でもこれ丈の熱がいつまで續くほど惡いとは受取れない。それにチブスの方の疑も全然

ないことになつて見ると、此の熱の原因は他の方にあると思はなければならないといふやうなことをぼつりぽつりと言つた。
「それで、結核の熱ぢやないかと疑へば疑へないこともないのですが、ともかくその反應を一つ……やうと思ひますが」
と醫者は最後に言つて、ピリケといふ一種の注射に就いて簡單な說明をして行つた。
醫者がその支度を整へて、再び稔の家を見舞つたのは、冷しい風の吹き出した夕方であつた。電氣の點っ火く前の部屋の中はもう薄暗かつた。
西の窓が明けられた。稔の左の腕には三ヶ所に注射が施された。
醫者を玄關に送り出すと、越子も稔の母もすぐ病人の側に戻つてきたが、あたりに取り散されたものなど片付けることも忘れたやうにそのまゝそこにまた座り込んで了つた。部屋の中には何となく不安な氣分が動いてゐた。
「二三日うちに分るんですつて?」
「さう二三日のうち」
これつきり三人とも口を開かなかつた。
「若し結核の反應があつたら……いやあるに相違ない。」
今、醫者から聽いたこゝ二三日中に現はれるかも知れないといふピリケの反應が或る恐ろしさをもつて皆に期待されてゐた。

稔の母が驚いて臺所へ走つて行つたときは、もう瓦斯の上のケンチンが煎り付いてゐた。

「ねえ、稔さん、T院長に一度診て頂くといゝと思ふわ。」

越子は夕食後の電燈の下でから言つて、相手の顏を氣遣はしげに見た。

T院長といふのは肺病專門の病院として有名なT病院の院長で、越子はその人を十餘年前から自分の學校の校醫としてよく知つてゐた。學生の頃、幾度か健康診斷を受けて、その度每に神經衰弱だなどと言はれたこともあつた。その頃同じ學校の生徒であつた彼女の姉は肺炎で、海に近いその人の病院の方に二年あまりも行つて居たこともあつた。またその姉の同窓で、最初は患者として入院し、後には役員として久しくそこで働きながら、なほ病を養つてゐたHといふ婦人が越子の經營する「S」社の內部の人として、越子と特に親しい交りをもち、折々上京しては越子の家に寄寓して、「S」雜誌の編輯を手傳つてくれたり、滯りがちな事務を整理してくれたりしたし、また越子の方では、心身が疲れたとき、海や空や雲の姿などがたまらなく戀しくなると、T病院の松林の奧のその人の淋しい部屋を訪れるのを樂しみにしてゐたので、自然その人を通じて、院長T氏の特殊な性格、思想、その日常生活の些事に至るまで聞かされてゐたのであつた。けれど、それぱかりではない。四年前、矢張り「S」社の同人で、越子を深く愛慕してゐた、そして世間からはその當時、越子と同性の戀の間柄だとさへ噂されてゐたKといふ婦人が極初期の肺を病んで、この病院にゐた一夏、彼女はKの淋しい心を慰めるため、自分も病院に近い或る漁師の家でその一夏を過したことがあつた。

彼女が稔に初めて出逢つたのは、その夏のことであつた。場所もT病院の應接室であつた。その日彼女は東京から來る某書店の主人と「S」雜誌の發行や發賣に關する眞面目な用談をしなければならなかつた。けれどその主人が彼女の全く見も知らぬ長髮の若い畫家を連れて來やうなどとは全く思ひ設けぬことであつた。そこにはHも居た。Kもゐた。紹介されるまゝに、彼女はその人と初對面の挨拶はしたが、それきり別に言葉らしい言葉も交へず、すぐ書店の主人との用談にはいつて了つた。けれども彼女は大きな卓を隔てゝ斜に向ひ合つてゐる若い畫家の始終うつ向き加減にひとり默してゐる淋しい姿に自分の注意のいつかしら集つて行くのを意識せずにはゐられなかつた。ふたりの間には常磐木の鉢植があつた。彼女はその木の蔭から、その木を通して大膽に彼の顏を見ることが出來た。彼女は時々彼の顏を見てゐた。彼女は見ないではゐられなかつたから。用談は思ひの外に手間どつて、人達は病院のまづいお膳に向つたが、彼女は彼の並外れて平つたい大きな手が、男のものとは思はれないほど柔らかさうだつたこと、子供のよくしてゐるやうなつかみ箸でありながら、その長い指が美と思はれるほどの器用さをもつて動いてゐたことを知つてゐた。またたとへ彼女の眼が全く他の方に向けられてゐる瞬間でも、彼女は彼の茶碗の中がいつ空虛になつたかをよく知つてゐた。彼はF町から、O町へ行く途中だと言つて——T病院の所在地であるC町はその中間の驛であつた——誰れよりも早く座を立つたが、彼女は扉を明けて女のやうに靜に出て行く丈高い彼のスケッチ箱をさげた後姿を見送りながら物足りない氣がした。が、同時に何故といふ理由もなしに、これ丈の會見で終るべき人でないといふ氣もしてゐた。果して彼はそれから何度ゝ訪ねてきた、白壁の多い病院の氣分が好きだと言つて。その度毎に越子もKもHも皆よろこ

んでこの新しい友達を迎へた。彼等は忽ち彼を自分達の仲間のやうに取扱つた。月のいゝ夜など川口に船を浮べて、夜の更けるのも知らず遊び暮したことも一度や二度ではなかつた。もうF町への終列車も行つて了つたあとを二里たらずの夜道をひとり淋しく歩いて歸らねばならぬ彼を彼女はどんなに氣の毒に、どんなに可哀相に思つたらう。また或時はその終列車のなくなつてゐることをどんなに願つたことだらう。そしてこの新しい自分の前に現れた年下の異性に對する若々しい好奇心の總べてと、姉らしい、母らしい優さの總べてをもつて、彼を自分の家に泊めるといふことにどれ程の心の喜びを感じてゐたことであらう。

「さうねえ。」

稔のこの答へはあまり氣のなささうにも聞えるけれど、それでも反對するまでの氣もなささうなのを彼女は心によろこんだ。あんなに醫者といふものを疎んじてゐた彼がこんな氣になつたのも好きな畫が描けないことがよくよく苦しいのだらうとも、またT院長といふ名が齎すT病院に纒る甘い追憶のためかとも思ひながら、彼女は今迄稔に話す機會を有たずにゐたT氏のことに就いて、自分の知つてゐるほどのいろ〳〵なことを話してきかせた。

「Kが大したこともないけれど、咳をするやうになつたの、それが何だか力のない、ほんとにいやな咳なのでしよ。それで私がT病院へ行つて診てお貰ひなさい、診てお貰ひなさいつて勸めて、とうと行つて院長さんの診察を受けたのよ。そしたら矢張り肺病の初期だといふの。それから大騷ぎになつて、Kのお父さんは家の娘に限つてそんな病氣なんかする筈がないなんて、大變に怒るのですもの、それで、

私が行つて、お父さんを說いたりして、とうと入院するやうにしたのよ。初期だつたからあんなに早く治つたのね。とても外の醫者だつたら、あんな初期のものは分りやしないのだけど。」

彼女はT氏の博士論文も肺病初期の診斷法に關するものだといふことなど話して、彼が初期の肺病を診斷する上の獨特の手腕を力說することをも忘れなかつた。

稔はだまつて聽いてゐた。けれどその當の問題などは少しも考へてはゐなかつた。彼の想像はもうとうに肺病の宣告を受けて、自分達の愛の故鄕であるC町の病院へ越子に送られて行く自分の上に移つてゐた。稔は肺病になることを怖ろしいとも何とも思はなかつた。

Yさんの家へお風呂を貰ひに行つてゐた稔の母も歸つて來て先刻から越子の話を聽いてゐた。

「そんな方があるのでしたら診て頂いた方がいゝでせうね。川上さんだつて侍醫局に出てゐたといふので、あの邊では少しは流行やうですけれども、もう舊い人ですしね。何と言つても專門にこしたことは……」と同意してゐるものらしかつた。が、

「あなた、稔は今年厄年なのですよ。」と、越子の方を向いて、俄に聲を低くした。「どんなにふだん丈夫な人でも厄負けすると言ふことはあると言ひますからね。」

「よくそんなことを言ひますけれど、ほんとに厄なんてあるのでせうかね。」

稔の母はこの間から稔が今年二十五の男の厄年に當つてゐることが氣にかゝてゐたのだ。そして今實は良い醫者にかけることも無論結構だけれど、それと一緒に、厄年だのにこゝへ引越したりしたことが惡いのかも知れないから、一度方向を見て貰ふといゝと言ひたかつたけれど、稔はいつもかういふこと

と言へば頭から馬鹿にしてかゝるし、越子だつて、矢つ張り自分の言ふことをとりあげてはくれまいと思ふとそのまゝ引つ込めて了つた。

越子は立つて、自分の部屋の方から四五冊の雑誌を持つて戻つて來た。T病院の廣告を今度移轉新築されたと聞いてゐた東京の方の病院の所在地や、診察日やその時間などを知らうと思つて。それはすぐ或る婦人雑誌の中から見出された。けれど院長の診察日は生憎今日で、明日も、明後日も駄目であつた。

「それぢや仕方がないわ。今度の月曜でなけりや。」

彼女にはそれがたまらなく待遠しいことに思はれた。

「稔さんは行けるの、俥に乘つて。靜に引いて貰へば大丈夫でせうね。私も無論一緒に行くわ。」

院長に來て貰ふことが出來たら……彼女はかうも思はないではなかつた。けれどそれは出來ることか出來ないことか分らなかつた。その上たとへ出來るとしても、今の自分の財布に向つては一寸出來にくい相談だといふことも同時に氣付いてゐた。それで彼女はだまつてゐた。

彼女は仕事をしなければならないことをひとり思つた。

「行けませうとも、朝のうち熱のない時でしたら」と彼の母が代つて答へた。

皆の氣に掛つてゐたピツケの反應は二日たつても、素人眼には左程に現はれたとも思へなかつた。醫者は極僅ばかり色づいてゐるかと思はれるほどのその箇所を見入りながら、病人を慰め顏に、「この位のことはどんな健康者にでもあります。多少結核の氣のない人はありませんから」などゝ言つてゐた。

けれどもそれは病人に對するほんの氣休めに過ぎなかつたことがすぐ知れた。反應といつても實際はこんな程度のものなのかも知れない。
「どなたかその方の專門の方にお知り合ひがありますか。」
と醫者はとうと言ひ出した。
先方からのこの提言は、時にとつて好都合であつた。彼女はこれをいゝ機會にT氏のことを話した。
「えゝ、もう、あの方なら――」
と醫者は言つた。
醫者は玄關まで來てから、送り出て來た越子と稔の母とをかへり見て、
「どうもかう言ふことになりますと、少し長びきさうでございますな。」と聲を潛めた。
そして海岸へでも轉地した方が早く熱がとれるかも知れないと云ふこと、滋養分を澤山とらねばならぬこと、肉汁などもいゝのだがこの暑さでは餘程新鮮な肉を特別に賴んでして貰はねば危險だといふこと、今鑵詰になつたものが出來てゐるから隨分高價なものではあるが聞いて見て上げてもいゝといふことなどを言つた。
いくらか混亂した頭腦で、越子は病室に戻つてくると、彼女の來るのを待ち設けてゐた稔の銳い眼に出逢つた。
「何を話してゐたの今。」
彼女は避けられるものなら、避けたかつた。けれどもそれは出來ないことだつた。

「矢張りよく分らないものと見えるのよ。……Tさんに診て貰つてくれと仰有るの。」

聲だけはいかにも落着いてゐたが、その顔には明かに當惑の色が見えてゐた。

彼女は何故(なぜ)事實を言はなかつたらう、彼女はあの醫者のやうに病人の前にその病氣を隱さうとは思つてゐない。それは彼を侮辱したことであるから。

けれど彼女はあの醫者を信じたくなかつた。あの醫者の言ふことを信じたくなかつた。そしてT氏の診察を受けた後、總てを稔に話してきかせたかつた。それとも矢張りあの恐ろしい事實にぶつかることをしばらくでも避けたかつたからなのだらうか。

越子のこの言葉は無論稔の心を滿足させなかつた。

「僕の病氣が長びくなんて言つて居たぢやないの。ほんとに困るなあ。早く描かなければあの畫はもう駄目だ。綠だつて、何だつてずん〱變つちまふんだもの。」

彼は描きかけの、けれども假りに額緣に入れて、壁にかけてある（かうして彼はいつも寢ながら眺めてゐた）十二號あまりの畫を眺めてゐた。それはあの三枚の内の溫室前を描いたものであつた。

「もうあと四日も行けばいゝんだがなあ。」そして彼女の方を見て、「ねえ、きをつけるから明日(あした)だけ行つて來てもいゝ。」

「そんなことを、稔さんは……」彼女はこれ以上云ふことが出來なかつた。彼女は胸が一杯になつてきた。

「さうしたらこれ一枚だけ仕上げちまふから、でないと、來年でなきやあ駄目なんだもの。」

「そしたらゆつくり描いてい丶ものにするんだわね。」

「來年こんな畫なんか誰れが描いて居るもんか。僕あ今ぐんぐん進まなければならない時なんだもの。ああほんとにい丶畫が描きたいなあ。」

彼女はもう何も言はなかつた。彼女の知つてゐる總ての慰めの言葉も、彼に對する彼女の同情を表はすにはあまりに足りないやうに思はれたから。

稔と越子とは俥を列ねて、曇り日の蒸し暑い大氣の中を、四谷見附から麹町の方へと靜に走つた。それは月曜日の朝であつた。

稔の咳を聞く度に越子は自分の神經に痛みを覺えて居たけれど、彼の方は寧ろかうして久しぶりで見られる町々の有樣を物珍らしさうに俥の上から眺め廻してゐた。自分が病氣になる前までよく遊びに行つた若い美術家好きの面白い主人のゐる花屋の綺麗な店先を覗いて見ることも忘れなかつた。そこには新に美しいビラが下つて「アイスクリームあり」と書かれてあるが特に稔の眼を惹いた。朝の電車の乘換場に集つてゐる人の群を見たときは戸外(そと)は矢張り、こんなに人が多いのかと不思議な氣もした。ある町角の洋食品を賣る店の前へ來たときは、好きな乾杏子を歸りに忘れずに買つて行かうなどゝ呑氣なことも思はれたりした。

俥は白い大きな洋館の、石疊の敷き詰められた玄關前につけられた。玄關にはもう澤山な下駄が並んで、窓からは患者らしい人が浮ばぬ顔でこちらを見てゐた。

患者控室に稔を休ませてから、受付の方へ行つてゐた越子は用事を濟せて戻つて來た。

室内には他に七八人の男女の患者がゐて、折々その間に自分達の病氣の話が交へられてゐた。中年の男もゐるけれど、多くは青年で、商人風のものも學生風のものもある。隅の方に愼ましくしてゐる背の高い娘もあつた。それらの患者たちの中には隨分瘠せ衰へ、首は長く前に突き出し、胸は崖のやうにそげ、一見誰れの眼にも肺病患者とすぐ思はれるやうなものもゐたけれど、それでも稔ほど蒼白い「死」そのものゝやうな凄い顏をしてゐるものは一人もなかつた。

病床の中に見る彼は周圍との關係のためか、比較するものゝないためか、それほどにも思はなかつたけれど、かうして今ちやんと着物をきて座つてゐる彼を人中で、しかも少し離れて見たとき、彼女はこれが自分の戀人であつたかと、ぢつと見てはゐられないやうな氣持がした。

彼はどうしても他界から何かの間違ひでまぎれ込んで來たものゝやうに見えた。その溢れるやうな濃い、長い髮、蒼い額の上に逆立ちながら蔽ひかぶさつてゐる前髮の下からは、白眼がちな一重瞼の長い眼が、眞黑な小さな瞳を上の方に集めて、何かをぢつと堪へてでもゐるやうに虛空を睨んでゐる。

「苦しいの？」

かう言つて越子は彼に寄り添つて腰をかけた。

稔がこの中で一番惡いに相違ないといふ考へが彼女の心を先刻から暗くしてゐた。

「何故こゝへもつと早く連れて來なかつたらう。」

と悔いられもした。

稔が診察室に呼び入れられたのは、もう十二時近く、二時間あまりも待つた後のことであつた。この二時間あまりは彼にとつてはとても考へられないほどの長時間であつたに相違ない。

「まだかなあ」

彼はもうこれ以上堪へられないといふやうに怒りを含んだ聲で幾度か言つた。そしてその度毎に首をあげて人々の方を見た。仕舞にはもう座つてなどゐられないと見えて、入口のところに立つたり、廊下の眞中まで出て見たり、診察室との間を何回となく往來して見たりした。と思ふとまた戻つてきて卓の上に取り亂されてゐる新聞や雜誌に手を觸れて見たりするが、細い活字を一つ一つ拾つて讀むやうな根氣はもとよりない。

このいら〳〵する氣分はまた烈しい咳を隨はずにはおかなかつた。

越子も稔のこの有樣を見てはぢつとしてゐられなかつた。その上午後になると熱が出るといふことも氣になつてゐた。彼女は診察室から出てくる白衣の女に幾度か稔の番を訊ねて見た。

「もうさう御手間はとれません。」

かう言つて忙さうに走つて行く白衣の女の言葉に僅に慰められながら、ふたりはとうと待ちつゞけたのであつた。

診察が終ると、院長は肺病患者共通の心得とも言ふべき心身の平靜、新鮮な空氣の呼吸、滋養分の攝取等に關する一通りのことを述べた。滋養分としては鷄卵、牛乳の外に特に豆腐が擧げられてゐた。

「何處がわるいのでございませう……あの矢つ張り……」

「左樣、肋膜肺炎――」

彼女は診察のあとすぐにいろ〳〵のことをたづねやうと思つて居たが、それは許されなかつた。もう次の患者がそこに來て立つてゐた。

待たせておいた俥で稔だけ先へ歸して、自分は殘つて、總ての診察が終つた後で院長に別に面會を求めることにした。それに藥も貰はなければならなかつた。けれどもその日は面會日ではなかつた。面會日は毎週木曜日の午後だと言はれた。

稔はいつもより五分ばかり熱が上つたけれど、それもほんの一時的のことで別段障つたらしくもなかつた。

その夜、越子は彼の床の側で、今日病院で、頒たれた某博士講述の「肺病一斑」といふ小冊を讀んでゐた。肺病初期の徴候としてあげられてゐるどの點も、稔が今日までに經過して來たところとよく一致してゐた。その時は等閑に看過されてゐたやうなこともかうして言はれて見ると思ひ當ることばかりだつた。

「ねえ、稔さんはこの頃隨分ひどい汗をかくわね。」

と彼女は口にまで出して、ちよつとの間うと〳〵したかと思ふと、もう身體中が水をかけたやうになり、額から頭の地の中まで玉の汗で、その度毎に寢卷を取り換へなければならない彼の烈しい汗のことを今更らしく思ひ浮べた。

「私はまた寢るとなほ暑いものだし、それに熱があるからだとばかり今迄思つて居たけれど……」

「何か書いてあるのそこに、汗のことが。」
「ええ、何だか、盗汗の烈しいのは肺病の特徴の一つですつて。」などゝ言つた。
　この病氣に對してあまりに無智であつた彼女は（また彼にしても）愚かにも、今日院長から肺病とか肺結核とかいふ恐ろしい宣告の下されることを豫期してゐたのに、その瞬間思ひがけない「肋膜肺炎」といふ言葉を受取ると同時に、それがどんな性質のものかを調べる前に、一度び張り詰めてゐた心に幾分の緩みさへ感じられたのであつた。それだけ彼女はこれらの文字の前にまたも新らしく恐れなければならなかつた。
　ところが、彼女はとうとこんな文字にぶつかつて了つた。
　そこには世間で肋膜と言つてゐるものゝ多くは結核から來てゐるといふやうなことが書かれてあつた。彼女はこれを見るとすぐ、
「肋膜つて大抵結核性のものなんですつて。」と思慮もなく口走つて、「それぢややつぱり感染するんだ。」とあとは心の中で言つた。
「さうだつてね。」ともう先にその箇所を讀んでゐた、けれども越子は今迄言はずにゐた稔にあまり落着いて答へられたので、彼女は却て恥かしい氣がした。と同時に稔の病氣が肺病であるといふことに對する自分の恐怖の中には、感染に對する否定することの出來ない恐怖も多分に含まれてゐるのを自覺せずにはゐられなかつた。それは彼女にとつて不愉快なことであり、なほそれ以上心苦しいことであつた。絶對の他愛とか犠牲とかいふやうなことは現實の生活には求め得ないことだと知りながらも、矢張りふ

たりの愛の生活の上のみには、それを求めやうとする心の傾向を絶えずもつてゐる彼女は彼に對する自分の愛をそれほど利己的なものだとは思ひたくなかつた。まして稔の前でそれを口外することは憚らなければならなかつた。

「感染するのが怖ろしいから……」

何といふ殘酷な言葉であらう。かう思つただけで、もう彼女は稔のために泣きたいやうな氣持になつた。

ふたりはそれきりだまつて了つた。これ以上病氣のことを突込んで話し合ひたくないと言ふやうに。そしてふたりは別々に、けれど同じことに就いて考へ續けてゐた。枕もとにある乾杏子を殆ど無意識に撮んでは、おつとり嚙みしめながら。

「いゝわ、明日院長さんにお目にかゝつて伺へばみんな分るのですもの。いろ〳〵なこと伺つて來ませうね。」

かう言つて、彼女がその小冊を下に置いたのはしばらくしてからのことであつた。

「すまないけどね。」

と彼は感謝と信頼を込めたやうに彼女の方に手を差出した。彼女はその手をとつて、

「肺病だつて構はないわね」

と反抗的に言つた、そして涙ぐんだ。

彼女は自分の部屋に歸つて、机に向つたけれど、容易に仕事は手につかなかつた。その頃、彼女は或

る雜誌から依賴されて、「大正年代の我邦の婦人問題」といふやうな大きな題の下に一つの論文を書きかけてゐたのだつた。これを早く書かなければ、四日目に取りに行かねばならぬ藥價に差支へることに彼女の心は絶えず鞭打たれてゐたけれど、それでも仕事の中に沒頭して行くことは出來なかつた。かうした問題に今の彼女は何の興味をも感じてゐなかつた。

蚊やり線香の煙りが盛んに來るのも彼女には不愉快であつた。緣に近い彼女の部屋の隅の方で、凉んでゐる稔の母が、その日の新聞を擴げる音や、折々煙管をはたく音もひどく彼女の神經に障つてゐた。けれども彼女には自分の仕事や、自分のこんな神經のはたらきを分つてくれる筈のない人に向つてそれを咎めることは出來なかつた。かうして働いてゐてくれゝ稔の母を只邪魔者にでも思つてゐるやうにとり違へられて、自分に對して氣まずい感情でももたれたときに、自分が受けなければならない苦痛とまでは行かなくとも不愉快も考へられた。殊に稔の母は自分が息子の枕もとにゐることを、息子からも好まれてゐないことを知つて、用事のない限り、越子の部屋の方に來てゐたのであつたから、そして、ふたりのこの狹い家は、ふたりの部屋を外にしては、暗い電燈のついてゐる女中部屋兼帶の小さな砦苫しい玄關の外になかつたのだから。

そのうち、稔の部屋からミユージクボツクスの音がし出した。彼女はすぐ彼がひとりゐるのが淋しくてたまらないのだと思つた。

「お仕事の邪魔になる？」

と彼は蚊帳の中から、襖越しに言つた。

「いゝえ」と彼女は答へるより仕方なかつた、それは嘘であつても。

「寝られないの、淋しいの、」

「これを聞きながら、寝やうと思つて。書けた？」

「來てほしいの？」

「でもあとでいゝわ。」

彼女はペンを置いて、襖を明けた。

ふたりはふたりが恐れ且つ避けてゐることを矢張り知り得る限り知らなければ滿足し、安心することが出來なかつた。

越子はその翌日、自分の仕事以外のことは、大抵彼女まかせにして、だまつてゐる彼が、珍らしく、「それぢやよくきいてきて下さいね。」などゝ床の中から言つてゐるのを後にして、また昨日の病院へと出かけた。

午後二時過ぎの病院はもうじんとして、どの控室も空虚であつた。受付へ名刺を出してからしばらくそこに待つてゐると、間もなく女學生風の女が彼女を應接室の方へ導いた。

院長は既にそこにゐた。彼は椅子に凭れて次の面會人である彼女のはいつてくるのを待つてゐたのであつた。

越子がかうして自分の愛する人の恐ろしい病氣の狀態をたづねるためにこの院長に面會するのはこれ

が始めてのことではなかつた。彼女は四年前Kのために、彼女が今稔に對して抱いてゐるそれと變らぬ心持――勿論生活を共にしてゐる彼に對して今もつてゐるほどの實際的な意味での强いそして大きな責任感の隨つてゐるものではなかつたけれど――をもつて同じこの院長の前に立つたのであつた。そのKの彼女に對する愛は、KがC町の病院に病を養つたといふことが不思議な因緣となつて、彼女の心に新しく生れた稔に對する愛によつて無慘にも破られて了つた。彼女のKに對する愛に變りはなかつたけれど、それはKには解されないことであり、また同時に堪へられないことであつた。純なそして熱烈なKの愛に彼女は常に感じさせられては居たけれど、周圍の事情も、相手の心狀も少しも理解してくれないその我儘な盲目な愛には彼女は始めから終りまで惱まされ通した。けれども彼女は一度としてKの愛を拒まうとはしなかつた。たとへKの法外な愛の要求を滿すには、弱い勞れ易い肉體に制限されてゐる彼女の愛は、又あまりに理知の加へられてゐる彼女の愛は、足りないものであつたとしても、彼女がKの愛から受ける苦しみを一度として避けやうともしなかつたゞけでも、Kに對する彼女の愛の眞實は疑ひないことであつたけれど、Kは彼女の愛の全部を虛僞なそしていたづらなものとして彼女を罵り廻つた。自から意識しない嫉妬のために、醜く亂れて行くKの憐れな、けれど淺ましい姿を、またさうして次第に彼女から遠ざかつて有く有樣を越子は只ぢつと傍觀してその淋しさ、苦しさをひとり堪へてゐるより外なかつた。そしてKの彼女に對するこの態度は彼女の稔に對する愛の萠芽を却てます／＼育てる力となつた。

　彼女はその瞬間自分にも分らない錯雜した感情の流れの中にはいつたが、院長にすゝめられるまゝす

ぐ前の椅子に靜についた。
この室で見る彼の顏には診察室では到底見ることの出來ない、穩かな、老年の人にのみ限られた深い落着いた微笑が絶えず動いてゐた。肩から背のあたりが圓みをもつて、數年前の彼よりも肥滿したやうに彼女には見えた。
「この度はまた大村がお厄介になりますやうになりまして、――」と彼女は謝意のつもりで言つた。
「病氣はどんな具合なのでございませう。當人も伺つてきてくれと申すものですから。」
T氏はだまつて前に置かれた厚い帳簿を繰り出した。彼女は息の詰るやうな氣持で、彼の口の開かれるのを待つてゐた。
帳簿の或頁が大きく明けられた。
「大村さんは――誠に御不幸なことでございます。」
とT氏はやがて重い、沈んだ聲で、同情に堪へないといふやうに途切れ〳〵にかう言つた。そして後の言葉が續かない。
これは一體何を意味してゐたのだらう。或は普通の輕い意味で用ひられたのかも知れなかつた。けれど多少昂奮し、過敏になつてゐたその時の彼女の心には、どうしても回復の見込のない重態――即ち死の宣告としか響いて來なかつた。同時に彼女の頭はくら〳〵として眼の前が急に暗くなつたやうに見えた。けれど、
「餘程もう病氣は進んでゐるのでございませうか。」

とたづねた何秒かの後の彼女は普通以上の平靜をとり戻してゐた。

「左樣――」と訥り癖のある彼は長く語尾をひいたまゝいつまでも考へ込んでゐるので、彼女はまた不安が胸元まで迫つて來るやうな氣がしたが、

「一期の終り――まあ二期の初め」

ときいて少しは安心した。と同時に彼女はこの院長は患者自身もまた看護人も病氣を輕んじないやうにいつでもまた誰れに向つても實際以上の重態にいふ傾向があるといふ世許とまた事實Kの場合も彼女の姉の場合も（彼女は、姉が病氣の時、彼女の母が家へ歸つてきてとても助からないやうなことを院長さんがお仰つたといつて泣いてゐたことのあつたのをはつきり心に浮べた。）さうであつたといふことを思ひ出した。そしてそこに幾分の救ひを見出すことも出來た。

それから彼女は肋膜肺炎といふのは一般に肺病と謂はれてゐるものと同一なものであるかどうかといふことや、檢痰の結果やをたづねた。また痰唾の消毒法に就いても、その他看護上のことに亙るいろいろの質問も試みた。

それらの質問が答へられてから、院長は、

「あなたが御自身で御看護なさるのですか。」

とたづねた。そして誰れも最初は恐れて嚴重に消毒などしても、いつかしら慣れて怠りがちになる結果、看護人に病氣の感染する例は少くない、殊にそれが他人同志でなく、夫婦の間柄であるとか、兄弟其他總て近親者であればあるほどその危險が多いといふことを注意して、

「あなたも十分御自身の身體を大切になさることを望みます。」などゝも言つた。

彼はまた病人の熱が今少し下るのを待つて、事情さへ許せば、海岸に移すことを御勸めすると言つたが、それはC町の方へ行けといふことらしかつた。

病人に關する話が終ると、院長はすぐ彼女の姉のことをたづねた。これは彼が彼女に逢ふといつでも必ずきくことであつた。

「お子さんはお幾人ですか。」

「今もう四人でございます。」

すると彼女は患者であつた人が健康者同樣になつて、結婚し、子供を產んで幸福に暮して居られることを聞くのは何より自分としてうれしいことだといふ意味のことを、眞に心から感じてゐるものにでなければ見ることの出來ない眞面目さと無邪氣さとをもつて語つた。が、それと一緒に思ひ出したと見えて、

「××さんも結婚されたといふやうなことを新聞で見ましたが。其後ずつと御丈夫ですか。」とKのことをきいた。

「はい、お陰樣で……」

と彼女は答へたけれど、今の自分はもうKとは手紙の往復さへも殆どしない間柄であつて、Kの消息は矢張り多くの他人のやうに新聞を通じて僅に知るだけなのを思ふといゝ氣持はしなかつた。その上彼女は他人からKのことをきかれることにも、きくことにもいつも輕い苦痛を感じてゐたから。

「近い中に子供が出來るのださうでございます。」

つい一二週間も前、或る新聞で見た記事をそのまゝ寧ろ冷淡な氣分になつて言つたが、その瞬間彼女は彼女自身の胎内に賑うつてゐる子供のことを強く思はせられた。そして彼女は苦しかつた。稔の病氣に壓倒されてゐる今の彼女にはこゝ三四ヶ月の後ふたりの間に來るべき子供のことを考へることは一層堪へられないことであつた。彼女はそこに只々大きな自分一人で背負されない責任を、感ずるばかり何の幸福も何の光明も見出し得なかつた。

「S」社に對するいくつかの質問も出された。そして「あなたも有名におなりになつて」などゝも言はれたけれど、そしてそれが只皮肉な意味のものでないことも、この人の人格の强さであり、尊さである率直なそして單純な一面を知つてゐる彼女には分つてゐたけれど、それに滿足な答へさへする氣になれなかつた。

靜に扉が明いて、先刻の女が名刺をもつてはいつて來た。彼女はそれをいゝ機會にすぐ立つた。病院を出てからの彼女の頭の中には今の院長との會見の總てとして只院長の最初の言葉ばかりが强く强くしかもはつきりと響いてゐた。

「大村さんは――誠に――御不幸なことでございます。」

彼女は幾度思ひ返さうとしても、これが稔の死を意味するものとしか受取れなかつた。院長が稔の病氣そのものに就いて多く語ることを好まないで、却て看護者としての越子の方を氣付かつて、たづねもしない色々の注意さへしてくれたのも、何だかそれを證據立てることの一つのやうに思はれた。また越子

が姙娠したのも自然が若くして死なねばならぬ稔の生命を存續させやうとしたものゝやうに思はれた。

この忌はしい考への中にすつかり囚はれてゐた彼女には周圍の何ものもほんとうには見えなかつた。またほんとうには聞えなかつた。彼女は市ヶ谷見附を出て、外濠の電車に乘らなければならなのを、いつかしら見附内の土手下の靜かな道の方を歩いてゐた。けれども彼女自身はそれさへ氣付かずにゐた。

「稔が死んだら……」

かう思つただけで彼女はその悲しみを意識する前に、もう二つの眼の底が熱くなるのを感じた。と抑へる間もなく涙がはら〱とこぼれた。彼女は急に氣付いたやうに、けれどもそつとあたりを見廻してさうして汗でも拂ふやうに顏中を撫で廻した。けれども彼女にはそれが自分にとつてどれ程の悲しみなのかよく分らなかつた。それほどその悲しみは深くまた大きなものゝやうに思はれた。

彼女は稔を失つた自分といふものをどうしても考へることが出來なかつた。自分自身の仕事といふことも考へては見たけれど、稔なしにはそれも矢張り力ないことのやうに思はれた。第一自分は稔の死の前にぢつと立つてゐられるだらうか、彼女はかう自分自身にたづねてみた。

彼女はいつか白壁で圍はれた病室のベットの上に堅く眼を閉ぢて仰臥してゐる彼の骸とその上に俯伏しになつてゐる彼女自身の骸とを眺めてゐた。稔の眼は深く凹んで、暗い影をつくり、その頰は殺げ、顎は強く緣どられたやうに角ばつてゐたけれど、そしてその顏色は壁と同じやうに白かつたけれど、その唇ばかりは生きてゐた時のやうに赤く滑かにうるんでゐた。まだいくらか殘つてゐる身體のぬくみがだんだん冷たくなつて行く彼女の肌に感じられるやうな氣がした。——それはC町の病院のKのゐた

一室らしく金網のはりつめられた窓の外には松林が暗く續いて、その上にいくつかの星が冷たさうに輝いてゐた。

この幻影は彼女をしばらく現在の不安や苦痛から救つて、甘い、靜かな氣分の中に浸らせてゐた。けれども「子供」といふことがふと彼女の頭の中をかすめ過ぎたとき、彼女ははたと突當つたやうな氣持がした。自分は自由に死ぬことが出來るものとしても、自分の胎內の新しい生命までも殺すことが出來るだらうか。殺していゝものだらうか。また若し子供が生れて了つてからだとしたら……母もなく、父もない幼な兒は稔の母か、越子の母の手でどうにか身體（からだ）だけは育てられることであらう。そして自分の父母のことを聞いたら……此處まで考へて來たとき彼女の眼はまた淚で一杯になつてきた。

四谷見附の電車の交叉點へ來たとき、彼女ははじめて電車に乘らなかつたことに氣付いたけれど、そこから家まではもういくらもないのであつた。彼女は家で稔と稔の母とが待つてゐるのを思ふと、急に足を早めた。

彼女の足音をきいた彼の母は玄關に出てゐた。

「まあ、お暑かつたでせう。御苦勞さまでしたねえ。」

そして稔の部屋の方へ行く彼女の後をついてきた。

「どうだつて？」

稔は頭を擡げてゐた。

「色々伺つてきたわ。」

と稔の床の側に座つた彼女の顔には疲れが見えてゐた。

肺病の宣告を受けたといふことも稔自身には越子が考へるほどの打擊ではなかつた。

その夜いつになく熱が九度近くに昇つたのを、彼女は彼の心に與へた打擊の反映として、自分が病人自身にも病氣に對する出來る丈の自覺を與へやうといふ考へからあまり正直に何もかも聞かせ過ぎたことを一時は悔いもしたけれど、もそれどうやら他に原因があつたらしく、彼の生命である畫が描けないこと、普通の身體（からだ）でない越子に色々心配をかけねばならぬことが苦になるばかり、肺病そのものは左程何とも思つてゐないらしかつた。彼女はそれをあまりに健康であつた人にありがちな病氣といふものに對する習慣的な輕侮若くは無頓着と無智からだと思つてゐた。

「僕あ何故だらう。ちつたあ打擊をうけるだらうと思つたけれど、いよ〳〵さうだと言はれて見ると何とも感じないなあ。」

など丶彼自身も言つてゐた。そして病人として守らなければならぬ多くのこともとかく怠りがちになつて行つた。否それ以上自分が病人だといふこともともすれば忘れてゐるやうだつた。一日中寢てこそ居るけれど、越子が絶えず注意してゐなければ一日三回の服藥も、毎食後三十分ほど口籠（くつこ）（病院特有の一種の吸入法）を口にかけることも、一定の時間に體溫をとつて溫度表に記入することも決して滿足にはしなかつた。その上彼は普通滋養物と云はれてゐるものゝ總てが嫌ひであつた。

「嫌ひなんだもの、仕方がない。」

彼はかう言つて努めて食べやうともしなかつた。そして林檎、水蜜、梨、バナ、といふやうな果物ばかり貪つた。

「ほんとうに困つた病人だわね。」

と彼女は日に幾度となく繰返さなければならなかつた。

「稔さんはそんなことばかりしてゐちやあ、近い中に死ななけりやならなくてよ。」

「僕あ、果物ばかりで生きられると思ふ。その方がいくら綺麗でいゝかしれやしない。」

「そりやあ健康者ならそれもいゝでせう。けれど今の稔さんがそんなことをしてゐたら死ぬより外仕方がないつて言ふのよ。私もう死ぬやうになつたつて知らないから。」

「僕あどんなにわるくなつても今死ぬとはどうしても思へない。」

「だつて分りやしないわ。いくら思へないつて言つても事實がさうでないなら。」かう言つて彼女はせめて三十近くにでもなつてゐればともかく、まだ發育期にあるものゝ病氣はその進行も非常に早いといふこと、從つて死ぬものも多いことなどを彼女の知つてゐる何人かの人を例にあげていくらか誇張的に話して聞かせた。

「それでもね、僕あこれからいゝ仕事をしなければならないんだし、ふたりの生活だつてこれから本當にならうとしてゐるんだもの、坊やだつてもうぢき出來るし。その僕が今死ぬつたつて死ねるもんか。」

と彼は蒼い顏をしながらでも、元氣よく言ひ張つた止まなかつた。これは彼にとつては決して附け元氣でもなんでもなかつた。多くの希望と幸福の豫想の前に立つ彼には、その彼の上に死といふものを描

いてみることさへ出來なかつたのだから。
「ですもの、なほさら大事にしなければね。」
と彼女は痛ましい心で言ふより外なかつた。
「僕あ、僕よりか何だか姉さん（彼は彼女をかう呼ぶ癖があつた）の方が死ぬやうな氣がする。三十近くなつてからの初產は重いんだつて。早く一度お醫者に診て貰つて置いた方がよかあない？」
かう言つて、彼は「六月、さうぢやないもうぢき七月だ」などゝ口の中で數へてゐた。
「ええ」と彼女は笑ひたいやうな氣がした。
「お產の時にや僕が側に附いてゐてあげるわね。――居てほしい？」
「そりや居てほしいわ。」
「姉さんはお產のとき泣く？」
「どうだか」
「僕あそれまではよくならう。」
「きつとね。」と彼女は言つた。「稔さんが病氣ぢや坊やが出來てもちつともうれしかない。」
口でこそかう答へはしたが、いつ迄續くか分らない、その上その果ては死かも知れない彼の病氣を思ふと、またふたりの生活を維持して行くことも出來かねてゐる今の自分がどうしたらこの先長い間の病氣の費用を續けて行くことが出來るか、それさへ覺束ないのに、その中で產もし、子供も育てゝ行かなければならないことを思ふと、彼女はどうしたらいゝのか全く分らなかつた。そして子供の出來るとい

ふことも少しもうれしく思はなかつた。

この春、姙娠といふことが確定したときも、彼女は決してそれを喜ばなかつた。ふたりの愛の生活の中には子供を欲するやうな要求が潜んでゐないやうに思はれたし、ふたりの貧しい生活は子供の養育や教育にあまり不適當なものとしか思はれなかつたし、また自分自身の教養や、仕事のためにも大打擊であるやうに思はれたりして、寧ろ悲しまれてならなかつた。烈しい惡阻に惱んで、瘠せ細つてゐたその頃の彼女は暗い氣分の中でいつかしら子供を否定しやうとする忌はしい思ひに耽つてゐる自分を見出しては驚くことさへ屢々あつた。けれども夏の初め頃にはもう餘程考へが違つてきてゐた。たとへ色々の不安や恐怖を感じてゐたとしても、そこに多くの意義や、新しい希望や期待なども加はつて、まあ一人位ならといつか子供を肯定するやうな心の傾向になつてゐた。ところが全く豫期しなかつた稔のこの病氣が彼女をしてまたも子供を厭はしいものに思はせるやうになつたのである。

でも何もかも忘れた無邪氣な心で子供をよろこぶ稔を見ることは矢張り彼女のよろこびであつた。

「どんな顏してゐるだらう。」

と稔はこれ迄畫の中で見たうちの一番可愛いゝ子供の顏を心に描きながら言つた。

「どつちに似ても別嬪さんに違ひないつて、大阪の姉さん（越子の姉はその頃大阪にゐた）から手紙がきたわ。」

「さう、何日來たの、別嬪さんだつて」

ふたりは顏を見合せて笑つた。

けれどもすぐ次の瞬間にはもう彼の顔は暗い悲しみの表情に變つてゐた。彼は難産で死ぬ越子をまた想像したのであつた。

「坊やをおいて死なれたりしちやたまらないなあ。——僕あそんな悲惨なめにだけは逢ひたくない。」と彼は頭を振つた。

「死ぬんなら僕あ先へ死にたいもんだ。一人遺されるなあたまらない。」

「ずるい人ね、稔さんは。」

ふたりがこんなことを話し合つてゐた頃は稔の母はもうF町の方へ歸つて居なかつた。そして近所の口入屋から連れてきたおせんといふ女中が働いてゐた。娘盛りでありながら顔色の惡い病身らしい女ではあつたけれど、かうして始終寢てゐるしかも人のいやがる病人のある家に居付いてくれたゞけでまあいゝとしなければならなかつた。

稔の母は稔の病氣も極り、女中も出來たけれど、またF町の家にひとり留守居をしてゐる八十に近い稔の父からは毎日のやうに歸宅を促して來たけれど、それでもすぐに歸らうともせず、新に來た女中を馴して行くと言つて、自分も一緒に二疊たらずの狹い臺所に出て、とても年寄でなければ氣の付かないやうな細いことまで、何やかと注意したり、長煩ひを豫想して稔のために新調した蒲團を縫つたり、彼が病院に通ふやうになつてから遠慮して向から來なくなつた、そして自分の代に細君を見舞によこしたりしてゐた醫者の川上へも御禮に行つてくれたりしてゐたが、とうと、

「もつと居たいとは思ひますけれど、いつまでかうしてゐても切りのないことですし、いつ治るといふ

病人でもないのですから、いづれまた出直して來るとして、ともかく一度歸つて來ます。」と或朝言ひ出した。

これは越子の實は待ち設けてゐたところであつた。

稔の母が彼女自身としての出來る丈の働きをしてゐてくれるのだといふことは越子にもよく分つてゐた。そしてそれがどれ程手助けになつたかは言ふ迄もないことであつたけれど、ふたりきりの家の中に全く別な世界に生活してゐる一人の他人がはいつて來たといふことはそしてその人に到底ふたりの生活を理解し盡しては貰へないだけ、お互の間に矢張り世間並の虛禮の交換もたまにはしなければ甘く行かないといふことは、彼女にとつては、どれ程の心の上の壓迫だか知れなかつた。わけてもその人が彼女の部屋をその座り場所にしてゐるといふことは、彼女に對して多くの遠慮や氣兼ねをもつてゐる彼の母は、露骨に現はしはしないけれど、消毒のことをいつもやかましく言ふ彼女を、何となく不快に思つてゐるらしいことも、また稔が肺病だといふことを人に隱さうともしない彼女を氣にしてゐるらしいことも彼女は分つてゐた。

「私は肋膜つて人に話してゐるのですよ。ですからどうぞそのつもりで。」など、遠まはしに言はれたこともあつた。

彼女はまた稔が母に對して少しも優しい感情を示さうとしないのみか、いつもイラ〳〵とした氣分で不滿な顏附をして接してゐるのを見るのもいやだつた。

「私のすることは何でも稔には氣に入らない。あなたのすることでなけりや。」

と母もいくらか不平らしい色を彼女に見せたりした。それも彼女にはいやだつた。

稔の父へのお土産など渡して、彼の母を送り出したあとの彼女は久しぶりで自分自身に返つたやうなのび〳〵とした氣分で家の中を見廻した。そして

「ねえ、矢張りふたありつきりがいゝわね。」

と稔を顧て言つた。

「僕あだん〳〵お母さんがいやになる。まあ一日か二日だ。それ以上ゐられちやたまらない。」

ふたりの間が一層ぴつたりとなつたやうな氣がした。

越子はそれから落着いて仕事をすることが出來るやうになつた。毎朝Y先生のところから戻つてくると、すぐ机に向つてゐた。夜も更けるまで起きてゐた。だんだん身重になるにつれて身體(からだ)の方は却つて平常よりも健康になり、肉づいて來たけれど、頭の働きはそれだけ鈍つたらしく、ちよつとした思想を纒めるにもいつも以上の時間と努力がいつた。彼女は彼女元來の遲筆と戰はなければならない上にそれとも戰はなければならなかつた。

けれども彼女の仕事の報酬は病人のある上、女中といふものを加へた一家を支へるには到底足りなかつた。彼女は色々の仕事の上の誓約をしては借られる限りの金を書店や雜誌社から借りた。稔の描いた畫も賣れる限りは賣ることにした。また稔がそれ迄母に送金を迫つた時、金の代りとしてF町の家の倉の中に、もうだん〳〵賣拂つて少なくはなつて居たが、それでもまだいくらか殘つてゐた骨董品の中から比較的賣れるやうなものを選んでは送つて來たのが、そのまゝ戸棚の奥に仕舞込まれてあつたのを引出

してきては、不相當な安い金にかへた。急の電車代に差支へる時などは小母さんと呼びたいやうなY夫人のところへ走つて行つた。

「ええ、ええ、その位なことならいつでも出來ますわ。もう少し上げておきませうか。」

などゝその夫人は小さな札の一二枚はいつ行つても借してくれた。どこか所帯染たところのある、そして思ひやりの深いこの夫人は彼女が口に出さない色々の生活上のことまで察してくれてゐるらしかつた。彼女があまり早く返しに行くと却つて厭な顔をして、

「いつでもよかつたのに。」とすぐはとらなかつた。

毎日々々喧嘩ばかりしてゐた前の貸家の子供達が學校へまた通ひ出すやうになつた九月始め頃から稔の熱はだんだん下つてきた。越子がいくら止めてもきかずに枕もとの林檎の皿を描いたのがもとで、突然八度以上に上つたこともあつたけれど、それは一日二日でもとに返つて、全體として下り坂になつてゐることを溫度表が明に示してゐた。

「この分ならC町へ行けるのも遠くはあるまい。」から思ふことはふたりの喜びであつた。

「早くC町へ來けたら」

ふたりはC町へ行くといふことがふたりの最後の目的であるかのやうに、またたのしい旅に立つ時のやうに待たれた。そして稔は一週に一度診察を受けた病院へ行く度毎に、越子は三日おき位に溫度表と病床日誌とをもつて藥取りに行く度毎にそのことばかりたづねてゐた。

「せめて七度前後の體溫が一週間も續いたら……」

答へはいつもこんな風でなか〳〵許されなかつた。

「行つて仕舞ひさへすれば――熱だつて下るに違ひないんだがなあ」と稔はそれをもどかしがつた。彼は今すぐにも行くもののやうに持物などとり揃へたりしてもう落着いてはゐられなかつた。

ふたりは別に相談した譯でもなく、ふたりの愛の最初の家である、あのT病院に近い漁師の家に行くことにいつか極めて居たのであつた。ふたりにはそれ以外に家のあることが考へられなかつた、また考へやうともしなかつた。

問ひ合せの手紙が越子の手によつて早速書かれた。二三日の後返事が來た。そこにはまだ避暑の客が居るけれど、幸にその人達は一兩日中に歸るといつてゐるから、さうしたらずつと明けてお出を待つて居るといふことや、かうして忘れずに來て下さることが何よりうれしいといふやうなことが覺束ない子供の字で書いてあつた。――越子はそれを稔の枕もとへ來て讀んだ。

この瞬間、ふたりは、ふたりがC町へ行かねばならなくなつた當面の不幸を忘れて、只ふたりがいつからか望みながら、今日まで果されずにゐたふたりの愛の故郷を、その第一の記念の土地を訪ねてみるといふことが、かうした思ひがけないことによつて近く實行されるのを寧ろよろこばしく思つた。少くともふたりはその不幸を不幸として感じないほど總てを甘い、柔い、そして溫い衣によつて包んで見てゐた。

「あの小母さん(漁師のおかみさんのことをふたりはさう叫んでゐた。)は僕達がかうして一緒になつて

ゐるのを見たら驚くだらう」などゝ稔は面白さうに言つたりした。

けれどそこでもすぐ金の問題にぶつからなければならなかつた。越子はその後三四日も引越しの費用を調へるために外出ばかりしてゐた。

丁度その頃のことであつた。F町の家へ歸つてから何の音沙汰なかつた稔の母からふたりに宛てた別別の手紙が來たのは。

「子を思はぬ親はなけれど、何もかも鷄の嘴とくひ違ひ、歸りし上は何とかして送金したしと思ひしことも思ふに任せず、」などゝ書き出された稔宛ての手紙には何かの用にも立つかと、屏風一双外に軸物を添へて送つたとあつた。越子宛の手紙の中には、稔も親甲斐もない親をもち、その上あんな病氣にかかつたのはよく／＼不幸な子と見えると言ふことや、ただのからだでないあなたにばかりいつも／＼心配をかけ通してすまなく思ふといふことなどが長々と書かれた末に、或人に見て貰つたところ四谷へ越したことが稔にとつてはとても惡いことであつた上に、家の東側にある溝を掃除したのもよくないさうである。C町の方角はいゝとのことだから少し熱が下れば早く移つた方がよくはないかと思ふといふやうなことが小さく書き添へられてあつた。

（終り）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
仝 神田區裏神保町 上田屋
仝 京橋區銀座三丁目 東海堂
仝 京橋區元數寄屋町 北隆館
仝 京橋區西紺屋町 良明堂
仝 日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
仝 東區京町堀 太華堂
仝 北區東梅田町 宮內立盛堂
京都市七條停車場前 三共社
仝 間之町七條 大盛社

○定價 金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替 にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵劵代用 必ず一割增の事
一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄 金六錢（集金委託料
　一金五圓迄 金七錢 及送料共）
一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正五年十一月三十日印刷納本
大正五年十二月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本鄕區駒込西片町十番地 中央公論社
電話四下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可